九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—7—

小郡市所在小郡正尻遺跡の調査

1986

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—7—

小郡市所在小郡正尻遺跡の調査

序

福岡県教育委員会は，日本道路公団の委託を受けて，九州横断自動車道建設地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和54年度以降実施しております。

これらの発掘調査の結果につきましては逐次「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」として公にいたしておりますが，今回の報告は，小郡市所在の小郡正尻遺跡の調査結果を第七集としてとりまとめたものであります。

発掘調査の報告としては，満足のいくものではありませんが，本報告書を通して，文化財に対する認識と理解，さらに学術研究上の一助になれば幸いです。

なお，発掘調査にあたり数々の御協力を頂いた地元の方々をはじめ関係各位に，心から感謝申し上げます。

昭和61年３月31日

福岡県教育委員会

教育長　友野　隆

例　言

1．本書は，昭和58年度と，昭和60年度に，福岡県教育委員会が日本道路公団から委嘱されて，九州横断自動車道建設のために破壊される埋蔵文化財を発掘調査した小郡正尻遺跡の報告書であり，九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第７冊目にあたる。

2．本書の執筆分担は次の通りである。

Ⅰ．……木下修・井上裕弘・小池史哲

Ⅱ．……小池史哲

Ⅲ．1……小池史哲・小田和利

2……小池史哲・小田和利・赤川正秀

3……小池史哲

4……小田和利

Ⅳ．……琉球大学農学部　林　弘也

Ⅴ．……小池史哲・小田和利

3．遺構の実測図は，木下修・小池史哲・小田和利・片岡宏二・赤川正秀・日高正幸・武田光正が，遺物の整理・図面作成には担当者の小池・小田の外に，高橋章・岩瀬正信・平田春美・豊福弥生・鶴田佳子・塩足里美が従事した。

4．掲載の写真のうち，遺構を小池・小田が撮影したが，遺物撮影は九州歴史資料館の石丸洋・藤美代子の協力があった。

5．挿図で使用する方位は真北に統一している。

6．本書の編集は，小池史哲があたった。

本　文　目　次

小郡正尻（オゴオリショウジリ）遺跡の調査

Ⅰ．調査組織と調査の経過……1

Ⅱ．遺跡の位置と環境……10

Ⅲ．遺構と遺物……15

1．A地区の調査……15

1．はじめに……15

2．層　序……15

3．住居跡……16

4．井　戸……18

5．溝状遺構……19

6．その他の遺構と遺物……75

7．小　結……86

2．B地区の調査……88

1．はじめに……88

2．住居跡……88

3．貯蔵穴……97

4．土　壙……184

5．溝状遺構……186

6．その他の遺物……140

7．小　結……141

3．C地区の調査……142

1．はじめに……142

2．井　戸……144

3．溝状遺構……145

4．その他の遺構と遺物……146

5．小　結……149

4．D地区の調査……150
1．はじめに……150
2．貯蔵穴……150
3．土　坑……165
4．その他の遺構と遺物……167
5．小　結……170

Ⅳ．出土木製遺物の樹種……172

Ⅴ．おわりに……174

図　版　目　次

本文対照頁

図　版　1　(1)　小郡正尻遺跡航空写真……10
(2)　A地区航空写真……15
図　版　2　(1)　小郡正尻遺跡全景……15
(2)　A地区全景……15
図　版　3　(1)　1・2号住居跡……16
(2)　溝状遺構群……19
図　版　4　　大溝1堆積状況……19
図　版　5　　大溝2南側杭列……58
図　版　6　(1)　大溝2北側杭列……55
(2)　大溝2土器出土状況……24
(3)　大溝2石帯出土状況……47
図　版　7　　2号井戸・大溝1出土遺物……19
図　版　8　　大溝2出土土器……26
図　版　9　　大溝2出土土器……28
図　版　10　　大溝1・2出土土器……19
図　版　11　(1)　大溝2出土土器……30
(2)　大溝2出土木製品……51
(3)　大溝2支流1出土土器……54
(4)　大溝2出土鉄滓……50
(5)　包含層出土白磁……84

図　版　12　(1)　大溝２出土陶磁器……29
(2)　大溝２上層出土石器……40
図　版　13　(1)　大溝２下層出土石器……44
(2)　大溝２出土石帯……47
(3)　大溝２出土石鍋……47
図　版　14　(1)　大溝２出土石製品……47
(2)　大溝２出土土製品……49
(3)　大溝２出土瓦……50
図　版　15　大溝２出土杭……55
図　版　16　大溝２出土杭……55
図　版　17　大溝２出土杭……55
図　版　18　大溝２出土杭……55
図　版　19　溝状遺構出土杭……65
図　版　20　北部・西部・北西部落込み出土土器……75
図　版　21　北西部・南西部落込み出土土器……80
図　版　22　(1)　Ｂ地区全景……88
(2)　２号住居跡遺物出土状況……91
(3)　３号住居跡全景……93
図　版　23　(1)　１号貯蔵穴……97
(2)　２号貯蔵穴……98
(3)　３号貯蔵穴……99
図　版　24　(1)　４号貯蔵穴……102
(2)　５号貯蔵穴……102
(3)　５号貯蔵穴堆積状況……102
図　版　25　(1)　７・８号貯蔵穴堆積状況……104
(2)　７号貯蔵穴……104
(3)　８号貯蔵穴……104
図　版　26　(1)　９号貯蔵穴……105
(2)　９号貯蔵穴堆積状況……105
(3)　10号貯蔵穴……106
図　版　27　(1)　11号貯蔵穴……108
(2)　12号貯蔵穴……109
(3)　13号貯蔵穴……109

図　版　28　(1)　14号貯蔵穴……109
(2)　17号貯蔵穴……113
(3)　17号貯蔵穴土器出土状況……113
図　版　29　(1)　18号貯蔵穴……115
(2)　19号貯蔵穴……115
(3)　20号貯蔵穴……122
図　版　30　(1)　19号貯蔵穴土器出土状況……117
(2)　19号貯蔵穴土器出土状況……117
(3)　19号貯蔵穴土器出土状況……117
図　版　31　(1)　23号貯蔵穴……123
(2)　24・31号貯蔵穴……125
(3)　25号貯蔵穴……125
図　版　32　(1)　25号貯蔵穴土器出土状況……125
(2)　26号貯蔵穴……128
(3)　27号貯蔵穴……129
図　版　33　(1)　28号貯蔵穴……129
(2)　30号貯蔵穴……131
(3)　B地区調査風景……9
図　版　34　(1)　2・4号住居跡出土土器……91
(2)　3・4号住居跡出土石器・土製品……95
(3)　4号住居跡等出土鉄器……97
図　版　35　2・4・5・9・15・17号貯蔵穴出土土器……99
図　版　36　18・19号貯蔵穴出土土器……115
図　版　37　19・23号貯蔵穴出土土器……117
図　版　38　(1)　25・32号貯蔵穴出土石器……126
(2)　貯蔵穴出土石器……99
(3)　貯蔵穴出土土製品……106
図　版　39　(1)　土壙……134
(2)　大溝出土土器……137
(3)　土壙・大溝他出土石器……136
図　版　40　(1)　C地区全景……142
(2)　井戸……144
(3)　C地区出土土器……145

図　版　40　(4)　C地区出土石器・土製品……145
図　版　41　(1)　C・D地区全景……150
(2)　D地区全景……150
(3)　D地区全景……150
図　版　42　(1)　1号貯蔵穴……150
(2)　2号貯蔵穴……150
(3)　3号貯蔵穴……153
図　版　43　(1)　3・4号貯蔵穴……153
(2)　6号貯蔵穴……155
(3)　5号貯蔵穴……155
図　版　44　(1)　7号貯蔵穴……156
(2)　8号貯蔵穴……156
(3)　7・9号貯蔵穴・3号小土坑……156
図　版　45　(1)　9号貯蔵穴……156
(2)　10号貯蔵穴……159
(3)　11号貯蔵穴……159
図　版　46　(1)　12号貯蔵穴……159
(2)　13号貯蔵穴……161
(3)　14号貯蔵穴……163
図　版　47　(1)　3号土坑……167
(2)　2号土坑……167
(3)　1号土坑……165
(4)　4号土坑……167
図　版　48　1～5・8号貯蔵穴出土土器……150
図　版　49　8・11～13号貯蔵穴出土土器……156
図　版　50　(1)　13～15号貯蔵穴出土土器……161
(2)　1号小土坑出土土器……167
(3)　1号貯蔵穴出土土器……150
図　版　51　木材顕微鏡写真1……172
図　版　52　木材顕微鏡写真2……173
図　版　53　木材顕微鏡写真3……173
図　版　54　木材顕微鏡写真4……173
図　版　55　木材顕微鏡写真5……173

図 版 56　木材顕微鏡写真 6 …… 173

挿 図 目 次

第 1 図　九州横断自動車道路線図 …… 4
第 2 図　小郡正尻遺跡と周辺遺跡分布図 …… 折込み
第 3 図　小郡正尻遺跡地形図 …… 折込み
第 4 図　小郡正尻遺跡遺構配置図 …… 折込み
第 5 図　A地区遺構配置図 …… 折込み
第 6 図　A地区南壁断面土層図 …… 折込み
第 7 図　1・2号住居跡実測図及び模式図 …… 17
第 8 図　1・2号井戸実測図 …… 18
第 9 図　2号井戸出土土器実測図 …… 19
第 10 図　溝状遺構部分の区割り …… 20
第 11 図　大溝 1 出土土器実測図① …… 21
第 12 図　大溝 1 出土土器実測図② …… 22
第 13 図　大溝 1 出土土器実測図③ …… 23
第 14 図　大溝 1 出土陶磁器実測図 …… 24
第 15 図　大溝 2 出土土器実測図① …… 25
第 16 図　大溝 2 出土土器実測図② …… 27
第 17 図　大溝 2 出土土器実測図③ …… 28
第 18 図　大溝 2 出土土器実測図④ …… 30
第 19 図　大溝 2 出土土器実測図⑤ …… 31
第 20 図　大溝 2 出土土器実測図⑥ …… 32
第 21 図　大溝 2 出土土器実測図⑦ …… 34
第 22 図　大溝 2 出土土器実測図⑧ …… 35
第 23 図　大溝 2 出土土器実測図⑨ …… 37
第 24 図　大溝 2 出土土器実測図⑩ …… 38
第 25 図　大溝 2 出土土器実測図⑪ …… 39
第 26 図　上層出土石器実測図① …… 42
第 27 図　上層出土石器実測図② …… 43
第 28 図　下層出土石器実測図① …… 45
第 29 図　下層出土石器実測図② …… 46

第 30 図　下層出土石器実測図③……47
第 31 図　上・中層出土石製品実測図……48
第 32 図　上・中層出土石鍋実測図……49
第 33 図　大溝１・２出土土製品実測図……50
第 34 図　大溝２出土瓦拓影……50
第 35 図　大溝２出土木製品実測図①……52
第 36 図　大溝２出土木製品実測図②……53
第 37 図　大溝２支流１出土土器実測図……54
第 38 図　大溝２支流２出土土器実測図……54
第 39 図　北側杭列実測図……折込み
第 40 図　大溝２出土杭実測図①……56
第 41 図　大溝２出土杭実測図②……57
第 42 図　南側杭列実測図……59
第 43 図　大溝２出土杭実測図③……60
第 44 図　大溝２出土杭実測図④……61
第 45 図　大溝２出土杭実測図⑤……62
第 46 図　大溝２出土杭実測図⑥……63
第 47 図　大溝２出土杭実測図⑦……64
第 48 図　小溝４出土土器実測図……69
第 49 図　北部落込み出土土器実測図①……76
第 50 図　北部落込み出土土器実測図②……78
第 51 図　北西部落込み出土土器実測図①……79
第 52 図　北西部落込み出土土器実測図②……折込み
第 53 図　北西部落込み出土土器実測図③……81
第 54 図　西部落込み出土土器実測図……82
第 55 図　南西部落込み出土土器実測図……折込み
第 56 図　包含層出土磁器実測図……84
第 57 図　大溝流路変遷模式図……87
第 58 図　Ｂ地区遺構配置図……折込み
第 59 図　１・２号住居跡実測図……89
第 60 図　１号住居跡出土土器実測図……90
第 61 図　２号住居跡出土土器実測図①……91
第 62 図　２号住居跡出土土器実測図②……92

第 63 図　3 号住居跡実測図……94
第 64 図　3 号住居跡出土土器実測図……95
第 65 図　3 ・ 4 号住居跡出土石器・土製品実測図……95
第 66 図　4 号住居跡出土土器実測図……96
第 67 図　4 号住居跡他出土鉄器実測図……97
第 68 図　1 ・ 2 号貯蔵穴実測図……98
第 69 図　2 ～ 4 号貯蔵穴出土土器実測図……100
第 70 図　3 ～ 6 号貯蔵穴実測図……101
第 71 図　5 ～ 8 号貯蔵穴出土土器実測図……103
第 72 図　7 ・ 8 号貯蔵穴実測図……105
第 73 図　9 ・10号貯蔵穴実測図……106
第 74 図　9 ・10号貯蔵穴出土土器実測図……107
第 75 図　11～14号貯蔵穴実測図……108
第 76 図　12～14号貯蔵穴出土土器実測図……109
第 77 図　15～18号貯蔵穴実測図……111
第 78 図　15号貯蔵穴出土土器実測図……112
第 79 図　16～18号貯蔵穴出土土器実測図……114
第 80 図　19・20・22・23号貯蔵穴実測図……116
第 81 図　19号貯蔵穴出土土器実測図①……117
第 82 図　19号貯蔵穴出土土器実測図②……119
第 83 図　19号貯蔵穴出土土器実測図③……120
第 84 図　19号貯蔵穴出土土器実測図④……121
第 85 図　19号貯蔵穴出土土器実測図⑤……122
第 86 図　20・21号貯蔵穴出土土器実測図……123
第 87 図　23号貯蔵穴出土土器実測図……124
第 88 図　24号貯蔵穴出土土器実測図……125
第 89 図　24～27号貯蔵穴実測図……126
第 90 図　25号貯蔵穴出土土器実測図……127
第 91 図　26号貯蔵穴出土土器実測図……128
第 92 図　貯蔵穴等出土製品実測図……129
第 93 図　28～31号貯蔵穴実測図……130
第 94 図　29号貯蔵穴出土土器実測図……131
第 95 図　32号貯蔵穴出土土器実測図……132

第 96 図　貯蔵穴出土石器実測図……133
第 97 図　土壙実測図……135
第 98 図　土壙出土土器実測図……135
第 99 図　大溝断面土層図……136
第 100 図　大溝出土土器実測図①……137
第 101 図　大溝出土土器実測図②……138
第 102 図　大溝等出土石器実測図……139
第 103 図　包含層出土土器実測図……140
第 104 図　C地区遺構配置図……143
第 105 図　井戸実測図……145
第 106 図　C地区出土土器実測図……147
第 107 図　C地区出土石器・土製品実測図……148
第 108 図　D地区遺構配置図……折込み
第 109 図　1～7号貯蔵穴実測図……151
第 110 図　1・2号貯蔵穴出土土器実測図……152
第 111 図　1号貯蔵穴出土石器実測図……153
第 112 図　3～5号貯蔵穴出土土器実測図……154
第 113 図　6～10号貯蔵穴出土土器実測図……157
第 114 図　8～13号貯蔵穴実測図……158
第 115 図　11・12号貯蔵穴出土土器実測図……160
第 116 図　13号貯蔵穴出土土器実測図……162
第 117 図　14・15号貯蔵穴実測図……163
第 118 図　14・15号貯蔵穴出土土器実測図……164
第 119 図　1～4号土坑実測図……166
第 120 図　2号土坑出土土器実測図……167
第 121 図　1・2号小土坑実測図……168
第 122 図　1・2号小土坑出土土器実測図……168
第 123 図　落込み状遺構出土土器実測図……169

表　目　次

表　1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表……折込み
表　2　A地区大溝2出土小皿・杯法量表……26
表　3　A地区大溝2出土高台付椀法量表……26
表　4　A地区大溝2出土杭一覧表……65
表　5　A地区大溝1出土弥生土器観察表……69
表　6　A地区大溝2出土弥生土器観察表……70
表　7　B地区貯蔵穴一覧表……134
表　8　D地区貯蔵穴一覧表……165
表　9　樹種一覧表……173
表　10　落し穴状遺構地名表……175
表　11　福岡県出土石帯一覧表……178

Ⅰ　調査組織と調査の経過

(1)　昭和59年度の調査経過

横断道路関係の発掘調査は，昭和54年より早くも６年目を迎えた。62年３月の供用開始に向けて用地の確保が進み，土工工事も小郡～朝倉間で本格的に発注され，柿原土取場からのダンプの行進による土煙と振動に悩まされる調査が続いた。

工事の進歩状況に対して，一方では調査体制が追いつかず，その対応策が検討された。我々のにがい経験から一調査現場に２名の職員の配置が義務付けられており，現状の３班体制の拡大のために，５名の臨時職員が採用となり，11月以降は５班体制を敷いた。

また，小郡市内の遺跡については58年度に終了した正尻遺跡（第１地点）を除く６ヶ所について，小郡市教育委員会に助力をお願いした結果，第３・第４地点の調査を快諾された。県知事と市長との間に埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が締結され，当年12月より第４地点の調査を開始した。

調査は小郡市委託分を含めて，４市町15箇所を行ない６箇所は次年度へ継続した。調査面積は69.780m^{2}になり，年々増加の一途をたどっている。

小郡市は４ヶ所調査した。第２地点は試掘の結果，遺構が無く残りは建物の移転後に調査を送った。第４地点は10月に一部橋脚の載荷試験部分の調査を行ない，12月より小郡市教育委員会が調査を引きついだ。弥生時代から古墳時代にかけての集落に関連した遺構が多く検出された。薬師堂遺跡（第５地点）は８月後半から調査を開始した。台地上では弥生時代～奈良時代にかけての集落跡があり，第５・６地点間の幅25mほどの狭い谷部の調査では，筑後地方では初の木簡の出土を見，合せて墨書土器・木製品・瓦等が多量に出土した。至近な距離に山田寺系重弁蓮華文棰先瓦を出す井上廃寺があり，同笵の瓦の出土を見る点重要な成果である。今後，寺域との関連も含めて遺跡の性格が問題となろう。第６地点でも７世紀代を中心とする集落跡が続いて調査され，カマドの支脚等に丸瓦の使用をみている。この両遺跡は次年度へ繰り越した。

大刀洗町では春園遺跡（第９地点）の調査を４月～７月にかけて実施した。台地上では奈良時代の住居跡，建物跡６棟のほか，江戸時代後半の墓（木棺が大部分）80余基が検出された。またその下層ではナイフ形石器と細石刃の２枚の文化層が確認された。

甘木市は５箇所の調査を実施した。立野・宮原遺跡（第11地点）の調査はのべ４年をかけて完了した。奈良～平安時代にかけての一大集落で住居数は実に260余軒、建物跡80棟以上に及

ぶ。今後の整理作業についても多くの期日を要するが，当期の住居がかくも多くこの地域に営まれた背景も問題である。高原遺跡（第16地点）は６月末から11月初旬に調査を行なった。砂質土を地山とするために遺構検出に手まどったが，弥生時代後期～奈良時代にかけての住居跡62軒のほか，縄文時代晩期の包含層を検出した。口之坪遺跡（第17地点）は古墳状の高まりであるが，近世の所産と判明した。塔の上遺跡（第19Ａ地点）は10月末～翌２月にかけて調査を行ない，宮原遺跡と同様に奈良時代を中心とする住居が密集して発見された。この集落には東～西にかけて幅２mほどの溝が巡っているのが注目される。柿原古墳群は４年目に入り，Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｌ地区を通年調査した。当遺跡は土取場にあたっているため，工事と調査が並行して行なわれ，現場一帯は重機・重輪の狂奏曲であった。横穴式古墳51基，石棺墓６基のほか，Ｆ地区の南斜面に弥生時代中期前半の甕棺・土壙墓40基ばかりが検出された。Ｌ地区では７世紀代の製鉄に関連した竪穴住居跡があり，住居中央にあった製鉄炉は切り取って保存した。なお古墳群の地形測量図作成にあたっては，航空・気球撮影により，調査期間の短縮に務めた。

朝倉町では筑後川右岸の段丘上で３箇所の調査を実施した。第23地点は第22地点の東側を含めて行ない，方形周溝墓１基のほかに弥生時代の住居跡４軒を検出した。第22地点側では縄文時代早期の包含層があり，環状石斧や押型文土器等が出土した。才田遺跡（第24地点）・東才田遺跡（第25地点）は水田内の微高地に営まれた遺跡で，７・８世紀の住居跡のほか，12～13世紀と考えられる青磁・白磁等の良好な出土品がある。当地には中世期に造営されたとされる歳田廃寺の記録もあり，今後の調査に期待がもたれる。

調査と併行して，甘木事務所及び太宰府市の九州歴史資料館において整理作業を実施した。また，第５集として甘木市の立野遺跡Ａ・Ｄ地区の報告書を刊行した。

なお，小郡市第６地点の高松家の墓地については，調査終了後に墓石等を含めて隣接地に移転し，従来通り憶想寺さんにて供養されることになった。　（木下　修）

(2)　昭和60年度の調査経過

60年度の発掘調査は薬師堂遺跡（第５地点），薬師堂東遺跡（第６地点），才田遺跡（第24地点），東才田遺跡（第25地点），柿原古墳群（第57地点），それに小郡市委託の大板井遺跡（第４地点）を含め，いずれも昨年度からの継続調査として４月当初から開始した。各工区とも本格的に工事が発注され，調査と工事が錯綜する状況を呈し，激しく行き交うダンプカーやブルドーザーに悩まされる調査となった。とりわけ，小郡～朝倉間の62年３月の供用開始に向けて，工事は一層拍車がかかり，調査の進行を圧迫する状況が続いた。

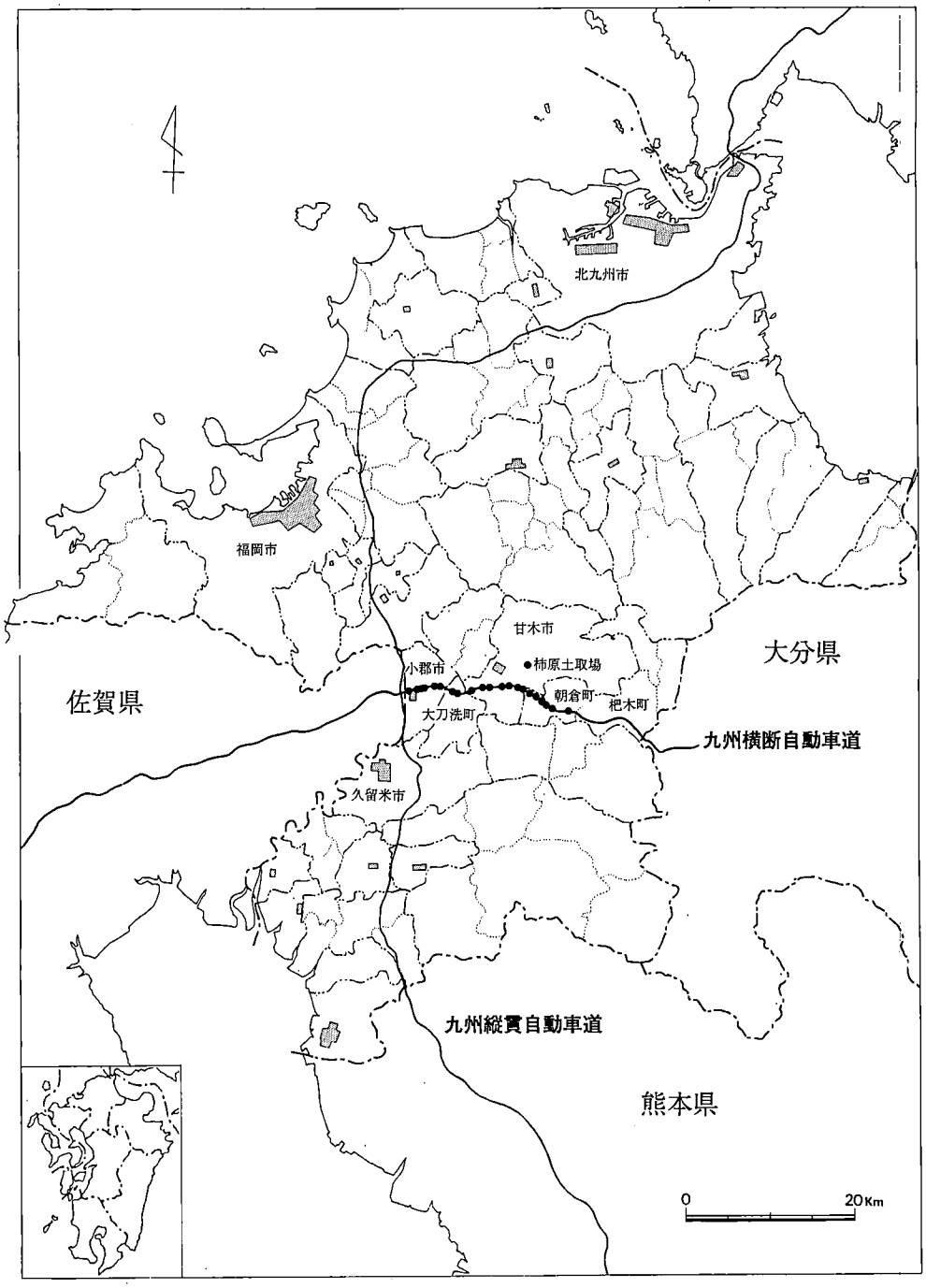
調査は小郡市を含め，６班体制で年間を通じて従事した。２市１町16地点と５箇所の試掘調査を行い，調査面積は115,910m^{2}と増加した。供用開始というタイムリミットの中で調査は工事に追われ難行したものの，調査地点の隣接と相互協力の体制を強化し，効率化をはかりなん

とか乗り切ることができた。

小郡市内の調査は7箇所で行った。小郡正尻遺跡（第1地点）は残りの560m^{2}の調査で，弥生時代中期初頭の貯蔵穴群が検出された。小郡の市街地である第2地点については，建物の移転が進行した4月中旬～5月中旬にかけて試掘を行った。その結果，西鉄小郡駅側の約5,000m^{2}に文化財が存在することが判り，直ちに本調査を実施した。古墳時代から奈良時代にかけての集落跡で，路線の北側に拡がるようである。薬師堂遺跡（第5地点）は昨年度から継続事業で，昨年の谷地区の調査で筑後地方では初めての木簡の出土で注目された遺跡である。本年度も残りの谷地区の調査で，木簡・木器・土器・瓦など多数の遺物が出土した。また，西側の台地上では弥生時代から中世にわたる集落跡が重複して多数検出された。薬師堂東遺跡（第6地点）の調査も昨年度からの継続で，7世紀代を中心とする集落跡が続いて調査された。宝暦の百姓一揆の罪で処刑された高松八郎兵衛一系の墓地として知られる高松家墓地の調査は7月から9月にかけて行い，押し倒された石碑下からは桶棺・木棺・甕棺などの墓穴26基が検出された。なお，調査前の墓地測量に気球撮影・地上撮影を併用し測量図を作成した。また，調査終了後に墓石等を含め，ほぼ同じ配列で隣接地に移転し，憶想寺さんで供養されることとなった。

甘木市内の調査は，土取場である柿原古墳群（第57地点）D地区とL地区の調査で，D地区は前年度からの継続で古墳28基の測量を中心とする調査を実施した。L地区の調査は10月下旬から約1ヵ月の間で古墳2基の調査を行い，柿原古墳群最終の調査となった。

朝倉町内の調査は11箇所で行った。才田遺跡（第24地点）と東才田遺跡（第25地点）は前年度からの継続調査で，古墳時代から奈良時代，平安時代から鎌倉時代にわたる大集落跡である。とりわけ，平安～鎌倉時代の20棟以上におよぶ建物跡には，庇や縁が付く大形の建物が存在し，周辺の土壙や溝からは宋銭をはじめ，中国産の陶磁器類が多数出土するなど，一般農民の集落とは考えがたく，より上の階層の集落といえるだろう。周辺には長淵荘・三奈木荘・黒島荘などといった荘園があったといわれ，今後の検討が必要な興味深い遺跡である。特に，50号土壙から一括出土した陶磁器類は逸品である。大還端遺跡（第19B地点）と石成久保遺跡（第19C・D地点）は隣接し，内容としても希薄な遺跡であったが，古墳時代から奈良時代の住居跡や掘立柱建物群，奈良時代の土壙墓群などが発見された。中道遺跡（第20地点）の調査は7月下旬から11月末にわたって行った。弥生時代～奈良時代にかけての住居跡60軒のほか，掘立柱建物28棟，土壙56基など多数の遺構・遺物が発見された。特に，その大半が火災を受けた弥生時代中期後半～後期の25軒の住居跡群は，事例の少ない時期の集落跡として貴重である。また，縄文時代早期押型文土器の包含層も検出した。西法寺遺跡（第21A地点）は7月中旬から11月下旬にかけて調査した。奈良時代の73軒におよぶ住居跡をはじめ奈良～鎌倉時代にわたる掘立柱建物跡・井戸・土壙など多数の遺構・遺物が検出された。鎌倉時代のものと思われる土壙か



第 1 図　九州横断自動車道路線図

表1　九州横断自動車道関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	面積	調査地区と面積							備考	報告書
					54年度	55	56	57	58	59	60		
1	小郡正尻遺跡	小郡市大字小郡	弥生集落・歴史溝	11,200					5,000		560	完了	7集
2	前伏遺跡	〃　〃	弥生・古墳散布地	10,400						330	5,100	完了	
3	大板井遺跡	〃　大板井	弥生・古墳	5,400							3,000	小郡市委託完了	
4	〃	〃　〃	大板井城跡	9,200						3,500	5,000	小郡市委託完了	
5	薬師堂遺跡	〃　井上	弥生・中世集落	8,800						4,500	3,700	完了	
6	薬師堂東遺跡	〃　薬師町	弥生・古墳散布地（首切塚）	32,000					500	7,300	10,100	完了	
7		〃　今隈	弥生散布地	7,200					200		100	完了	
8	宮巡遺跡	大刀洗町大字山隈	中世散布地	4,000					3,600			完了	
9	春園遺跡	〃　〃	先土器・弥生・古墳・近世墓	10,800					100	6,700		完了	
10		〃　中条本郷		34,400			700	13,500	300			遺構なし，完了	
11	立野・宮原遺跡	甘木市大字下浦	弥生末～平安集落・方形周溝墓・円墳・土壙墓等	33,800			13,860		10,000	3,000		完了	2・5集
12	小石原川西条里	〃　上浦	中世	48,000			810					遺構なし，完了	
13	〃　東条里	〃　上浦馬田	〃	56,000	200	7,600						完了	1集
14	上々浦遺跡	〃　上浦	弥生・古墳集落	18,400	200							完了	1集
15	西原・下原遺跡	〃一ッ木・屋永	弥生・古墳集落	54,800	A・B地点 3,850		下原 4,200	C地点 1,400				完了	1・2・3集
16	高原遺跡	〃　屋永	縄文・弥生・古墳集落	7,800					1,400	5,400		完了	
17		〃　牛鶴		100						100		完了	
18		〃　〃	散布地	2,550					300			遺構なし，完了	
19-A	塔の上遺跡	〃　〃	古墳集落	30,000					700	8,200		完了	
19-B	大還端遺跡	朝倉町大字石成	〃　奈良墓地	20,000							8,400	完了	
19-C/D	石成久保遺跡	〃　〃	古墳集落	20,000							6,100	完了	
20	中道遺跡	〃　大庭	縄文・弥生・奈良集落	15,400					300		11,400	完了	
21-A	西法寺遺跡	〃　〃	奈良集落・中世	46,900				800	600		8,400	完了	
21-B		〃　〃	散布地								2,300	完了	
21-C	大庭久保遺跡	〃　〃	弥生墓地・奈良集落								9,650	完了	
21-D	上の原遺跡	〃　〃	弥生集落・墓地・古墳集落								12,300	完了	
22-A/B	治部ノ上遺跡	〃　入地	縄文・弥生・古墳集落	5,400					300	4,800		完了	
22-C	狐塚南遺跡	〃　〃	弥生・中世集落・墓地	5,000							3,420	完了	
23	座禅寺遺跡	〃　〃	弥生集落・古墳	2,600						2,600		完了	
24	才田遺跡	〃　〃	中世散布地・歳田廃寺	5,400						1,050	6,650	完了	
25	東才田遺跡	〃　〃	〃　〃	4,000						1,300	4,400	完了	
26		〃　須川	散布地	1,600				70				遺構なし，完了	
27	長島遺跡	〃　〃	縄文・弥生・古墳・奈良集落	16,000				C地点 5,000	C地点 6,640				
28	中妙見遺跡	〃　〃	縄文・歴史集落	2,400				200	458			完了	
29	原の東遺跡	〃　菱野	縄文・弥生集落・墓地	16,800					600				
30		〃　菱野・山田	箱式石棺	4,000									
31		〃　山田	箱式石棺	2,000									
32		〃　〃		2,400				300				遺構なし，完了	
33		〃　〃	古墳	2,000									
34		〃　〃	散布地	3,600									
35		〃　〃	弥生・散布地	2,600									
36		〃　〃	古墳散布地	2,000									
37		〃　〃	〃	2,400									
38		〃　〃	弥生・中世・箱式石棺	125									
39		杷木町大字志波	弥生・古墳・中世散布地	22,000							320		
40		〃　〃	中世・散布地	2,500							300		
41		〃　〃	〃　〃	18,000							300		
42		〃　〃	〃 一字一石経	8,000							300		
43		〃　若市	古墳群	12,000									
44		〃　久喜宮	古墳4～5基	1,800									
45		〃　〃	散布地	2,400									
46		〃　古賀	〃	1,800									
47		〃　池田	弥生・古墳・中世散布地	4,000									
48		〃　〃	散布地	1,800									
49		〃　林田	〃	3,200									
50		〃　〃	〃	2,400									
51		〃　〃	〃	5,200									
52		〃　〃	〃	2,000									
53		〃　穂坂	〃	3,500									
54		〃　〃	〃	1,800									
55		〃　〃	古墳	1,600									
56		〃　〃	散布地	2,400									
57	柿原古墳群	甘木市大字柿原	古墳群・縄文・弥生集落	200,000		測量 14,700	900	8,300	15,000	18,500	4,400	土取場完了	4・6集
58	山田古墳群	朝倉町大字山田	〃	40,000	測量 4,435				2,500	2,500	8,710	土取場完了	
IC		把木町大字寒水									500		
			計		8,685	22,300	20,470	29,570	48,498	69,780	115,910		

ら出土した手錫杖と鉄剣は極めて珍しく，修験者の墓かもしれない。また，小字名に残る西法寺なる地名とも無縁ではないかもしれない。大庭久保遺跡（第21Ｃ地点）の調査は，８月末から10月上旬，１月中旬から３月までの２回に分けて実施した。その結果，横断道関係の調査では少ない弥生時代中期初頭から前葉にかけての甕棺・石棺・木棺など120数基の墓が重列に配置され検出された。ほかに奈良時代の50軒近い住居跡や掘立柱建物跡が検出された。上の原遺跡（第21Ｄ地点）の調査は10月中旬から３月までという長期間の調査となった。今年度で最も遺構の密度が高い遺跡で，かつまた礫層に切り込んでいるため，遺構検出や発掘に手まどった調査であった。筑後川の支流である荷原川の右岸に面した東側端部付近から100基を越す弥生時代前期から中期の貯蔵穴群が密集して発見され，円形・方形の住居跡群・土壙・竪穴遺構が群集した弥生時代の大集落跡であった。また，集落の一角には20数基からなる甕棺墓群も検出された。その他にも奈良時代の110数軒にも及ぶ住居跡をはじめ，掘立柱建物跡・土壙・竪穴・溝など多数の遺構が密集して検出された。この地点は２つのボックス工事を控えた調査であったため，調査の進行と工事工程が錯綜し，まさに戦場の様相を呈することとなった。狐塚南遺跡（第22地点）の調査は５月中旬から９月下旬の間で実施した。弥生時代後期の集落跡，終末から古墳時代初頭にわたる石棺・木棺・土壙墓などからなる墓地群をはじめ，平安・鎌倉・室町時代にもわたる住居跡や掘立柱建物跡，墓などが複雑に密集した遺跡であった。また，西端部の共同墓地の買収・移転の遅れ他，工事進捗に追われた調査であった。山田古墳群（第58地点）の調査は８月下旬から１月下旬にわたって行った。複室式の横穴式石室を有す円墳３基をはじめ，土壙墓６基，石棺墓１基，蔵骨器１基が検出された。盗掘は受けていたものの，耳環・勾玉・管玉などの装身具類，辻金具・雲珠・鐙などの馬具，刀子・鉄鏃など多数の遺物が出土した。

３月になって，61年度予定される杷木インターチェンジ用地をはじめ，杷木町５箇所の試掘調査を実施した。

一方，地元住民を対象にした遺跡の現地説明会を３箇所で行った。また，３月から４月にかけてこれまでの７年間の調査成果を一般に公開・展示する九州横断自動車道関係埋蔵文化財出土品展を甘木歴史資料館で開催した。甘木・朝倉地区をはじめ，近隣から多数の参観者を得て好評であった。

整理作業は調査と併行して甘木事務所と太宰府市の九州歴史資料館で行った。調査報告書は，柿原古墳群（６集）と小郡正尻遺跡（７集）の２冊を刊行した。

なお，発掘調査にあたっては第３・４地点を受託された小郡市教育委員会をはじめ甘木市・朝倉町教育委員会，ならびに作業員として参加していただいた地元の方々の御協力を得た。感謝の意を表します。

昭和59年度から60年度におよぶ調査関係者は下記のとおりである。　　（井上裕弘）

日本道路公団福岡建設局

	局　長	今村　浩三	
	総務部長	菱刈　庄二	安元　富次
	管理課長	森　宏之	
	管理課長代理	野口利夫（前任）	佐伯　豊

日本道路公団福岡建設局甘木工事事務所

	所　長	乗松　紀三	
	副所長	西田　功	
	副所長(技術担当)	中村　義治	
	庶務課長	松下　幸男（前任）	徳永　登
	用地課長	岩下　剛	
	工務課長	山口宗雄（前任）	後藤二郎彦
	小郡工事区工事長	友田　義則	
	甘木工事区工事長	猪狩　宗雄	
	朝倉工事区工事長	平沢　正（前任）	小手川良和
	杷木工事区工事長	前田　雄一（前任）	山中　茂

小郡市教育委員会

	教育長	福田　大助	
	教育部長	安永　茂歳	
	社会教育課長	藤田　静生（前任）	平山　稔
	社会教育係長	出利葉哲也（前任）	永田　真二
	庶　務	高倉　秀雄（前任）	米倉百合子
	技　師	速水　信也	
	調査補助員	山田あや子	岡村　正子

福岡県教育委員会

総　括	教育長	友野　隆	
	教育次長	安部　徹	
	管理部長	伊藤　博之（前任）	大鶴　英雄
	文化課長	前田　栄一	
	文化課長補佐	中村　一世（前任）	平　聖峰
	文化課長技術補佐	宮小路賀宏	
	文化課参事補佐	栗原　和彦	
庶　務	文化課庶務係長	松尾　満（前任）	平　聖峰（兼任）

庶　務	文化課事務主査	長谷川伸弘	
調　査	文化課調査第２係長	栗原　和彦（前任）	宮小路賀宏（兼任）
	同　技術主査	井上　裕弘	
	同　主任技師	木下　　修（現京築教育事務所技術主査）	
	同　主任技師	高橋　　章	
	同　主任技師	児玉　真一（現北筑後教育事務所技術主査）	
	同　主任技師	新原　正典（現筑豊教育事務所技術主査）	
	同　主任技師	中間　研志	
	同　主任技師	佐々木隆彦	
	同　主任技師	小池　史哲	
	同　技師	伊崎　俊秋	
	同　技師	小田　和利	
	同　技師	緒方　　泉（前臨時職員）	
	同　文化財専門員	木村幾多郎	
	同　臨時職員	日高　正幸	
	同　臨時職員	森山　栄一（現筑紫野市教育委員会）	
	同　臨時職員	宮田　浩之（現小郡市教育委員会）	
	調査補助員	高田　一弘	武田　光正　　佐土原逸男
		樋口　秀信（現佐賀県教育委員会）	平嶋　文博
		向田　雅彦	柏原　孝俊　　田中　康信

(3)　小郡正尻遺跡の調査経過

この調査は，鳥栖インターチェンジに隣接する秋光川３～５号橋橋梁工事を先行させたいという日本道路公団の要望によるものである。公団側は都市計画道路三沢・西福童線から秋光川までの，橋梁工事に伴う資材搬入路を確保したいとの主旨であった。これに対し，文化課側では昭和58年７月22日に試掘調査を実施し，都市計画道路西方の水田で，弥生時代～中世遺物の包含，ピット・溝等の遺構の存在を確認したが，軟弱な地盤であること，調査中の他遺跡の進行状況などから，北側20m幅をとりあえず搬入路として明け渡し，残余の部分を渇水期に全面発掘調査することにした。

調査は，昭和58年10月31日から開始したが，都市計画道路西側でも県境側をＡ地区，道路側をＢ地区，道路東側をＣ地区と便宜上区別し，Ａ地区から調査を進め，Ｂ，Ｃ地区へと移行した。なおＣ地区の調査の結果，Ｃ地区東方に遺跡の存在が予想されて，追加調査の必要があったものの，用地未解決でもあり，他に対処しなければならない調査が控えていたため，第２地

点調査時に付帯して発掘調査することにして，昭和59年２月28日に終了した。

追加調査は，昭和60年５月14日～６月１日の期間で実施したが，第２地点側の試掘調査の結果，調査範囲の東側の小郡幼稚園跡地に遺構遺物が存在せず第２地点の調査区域と700mもの空白が生じたので，第１地点の小郡正尻遺跡に含めてＤ地区と称することになった。

昭和58年10月31日，表土剝ぎを開始する。

11月７日，テントの設営・発掘器材の搬入。Ａ地区南東部から遺構検出作業を始める。

11月10日，Ａ地区小溝１，大溝１・２などを検出。大溝２には南端にトレンチを入れて掘り下げる。白磁・土師器椀・弥生土器などが出土した。表土剝ぎ，排土移動は継続実施。

11月19日，座標に合わせて測量杭を打つ。

11月23日，大溝１より西方の部分に，４m方眼の区割りを設定して掘り下げる。

11月24日，大溝２では，上層に土師器など，下層に弥生土器の包含していることがわかる。

11月26日，Ｂ地区試掘。この結果畑地部分のみ全面発掘することにし，表土剝ぎを開始する。

11月29日，Ｃ～Ｅ－２・３区の中層下部と下層を掘り下げる。Ｄ・Ｅ２区に杭列を検出し，大溝２を横断することを確認する。大溝２の西肩部から石帯が出土。

11月30日，杭列を露呈させて写真撮影。「郡」字の読める墨書土器出土。

12月２日，Ａ～Ｄの８～11区の上層を掘り下げながら大溝１と大溝２の支流の関係を検討。

12月８日，杭列実測，杭列部分の土層実測図を終える。大溝１は，Ａ－７～８区を，大溝２はＢ～Ｄの６・９・10区を中心として中層・下層を掘り下げる。

12月10日，Ｄ～Ｇの９～12区の遺構検出。

12月12日，大溝１・２及び支流１・２，小溝３などの先後関係を検討し，大溝２を整地して大溝１が流れることを確認する。

12月14日，Ｂ13区に杭列を検出する。支流２は大溝１を切ることが確実となる。

12月20日，大溝２の支流１を掘り下げる。

12月23日，大溝２の支流２をほぼ掘り上げる。年内の現場作業はこの日迄で，発掘器材整理。

昭和59年１月５日，現場再開。休日の間に冠水し，調査区端や，土層観察用畦の壁が崩壊しており，この崩落土を取り除く作業が休み明けの最初の仕事となった。

１月６日，冷え込みが厳しく，冠水が凍り，砂質粘性土の埋土も鍬が立たず，三叉鍬で掘り下げるが，午後からは解けて軟弱に一変。正月気分はどこへやら。

１月11日，西側の落ち込み部分を掘り下げる。下層は弥生後期の土器のみが出土。Ａ～Ｄ７区の土層断面実測。佐賀県側の試掘調査が始まり，佐賀県教委の田平徳栄主事が来訪。

１月14日，県境に近い水田を試掘調査，湧水が激しく拡張は不可能。

１月18日，Ｃ地区の表土剝ぎ開始，Ａ地区は全景写真撮影のため清掃作業に入る。

１月19日，約15cmの積雪。Ａ～Ｅ11区土層断面実測。

1月20日，約10cmの積雪。C地区の排土置場の都合もあり，周辺の試掘調査を実施。C地区東部では東方に遺構・遺物の存在する可能性がある。

1月23日，A地区全景写真撮影。B地区は遺構検出を開始。C地区は表土剝ぎ継続実施。

1月27日，B地区の1・2号住居跡，大溝などの掘り下げ作業。

2月1日，積雪を除去して，B地区の貯蔵穴群を掘り下げる。(図版33-3)

2月11日，B地区3号住居跡床面下の貯蔵穴を掘り下げる。C地区の表土剝ぎはほぼ片付く。

2月15日，A地区の北側杭列実測終了。B地区の貯蔵穴は，19号まで掘り下げが進む。19号貯蔵穴内に土器がまとまって出土する。貯蔵穴の実測にも追われるが，片岡宏二氏・赤川正秀氏らが来訪，実測協力を頂くなどで大いに助かる。

2月18日，C地区の遺構検出を開始し，井戸・小溝などを掘り下げるが，密度は低い。

2月14日，B地区貯蔵穴群の掘り下げが終了し，全景写真撮影。鳥栖市教委の石橋新次氏来訪。

2月25日，C地区も掘り下げが終了し，写真撮影。B・C地区とも実測作業に追われる。

2月28日，B地区・C地区共，平板測量，個別実測のポイントを確認し終了。併行して器材・テント等を撤収。

A～C地区の調査は木下修と小池史哲が担当し，調査補助員として小田和利が参加した。なお調査期間中には，福岡県文化財保護指導委員赤川正秀氏，小郡市教育委員会技師速水信也・片岡宏二氏，他地点調査中の武田光正・日高正幸氏らの御協力を得た。

昭和60年5月14日，D地区表土剝ぎ開始。

5月22日，テント設営，遺構検出を実施し，貯蔵穴が15基確認された。

5月27日，貯蔵穴はいずれも浅く，掘り下げが終了し，大溝の掘り下げを始め，実測開始。

5月31日，全景写真を撮影する。

6月1日，実測作業も終了し，器材・テントを撤収する。

D地区の調査は，前半の試掘・表土剝ぎを井上裕弘，後半を小田和利が担当した。期間中，他地点調査中の中間研志，木村幾多郎，高田一弘，平嶋文博，田中康信の諸氏の来援を得た。

出土木製品の樹種同定については，九州大学農学部の林弘也先生にお願いしたところ御快諾を頂き，整理中に琉球大学へ転出されるという御多忙中にもかかわらず，結果報告を頂いた。

出土遺物は，九州歴史資料館へ搬入し，整理作業を実施したが，整理・復原には岩瀬正信氏が指導にあたり，鉄器・木製品の保存には九州歴史資料館技術主査横田義章氏の御協力を得，遺物写真の撮影には同館技術主査石丸洋氏，藤美代子氏の御協力，土器実測・製図作業には平田春美・豊福弥生・鶴田佳子・塩足里美・原田和枝・松島邦子・速水公己の諸氏の御協力を得た。この他発掘調査・整理作業を通じて多くの方々の有益な助言・協力を得ることができた。感謝に耐えない。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

小郡正尻遺跡は，福岡県小郡市大字小郡字正尻，同字才町，同字寺田にわたって所在する。

九州横断自動車道の路線は，九州縦貫自動車道鳥栖インターチェンジから東へ延びるが，ここから約250mで，佐賀県と福岡県の県境を越す。この県境を越したあたり，小郡市街地との間が，小郡正尻遺跡の範囲で，北緯33°23′38″，東経130°32′44″付近に位置することになろう。

遺跡周辺の地形は，背振山地東南麓につながる丘陵・段丘の裾部と，山地・丘陵を開析する河川の沖積平野であり，背振山地・朝倉山塊・耳納山地に囲まれた両筑平野の西部に相当する。

両筑平野では，大分県の山岳部から流れる筑後川に，朝倉山塊・背振山地から南へ流下する河川が合流して有明海に注いでいるが，中・下流域は洪水の絶えない地域でもあったため，多くの自然堤防も形成されている。

遺跡の近くでは，東方に宝満川が流れる。宝満川は，朝倉山塊からの山家川・曽根田川・草場川や，背振山地側からの宝珠川・高原川を集めて流下している。西側には，遺跡のすぐ近くを秋光川が流れ，更に西方では山下川・大木川などが流下している。

秋光川の上流に目を向けると，背振山地の東部にそびえる九千部山（848m）から，東へ標高626mの権現山，404mの基山へと徐々に高度を下げて，筑紫・三国の丘陵部が広がり，また東南側は，標高494mの城山，201mの群石山へと高度を下げて，柚比・麓の丘陵部に至っているが，秋光川は権現山に源を発して，基山の南方を回り園部の谷を開き，国鉄鹿児島本線・国道３号線を越したあたりから南に流路をとるようになる。一方，基山に源をもつ高原川は，国道３号線を越すあたりで，秋光川の北約600mを流れ，東南方に流下して宝満川に注ぐ。

遺跡は，この秋光川と高原川の開析による扇状地状の丘陵・段丘の西端部標高16～19m位に位置し，秋光川の左岸低位段丘・氾濫原・自然堤防上に占地している。

なお遺跡周辺は交通の要衝でもある。鳥栖インターチェンジはもとより，西方約1.5kmに国道３号線と34号線の分岐点があり，国鉄鹿児島本線が走る。南0.5kmに主要地方道鳥栖・甘木線が走り，東約１kmに西鉄大牟田線小郡駅が，東0.5kmに国鉄甘木線小郡駅がある。

小郡正尻遺跡周辺の遺跡群は，先述の各河川のつくる段丘・丘陵上に数多くみられるが，各時期毎に少し眺めてみることにしよう。

先土器・縄文時代　先土器時代の遺跡は今のところ多く判っていないが，鳥栖市と基山町にまたがる長ノ原遺跡（註１）から細石刃，基山町千塔山遺跡（註２）からナイフ形石器・台形状石器・細石刃，城ノ上遺跡（註３）からナイフ形石器が出土している。また小郡市内では，横隈山遺跡（註４）・津古内畑遺跡（註５）・乙隈内畑遺跡（註６）などからナイフ形石器，三

1 小郡正尻遺跡
2 小郡前伏遺跡
3 大板井遺跡(銅戈出土地)
4 大板井遺跡
5 井上薬師堂遺跡
6 薬師堂東遺跡
7 宮巡遺跡
8 春園遺跡
9 立野遺跡
10 宮原遺跡
11 上々浦遺跡
12 下原遺跡
13 基肄城遺跡
14 とうれぎ土塁
15 千塔山遺跡
16 関屋土塁
17 城ノ上遺跡
18 伊勢山遺跡
19 柚比梅坂遺跡
20 梅坂炭化米遺跡
21 平原遺跡
22 上野古墳
23 長ノ原遺跡
24 永吉遺跡
25 南西川遺跡
26 本川原遺跡
27 田代天満宮東方遺跡
28 太田東方古墳
29 剣塚古墳
30 岡寺古墳
31 田代太田古墳
32 庚神堂古墳
33 安永田遺跡
34 姫方遺跡
35 京町遺跡
36 今泉遺跡
37 真木町宮ノ前遺跡
38 五郎山古墳
39 隈遺跡
40 津古内畑遺跡
41 津古東宮原遺跡
42 津古古墳群
43 種畜場遺跡
44 ハサコノ宮遺跡
45 三沢蓬ヶ浦遺跡
46 三国の鼻古墳
47 横隈鍋倉遺跡
48 横隈狐塚遺跡
49 横隈山古墳
50 横隈山遺跡
51 三国小学校遺跡
52 北牟田遺跡
53 松尾口遺跡
54 三沢栗原遺跡
55 宮裏遺跡
56 花聳古墳群
57 乙隈天満宮遺跡
58 乙隈東畑遺跡
59 干潟遺跡
60 井上北内原遺跡
61 井上廃寺跡遺跡
62 小郡官衙遺跡
63 向築地遺跡
64 八坂石塚遺跡
65 中原前遺跡
66 東小田峯遺跡
67 沼尻遺跡
68 東小田七板遺跡
69 向福島遺跡
70 金山遺跡
71 小隈窯跡
72 小隈古墳
73 焼峠古墳
74 松尾古墳群
75 山隈窯跡
76 野町遺跡
77 栗田経田遺跡
78 栗田旭ノ下遺跡
79 仙道古墳
80 鬼ノ枕古墳
81 上川原遺跡
82 馬田ひばりヶ丘遺跡
83 馬田上原遺跡
84 一木丁坪遺跡
85 大願寺遺跡
86 大願寺南遺跡
87 小田道遺跡
88 栗山遺跡
89 中寒水屋敷遺跡
90 小隈出口遺跡
91 神蔵古墳
92 小隈松山遺跡
93 小田茶臼塚古墳
94 小田小塚古墳

第 2 図 小郡正尻遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50000)

国小学校遺跡（註７）から尖頭器などが出土しており，横断道路線内の大刀洗町春園遺跡（註８）からはナイフ形石器，細石刃など多くの石器類が出土した。

縄文時代では，鳥栖市内で真木町宮ノ前遺跡（押型文），古賀遺跡（轟式），安永田遺跡（御手洗式），柚比梅坂遺跡（曽畑式・御領式系），本川原遺跡（晩期前半の袋状竪穴２基）（註９），基山町内で千塔山遺跡（押型文など），伊勢山遺跡（押型文）（註10），小郡市内では横隈山遺跡（早・後期），向築地遺跡（註50），干潟遺跡（註11），向畔ヶ浦遺跡（押型文）（註12）などが知られている。また夜須町では向福島遺跡（押型文）（註13），金山遺跡（曽畑式）（註14），小隈遺跡（後・晩期）（註15），三輪町では野町遺跡（押型文）（註16），甘木市では上川原遺跡（押型文・晩期）（註16），ひばりヶ丘遺跡（押型文）（註16），立野遺跡（押型文）（註17），神蔵遺跡（押型文・塞ノ神式）（註18）などがある。

先土器・縄文時代の遺物は，弥生時代以降の遺跡で副次的に発見される例が多く，遺構の数は極めて少ない。資料の増加を俟つしかないようだが，縄文時代でも早い時期の押型文土器を出土させている遺跡が多いことは注目されよう。また小郡市赤川地区で晩期土器片が採集されていること（註19）久留米市宮ノ陣町五万騎塚遺跡で晩期前半頃の土器出土が知られること（註20）にも注意しておきたい。

弥生時代　この地域の弥生時代遺跡は前期末頃以降急激に増加している。鳥栖市内では，銅鐸・銅矛の鋳造が考えられる安永田遺跡が柚比地区にあり，細形銅戈・鉄剣・石戈も出土している。柚比地区遺跡群では，住居跡・甕棺墓群・石棺墓群も数多く検出されており（註21）梅板炭化米遺跡や平原遺跡など規模の大きな遺跡も多い。この他，田代天満宮東方遺跡でも95基の中期甕棺墓（註22），西川遺跡からは石剣の出土（註23）が知られ，長ノ原遺跡では中・後期の多量の遺物が出土している。基山町千塔山遺跡では弥生後期～終末期の環溝集落・石棺墓・土壙墓群が調査された（註24）。

小郡市域では，当該遺跡に近い大板井遺跡がある。古くから甕棺墓地として知られており，銅戈７口の出土も注目されてきたが，宅地造成・横断道建設に伴った数次にわたる調査がある（註25）。また三国丘陵では，九州縦貫自動車道建設や，学校建設・宅地造成などに伴って調査された数多くの遺跡があり，殊に弥生期の遺跡が集中する。この地区の遺跡については，かつて酒井仁夫氏による紹介（註26）があるので特には触れないが，弥生前期末～中期初頭期のの遺跡が多く，中期前半以降，後期前半迄の遺跡が減少する。近年では，三沢蓬ヶ浦遺跡（註27），三沢栗原遺跡（註28），三沢鍋倉遺跡（註29）などの調査例がある。三沢栗原で中期末～後期初頭の住居跡群が検出されたこと，三沢鍋倉で朝鮮系無文土器が出土したことなどが注目される。小郡市域と筑紫野市域にまたがる中九州ニュータウン建設に伴った調査が進められるので更に資料が増加しようが，筑紫野市域では隈・西小田地区の調査があり，最近，西小田地区で細形銅剣・貝釧を副葬品にもつ甕棺墓も調査されている（註30）。

また宝満川と曽根田川に挟まれる夜須町東小田地区では，昭和初期に前漢鏡・銅戈が発見されたことで知られる東小田峯遺跡，銅戈溶笵が発見された中原前遺跡がある。

最近，圃場整備に伴う発掘調査が実施されて，東小田峯遺跡の長方形の墳丘墓から，棺内に前漢鏡２面・鉄剣・ガラス璧２個などを，棺外に鉄戈を副葬する甕棺墓，鉄剣を副葬する甕棺墓が発見された（註31)。東小田七板遺跡でも鉄戈の出土と豊富な丹塗磨研土器が出土している（註32)。

曽根田川と草場川に挟まれる地区の先端部にあたる小郡市乙隈で銅戈２本の出土が伝えられる（註33)。なお，中細銅戈の出土，丹塗磨研土器群の祭祀遺構で知られる栗田遺跡は約５km上流に位置する。

草場川の南側は城山山塊につづく丘陵が広がるが，小郡市干潟遺跡（註34)，井上北内原遺跡（註35）が調査され，中期中葉，中期後半～後期初頭の甕棺墓群が発見されている。なお青銅器類の出土としては，銅戈が岩田地区から出土したと伝えられている（註36)。小石原川右岸には甘木市上川原遺跡（註37)，馬田上原遺跡（註38）が占地し，上原遺跡では夜臼式の甕棺墓，有柄式石剣２本が出土している。

小石原川の対岸，小田，平塚あたりの丘陵部では，中寒水屋敷遺跡の中国式銅剣の出土（註38)，平塚栗山遺跡の前漢鏡・鉄戈・貝釧の出土（註38)，小田道遺跡の住居跡群（註39）などが知られる他，近年，小隈出口遺跡で甕棺墓などが調査（註40）されている。

弥生時代の遺跡群では，三国丘陵中の北牟田遺跡12号木棺墓出土の銅剣切先（註41）を含めて，青銅製品・鉄戈・鉄剣などの鉄製武器類の出土が注目され，目下のところ各河川に挟まれた地形の処に点在することも興味深い。

古墳時代　鳥栖市内では，剣塚・岡寺・庚申堂古墳の３基の前方後円墳（６世紀代）が大木川左岸の丘陵上にあり，国指定史跡の田代太田古墳（６世紀後半）も占地する。東部の地域では，本川原遺跡に古墳時代初頭期の住居跡，方形周溝墓がある（註42)。基山町内では山下川左岸に上野古墳（５世紀）があり，貝釧をもった人骨，筒型器台の出土（註43）が知られる。秋光川の右岸に５世紀の平地式住居跡と報告される永吉遺跡（註44)，左岸に千塔山遺跡の６世紀初頭～後半の古墳，高原川の左岸に伊勢山遺跡の住居跡などがある。なお鳥栖市内，基山町内とも山麓部には６世紀後半以降の群集墳が占地している。

小郡市内の古墳時代の状況については片岡宏二氏の紹介（註45）があり，甘木市周辺については児玉真一氏の紹介（註46）があるのでそれに譲る。

歴史時代　大宰府防衛の一貫として，基肄城が基山に築かれており，御原郡衙に推定される小郡官衙遺跡（註47）が当該遺跡の東北東1.3kmの位置にある。古代官道（西海道）の基肄駅もこの周辺に推定される。地形的にみても大宰府から筑後に抜けるルートとして，宝満川沿いに，西小田・横隈・大保・小郡・寺福堂に至るルート，東小田・干潟・井上・下岩田に至る

ルートと，国道３号線に沿ったルートが考え易い。しかし三国境で分岐を仮定すれば原田・小倉での分岐を想定せざるを得ない。基山町小倉の周辺では関屋土塁（註48），とうれぎ土塁（註49）があり，時期的にはっきりとしないが，基肄城同様，大宰府防衛の目的で作られた水城の可能性が高い。

小郡市内では，三沢栗原遺跡で老司系の瓦（註50），干潟遺跡・井上廃寺の山田寺系瓦（註51）が出土している。また横断道路線内の井上薬師堂遺跡では山田寺系瓦や木簡・墨書土器・木製農具類が出土している（註52）。小郡官衙遺跡に隣接する向築地遺跡では，古墳時代末期～奈良時代の住居跡・掘立柱建物を検出している（註53）。この調査では，小郡官衙遺跡が東南方向に広がらないことも確認されている。この時期の集落としては，三沢栗原遺跡・三沢鍋倉遺跡・干潟遺跡などの他に，横断道路線内において小郡市・甘木市域などで多数の住居跡・掘立柱建物群を調査している。

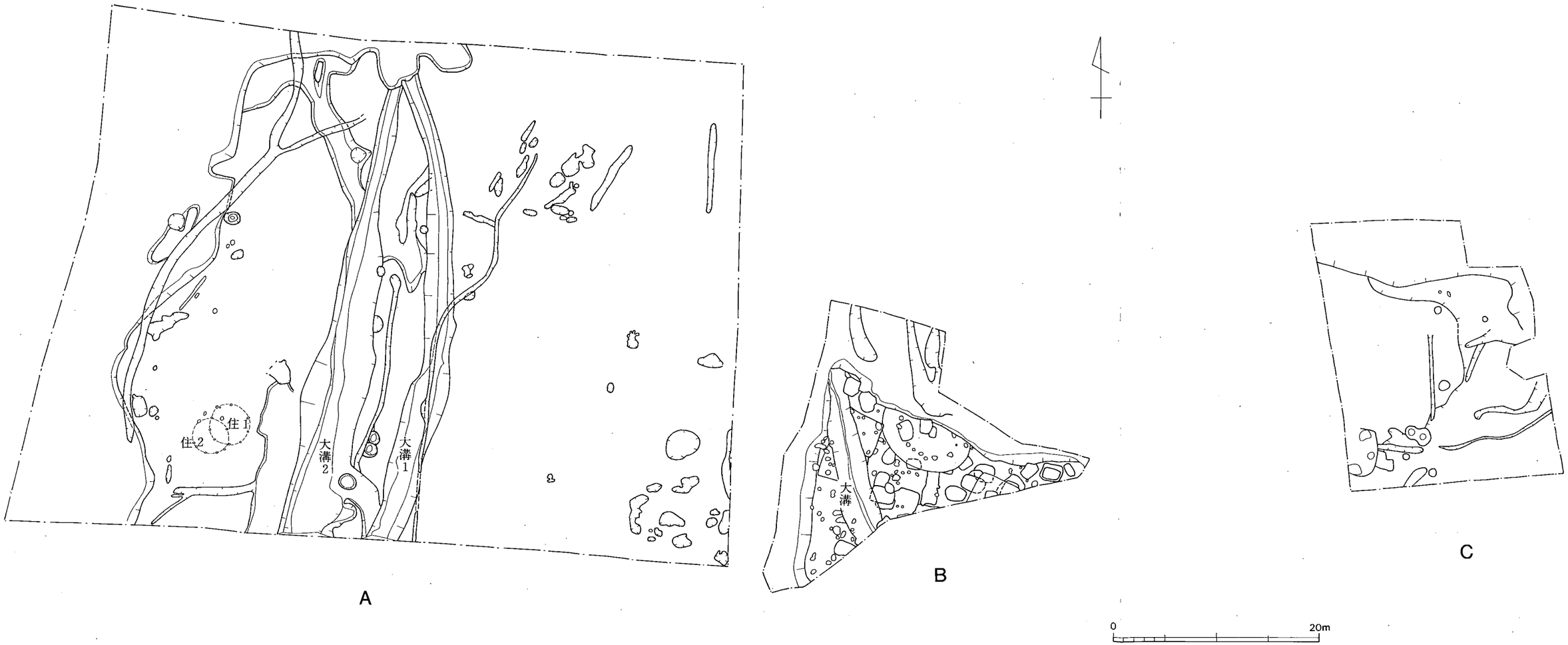
いずれにしても，日本書紀，持統天皇三（693）年六月の条に「二巳，於筑紫小郡，設新羅弔使金道那等。賜物各有差。」の記録，遡って，天武天皇二（674）年11月の条に「壬申，餐高麗邯子新羅薩儒等於筑紫大郡。賜禄各有差。」の記録の小郡・大郡が，現在の小郡の地に相当するのであれば，更に遡って，斉明期の朝倉橘廣庭宮が朝倉山塊と筑後川の接近する両筑平野東部の山裾に仮宮とはいえ造営されたことも併せて，有明海側に面した占地であることに注目しておきたい。

（小池史哲）

註１　佐賀県教育委員会　1979　本川原遺跡　第３次調査
註２　基山町遺跡発掘調査団　1978　千塔山遺跡
註３　基山町遺跡発掘調査団　1977　城ノ上遺跡
註４　小郡市教育委員会　1974　横隈山遺跡　小郡市文化財調査報告書　第３集
註５　小郡町教育委員会　1970　津古内畑遺跡
註６　小郡市教育委員会　1981　小郡の文化財　小郡市文化財調査報告書　第９集
註７　小郡市教育委員会　1981　三国小学校遺跡　小郡市文化財調査報告書　第10集
註８　福岡県教育委員会が1979年度に発掘調査
註９　註１前掲書，鳥栖市教育委員会　1983　安永田遺跡　鳥栖市文化財調査報告書　第16集などを参照した。
註10　佐賀県教育委員会　1970　基山町伊勢山　鳥栖市永吉遺跡
註11　福岡県教育委員会　1980　干潟遺跡Ⅰ
註12　小郡考古学研究会　1982　みくに　創刊号
註13　片岡肇　1968　福岡県朝倉郡向福島出土の押型文土器　九州考古学33・34
註14　夜須町教育委員会　1981　金山遺跡　夜須町文化財調査報告書　第４集
註15　中村勝氏の採集資料による。
註16　甘木市役所　1984　甘木市史資料　考古篇
註17　福岡県教育委員会　1983　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　2
註18　甘木市教育委員会　1978　神蔵古墳　甘木市文化財調査報告　第３集
註19　小郡市教育委員会　1983　八坂石塚遺跡Ⅰ・Ⅱ　小郡市文化財調査報告書　第19集

註20　福岡県教育委員会　1977　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XV
註21　鳥栖市教育委員会　1983　安永田遺跡　鳥栖市文化財調査報告書　第16集
註22　佐賀県教育委員会　1973　田代天満宮東方遺跡　佐賀県文化財調査報告書　第24集
註23　小田富士雄　1959　佐賀県田代発見の石剣と土器　九州考古学７・８
註24　註２前掲書
註25　九州考古学会　1950　北九州古文化図鑑第一輯，小郡市教育委員会　1981～1984　大板井遺跡Ⅰ～Ⅳ
註26　福岡県教育委員会　1979　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XXXI
註27　福岡県教育委員会　1984　三沢蓬ヶ浦遺跡　福岡県文化財調査報告書　第66集
註28　小郡市教育委員会　1984・1985　三沢栗原遺跡Ⅰ～Ⅳ　小郡市文化財調査報告書　第15・23集
註29　小郡市教育委員会　1985　三沢鍋倉遺跡　小郡市文化財調査報告書　第26集
註30　昭和61年１月31日付　西日本新聞掲載記事
註31　夜須町教育委員会　1986．１．12現地説明会資料 峯遺跡
註32　夜須町教育委員会が1982年度に，県営圃場整備に伴い発掘調査を実施
註33　井上俊男・柴田泰典・渡辺正気　1962　福岡県三井郡小郡町大字乙隈発見の二口の銅戈　九州考古学14
註34　小郡市教育委員会　1983　千潟遺跡　小郡市文化財調査報告書　第16集
註35　小郡市教育委員会　1984　井上北内原遺跡　小郡市文化財調査報告書　第20集
註36　九州歴史資料館　1982　田中幸夫寄贈品目録
註37　甘木市教育委員会　1982　上川原遺跡　甘木市文化財調査報告　第13集
註38　註16前掲書
註39　甘木市教育委員会　1981　小田道遺跡　甘木市文化財調査報告　第８集
註40　甘木市教育委員会が1984年に発掘調査を実施
註41　註26前掲書
註42　佐賀県教育委員会　1974　本川原遺跡　佐賀県文化財調査報告書　第26集，及び註１前掲書
註43　佐賀県教育委員会　1954　基山町上野古墳　佐賀県文化財調査報告書　第３輯
註44　註10前掲書
註45　小郡市教育委員会　1985　三国の鼻遺跡Ⅰ　小郡市文化財調査報告書　第25集
註46　福岡県教育委員会　1984　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　5
註47　福岡県教育委員会　1968　福岡県三井郡小郡遺跡発掘調査概報　福岡県文化財調査報告書　第39集
註48　鏡山猛　1986　大宰府都城の研究
註49　註２前掲書
註50　小郡市教育委員会　1978　向築地遺跡　小郡市文化財調査報告書　第５集
註51　註11前掲書及び小田富士雄　1961　九州における山田寺系棰先瓦の発見　歴史考古学６
註52　福岡県教育委員会が1984年に発掘調査を実施
註53　註50前掲書

第 3 図　小郡正尻遺跡地形図（1/2000）



第 4 図　小郡正尻遺跡遺構配置図 (1/400)

Ⅲ．遺構と遺物

1．A地区の調査

1．はじめに

A地区は，小郡市の中心部を南北に流れる宝満川の一支流である秋光川（鳥栖市側）より東へ約100mの距離にあり，80m×50mの調査区を設定した。調査区西側は，重機による試掘を行った結果，秋光川の氾濫原であるということが判明し，また，土捨て場を確保する必要があったので調査を行わなかった。

調査区の周辺は，水田面ということもあってかなり水位が高く，大溝の調査の際には，終始湧水に悩まされた。また，58年度の冬は，第一級の寒波が襲来した年でもあり，福岡でもその例外ではなかった。寒さと湧水のために調査は遅々として進展せず，さらに調査区南北両壁の崩落という憂き目にあった。58年10月末日に調査を開始し，終了したのが，明けて２月中旬であった。

A地区は，元来B地区と同じ程度の高さであったのが，後世の水田化により１m以上削平され，為に，遺構の残存状態が悪かった。遺構としては，調査区の中央において大溝を２条検出し，その南北両端において杭列を確認した。住居跡は，大溝西側において検出したが，周壁は削平され，柱穴を残すのみであった。井戸は，２条の大溝の中間において２基検出した。他に，小溝４条，ピット多数を検出した。また，調査区の西側は，青灰色粘土層となっていたので，深さ及び土層を確認する意味で，南西側と西側に１m×３mのトレンチを設定した。すると，地山の粗砂層が急激に深くなり，落込み状遺構を呈していることが判明した。

2．層　序

A地区では，調査区の南壁において土層の堆積状態の観察を行った。その結果，基本的には３層に大別でき，Ⅰ層が水田の耕作土，Ⅱ層が床土（黄褐色粘土と灰白色砂との混合土），Ⅲ層が砂粒混じりの茶褐色土で，古墳時代以降の遺物（主として奈良時代～鎌倉時代にかけての遺物）を含む包含層であった。大溝２の堆積土は，上・中・下の３層に大別でき，上層がⅠ層に該当する。中層は，灰黄褐色の粗砂層で，下層は，暗青灰色の粘微砂層であった。大溝１の方は，上層が大溝２同様，Ⅰ層に該当する。遺物は，上・中・下層の３層に分けて取り上げたが，中・下層とも粗砂層であり，大差はない。

大溝２付近では0.2mの堆積であったⅢ層は，調査区西端においては0.3m程の堆積となっている。また，調査区の西端には落込み状遺構がみられ，表土からの深さは2.8mであった。その堆積土は６層に大別でき，１層がⅢ層直下の茶褐色土，２層がⅢ層とは異質の黒茶褐色土，３層が炭化物混じりの暗青灰色粘質土（弥生土器の包含層），４層が３層より薄い青灰色粘砂，５層が暗灰色粗砂，６層が５層に植物遺体を多く含む層であり，総体的に粘性が強い。

本項では，層序の大略を述べただけなので，土層の堆積状況の詳細は，第６図を参照されたい。

３．住居跡

１号住居跡（図版３-１，第７図）

大溝２と南西部落込みとの中間に位置し，２号住居跡と切り合い関係にあると思われるが，両者とも周壁は削平され，ピットのみが浅く残存するだけなので，両者の前後関係は不明である。また，ピットから出土した遺物は，土器の小片にすぎず，器種・時期を言及するに至らないが，ピットが円形に配されることから，弥生時代中期頃の円形竪穴住居跡と考えられる。

馬田弘稔氏は，『三雲遺跡Ⅰ』（註１）の中で，「円形住居跡について」という考察を行っている。本文では，氏の言う「住心」を点Ｏとし，Ｐ１と点ＯとＰ２のなす角度を∠１Ｏ２＝40°と表現する。第７図左下は，１・２号住居跡の模式図で，ピット下端の線のみを描き（註２），氏と同様の方法で住心を求め，半径２mの円（氏の言う内円）を描いたものである。∠１Ｏ３＝80°で，∠１Ｏ２＝40°なのでＰ２は，Ｐ１とＰ３の中間に位置する。∠３Ｏ５＝75°で，∠３Ｏ４＝30°なのでＰ４はＰ３の方に少し寄っている。∠５Ｏ６＝∠８Ｏ９＝30°である。

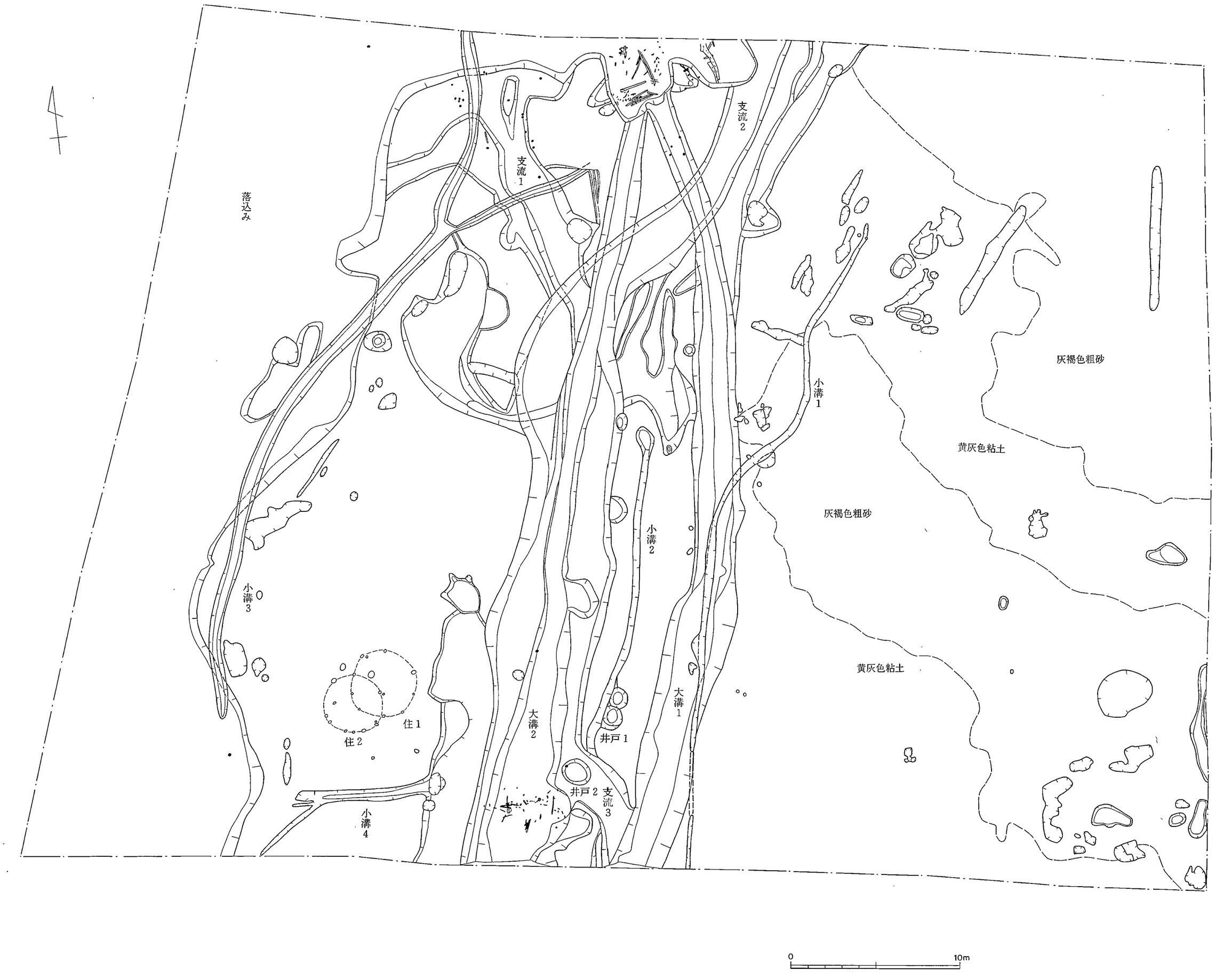
つまり，１号住居跡は，Ｐ１・Ｐ３・Ｐ５・Ｐ９の４本が主柱穴で，Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ８の４本が補柱穴と考えられ，入口部はＰ６―Ｐ８間に想定できよう。

次に，１号住居跡本来の規模についてであるが，小郡市内で調査された円形住居跡の内円と外円の比率を求めた結果，大板井遺跡16号住居跡（註３）は２対３で，同17号住居跡も２対３であった。三沢栗原遺跡７号住居跡（註４）は２対３であり，三沢鍋倉遺跡（註５）も２対３であった。この比率を１号住居跡に当てはめると，規模は直径６mとなる。

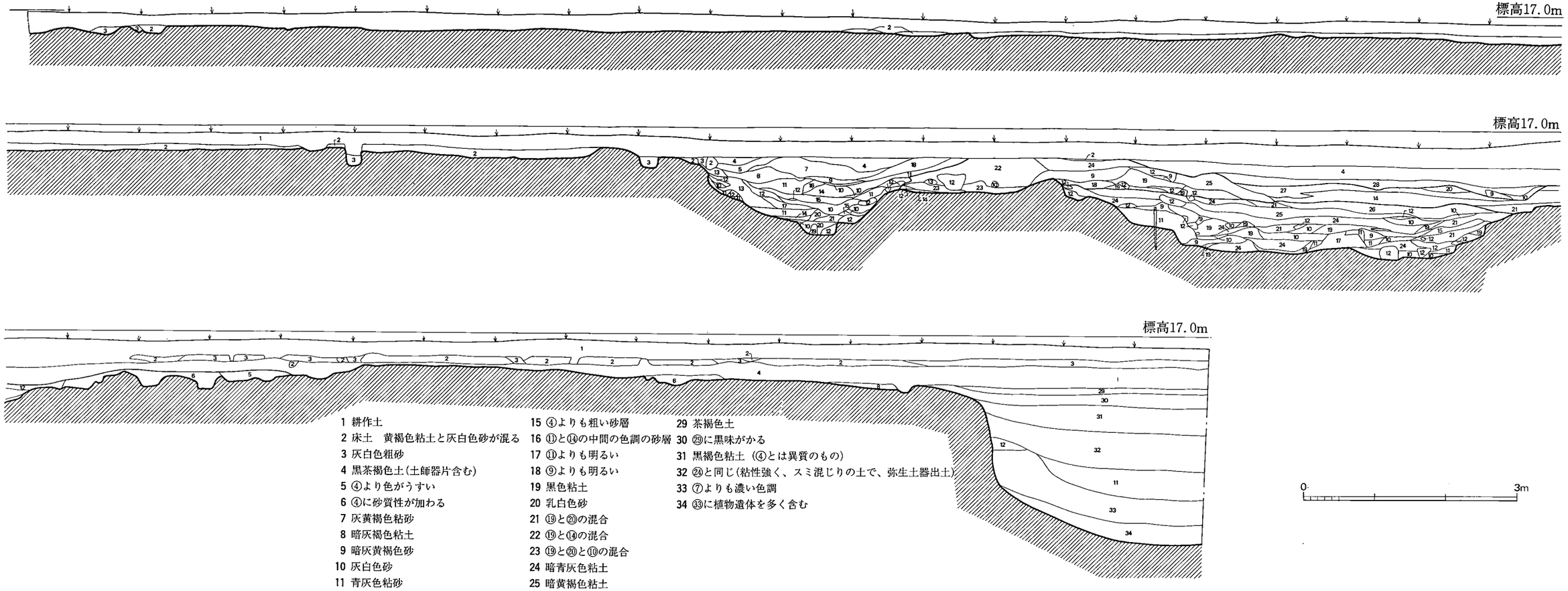
２号住居跡（図版３-１，第７図）

ピット中からの遺物の出土はなかったが，１号住居跡同様，ピットが円形に配されることから，弥生時代中期頃の円形竪穴住居跡と考えられる。

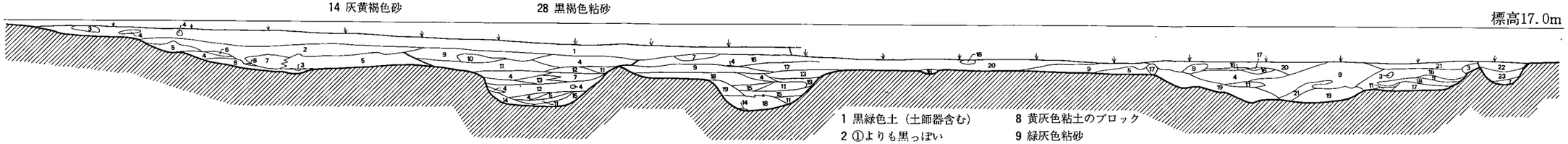
∠11Ｏ22＝∠20Ｏ15＝∠15Ｏ14＝∠13Ｏ11＝65°で，∠22Ｏ20＝∠14Ｏ13＝50°である。∠20Ｏ18＝∠16Ｏ15＝15°である。よって，Ｐ11・Ｐ22・Ｐ20・Ｐ15・Ｐ14・Ｐ13の６本が主柱穴で，Ｐ18はＰ20に寄っていること，また，Ｐ16はＰ15に寄っていることから，Ｐ18はＰ20の，



第 5 図　小郡正尻遺跡Ａ地区遺構配置図（1/200）

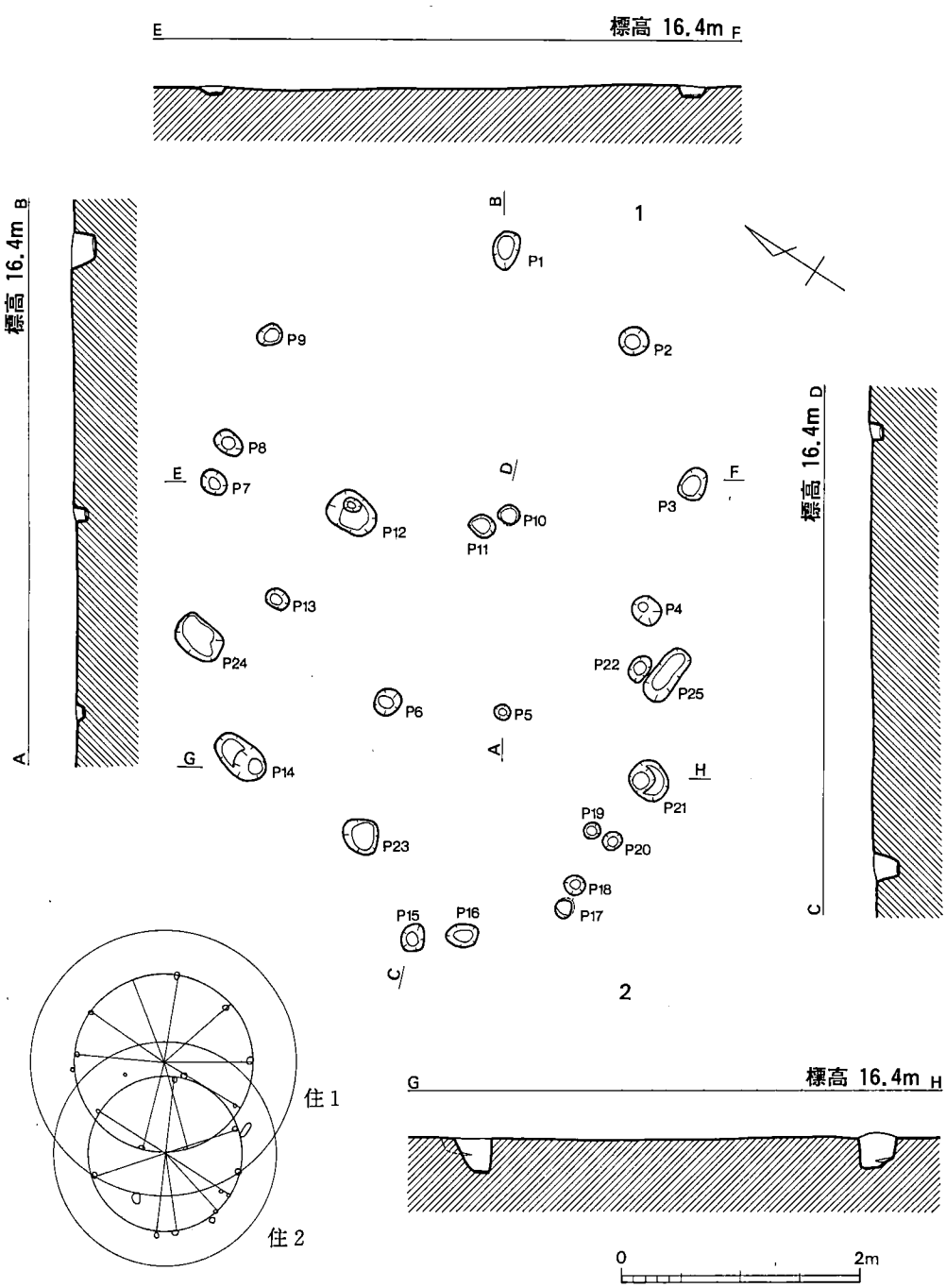


1 耕作土
2 床土　黄褐色粘土と灰白色砂が混る
3 灰白色粗砂
4 黒茶褐色土(土師器片含む)
5 ④より色がうすい
6 ④に砂質性が加わる
7 灰黄褐色粘砂
8 暗灰褐色粘土
9 暗灰黄褐色砂
10 灰白色砂
11 青灰色粘砂
12 黄灰色粘土
13 ⑧よりも明るい
14 灰黄褐色砂
15 ④よりも粗い砂層
16 ⑪と⑭の中間の色調の砂層
17 ⑪よりも明るい
18 ⑨よりも明るい
19 黒色粘土
20 乳白色砂
21 ⑲と⑳の混合
22 ⑲と⑭の混合
23 ⑲と⑳と⑩の混合
24 暗青灰色粘土
25 暗黄褐色粘土
26 ⑩にやや黄味がかる
27 ㉔に砂質が増したもの
28 黒褐色粘砂
29 茶褐色土
30 ㉙に黒味がかる
31 黒褐色粘土（④とは異質のもの）
32 ㉔と同じ(粘性強く、スミ混じりの土で、弥生土器出土)
33 ⑦よりも濃い色調
34 ㉝に植物遺体を多く含む



1 黒緑色土（土師器含む）
2 ①よりも黒っぽい
3 黒色土のブロック
4 灰白色粗砂
5 灰白色粘砂
6 ④よりも砂粒が細かい
7 黒灰色粘微砂（自然木を含む）
8 黄灰色粘土のブロック
9 緑灰色粘砂
10 ⑨に砂粒混じる
11 暗灰色粘砂
12 ⑪よりも砂粒が細かい
13 ④よりも黒っぽい
14 ⑧と④の混合土
15 青灰色粘砂
16 緑灰色粘土
17 黄灰褐色粗砂
18 暗灰色砂礫
19 暗灰色粘微砂
20 ⑨と黄褐色砂との混合
21 ⑨よりも色がうすい
22 ⑯よりも色が濃い
23 ㉒よりも砂粒が少ない

第 6 図　小郡正尻遺跡Ａ地区南壁断面土層図（1/60）（下段はＡ～Ｅ11区南壁断面）



第 7 図　1・2号住居跡実測図及び模式図 (1/60)

P16はP15の補柱穴と考えられ，P16—P18間に入口部を想定したい。1号住居跡同様，内円と外円の比率を2対3とすると，2号住居跡の規模は直径5m程になる。

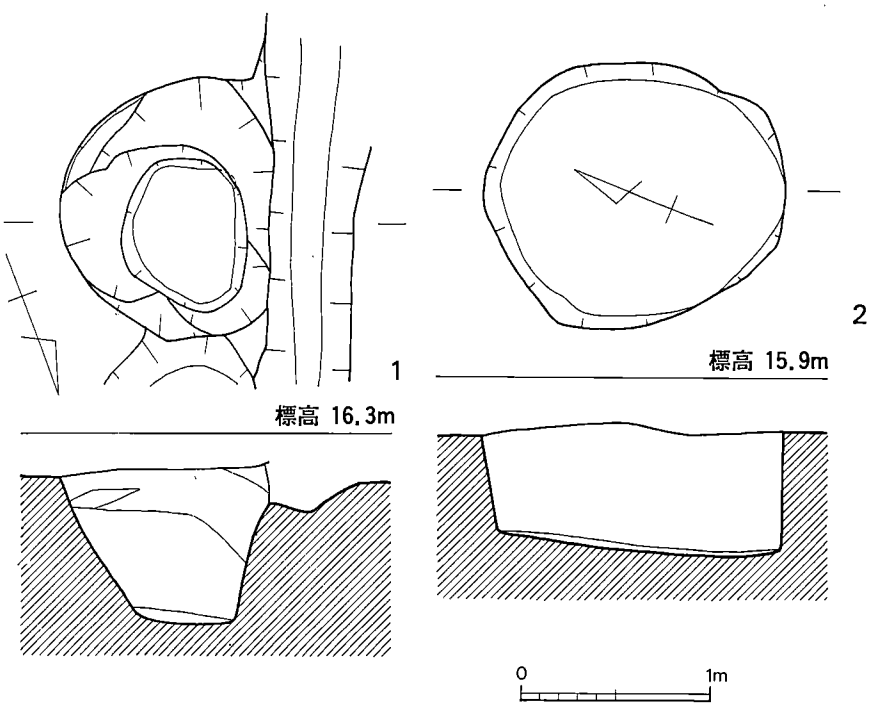
4．井　戸

1号井戸（第8図）

大溝1と大溝2の中間で，調査区の南寄りに位置する。不整楕円形を呈する素掘りの井戸である。深さは，0.82mを測る。すぐ北側の穴と切り合い関係にあると考えられるが，両者とも茶褐色土（Ⅲ層）が堆積しており，切り合い関係は判別できなかった。井戸の埋土は，上層が茶褐色土（Ⅲ層）で，下層は青灰色粘質土であった。また，掘っていて底に近づくと，湧水してきた。遺物の出土はなく，時期は不明。

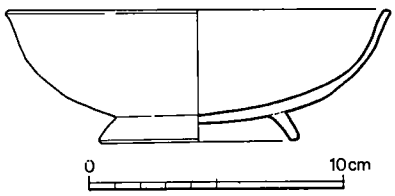
2号井戸（第8図）

1号井戸の南側で，大溝2支流3の中央に位置する。Ⅲ層（茶褐色土）除去後に2号井戸を検出した。不整円形を呈する素掘りの井戸である。深さは，0.65mを測る。井戸の埋土は，暗青灰色粘質砂泥であった。　（小田和利）



第 8 図　1・2号井戸実測図（1/40）

土師器（図版７，第９図）高台付椀。口径14.9cm，器高5.2cm，高台径7.6cmを測る。内弯気味で少し高めの高台が開く。体部は浅めで丸味をもち，口縁はかるく外反している。器面はヨコナデ調整される。細砂粒を含むが精良な胎土で灰黄色ないし灰褐色に焼成されている。体部外面に煤が，内面にはタール状の膠着物が付着する。11世紀前半～中葉頃だろう。（小池）



第 9 図　2号井戸出土土器実測図（1/3）

5．溝状遺構

大溝１（図版３-２，４，第５図）

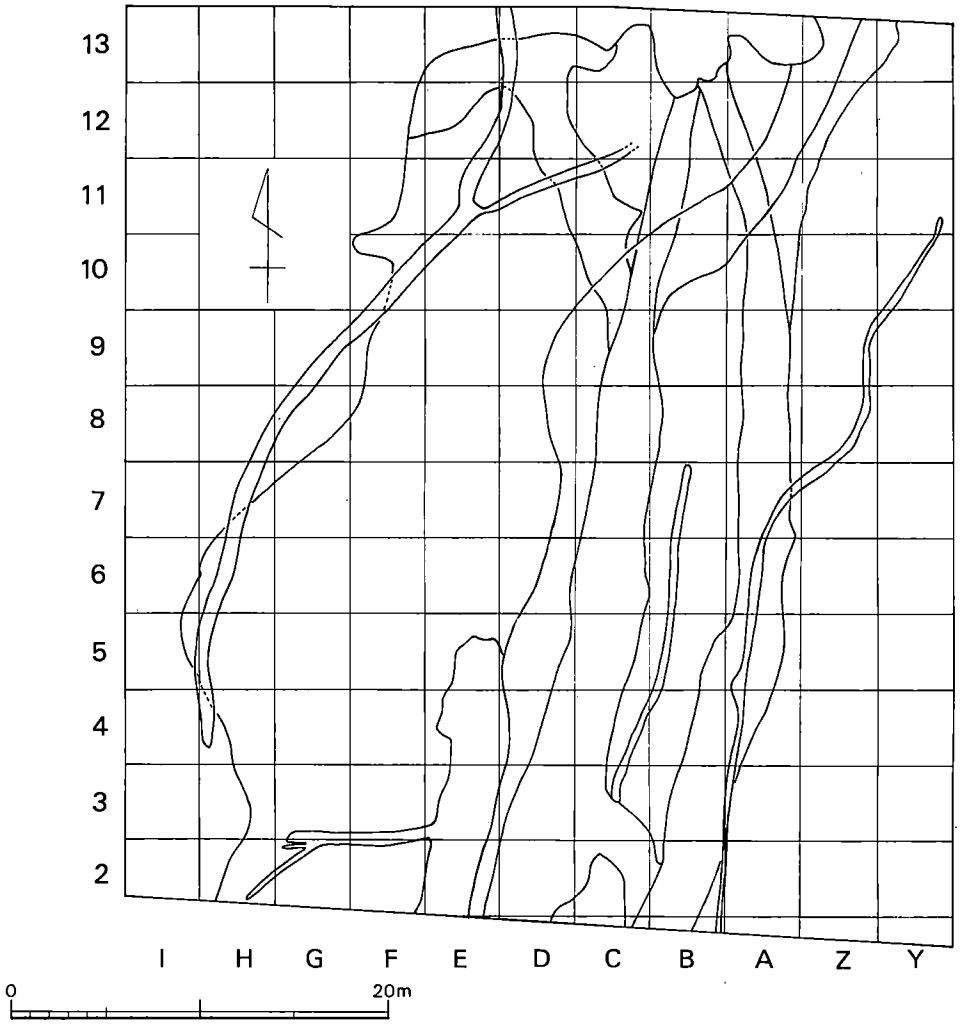
調査区の中央を東側に弧を描きながら流れる溝であり，北端部は大溝２との分岐点となっている。規模は，調査区北端で幅1.5m・深さ0.8m，中央で幅2.5m・深さ1.0m，南端で幅3.0m・深さ1.1mを測り，南側へ行くに従って溝の幅及び深さが増すことから，北から南へ水が流れていたものと考えられる。大溝１の埋土は，層序の項で説明したので省略する。

ここで注目されるのが，北端部の分岐点に構築された杭列であり，大溝１の性格を暗示するものであるが，大溝２との絡みもあるので，改めて説明したい。

上層出土弥生土器（第11図）１は甕のミニチュア品で，底部のみ残存する。外面がハケ目で，内面はナデである。２・３は壺の底部破片で，両者とも上底を呈す。内面はナデで，外面は磨滅しているために不明。時期は，弥生時代中期前葉頃であろう。

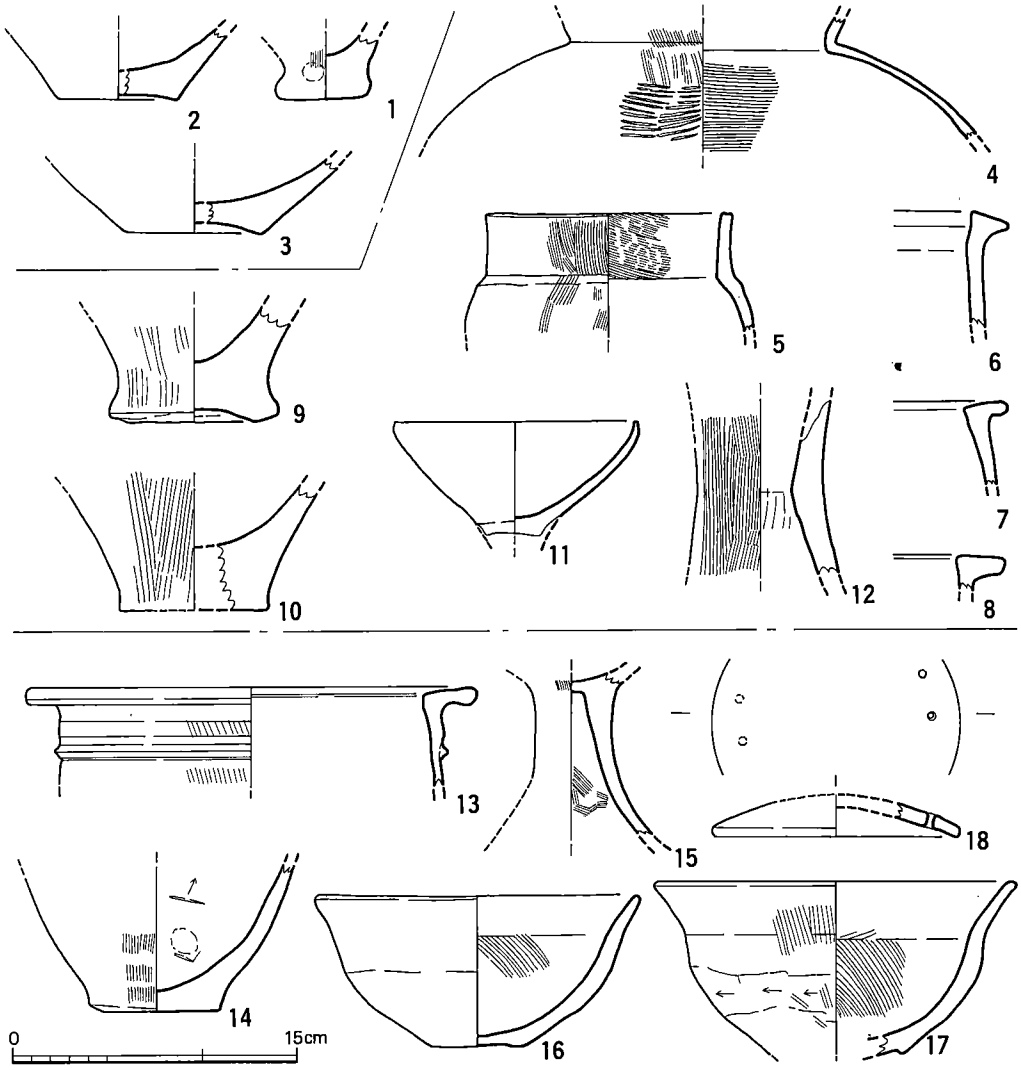
中層出土弥生土器（図版10，第11図）４は頸部から胴部上位にかけての破片であるが，肩が張っていることから壺であろう。外面がタタキ整形の後にタテ方向のハケ目調整で，内面はヨコ方向のハケ目調整である。５は直口壺の破片である。口縁部はそのまま直立し，口唇部は若干窪む。外面がタテ方向の細かいハケ目調整で，内面はヨコ方向の細かいハケ目を部分的にナデ消している。６～８は甕の口縁部破片である。６の口縁部平坦面は外傾する。調整は内外面ともナデである。７・８は逆Ｌ字状口縁を呈する。７の外面はハケ目調整で，内面はナデ調整である。９・10は甕の底部破片である。９は上底で，10は平底を呈する。調整は両者とも，外面がハケ目で，内面はナデである。11は高杯の杯部破片である。口唇部は丸く，やや内弯気味である。調整は，内外面ともにナデであるが，全体的に磨滅顕著である。12は器台の中央部破片である。外面は細かいハケ目調整である。４・５が弥生時代終末期で，６～10が中期前葉であろう。

下層出土弥生土器（第11図）13・14は甕である。13は逆Ｌ字状を呈する口縁部の破片で，口縁部平坦面は若干内傾する。頸部のやや下位に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。調整は，外面



第 10 図　溝状遺構部分の区割り（1/400）

が粗いハケ目で，内面はナデである。14は底部破片で，平底を呈する。胴部はあまり拡がらないようである。調整は，外面がハケ目（9～10条/cm）で，内面には板状工具による押圧痕が残る。15は高杯の脚部破片である。調整は，外面がヘラミガキで，内面はハケ目の後にナデている。16は無脚の，17は有脚の鉢である。16の口唇部は丸く，口縁部はやや屈曲して外方へ開く。調整は，外面がヘラケズリの後にナデており，内面はハケ目の後にナデている。17は16同様の形態を呈するが，一回り大きいようである。調整は，内外面ともハケ目であるが，外面下部はヘラケズリを行っている。18は傘形を呈する蓋の破片であり，天井部を欠く。2孔穿孔し

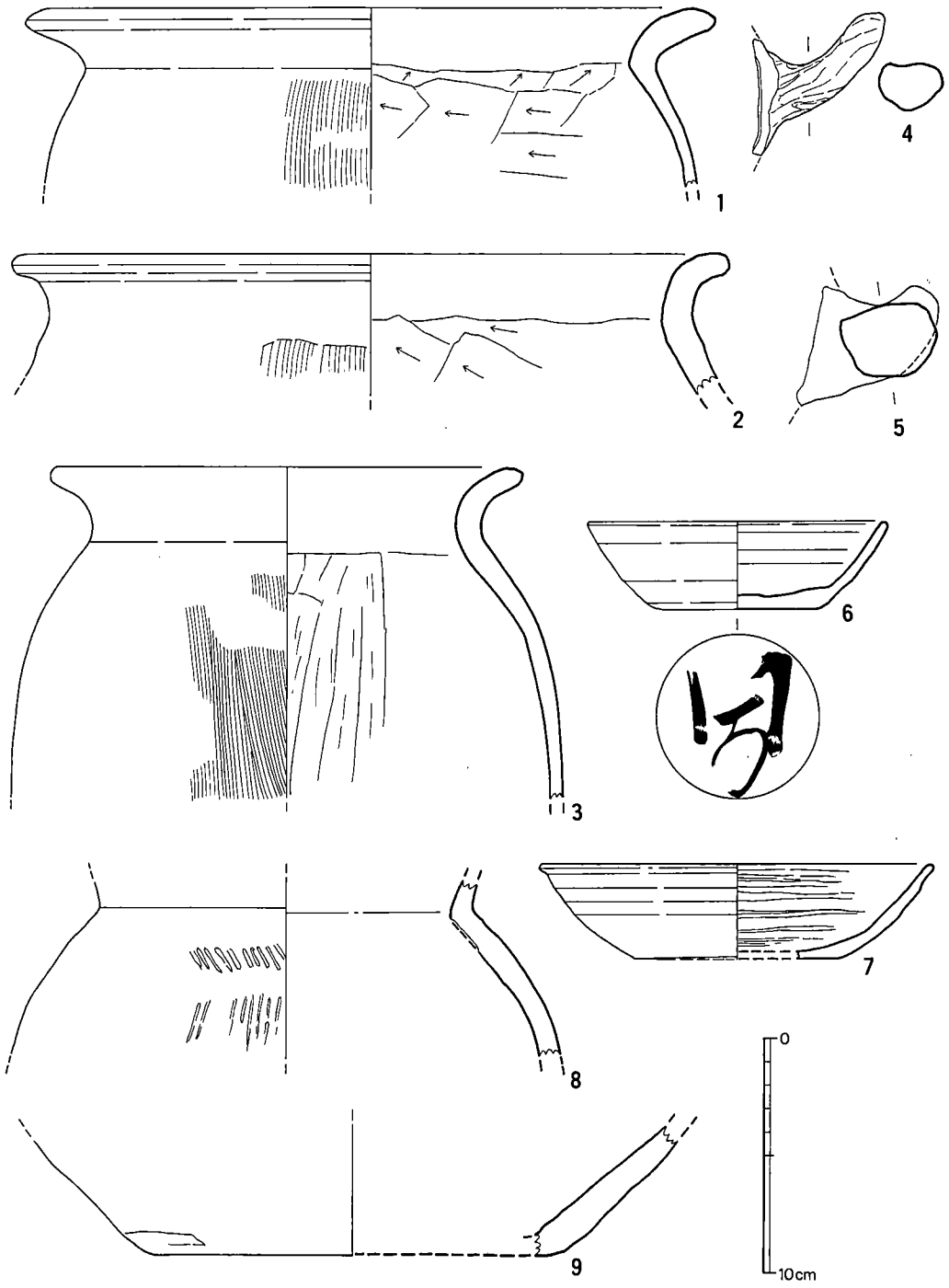


第 11 図　大溝 1 出土土器実測図①（1/4）

ている。時期は，13が弥生時代中期中葉で，16・17は底部が平底を残していることから後期後半頃であろう。（小田）

土師器（図版 7，第12図）1～3は甕口縁部。1の口縁は2・3に比して強く外反する。体部外面はハケ目調整，内面はヘラケズリされるが，3は口径が小さいため縦方向のヘラケズリになっている。1は下層，2・3は上層からの出土資料。

4・5は，甕ないしは甑の把手であろう。4は細目の把手で外面に煤が付着する。器内外面



第 12 図　大溝 1 出土土器実測図②（1/3）

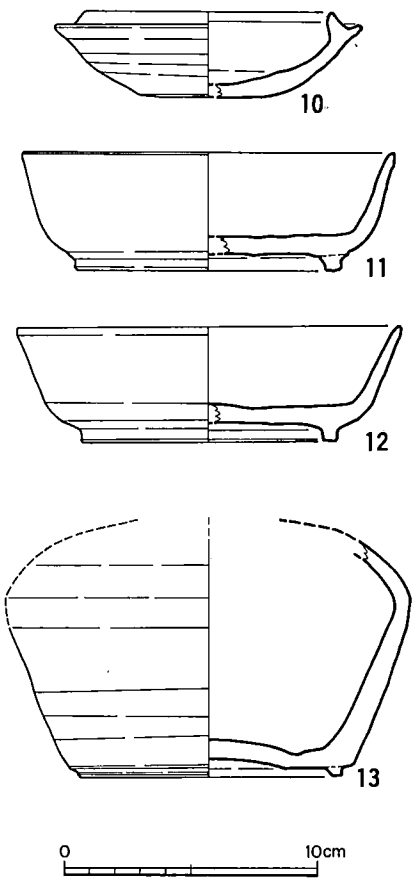
共に黝黒色を呈している。5は太い把手で体部外面で剝げ落ちている。4は上層，5は上層と中層の境目からの出土。

6は外底面に墨書のある杯。口径12.7cm，器高3.7cm，底径6.9cmの大きさ。器外面は横方向にヘラケズリされる。外底面の墨書文字は判読しえないが，「別」の字の偏に近い。B3区上面出土。

7は復原口径で16.8cmの大きさになったが，もう少し径が小さいかもしれない。器高4.0cmの杯。内面はヘラミガキ，外面はヘラケズリされている。B3区の上層・中層の境目出土。

須恵器（図版7，第12・13図）8・9は須恵器の焼成不良のもので，8は甕の胴上半部破片。9は器種不明だが底径はかなり大きい。8は内外面共にヨコナデ仕上げされるが，外面に平行タタキ目が残る。9は内外面共にナデられるが，外底部はヘラケズリされている。2点共にA10・11区の上面出土。

10は蓋受けをもつ杯身。口径9.5cm，器高3.4cmの大きさ。外底面にヘラ記号があるものの破片のため，平行線とそれに交差する沈線しか判らない。北端部の中層出土。



第13図 大溝1出土土器実測図③（1/3）

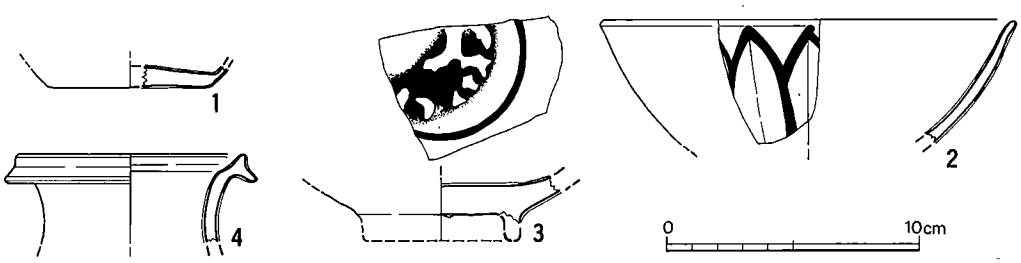
11・12は高台をもつ杯身。11は復原口径14.6cm，器高4.5cm，高台径10.5cmの大きさ。高台貼付けの接合部をヘラで押さえている。内底面にヘラ記号状の短直線がみられるものの破片資料のため全容は判らない。12は復原口径15.0cm，器高4.4cm，高台径10.0cmの大きさ。体部の下半にわずかな稜がつく。11は中層，12は上層と中層の境目出土。

13は高台を有す壺で，肩部以上を欠く。肩部はわずかに稜をもって内傾する。最大径15.7cm，高台径10.2cm，残存器高9.2cmの大きさ。体部下半は回転ヘラケズリされる。B4区の上面出土。

これらの土器のうち，須恵器では10が6世紀後半，11～13が8世紀前半，土師器杯の6は9世紀前半，7が8世紀前半に考えられる。

陶磁器（図版7，第14図）白磁・青磁合せて5片出土した。

白　磁（1）口禿げの皿ないし杯になると思われる底部破片。約1/4の破片で復原底径6.



第 14 図　大溝１出土陶磁器実測図（1/3）（４は支流２出土）

4cm。上層と中層の境目あたりから出土した。

青　磁（２・３）２は体部外面に鎬蓮弁文をもつ椀の口縁部破片。暗灰色の胎に黄色味の濁った緑色の釉がかかる。復原口径16.4cmの大きさ。上層と中層の境目あたりから出土した。３は椀の底部破片。灰白色の胎に濁ったうす緑色ガラス質の釉が厚くかかる。内外共に粗い貫入を伴う。内面見込み部分にヘラ状工具で文様が描かれている。釉は高台内面にまでかかり，外底の中央部にも直径１cm程度釉が点状に付く。上層から出土した。

白磁は13世紀後半頃のものであろう。

石　器（図版７，第26図４）安山岩製の石錐片。基部を欠き，現存長2.2cm，幅0.6cm，厚さ0.4cm，重量0.7gを測る。全面に調整剝離が及び先端は磨耗する。A11区の中層から出土したが，弥生中期以前の石器で，この遺構に直接伴うものではないだろう。

石製品（図版７，第31図２）滑石製の紡錘車。約2/3が残り，復原外径9.4cm，厚さ1.2cm，孔径1.0cm，重量の現存値73.2gを測る。扁平な円錐形を呈す。全面研磨され，上下両面共に線刻文様が描かれる。扁平な面では，周縁に沿った円弧と，円孔を囲む羊歯の葉状の組み合わせ文様から構成される。円弧は半径4.6cm程度のものだが，交差する形にズレを生じる。また葉状文様は一方の茎部と他方の先端部が向い合う形に配される。凸面の線刻文様は，周縁部の円弧と円孔寄りに，コイル状の折返し文様がみられるものの現存部が少なく図柄不明。この面の円弧も半径4.6cm程度のものだが，中心点を移動させており，幾何学的に交差する。この交点は周縁に沿って復原させると４ケ所になる。B13区上層出土。

土製品（図版７，第33図１）管状土錘。一方の端部を欠くが，現存長3.7cm，外径1.5cm，孔径0.4cm，重量6.6gを測る。端部が細めで胴中程は太い。　（小池）

大溝２（図版３-２，４～６，第５図）

大溝１の西側に位置し，調査区中央を縦断して流れる溝であり，北端部は大溝１との分岐点になっている。また，大溝２の北部には，西側に支流１があり，東側に支流２があるため三叉状を呈する。大溝２の規模は，調査区北端で幅1.2m，深さ0.3m，中央部は２段になっており，

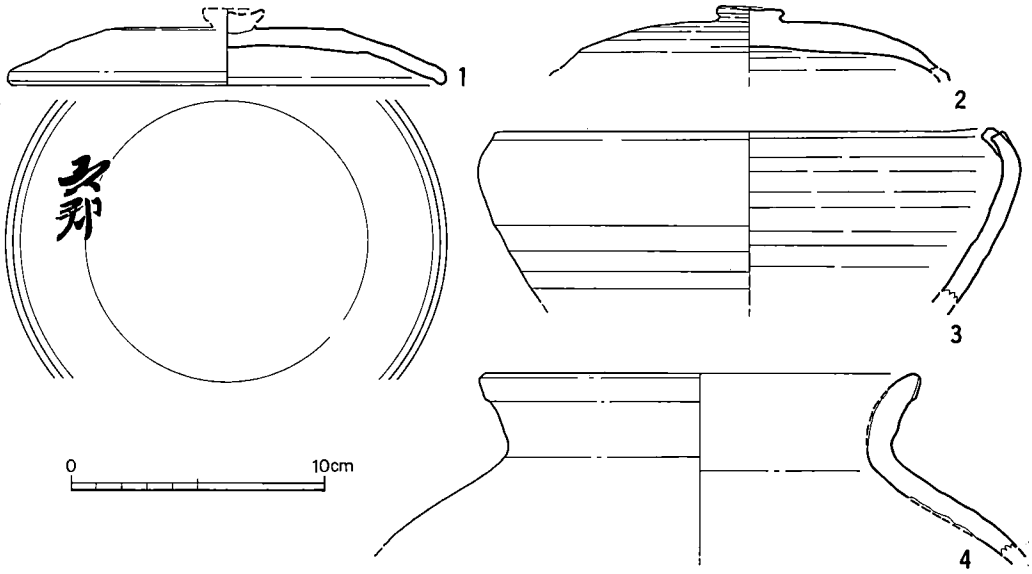
上面での幅は5.0m，１段目の深さは0.8m，下面での幅は1.4m，２段目の深さは0.9mであった。これは，支流２の時期に拡幅されたものと考えられ，下段が大溝２本来の規模であろう。南端で幅8.5m，深さ1.2mを測る。大溝１同様，南に行くに従って溝の幅及び深さが増すことから，北から南へ水が流れていたものと考えられる。なお，大溝２の埋土は，層序の項で説明したので省略する。

大溝２においては，北端部だけではなく，南端部にも杭列が構築されていた。また，分岐点においては，人意的に埋められた形跡があり，これは大溝１側に水流を導くためと考えられる。支流１・２・３及び南北両端の杭列については後程説明を加えたい。

大溝２出土の土器は，大溝１同様，弥生時代から鎌倉時代に至るまでの多岐に及び，古墳時代以降の土器の大半が上層（Ⅲ層）からの出土であり（若干中層上部で出土），中層下部以下は弥生式土器が含まれる。大溝２が掘削された時代は弥生時代であり，弥生土器は，Ｃ４～６区及びＤ２～７区と分岐点付近（B12区）に集中しており，中央部のＣ８～10区からはあまり出土していない。（小田）

須恵器（図版９，第15図）杯蓋・鉢・甕の器種があるものの，量的に少ない。４点を図示したが，図示しない資料は甕胴部破片が大半で，外面に格子目タタキ痕，内面に同心円タタキ痕の付くものが多い。この他高台付杯身の破片もあるが，小破片で図示しえなかった。

１は杯蓋で，つまみ部が剝げ落ちている。天井部は平坦で，口縁端部は内面をくぼませてわずかに屈曲する。天井部外面の器面は風化しているが，体部の内外面はヨコナデ仕上げされ，



第 15 図　大溝２出土土器実測図①（須恵器）（1/3）

淡めの灰色に焼成されている。口径17.1cm，残存器高2.3cmの大きさ。体部内面の一部に墨書がある。墨書は二文字書かれており，下の文字は「郡」と読めるが，上の文字は判読しえない。D５区の中層から出土した。

２も杯蓋だが，明るい橙褐色に焼成されている。直径1.6cmの扁平なつまみが付く。口縁部を欠くが，天井部から体部は丸味をもって移る。天井部外面はヘラケズリされるが，他はヨコナデされている。上層出土。３の鉢は，口縁部が内弯するいわゆる鉄鉢形の鉢。復原最大径は21.0cm。胴下半を欠くが，口縁部はヨコナデ，胴部はヘラナデされている。精良な胎土で，堅く焼成され黒色ないし暗紫灰色を呈す。口縁部はやや波状を呈す可能性がある。C７区の上層出土。４は復原口径16.7cmの甕。器面は風化が進み磨滅しているが，胴部外面は格子目タタキのようだ。砂粒をほとんど含まず灰色に焼成されている。C４区の上層出土。

土師器（図版８，第16図，表２・３）小皿（１～４）は口径9.8cm～10.6cm，器高0.9cm～1.8cm，底径6.3cm～7.8cmである。内底面はナデられ，１の外底面には板状圧痕がみられる。

杯（５～11）はヘラ切りの底部をもつ。口径11.8cm～13.4cm，器高2.4cm～3.7cm，底径6.7～8.6cmの大きさ。５はヨコナデ仕上げで内底面にタール状の膠着物が付着する。６は底部から体部へ丸味をもって立ち上がる。外底面に板状圧痕がみられる。９は内面全体に朱墨が付着し，外面の一部にも垂れ落ちた朱墨が付く。

高台付小椀（12～14）口径12.0cm～12.3cm，器高4.2cm～5.7cm，底径6.7cm～7.3cmの大き

表２　大溝２出土小皿・杯法量表

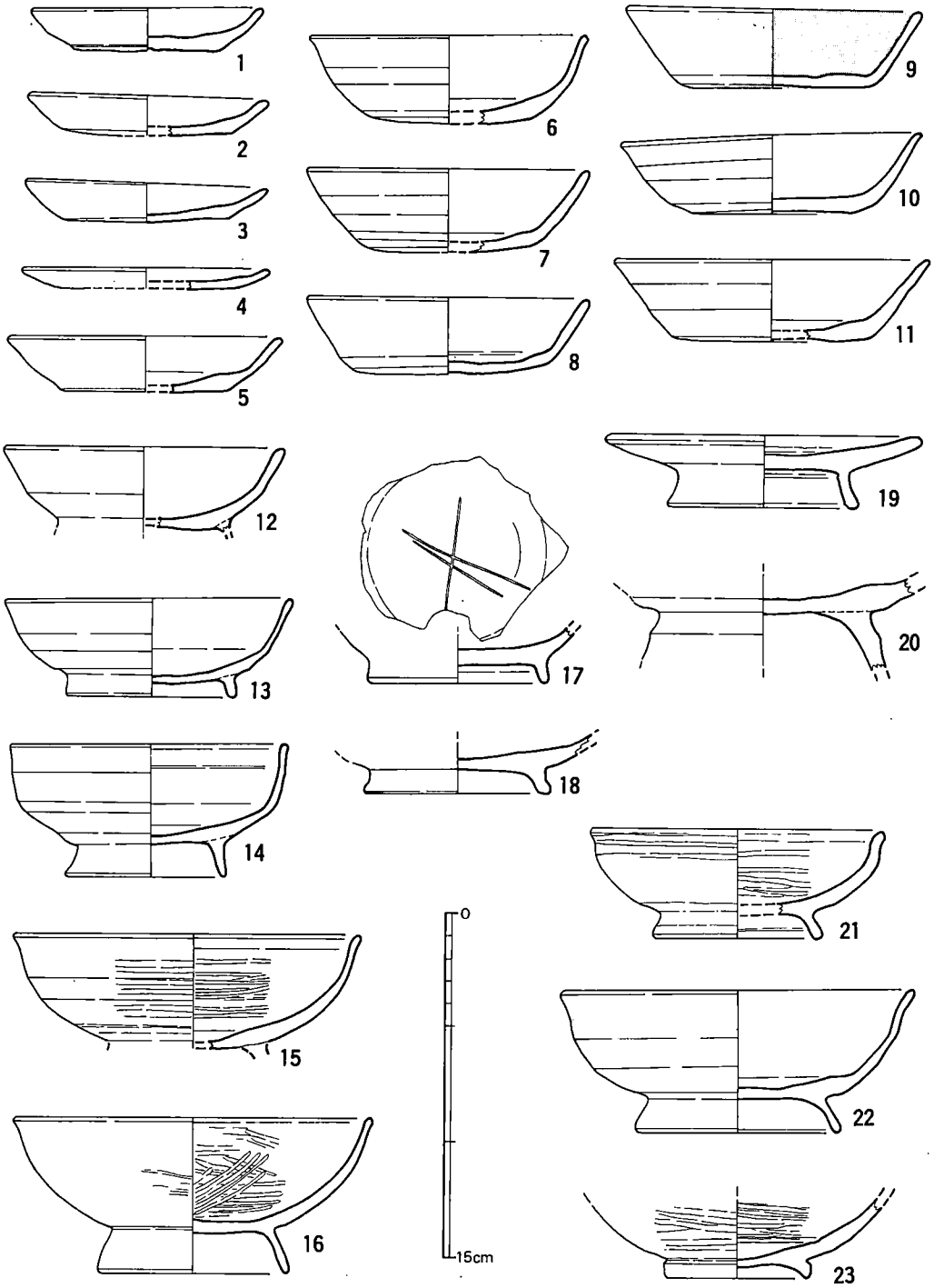
(単位cm)

挿図番号	口　径	器　高	底　径	切り離し	内底ナデ	板状圧痕	区・層序
小　皿							
1	9.8	1.8	6.3	ヘラ	○	○	C5上
2	10.3	1.7	7.3	ヘラ	○		C4中
3	10.5	1.7	7.1	ヘラ	○		D3上(下)
4	10.6	0.9	7.8	ヘラ	○?		上
杯							
5	11.8	2.4	7.3	ヘラ	○		D6中
6	12.0	3.7	7.0	ヘラ		○	C5上
7	12.0	3.6	7.0	ヘラ			C7中(上)
8	12.0	3.3	8.4	ヘラ			C7中(下)
9	12.5	3.4	7.2	ヘラ			B8中(上)
10	12.6	3.4	6.7	ヘラ	○	○	A10上
11	13.4	3.5	8.6	ヘラ	○	○	上

表３　大溝２出土高台付椀法量表

(単位cm)

挿図番号	口　径	器　高	高台径	区・層序
土師器　高台付小椀				
12	12.0	－	－	B10中
13	12.3	4.2	7.3	Z13上
14	12.0	5.7	6.7	C7中(下)
土師器　高台付椀				
15	15.0	－	－	A12中
16	15.3	6.7	8.2	C7中(上)
17	－	－	7.8	D2上(下)
18	－	－	8.1	Z12上
土師器　托・高台付皿				
19	13.6	3.1	8.2	Z13中(下)
20	－	－	－	C8中(下)
内黒土器　高台付椀				
21	12.5	4.7	7.2	C9上
22	15.1	6.1	8.8	D2上(下)
23	－	－	6.3	A11上
黒色土器　高台付椀				
24	15.7	5.8	7.8	D3上(下)
25	16.0	－	－	D3上(下)
26	－	－	7.7	C2上
27	－	－	7.3	D7中
28	－	－	7.8	C7上
29	8.0	4.0	5.0	D3上(下)
30	－	－	－	D2上



第 16 図　大溝 2 出土土器実測図②（土師器）　(1/3)

さ。12はヨコナデ仕上げされ，内底面に直径3.5cm程度の油煤らしき膠着物がある。14は，口縁部外面が強くヨコナデされて僅かにくびれ，高台は薄く長い。高台部は高台貼付け後にヨコナデないしナデ仕上げされるものの，13・14の外底面にはヘラ切り痕と板状圧痕が残る。

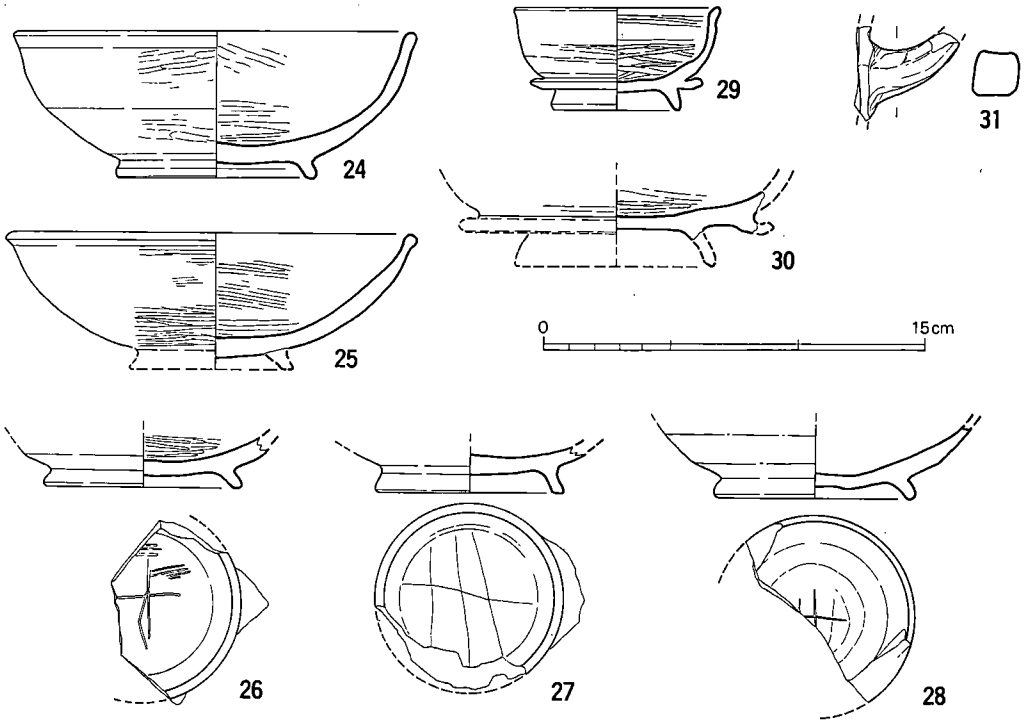
高台付椀（15～18）完形になる16は，口径15.3cm，器高6.7cm，高台径8.2cmの大きさで，深めの体部に薄く長めの高台が付く。外面は器面風化のため詳らかでないが，内面はヘラミガキされている。15は高台部を失うが，復原口径15.0cm，体部高5.0cmの大きさ。16に比して体部は低平で，口縁部は外反する。内外面共にヘラミガキされている。17・18は底部破片で，高台は低め。内外面共ナデ調整されているが，17の内底面にヘラ記号が付される。

托（19）は，口径13.6cm，器高3.1cm，高台径8.2cm，高台高1.7cm。器面はヨコナデ調整されている。北端部の下層に近い灰青色砂層から出土した。

高台付皿（20）破片資料だが，高台は外径10.5cm以上，高さ2.5cm以上の大きさになる。体部・高台部共ヨコナデ調整されている。中層の下部から出土した。

黒色土器（図版9，第17図，表3）いわゆる内黒土器と黒色土器が出土している。

内黒土器（21～23）21は高台付小椀。体部内面と外面の上部はヘラミガキされ，且つ黒色を呈す。外面の下半はヨコナデ調整され，暗黄褐色に焼成されている。22は完形資料の高台付椀。



第 17 図　大溝 2 出土土器実測図③（黒色土器）（1/3）

外面は赤味の強い淡褐色に焼成されている。器外面はヨコナデ調整。高台は底部端より内側に貼付けられ，薄く長め。23は内外面共にヘラミガキされ，内底部にヘラ先の沈線がある。断面三角形に近い高台はヨコナデ仕上げで貼付けられるが，外面の接合部にヘラ先による沈線が施される。接合を強固にさせるための手法であろう。外面は暗黄褐色に焼成されている。

黒色土器（24～31）24・25は高台付椀で，口径15.7cmと16.0cm，体部高は5.0cmと5.1cm内外面共にヘラミガキされている。25の体部は弯曲が少なく，内面の口縁部が僅かにくぼむ。25は高台を欠くが，24の高台部は短め。

26～28は底部破片だが，高台付椀の底部であろう。外底部に板状圧痕とヘラ記号がある。27では高台貼付け前にヘラ記号が描かれている。

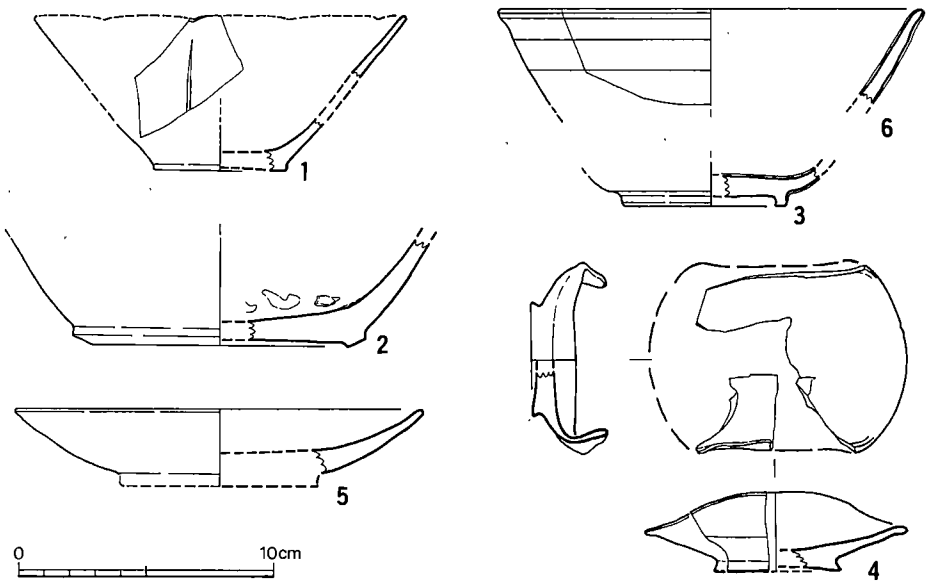
29・30は鍔付の高台付椀。29は小形だが，30の破片資料は大形であろう。29では，鍔の外径6.6cmで，口径8.0cmのゆるく外反する口縁部に向って体部が立ち上がる。鍔と体部の境目はヘラ先によってケズリ込まれる。体部の内外面はヘラミガキ，鍔から下位の外底面はヨコナデされている。

31は把手部の破片で，体部と把手の先端部を欠く。把手部は断面を四角っぽく中くぼみに整えられ，弯曲する先端側は扁平になる。体部は器壁0.5cm程度で，残された内面の弯曲度からみて，把手の付く部分の内径が15cm程度の大きさを有していたものと思われる。鉢か壺であろうか。内外面共にヘラミガキされるが，把手の下部は器面が剝げている。D３区の上層下部から出土した。

陶磁器（図版12-１，第18図）白磁・青磁合せて10個体分程度の破片が出土した。図示しない資料の中には蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁片も含まれているが白磁はない。

青　磁（１～３）１は口縁部片と底部片で接合しないが，色調・胎土からみても同一個体であろう。口縁端部に輪花，体部外面に縦沈線が入り，復原底径5.2cmの底部は円盤状を呈し上げ底状になるようだ。濁茶白色の胎に濁黄白色の釉がかかる。畳付は露胎。椀形と思われるが，口径は小破片のため不確実。D３区の上層下部出土。２は鉢の底部破片。灰色の胎に濁緑黄色の釉が薄く施釉され，内外面共に貫入を伴う。内面見込み部分と高台外面部分に重ね焼きの痕跡がみられる。３は復原高台径6.5cmの底部破片。灰白色の胎にうす緑色ガラス質の釉がかかる。内外共に粗い貫入を伴う。内面見込み部分にヘラ状工具による文様が描かれているようだが釉がすれて不透明になりはっきりしない。高台内面まで釉がかかるが，畳付に重ね焼きの痕跡がみとめられる。大溝２の上面から出土した。

緑釉陶器（４・５）４は耳皿。糸切り痕の残る底面を除いて，硬質な灰色の胎に暗黄緑色の釉がかかる。復原すると長径10.3cm，短径7.4cm，器高3.0cmの大きさになる。D５区の中層下部から出土。５は皿の口縁部破片。接合しない破片が別に１片ある。復原口径16.0cm，残存器高2.5cmで，外面の端部は高台へ移行するカーブを僅かに残している。胎土は濁黄灰色を



第 18 図　大溝 2 出土土器実測図④（陶磁器，6 は支流 2 出土）(1/3)

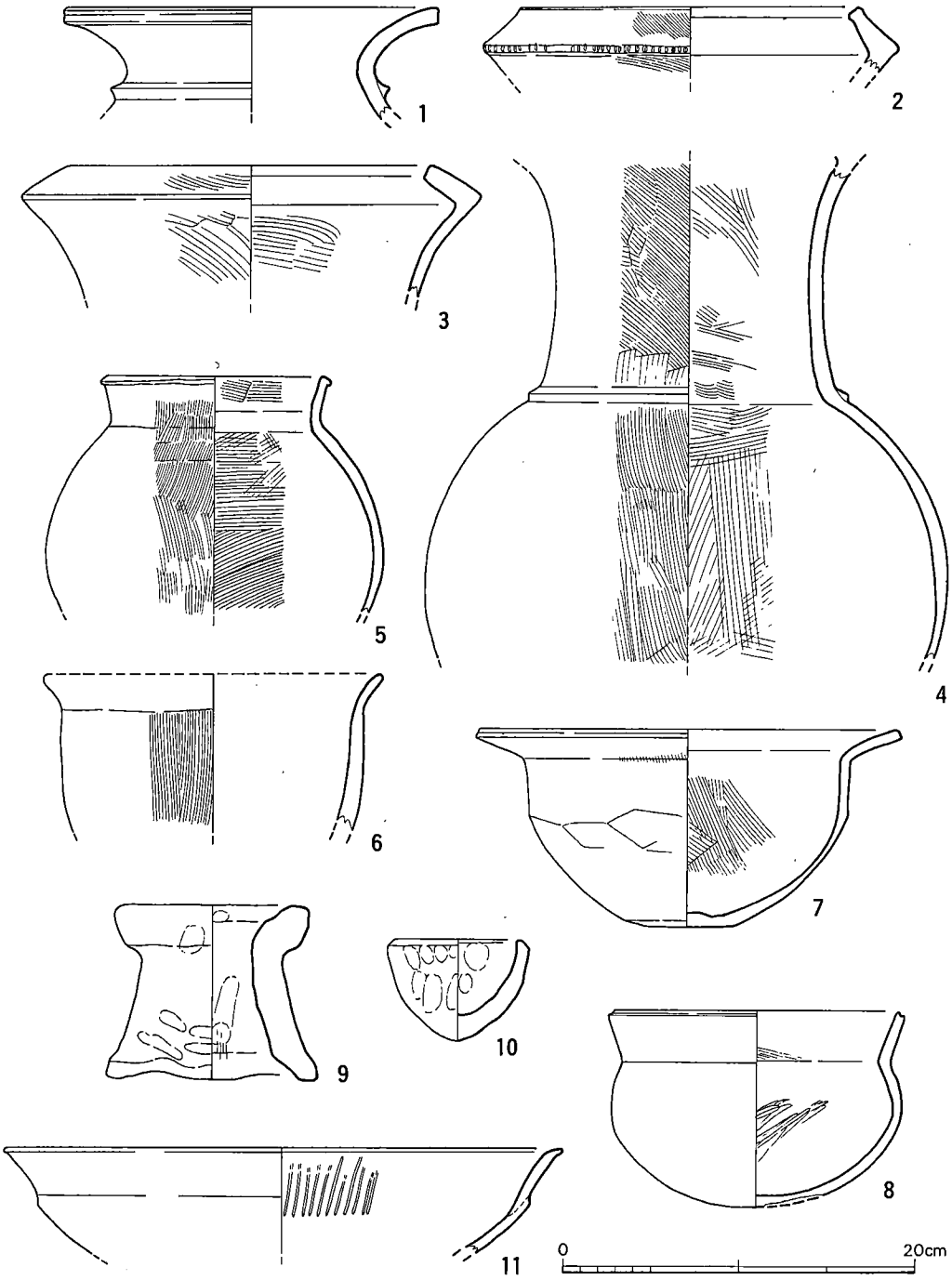
呈し軟質。施釉は薄く，口縁内部はすり減っている。E 3 区の中層下部から出土した。(小池)

上層出土弥生土器（図版 8 ・11，第19～21図）1 ～ 5 は壺である。1 は広口壺の口縁部破片で，口唇部は若干窪む。頸部には断面三角形の貼付凸帯を巡らす。2 ・ 3 は袋状口縁壺の口縁部破片で，屈曲が強く，2 は屈曲部にキザミ目を付す。調整は両者とも，内外面粗いハケ目である。4 は口縁部を欠くが，袋状口縁を呈するであろう。頸部と胴部の境に，断面三角形の貼付凸帯を巡らす。胴部はよく張っており，球状である。調整は，外面がハケ目で，内面はハケ目の後を部分的にナデ消している。5 は壺というより甕に近い形態の直口壺である。口唇部は粘土だれしている。胴部はよく張っており，球状を呈する。調整は，内外面ともハケ目である。

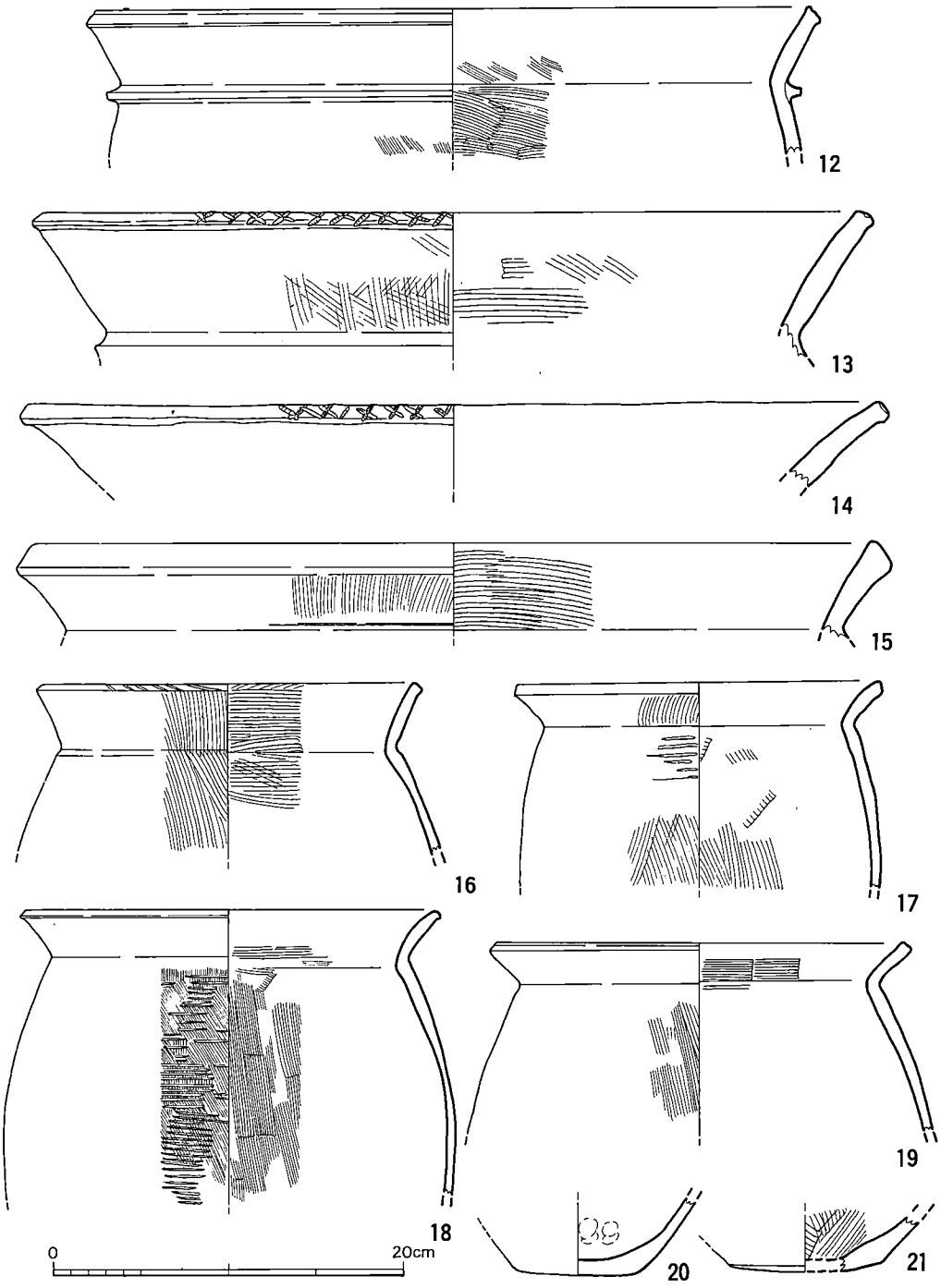
6 は甕の口縁部から胴部にかけての破片であり，口縁部は外上方に屈曲している。胴部の張りは弱い。調整は，外面がハケ目で，内面はナデである。

7 は鉢である。口縁部は水平近く屈曲し，底部は丸底気味の平底を呈する。調整は，外面がヘラケズリで，内面はハケ目（6 条/cm）である。8 は鉢に近い形態を呈するが，頸部がよく締っているので短頸壺とした。口唇部は，ヘラ描きの沈線を施すため窪んでいる。胴部の張りは強く，底部は丸底を呈す。外面はハケ目の後にナデ調整が加わり，内面は部分的にヘラミガキを施す。

9 は支脚である。概して雑な作りで，内外面ともユビオサエ痕が残る。10は手捏ねによる椀である。口唇部は丸く，底部は尖底である。内外面とも無数のユビオサエ痕が残る。11は高杯



第 19 図　大溝 2 出土土器実測図⑤（弥生土器）　(1/4)



第 20 図 大溝 2 出土土器実測図⑥（弥生土器） (1/4)

の杯部破片である。口縁部はやや外反し，屈曲部には明瞭な稜が残る。調整は，内外面ともヘラミガキであり，内面にはタテ方向の暗文を施す。

12～15は大型甕の口縁部破片で，何れも「く」字状口縁を呈する。12の口唇部は，上方につまみ上げており，頸部には断面「コ」字形の貼付凸帯を巡らす。13・14の口唇部は，ハケ状工具によるX状のキザミ目を付す。また，13の頸部には断面三角形の貼付凸帯を巡らす。15の口唇部は肥厚する。調整は，何れも内外面とも粗いハケ目である。16～19・22の口縁部断面形は「く」字状を呈する。16～18・22は外方に，19は内方に屈曲する。調整は，16～18・22が内外面ともハケ目で，19は外面がハケ目（6～7条/cm）で，内面はナデである。

23～27は底部破片であるが，壺か甕か判然としない。23の底部は厚いこと，また，25の底部は尖底気味であるが，開いていることから壺の底部と考えられる。20・21・24は丸底気味であり，26は平底である。また，26の外底面には煤が遺存しており，かつ，2次焼成による器面剝離がみられるので甕であろう。27は大型壺の底部で，平底を呈する。他は甕であろう。調整は，何れも内外面ともハケ目を主体とするが，23の内面には板状工具によるナデがみられる。

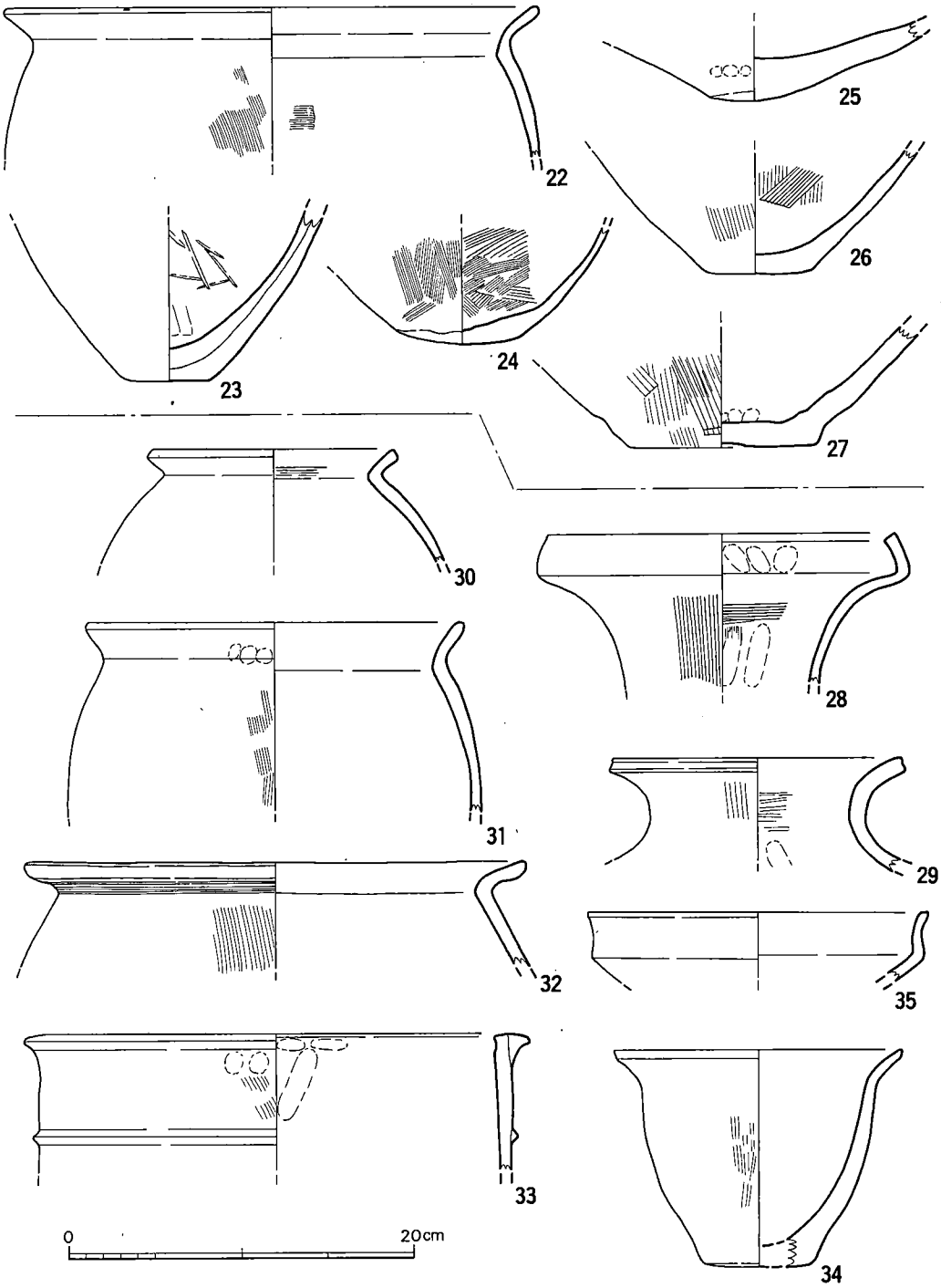
1の頸部は直立気味でなく，大きく外方に開くことから弥生時代中期初頭であろう。19・22・26は後期後半に属し，17・18は終末期よりの後期後半頃であろう。他のほとんどは，終末期に属すると考えられるが，8の底部は既に丸底化していることから，古墳時代前期に入れた方が妥当であろう。

中層出土弥生土器（図版8・11-1，第21・22図）28・29は壺である。28は袋状口縁壺の口縁部破片であり，屈曲部の稜はシャープさに欠けている。調整は，内外面ともハケ目（5～6条/cm）であり，内面にはユビオサエ痕が残る。29は広口壺の口縁部破片であり，弓なりに外弯する。外面がハケ目の後にナデ調整を加えており，内面はヘラミガキである。

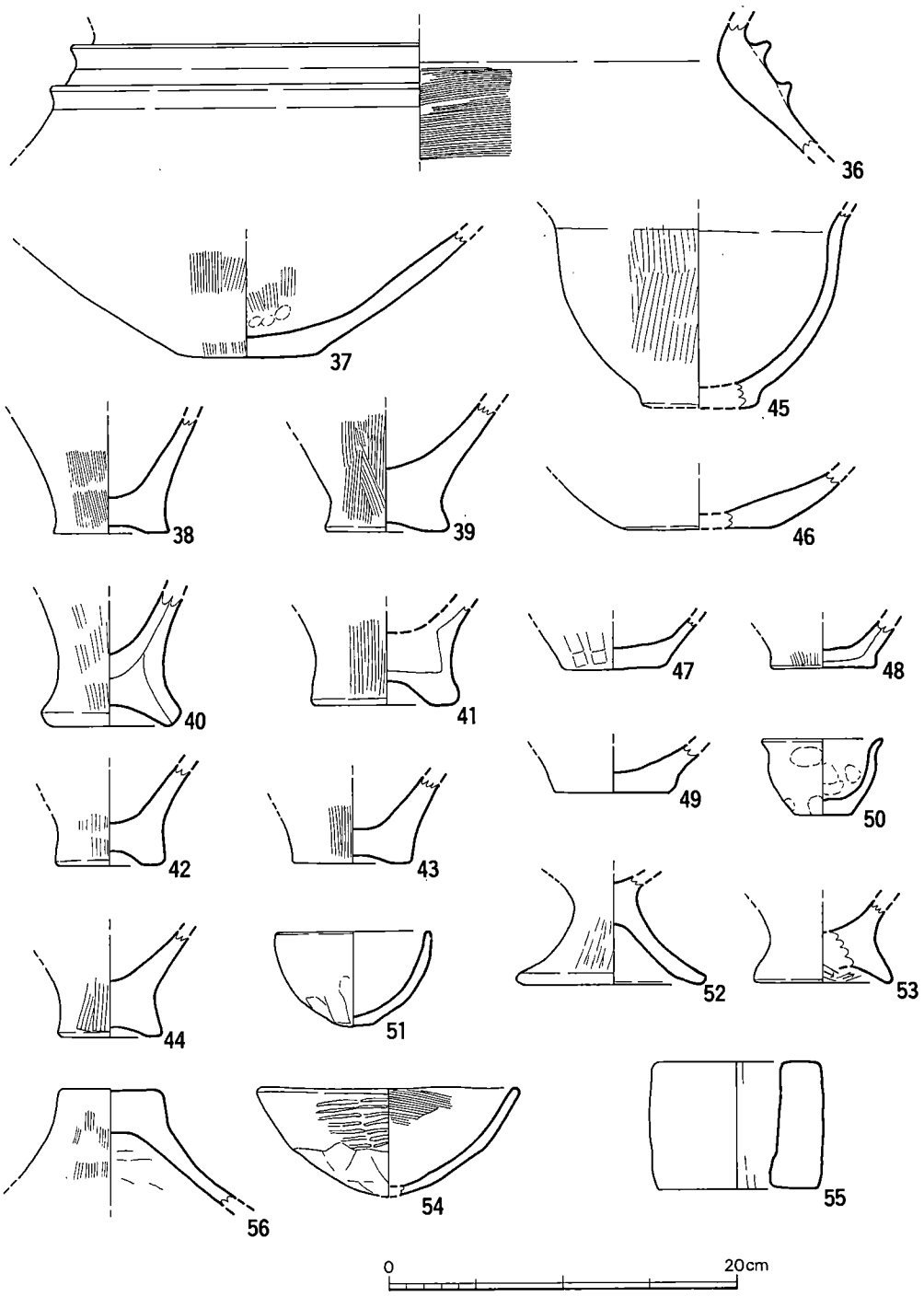
30～34・36・45は甕である。30～32は「く」字状口縁を呈する。屈曲の度合いは32が最も強い。調整は，外面がハケ目で，内面はナデであるが，30の外面はヘラミガキ調整を行っており，胎土ともに丁寧な作りである。33の口縁部は，粘土帯を貼付することにより肥厚させ，そのまま胴部へ移行する。また，口縁部のやや下位に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。調整は，外面がハケ目で，内面はナデである。

34・45は小型の甕である。34の口縁部は薄く，外上方へ屈曲する。胴部はあまり張らず底部へ移行する。45は口縁部を欠く。胴部は，器高に比してよく張っている。調整は，両者とも外面がハケ目で，内面はナデである。36は大型甕の頸部破片である。頸部のやや下位に断面台形の貼付凸帯を2条巡らす。

35は高杯であり，脚部を欠く。口縁部はS字状に屈曲する。調整は，内外面ともヘラミガキである。37は底部のみの破片であるが，大きく開いていることから壺の底部であろう。若干，平底を残している。外面がハケ目で（5～7条/cm）で，内面はハケ目の後にナデ調整を加え



第 21 図　大溝 2 出土土器実測図⑦（弥生土器）　(1/4)



第 22 図　大溝 2 出土土器実測図⑧（弥生土器）（1/4）

ている。

38～44・46～49は甕の底部破片である。38～44は内窪みの上底を呈し，器厚は1.5～3cmと厚い。40はバットのグリップエンドの形態を呈す。調整は，何れも外面がハケ目であり，内面はナデである。48・49は平底を呈する。46・47は若干丸底化の傾向がみられる。50は手捏ねによる甕であり，内外面には無数のユビオサエ痕が残る。

51・54は椀である。51の口唇部は丸く，底部は尖底気味である。54は51より一回り大きい。外面はタタキ整形であり，それより下位をヘラケズリしている。52は高杯の脚部であろうか。脚端部は丸く納める。外面はハケ目の後にナデ調整を加えており，内面はナデである。55は筒形の支脚である。調整は，外面がナデで，内面には成形時のシボリ痕が残る。56は蓋の把手部破片である。調整は，外面がハケ目（10～12条/cm）で，内面はナデである。

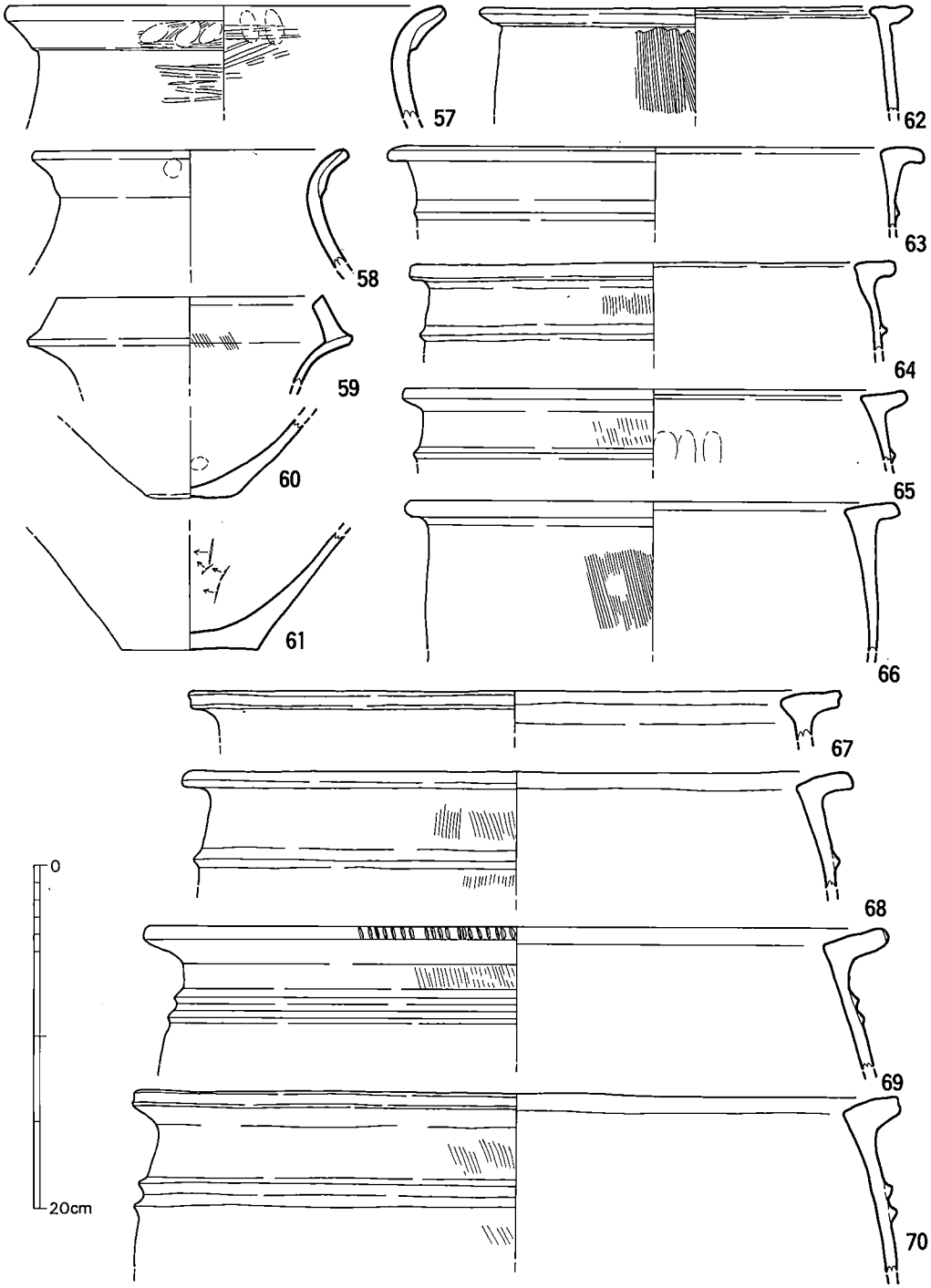
29の壺は頸部が弓状に弯曲することから，弥生時代中期初頭で，38～44の上底を呈する甕は城ノ越式の範疇に納まる。28の袋状口縁壺は，屈曲部の稜が不明瞭であることから後期前半頃に位置するであろう。34の小型甕は，底部に丸底化の兆がみられることから後期前半，31・32の甕と35の高杯は後期後半に位置付けられよう。36の大甕と37の壺の底部及び51・54の椀は，終末期の様相を呈している。

下層出土弥生土器（図版11-1，第23～25図）57～61は壺である。57・58の口縁部は，外方に大きく弯曲しており，粘土貼付による段を有す。調整は，内外面ともヨコ方向の細かいヘラミガキであり，また，口縁部外面には無数のユビオサエ痕が残る。59は袋状口縁壺の破片である。屈曲部の稜はシャープである。内面はハケ目を部分的にナデ消しており，外面は磨滅により不明である。

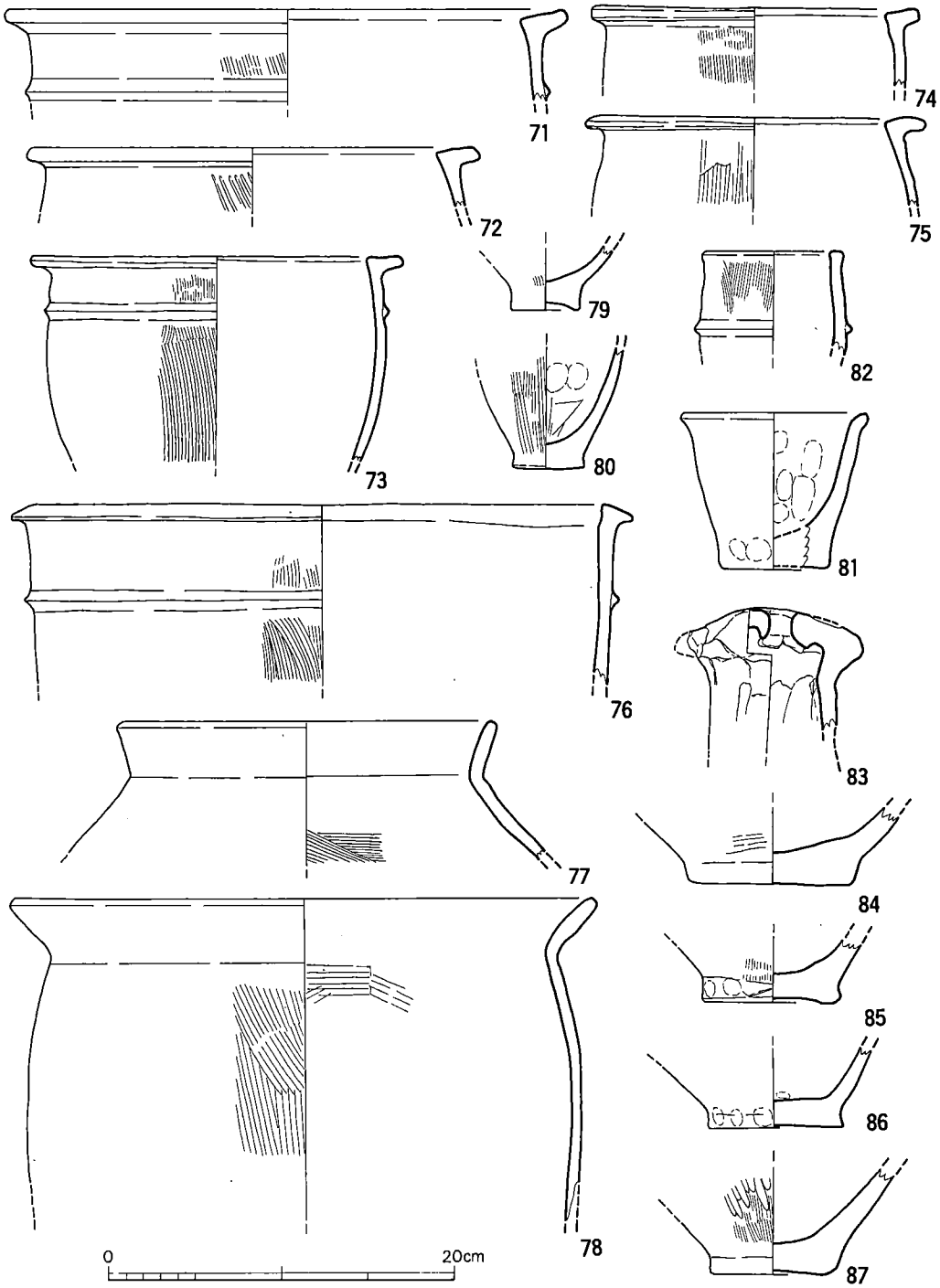
60・61は底部破片である。60は丸底気味で，61は若干上底である。調整は，両者とも外面がヘラミガキで，内面は60がナデで，61は板状工具によるナデである。

62～76は甕である。62・66・72・74・75は逆L字状口縁を呈す。62の内面の稜は突出している。調整は，何れも外面がハケ目で，内面はナデである。72のハケ目はタタキ状で，1cmに3条と粗い。63～65・68～71・73・76は逆L字状口縁部のやや下位に断面三角形の貼付凸帯を1条巡らす。69・70は凸帯を2条巡らしており，69の口唇部にはヘラ状工具によるキザミ目（2～3個/cm）を付す。76の口縁部の突出度は弱い。調整は，何れも外面がハケ目で，内面はナデである。77・78は「く」字状口縁を呈する口縁部から胴部にかけての破片である。78はやや開き気味である。調整は，外面がハケ目で，内面はナデである。

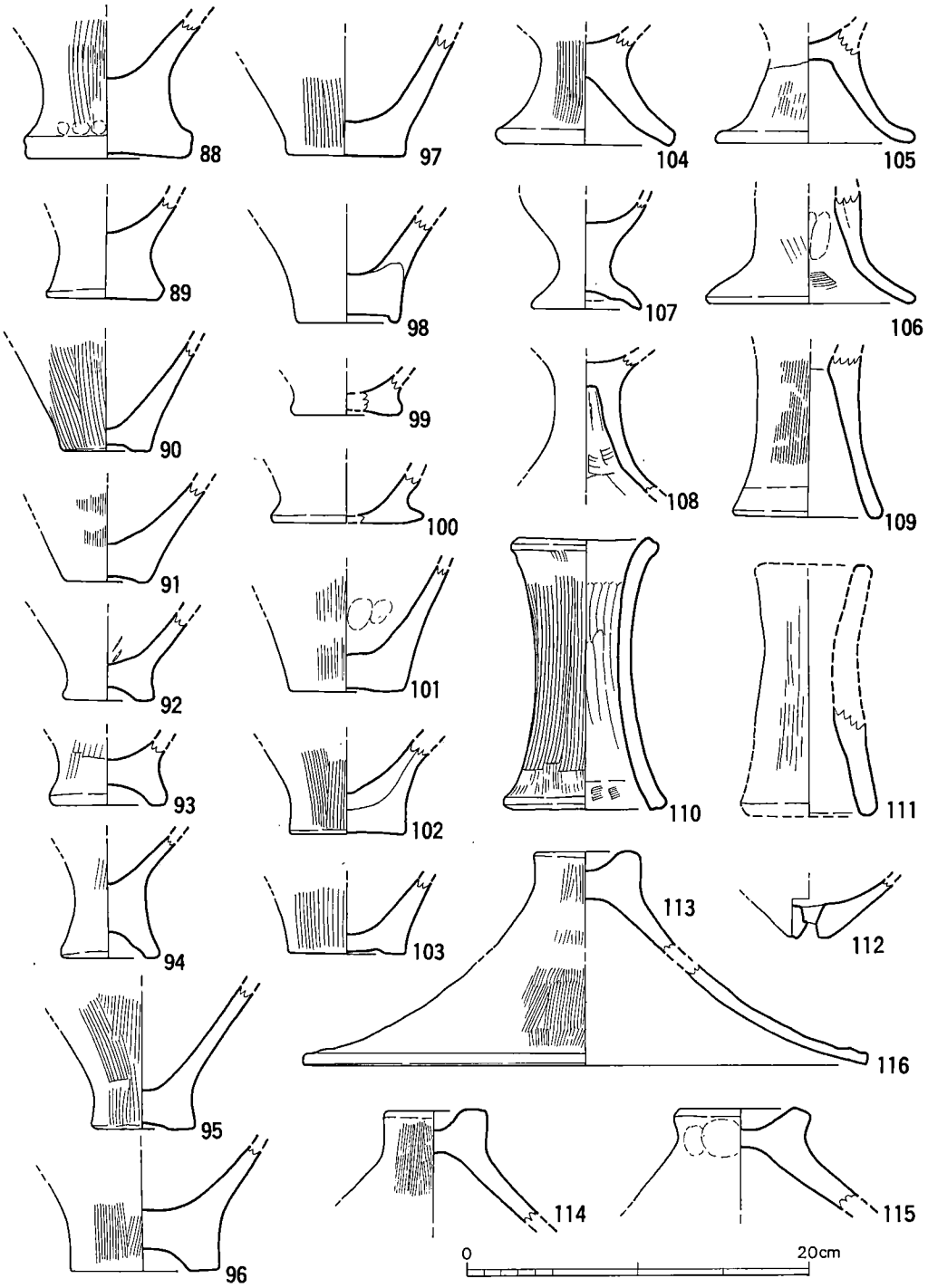
79はミニチュア壺の底部破片であろう。上底を呈す。調整は，外面がハケ目をナデ消しており，内面はナデである。80・81はミニチュア甕である。81の口唇部は丸く，口縁部は少し外方に屈曲している。調整は，内外面ともナデで，無数のユビオサエ痕を残す。80の調整は，外面がハケ目で，内面は板状工具によるナデである。



第 23 図　大溝 2 出土土器実測図⑨（弥生土器）　(1/4)



第 24 図　大溝 2 出土土器実測図⑩（弥生土器）（1/4）



第 25 図　大溝 2 出土土器実測図⑪（弥生土器）　(1/4)

82は椀で，底部を欠失する。口縁部は直立し，胴部に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。83は器台で，所謂「沓形器台」とは形態を異にするが，その範疇に属するものであり，上面中央に1cm強の穴があく。

84～87は底部破片であるが，胴部下位の開き具合いから壺の底部であろう。84・86が平底で，85・87は上底を呈す。調整は，外面がハケ目，内面はナデを基調とし，87の外面は，ハケ目の後にヘラミガキを施している。

88～103は甕の底部破片である。平底を呈するもの（89・97・100～103），内窪みの上底を呈するもの（90～96・98）がある。88は若干上底を呈し。バットのグリップエンドの形状を呈す。調整は，何れも外面がハケ目で，内面はナデである。

104・105は脚台付椀の脚部であろうか。脚高が低く，大きくラッパ状に開いているため，高杯の脚部と比べてずんぐりしている。大板井遺跡1号祭祀土壙からは，脚付甕が出土しており（註6），その可能性もある。調整は，両者とも外面がハケ目で，内面はナデである。

107は脚台付椀であろう。脚台は上底状で，筒部は中実である。106・108は高杯の脚部破片である。106は，筒部から直線的に移行していたのが，脚裾部で屈曲し，ラッパ状に開く。脚裾端部は丸い。調整は，外面がタテ方向のハケ目で，端部内面はヨコ方向のハケ目である。108の脚裾部は，緩やかなカーブを描いて開く。調整は，脚裾端部内面がヘラケズリで，筒部内面は整形時のシボリ痕を残す。外面は磨滅により不明である。

109～111は器台である。111は完形品で，他は破片である。端部は三者とも丸い。調整は，三者とも外面がハケ目，内面はナデで，端部内面はヨコ方向にナデている。112は甕に内外両方から穿孔し，甑としている。底部は尖底気味である。

113～116は蓋である。113～115は把手部破片で上部は内窪みである。116は口縁部であり，把手部を欠くが富士山形を呈すと考えられる。調整は，外面がハケ目で，内面はナデである。

57・58の壺は，口縁部に粘土帯貼付時の段を残すことから，弥生時代前期後半であろう。63～66・68～75の甕は，口縁部内側の稜が，所謂「鋤先状口縁」程発達しておらず，城ノ越式甕にみられるような肥厚する逆L字状口縁とは若干異なるので，中期前半頃に位置付けられよう。93・94の底部は厚く，高い上底を呈するので城ノ越式に属するものと考えられる。90～92・95・96・98は，上底の度合いが弱いことから城ノ越式よりは後出するもので，97・100～103は，平底であるので前者よりさらに後出すると考えられる。78は「く」字状口縁を呈し，胴部の張りが弱いことから後期後半頃で，77は終末期に属するであろう。（小田）

上・中層出土石器（図版12-2，第26・27図）大溝の上層・中層からは打製石鏃・石錐・ナイフ形石器・削器・磨製石剣・磨製石庖丁・磨製石斧・すり石・砥石等が出土している。なお，第26図4は大溝1出土石器で，別項に扱う。

打製石鏃（1・2）1は安山岩製で，全面に調整剥離の及ぶ凹基式。長さ2.0cm，幅1.6cm，

厚さ0.26cm，重量0.65g。2は黒色を呈す黒曜石製で，全面調整剝離の平基式。長さ1.6cm，幅1.6cm，厚さ0.4cm，重量0.8g。

石　錐（3）黒色を呈す黒曜石剝片の打瘤部に調整剝離を加えて刃部にしている。基部を欠くが，現存長2.2cmで，重量の現存値1.45g。先端部は磨耗している。

ナイフ形石器（5）黒色を呈す黒曜石製で，刃部を欠く。縦長剝片を素材とし，厚みのある部分まで刃潰し調整を加えて背を作っている。使用による縦方向擦過痕が両面共背側の0.4cm程度の幅にみられ，背も磨耗する。現存値で，長さ2.8cm，幅1.5cm，厚さ0.5cm，重量2.1gを測る。

削器類（6・7）6は安山岩の縦長な剝片の側縁部を調整剝離して刃部とする削器。長さ5.3cm，幅3.3cm，厚さ1.1cmの大きさ。7は黒色を呈す黒曜石の剝片で，剝片の打撃面と先端に原面が残る。

磨製石剣（8・9）8は石剣の先端部破片。現存長7.0cm，幅3.2cm，厚さ1.0cm，重量29.1gを測る。身の中央に鎬が通る。両面共丁寧に研磨されて，断面は菱形を呈す。頁岩製で，やや風化が進む。9は石剣の基部端であろう。現存長2.9cm，幅3.1cm，厚さ0.85cm，重量10.7gを測る。折損部では，両面から抉りが入り厚さ0.55cmになる。側縁は直線的だが，端部の一方の角は斜めに切られる。各面共に丁寧に研磨されており，断面形は扁平な棗形を呈す。

磨製石庖丁（10～14）10は玄武岩，11・12はアズキ色輝緑凝灰岩，13・14は緑泥片岩製の石庖丁片。孔の位置からすると，本来10・11・14は直線的な背をもち，刃部幅の割に背の長さの短い形を呈していたと思われる。13は大形品であろう。なお，11の刃部では破損後に研磨した刃部がみられる。

15は，緑泥片岩製の磨製石器で，現存長6.6cm，幅2.7cm，厚さ0.4cmを測るが，幅広になる部分を欠く。内弯する刃部をもち，鎌かと思われる。

磨製石斧（16～19）16は，灰白色の頁岩製柱状片刃石斧。折損後の調整が加わり研磨も随所にみられる。基部側の折損面にも研磨痕があることから，この大きさで再利用されていたと考えられる。長さ7.3cm，幅2.35cm，厚さ1.5cm，重量40.75gを測る。

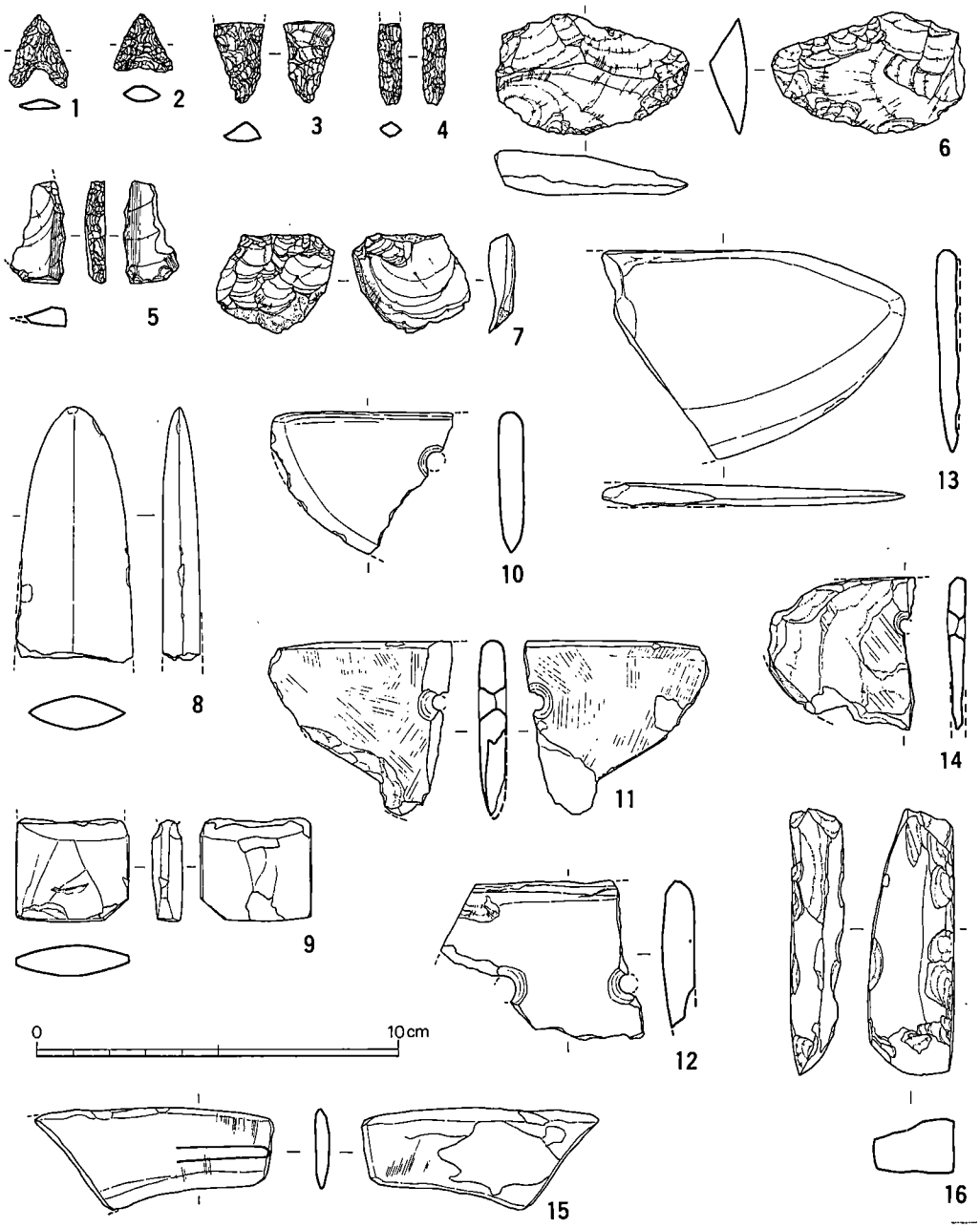
17・18は玄武岩製の太形蛤刃石斧。17は頭部を僅かに残すが，現存長16.5cm，幅8.5cm，重量の現存値954.5gを測る。18は胴部破片で17よりは細身。19は硬砂岩製の石斧頭部破片。敲打調整痕が残る。現存値で長さ7.3cm，重量166gを測る。

すり石（20～23）20～22は玄武岩製，23はアプライト製のすり石で，いずれも破片。20・21・23には敲打面があり，敲く機能も兼ね備えられている。平坦になる面はいずれもよく擦れている。20は，現存値で長さ10.4cm，幅7.1cm，厚さ4.2cm，重さ409g。

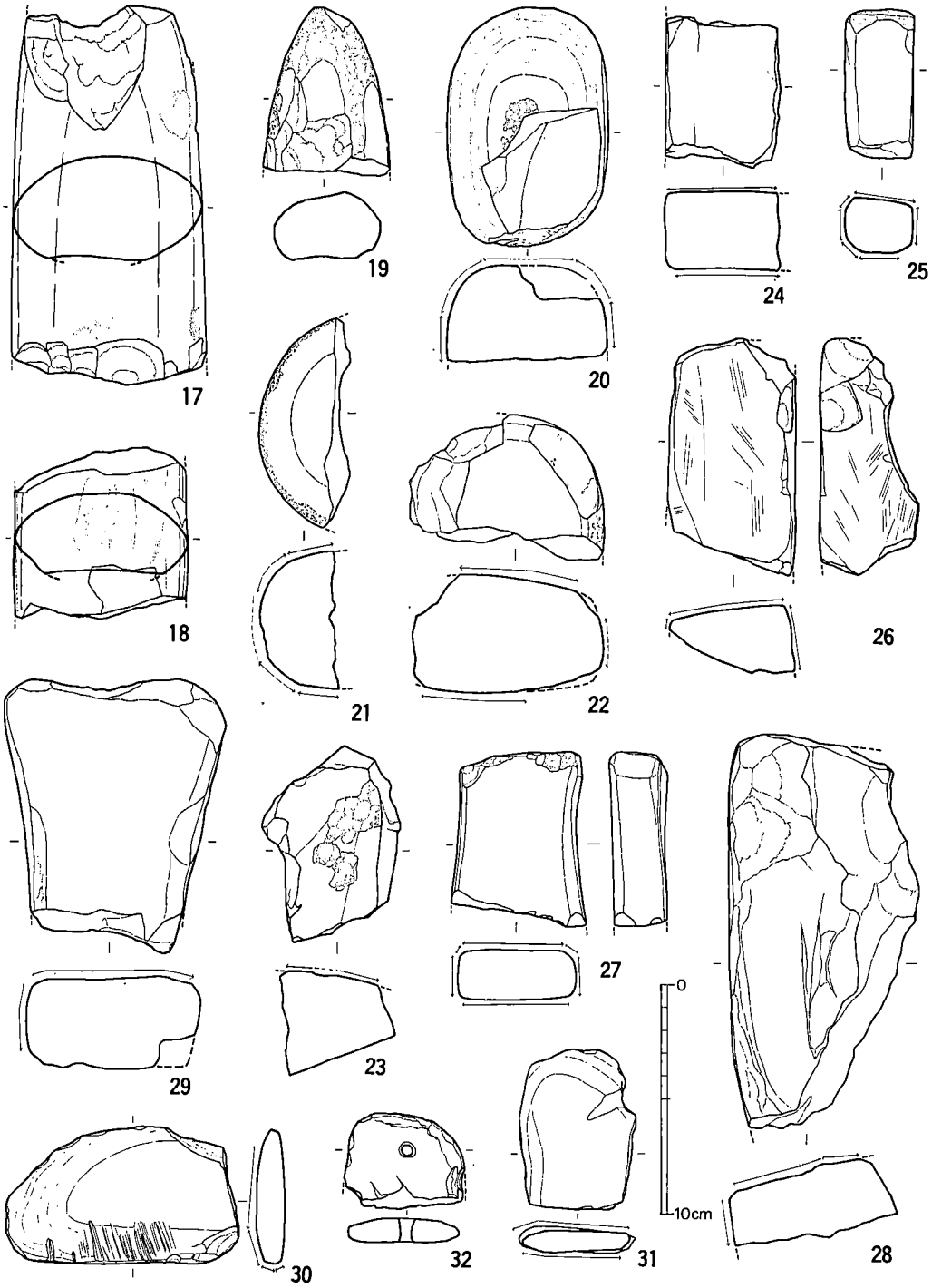
砥　石（24～32）24・28はアプライト，25・27は砂岩，26は泥岩，29は緑泥片岩，30～32は雲母片岩製の砥石で，アプライト製のものを除いて生目は細かい。断面図に砥面を←→で図示

したが，多面になる例が多い。24は破損面以外の面が火を受けている。32は円孔を有しているが，石庖丁の穿孔よりも直に穿たれており，時期的に下るものと思われる。

出土層位では，2・3・8・10・12・17・19～21・24・27・29・31が中層出土で，他は上層



第 26 図　上層出土石器実測図①（1/2）



第 27 図　上層出土石器実測図②（1/3）

から出土している。砥石等は時期を特定しえないが，他の器種はいずれも混入品であろう。これらの石器の大半は弥生時代前期～中期前半頃にみられるもので，５のナイフ形石器は先土器時代の後半期の可能性もある。

下層出土石器（図版13-１，第28～30図）打製石鏃・削器・磨製石庖丁・磨製石斧・すり石・砥石・石皿などが出土している。

打製石鏃（１・２）２点共に安山岩製。１は完形品で，長さ5.5cm，幅2.5cm，厚さ1.1cm，重量12.2gを有す。横長剝片の両面から調整剝離を加えているが，基部側は側縁がそのまま残る。２は平基式で，先端部を欠くが，現存長3.1cm，幅2.0cm，厚さ0.6cm。両面から調整剝離を加えているが，主要剝離面が残る。

削　器（３～６）３～５は安山岩製。６は黒色を呈す黒曜石製。３は横長剝片の先端部と打瘤部に調整剝離を加えて，原面の残る先端部を刃部にしている。現存長6.2cm，幅3.0cm，厚さ1.2cm。４は不定形剝片を素材にしており，粗い調整剝離と刃部に細かな調整剝離を加えている。長さ4.3cm，幅2.3，厚さ1.2cm，重量9.85gを測る。５は刃部破片。扁平な横長剝片の先端部を刃部にしている。６は黒曜石縦長剝片の側縁を刃部にする。長さ7.9cm，幅3.5cm，厚さ0.8cm，重量21.2gを測る。

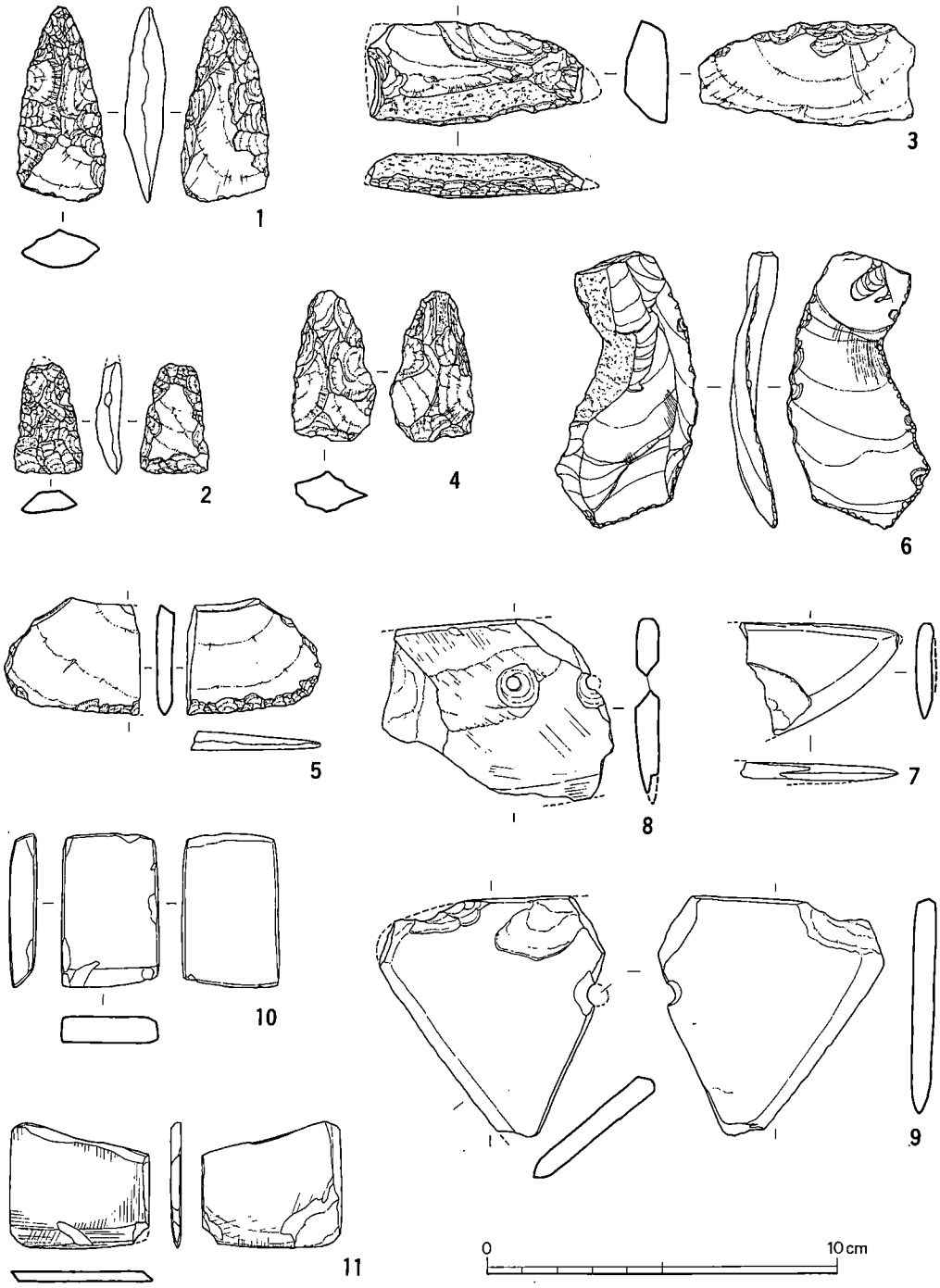
石庖丁（７～９・21）７は粘板岩，８は雲母片岩，９・21は緑泥片岩製で，いずれも破片資料。背と刃部の縁の角度は，７が狭く９は広い。８は７に近いであろう。９は現存値で長さ6.5cm，幅6.9cm，厚さ0.6cmの大きさ。21は現存長9.9cm，幅7.2cm，厚さ0.7cmの大きさで，刃部は調整剝離されている。打製石庖丁と称すべきであろう。

扁平片刃石斧（10・11）頁岩ないしは粘板岩製。完形資料の10では，長さ4.4cm，幅2.8cm，厚さ0.8cm，重量18.0gを測る。11は剝落した破片の再利用であろうか，幅4.0cm，厚さ0.3cmだが，刃部両面共に研磨痕がみられる。

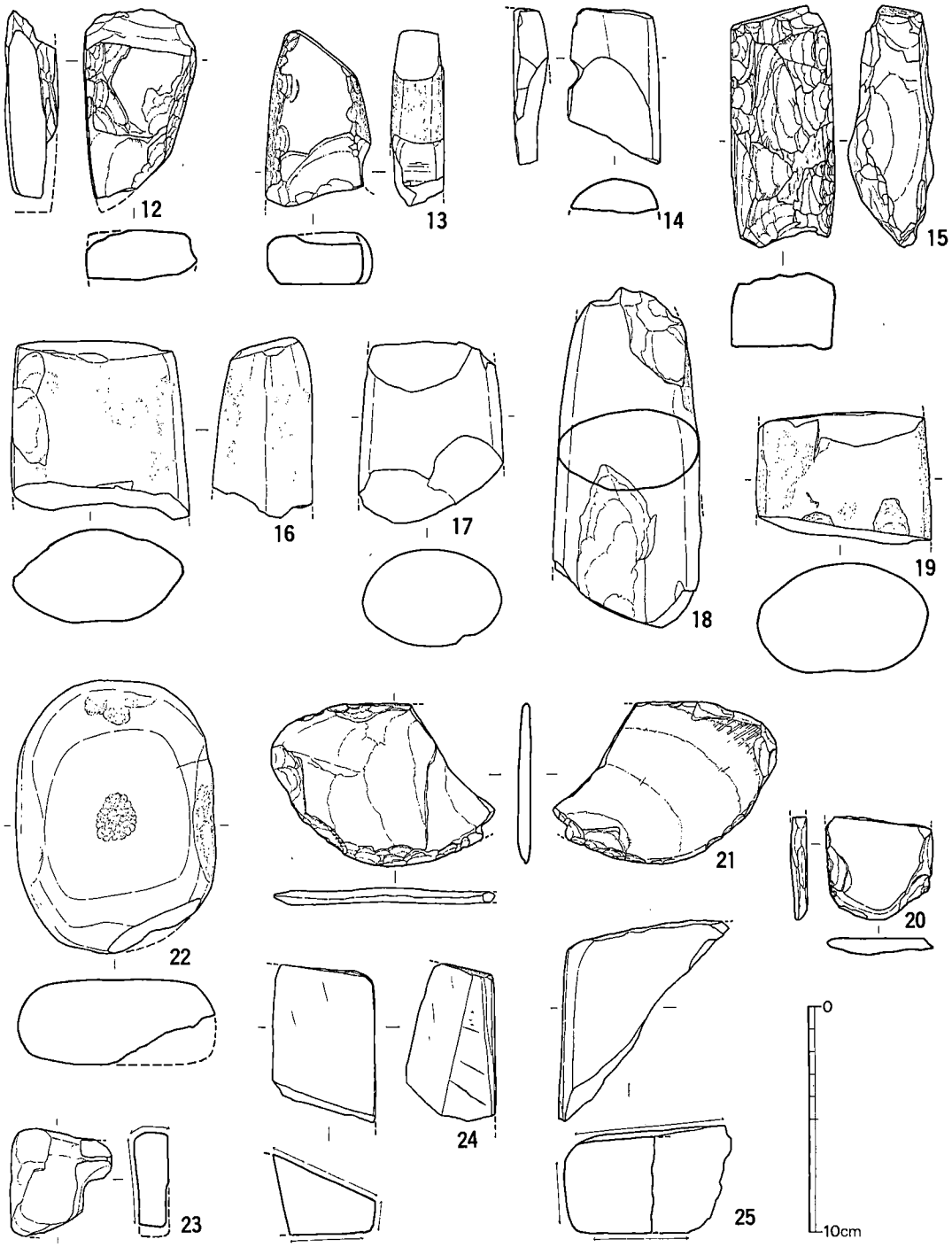
柱状片刃石斧（12～15）12は頁岩製。刃部付近の破片で長さ8.3cm，幅0.5cm，厚さ2.3cm，重量133.5gの現存値。13は頁岩製の抉入石斧頭部。現存長7.8cm，幅4.7cm，厚さ2.4cm，重量143gを測る。両側縁には敲打調整痕が残り，頭頂部にも敲打痕があるものの平坦面に研磨されている。15は頁岩製で折損後の再調整がみられる。頭部と側面に元の面が残り，調整剝離面の間に元の敲打調整面が一部残る。長さ10.7cm，幅4.6cm，厚さ3.8cm，重さ294gを測る。14は玄武岩製の磨製石斧で，円柱状の体部の可能性もあるが，小さな抉りが設けられている。

太形磨製石斧（16～19）いずれも玄武岩製で扁球形断面の体部であるが，完形資料はない。16は頭部破片，他は胴部破片だが，18は頭部に近い部分であろう。16は現存長7.9cm，幅7.9cm，厚さ4.5cm，重量432gの現存値。18は現存長16.5cm，幅8.5cm，厚さ4.6cm，重量954.5gの現存値。

打製石斧（20）緑簾片岩製の扁平打製石斧で，刃部のみ4.7cmの長さが残る。幅4.8cm，厚



第 28 図　下層出土石器実測図①（1/2）



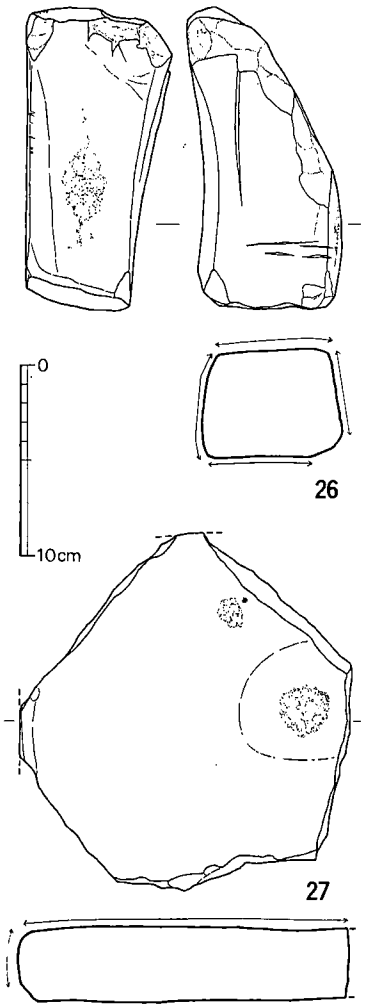
第 29 図　下層出土石器実測図②（1/3）

さ0.7cmの大きさだが，刃部は磨耗している。

すり石（22）長さ12.3cm，幅8.9cm，厚さ3.8cm，重量の現存値677g。下面側の1／4程度を欠く。上面には，すれた面とその中央に敲打痕がある。玄武岩製。

砥　石（23～26）23は凝灰岩質砂岩製，24は花崗岩質の石，25は玄武岩質の石を用いている。3点共破片だが，23は小形品。26は硬質の砂岩製で，長さ16.1cm，幅・厚さ共7.5cm程度の大きさで重量1252g。方柱状の広い4面はいずれも砥面にされて平滑になるが，断面図の上面に低い段や切り傷が，側面に刺突された傷がみられる。小さく折れ曲がった対象物の先端を引っ掻いた痕跡であろう。

石　皿（27）完形資料ではないが，長さ19.1cm，幅17.4cm，厚さ4.2cmの大きさの扁平な石で花崗岩質の石。上下両面共平滑に擦れ，上面には直径6cm強の僅かに凹む部分がある。この凹みの内側も擦れているが，中央部に敲打痕もみられる。



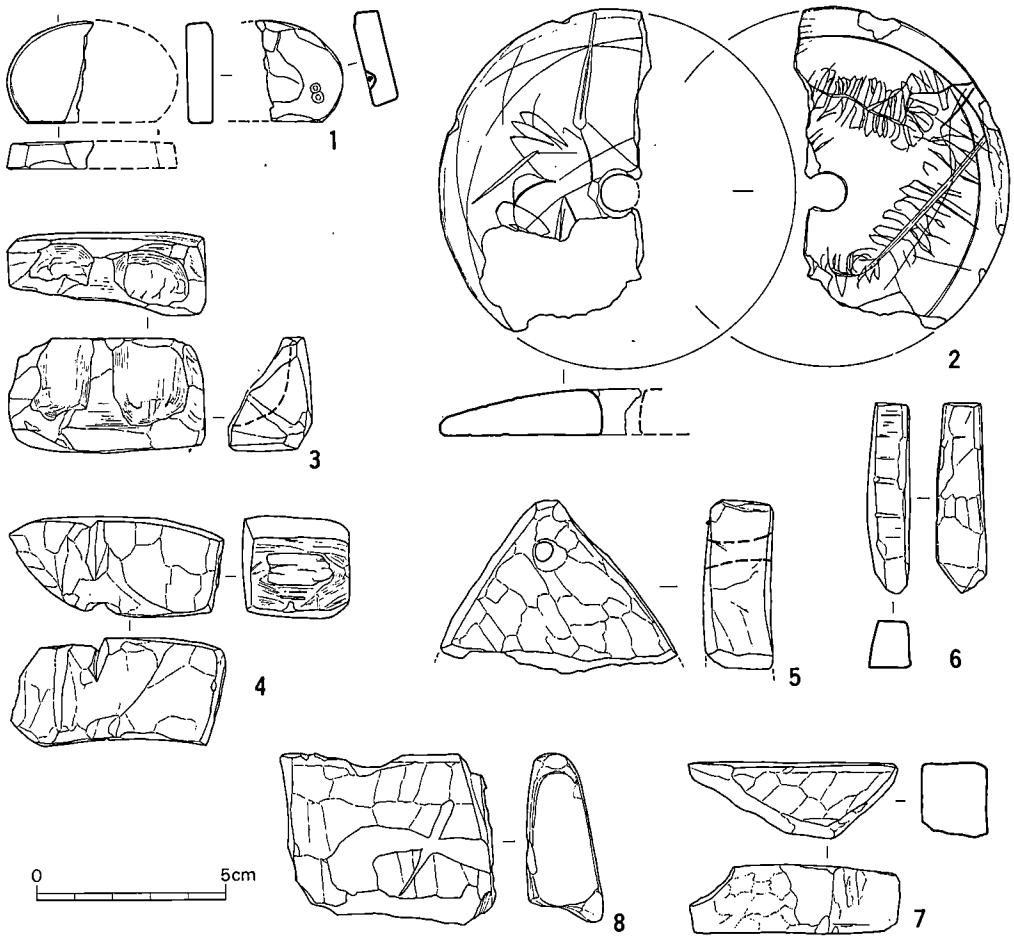
第30図　下層出土石器
実測図③（1/4）

石製品（図版13-2・14-1，第31・32図）石帯・石鍋・石鍋片を再加工した石製品がある。

石帯（第31図1）E3区中層下部から出土した。出土位置は大溝2の南側杭列より少し北側になるが，溝の西肩部に相当する。丸鞆の半欠資料で，鉄分の沈着のせいか淡い褐色を若干帯びるが乳白色を呈す。石材の科学的分析は未実施だが玉質か大理石であろうか。復原すると長さ4.5cm，幅2.7cm，厚さ0.7cmの大きさ。裏面に1ケ所かがり穴が残っており，その位置からして3ケ所に配置されていたものと考えられる。表面及び側面はよく磨かれて光沢を放っている。

石　鍋（第32図1～3）再利用している破片を除いて13点出土している。このうち4点が中層の上部から，9点が上層からの出土資料。胴部破片を除いて3点を図示する。

1は口径を復原すると37cm前後の大きさになる。口縁部上面は平坦だが，さほど平滑でなくむしろ節理で剝げた面が現れている。外面には細かな削り痕，内面には広めの削り痕がみられる。口縁から4cm程下に円孔が穿たれている。この孔の位置での器壁厚は0.7cm程度に薄くなるが，他の部分は1.5～1.8cmの厚みをもつ。色調は暗紫灰色を呈す。中層上部出土。2

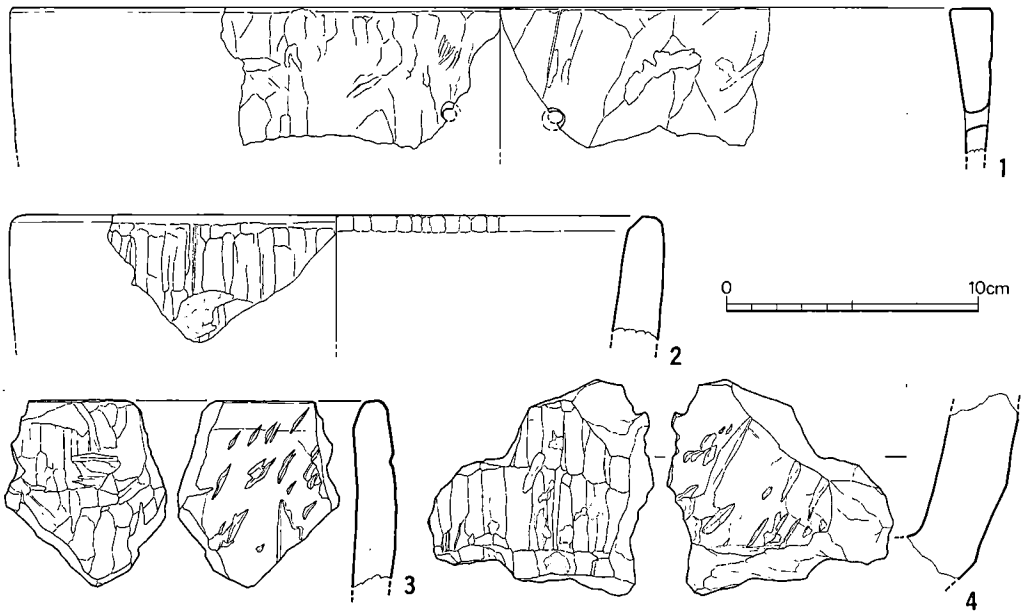


第 31 図　上・中層出土石製品実測図（1/2）

は口径を復原すると25cm弱になる。口縁端部の内外面は角を削り取られ梯形にまとまるが，内面側の削り方がやや広い。内外面共に削り痕がみられるものの，内面はかなり平滑になっている。灰白色を呈す。3は淡めの青灰色を呈す。口径を出しえないが弧は小さめ。調整手法では2と同じような特徴をもつが，内面にノミ状工具の傷痕が点在する。外面には煤が付着するが，一部煤付着後に削り取ったような部分がみられ，把手部であった可能性もある。2・3共に上層出土。

なお図示していないが，上層出土の資料で，滑石質の石材ではあるものの，雲母片岩・緑泥片岩の部分が嵌入する例がある。

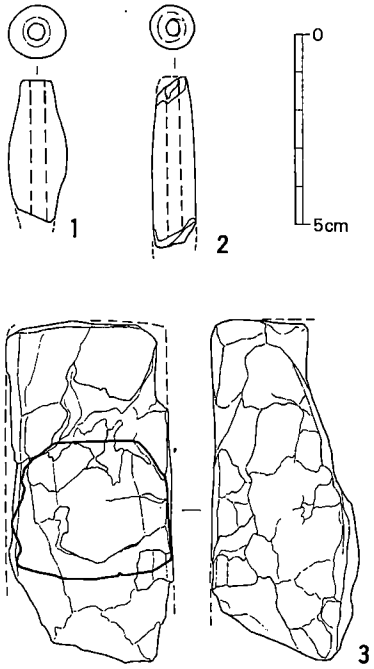
その他の石製品（第31図3～8）6点共，上層出土資料で，滑石製石鍋の破片を再加工したもので用途の判らないものが多い。3は，長さ5.2cm，幅2.2cm，厚さ3.0cmの大きさ。断面



第 32 図 上・中層出土石鍋実測図 (1/3)

形は直角三角形状を呈し，斜辺になる面には親指大の凹みが設けられている。外面は平滑に削られるが，凹みの底面には工具先端の痕が残る。4は，長さ5.7cm，厚さと幅は2.7～2.8cmの方柱状で，一方の端部は，四方から擦り切りを加えて折り取った折断面が残る。また端部から3cm程の位置の石鍋外面側に，新たに擦り切りを始めている部分があり，石鍋内面側ではこれに対応する擦り切りの計画線が刻まれている。製作中途段階のものであろう。5は，下部を欠き用途がはっきりしないが，山形の頂部に円孔が穿たれていることからして，紐等を通して垂下させるものであったかと推測させられる。現存値で高さ4.6cm，幅6.3cm，厚さ1.8cm，重量67gを測る。6は，長さ5.0cm，幅1.3cm，厚さ1.15cmの方柱状で，一方の端部は尖り気味。幅広な面の片面が煤の付着する石鍋外面で，他の面には削り痕がみられ，平滑に研磨された面もある。7は，長さ5.6cm，幅2.0cm，厚さ1.8cmの大きさ。一方の端部は約45°に削られるが，他方は破損面のまま残る。断面図の左側の面が石鍋の外面。8は石鍋の口縁部をそのまま残し，縦方向に四方から擦り切りを加えて折り取ったもので，長さ3.6cm，幅0.9～1.5cmの折断面が残る。長さ5.5cm，幅4.5cm，厚さ1.8cmの大きさ。平面図の面が石鍋外面。

土製品（図版14-2，第33図2・3）2は管状土錘。上層から出土した。現存長4.4cm，外径1.2cm，孔径0.35cm，重量の現存値4.6gを測る。3は，現存長9.0cm，幅4.3cm，現存厚3.8cmの大きさの方柱状になると思われるもので，一方の端側を欠く。器面は丁寧にナデられる。胎土にスサ（藁であろう）と若干の砂粒を含むが精良な粘土を用いており，淡めの暗黄褐色に

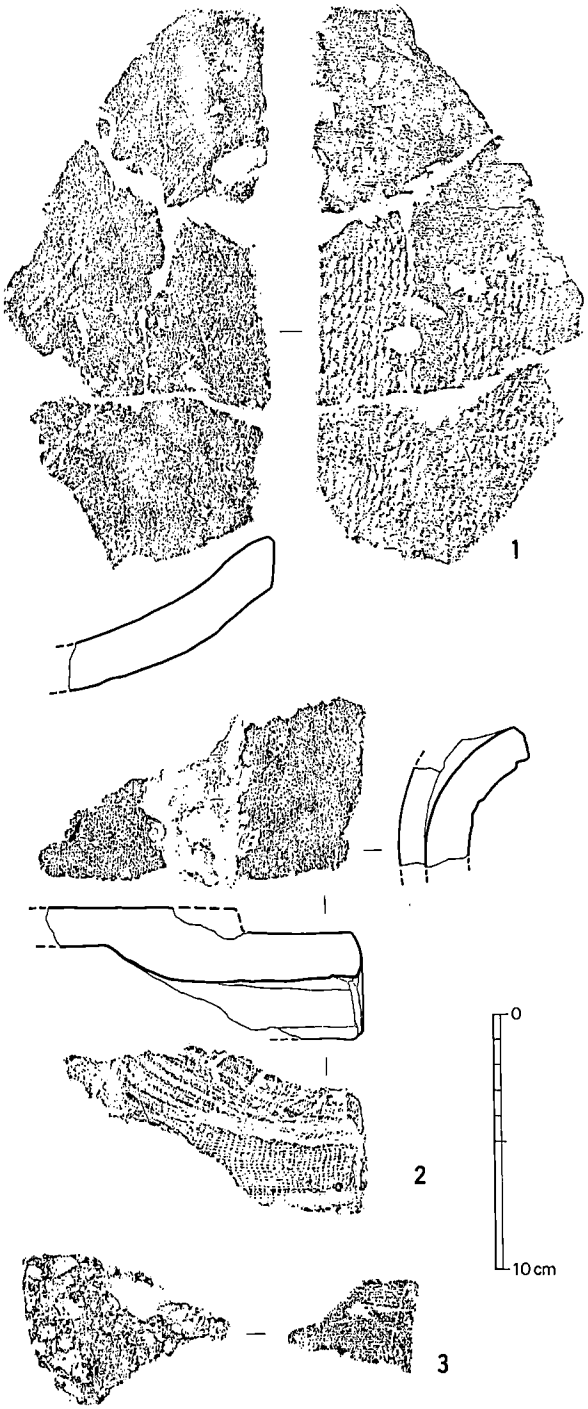


第 33 図　大溝１・２出土土製品
実測図（1/2）

焼成されている。支脚かもしれないが，一応土製品として取り扱った。上層出土。

鉄　滓（図版11-４）大溝２の上面から出土した。約５cm×４cmの大きさの椀形を呈すもので，重量84gを測る。全体に気泡が多く，椀の内側に相当する部分には藁状の痕跡が残る。

瓦（図版14-３，第34図）５片出土したが，うち３片が接合した。１は接合資料で，小口端部が大溝２のＣ６区上層出土，中程は支流２のＺ13区上層出土，そしてあと１片は支流２のＡＢ11区境中層上



第 34 図　大溝２出土瓦拓影（1/3）

面から出土したが，小口端部の破片は磨耗が進む。現存長22cm，幅11cm，厚さ2cm弱の大きさ。粘土板の平瓦で，凸面は縄目タタキ痕，凹面は布目がすり消され，側面は梯形にヘラケズリされる。灰黄褐色に焼成されるが，器壁内部は黝黒色ないし灰色を呈す。2は支流2のA11区上層下面から出土した。粘土板の丸瓦片で，現存長12cm，幅6cm，厚さ2cm弱～3cm。玉縁は5cm弱の奥行をもつが，段の部分を欠く。凸面はケズリ，凹面は布目圧痕が残るものの布目は雑で，粘土板を切る際の擦過痕がある。胎土に砂礫がかなり含まれ，淡灰黄褐色に焼成されている。3は遺構検出面の大溝2上面から出土した平瓦片。厚さ3cm弱で，凹面に布目圧痕を残す。灰白色に焼成されているが，風化が進む。（小池）

木製品（図版11-2，第35・36図）1は現存での長さ24.8cm，幅7.5cm，厚さ0.6cmを測る板状の木製品で，C13区下部暗灰色粘砂中より出土した。周縁は欠損しているために全体の形状・規模は不明。表裏面とも工具痕が認められるが，鮮明さを欠く。建築用材であろうか。

2は現存での長さ17.2cm，幅6.8cm，厚さ0.6cmを測る板状の木製品で，1同様C13区下層暗灰色粘砂中より出土した。周縁は欠損しているために全体の形状・規模は不明。表裏面とも工具痕が認められるが，1同様鮮明さを欠く。

3は現存長14.2cmを測る。大半を欠損するが楕円形を呈するようであり，周辺は縁がつき，広い所では6mm，中央部に行くに従って細くなる。また，縁の広い方には柄がついていたようであり，杓子と考えられる。辻田遺跡に類例があり，Ⅱ区出土杓子25は身の先端を欠損しているが，全長70cm程になる（註7）。北部落込み下層暗灰青色粘砂出土である。

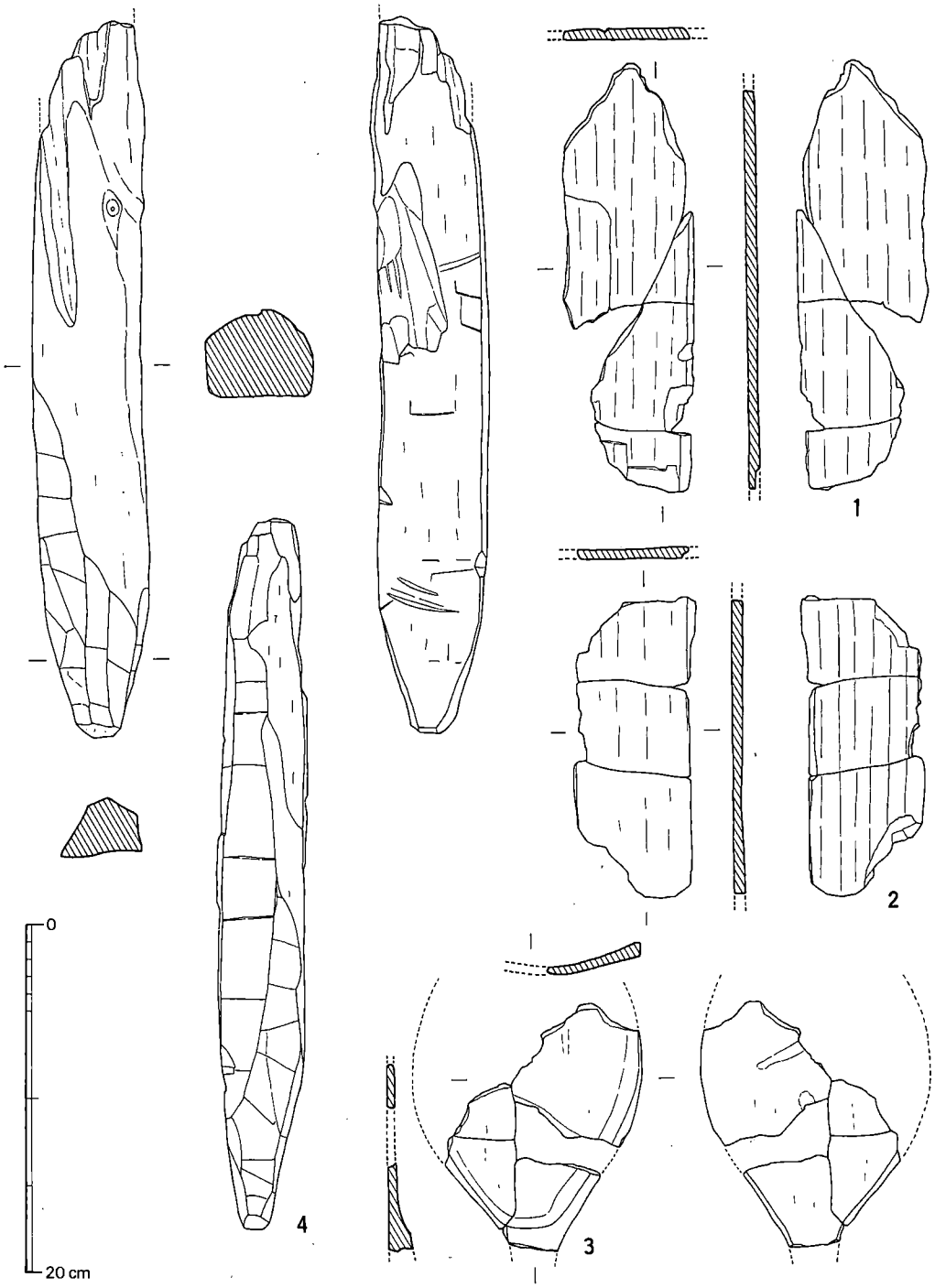
4は残存長41.3cm，幅6.3cmを測る。2面面取りしてあり，建築用材の転用品であろう。また，裏面は原木の形状を留めており，復原すると径8cm程になる。先端は舳先状にカットしている。北側杭列51として取り上げた。

5は全長76.2cm，中央部長58.1cm，幅16.1cm，厚さ11.2cmを測る。両端は双角状の抉り込みがあり，全体としてH字状を呈し，側面は台形状で中央部に方形の抉り込みを有す。また，体部には，北側杭列53を打込まれてできた孔が開き，中央部に亀裂が走る。原深町遺跡に類例があり，W30は全長87.1cm，幅25.5cm，厚さ0.87cmを測り（註8），本遺跡例に比して扁平である。建築用材であろう。

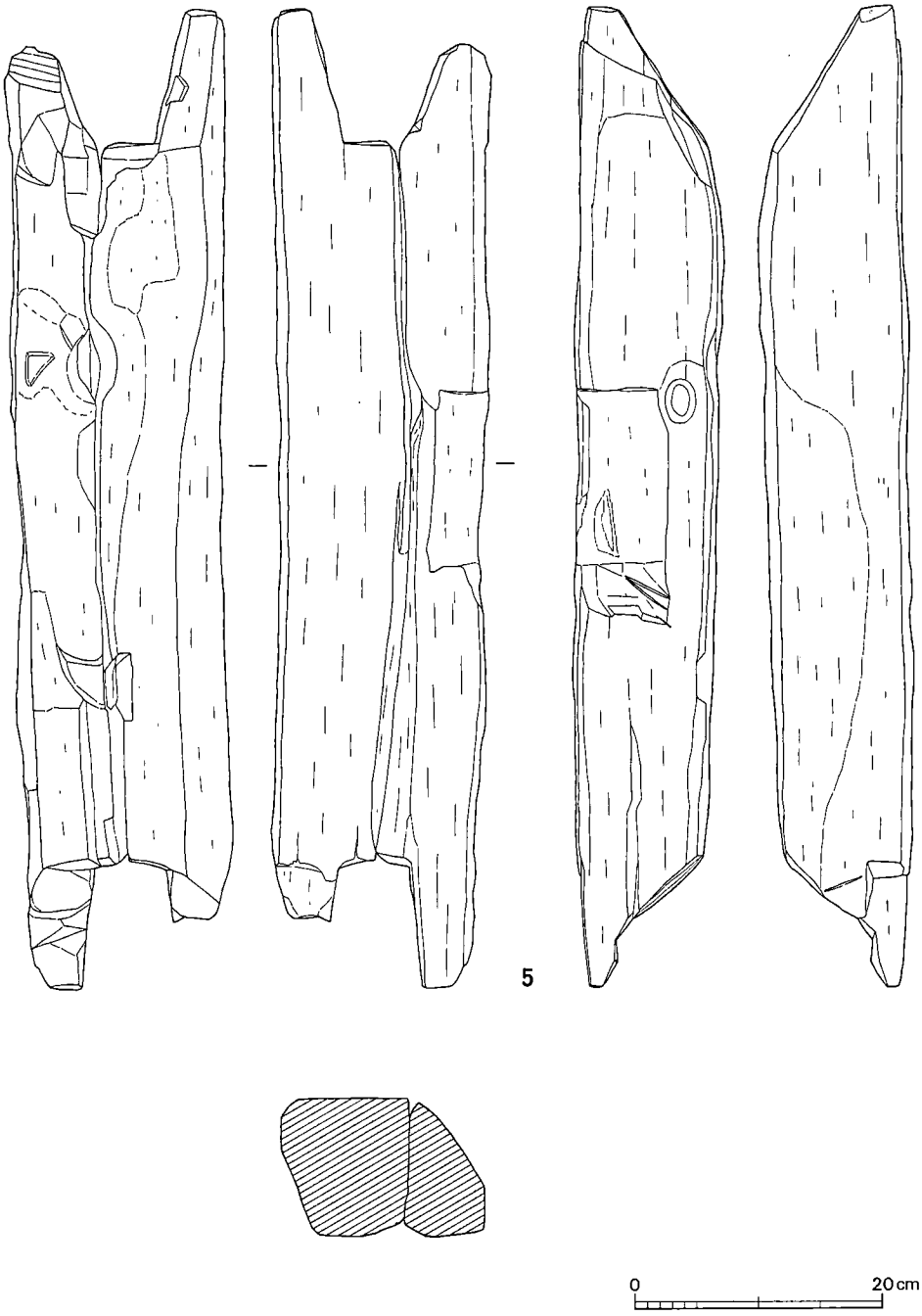
大溝2支流1（図版3-2，第5図）

大溝2の西側に位置し，C10区で大溝2に接続する。北端部での幅2.0m，深さ0.2mを測る。支流1の北端部には，杭が2列打ち込まれている。説明上，支流としているが，大溝2の北端部を埋めた際の付け替え水路である。

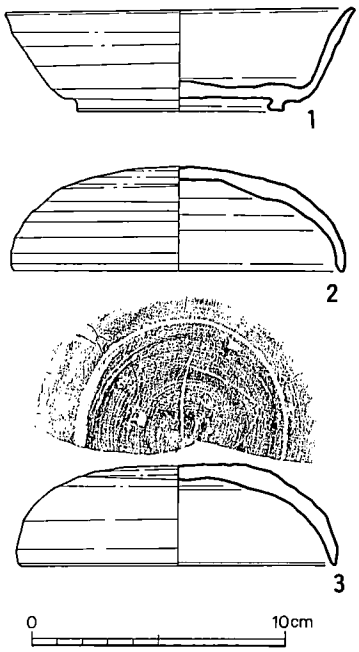
時期は，D11区中層上部及び，北端部のE13区より古墳時代後期の須恵器が出土しているので，それ以降と考えられる。（小田）



第 35 図　大溝 2 出土木製品実測図①（1/4）



第 36 図　大溝 2 出土木製品実測図②（1/6）



第 37 図　大溝２支流１出土土器実測図（1/3）

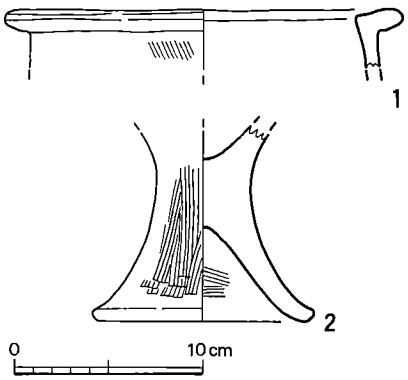
須恵器（図版11-３，第37図）１は高台のある杯身。完形資料で口径13.5cm，器高3.9cm，高台径8.1cm。底部端から直線的に体部が立ち上がる。高台は底部端より内側に付く。体部はヨコナデ調整，底部はナデ調整されるが外底面にヘラケズリ痕が残る。D11区の中層上部出土。

２・３は杯蓋。２点共に破片資料で，復原値はそれぞれ，口径12.8cm・12.4cm，器高4.1cm・4.0cmの大きさ。２は天井部外面ヘラケズリ，天井部内面ナデ，体部は内外面共ヨコナデ調整。D12区の中層出土。３は，ヘラケズリの天井部外面とヨコナデの体部の境目にヘラ先による段がみられ，体部・口縁部の器壁は厚め。天井部外面にヘラ記号がある。北端部の緑灰色粘土層から出土したが，大溝２支流１と北部落込みの重なる部分で，大溝２支流１の河床面より低いレベルの位置に相当する。　（小池）

大溝２支流２（図版３-２，第５図）

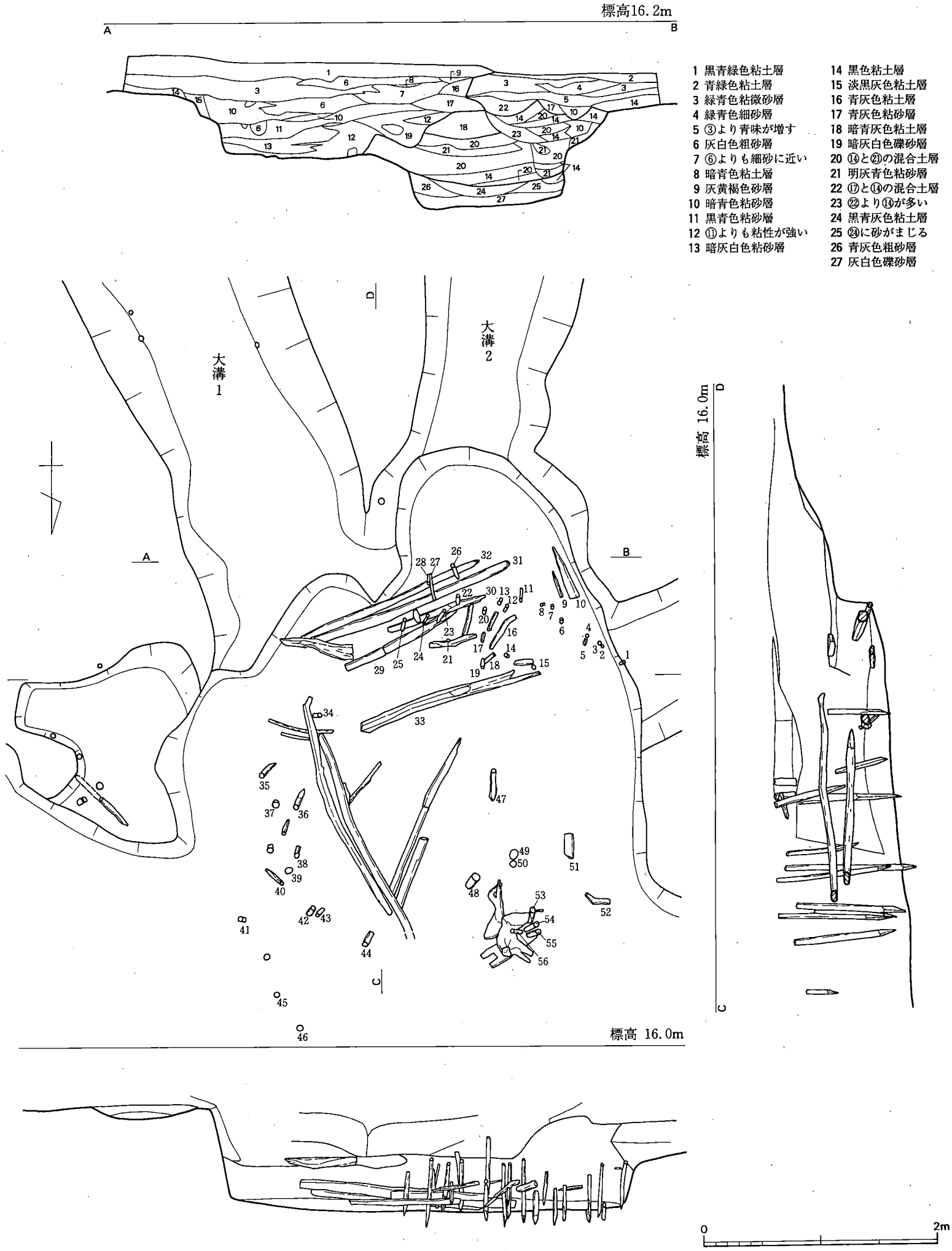
大溝２の東側に位置し，大溝１を切ってC10区で大溝２に接続する。北端部での幅2.5m，深さ0.3mを測る。支流２は，大溝１が完全に埋った段階で掘削されている。遺物は，A12区で弥生土器が出土しているが，混入であろう。

弥生土器（第38図）１は逆L字状口縁を呈する甕の口縁部破片である。復原口径は21.0cmを測る。口縁部平坦面は若干内傾しており，口唇部は丸い。調整は，外面がハケ目で，内面はナデである。胎土には長石・石英粒を多量に含む。焼成は良好で，内外面ともにぶい黄色を呈す。２は台付甕の脚部破片である。残高10.0cm，脚径5.0cmを測る。脚部はラッパ状に開き，端部は丸い。調整は，外面がタテ方向のハケ目（５～６条／cm），内面はヨコ方向のハケ目，端部はヨコナデである。胎土には２mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は良好で，内外面とも暗灰褐色を呈す。時期は，弥生時代中期前半であろう。　（小田）



第 38 図　大溝２支流２出土土器実測図（1/4）

陶磁器（図版７，第14図４）復原口径8.9cmの口縁部破片で，壺ないしは水注のような器形



第 39 図　小郡正尻遺跡A地区北側杭列実測図（1/40）

であろう。口縁部は折れ曲がり，上縁と下縁につまみ出されたような形状を呈している。暗灰色の胎に濁った濃緑色の釉がかかる。

青　磁（図版12-1，第18図6）復原口径16.6cmの椀口縁部破片。暗灰色の胎に濁緑黄色の釉がかかる。A12区の上層やや下位から出土した。（小池）

大溝2支流3

調査区の南端側に位置し，大溝1に切られている。幅2.6m，深さ0.4mを測る。埋土は，上層がⅢ層で，下層が黄褐色粘土（砂粒混り）と黒色土の混合土で，下層は人意的に埋められていた。2号井戸は，その後に掘り込まれたものである。下層からの遺物の出土はなかった。

北側杭列（図版6-1，第39図）

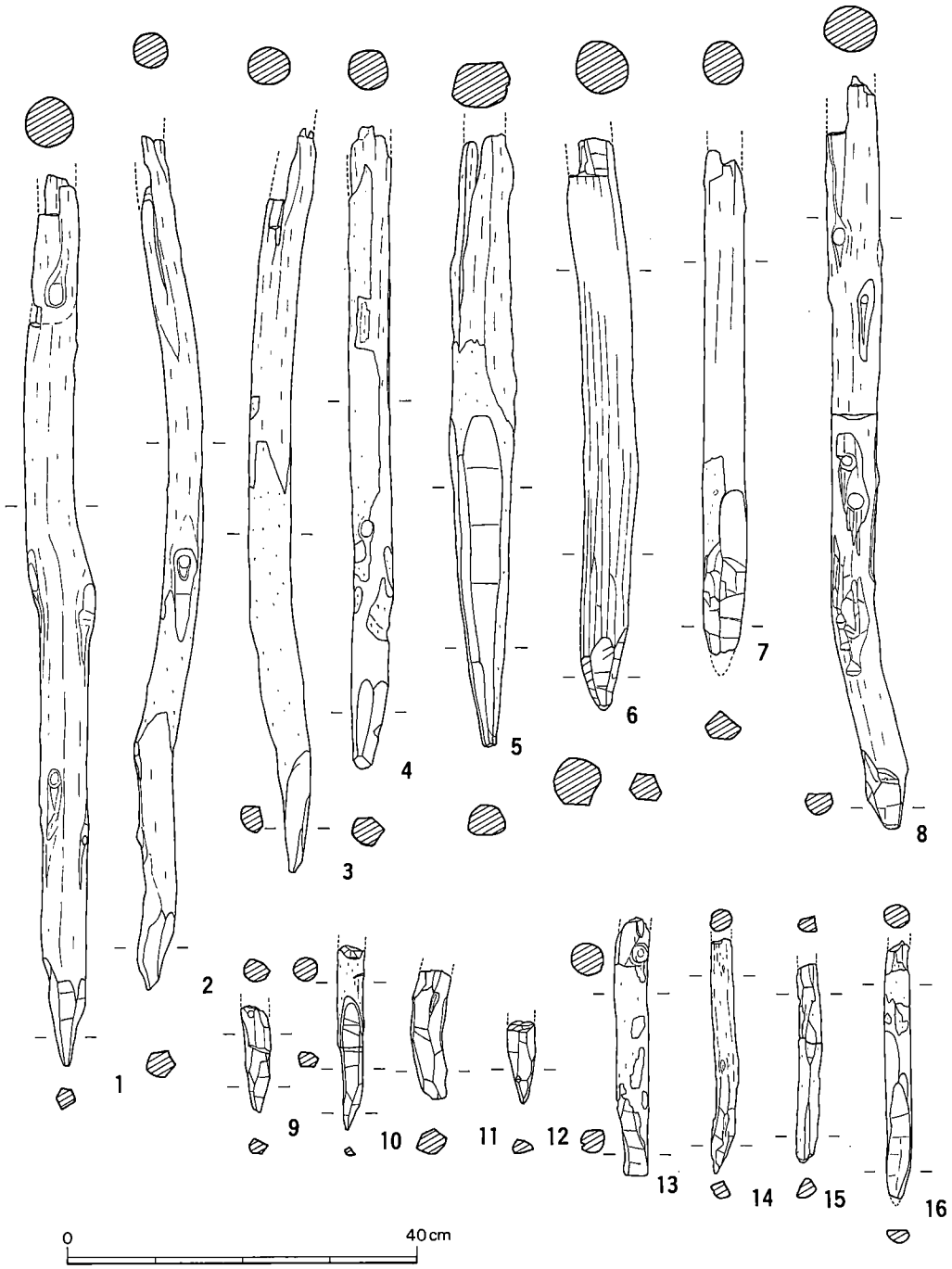
北側杭列は，北部落込みの大溝1と大溝2の分岐点（B13区）に位置する。大溝1に対して接続する状態を呈する杭列と，大溝2に対して直交する杭列の二者が存在する。大溝1に接続する杭列は，上部が欠損するものの，長さ60～110cm，径6cm程の太めの杭であった。また，北部落込みの埋土である暗青灰色粘微砂中に打ち込んでおり，先端が地山まで達しているのは数本にすぎなかった。これは，北部落込みがある程度埋まった段階において，杭が打込まれたことを意味している。

大溝2に直交する杭列は，長さ30～60cm，径3cm程の細めの杭で，地山まで打込んであった。また，杭列の下部には，柱状の加工木や自然木4本を横木として渡してあった。さらに，大溝2が北部落込みに接続する箇所（大溝2に直交する杭列の上部及びその付近）は，青灰色粘土と黒色粘土が交互に堆積しており（第39図の土層図参照），人為的に埋められた状況であり，大溝1がそれを切っていた。

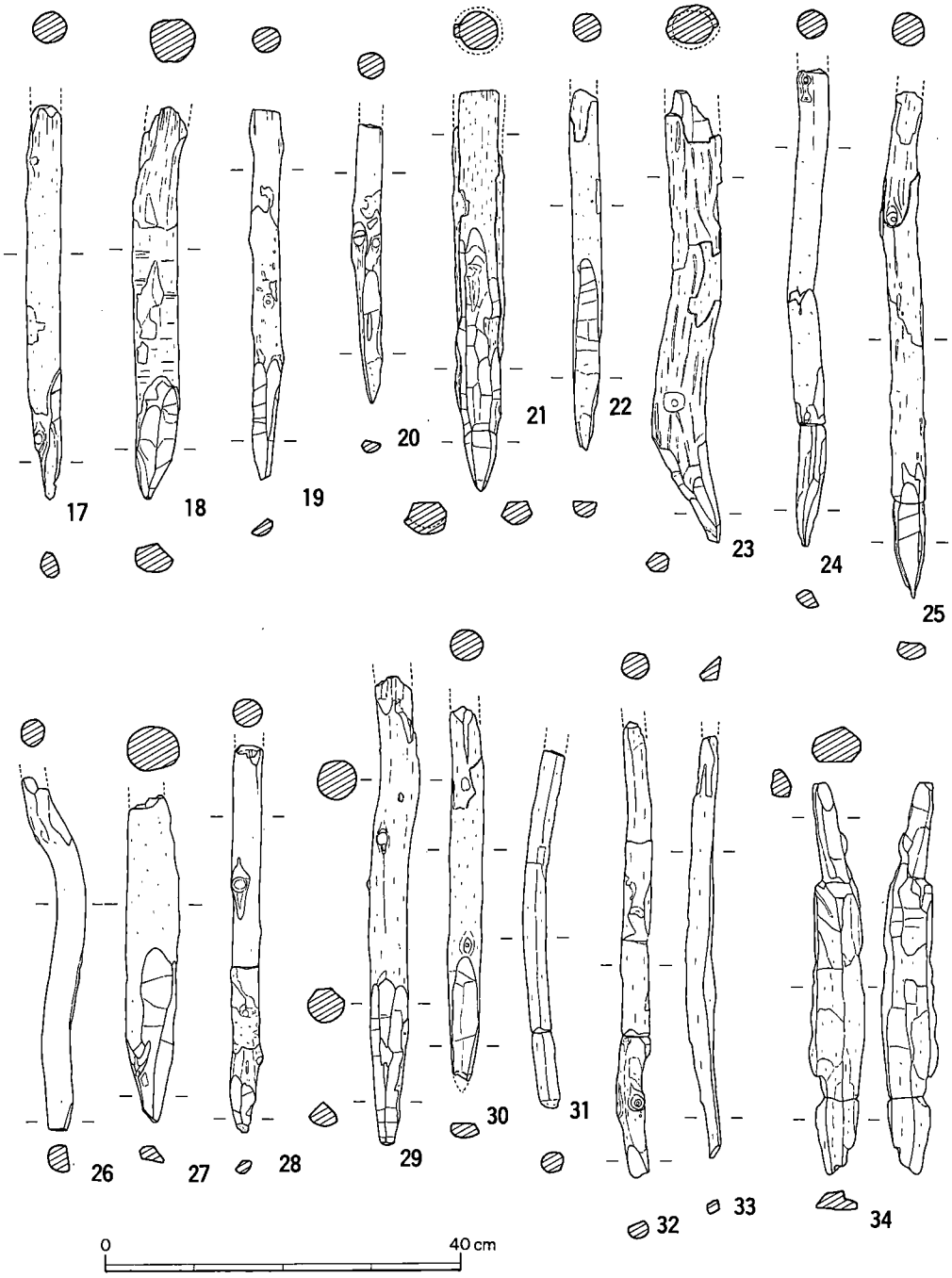
つまり，大溝1を掘削した際に，大溝2の北端部を埋めており，大溝2に直交する杭列は，その根固めのために打込まれたものと考えられる。

杭（図版15～18，第40・41・43，表4）1～8・21・23・29・35～39・47・48は，大溝1に接続する杭である。1が最も長く，現存長100.7cm，径5.5cm，加工部長12.4cmで全面（5面）カットしている。全体として（上部は欠損するが），径6cm程の自然木を60～100cm程の長さに切断して，先端部を2～4面程カットして杭としている。

9～20・22・24～28・30・32・34・40～44・46・49・50は，大溝2に直交する杭である。24が最も長く，現存長59.0cm，径3.3cm，加工部長11.0cmを測り，3面カットしている。全体として（上部は欠損するが），径3～4cm程の自然木（枝の可能性も有る）を40～60cm程の長さに切断して，先端部を1～2面程カットして杭としている。19はほぼ完形品で，長さ40.9cm，径3.1cm，加工部長19.3cmを測る。先端部は2面カットしており，上部は鋸で切断した



第 40 図　大溝 2 出土杭実測図①（1/8）



第 41 図　大溝 2 出土杭実測図②（1/8）

ような形跡がある。また，全体的に先端部のカットは鋭利な刃物によってなされた感がある。詳細は，杭の観察表を参照されたい（遺構図の杭の番号は，実測図と対応しない）。

南側杭列（図版５，第42図）

南側杭列は，大溝２南端（Ｄ２区とＣ３区の一部）に位置する。大溝２に対して直交する状態を呈する杭列であり，上部が欠損するものの，長さ80～140cm，径８cm程の太めの杭を５m余りの長さに渡って，30本あまりの杭を10～40cmの間隔で打込んでいた。また，70cm程の横木を２本渡している箇所には，厚さ10cm程の植物遺体が認められた。杭列中に自然石が２個あるが，意識的にそこに置かれたものかは不明。杭の先端は，地山に40～60cmも達しており，上部は欠損するものの，大溝２の肩部からは40cm程下がっており，杭列自体は大溝２の下層中に存在することになる。

南側杭列は，北側杭列の大溝２に直交する杭列とは異なる機能を有し，支流を一旦塞き止め他へ流す施設－井堰－と考えられる。一旦塞き止められた水はどこへ流れるかと言うと，支流３が水路の役目を果たし，大溝１側へと水流を導くと考えられる。

ここで問題となるのは，井堰が構築された時期であり，

①弥生時代には，大溝２本流が存在するのみで，大溝２に井堰を設ける必要性がないこと。

②支流１と大溝１とは，ほぼ同時期で併存する可能性があること。

③支流３は，大溝１に切られていること。

④支流２の時期には，大溝１は埋没していること。

以上のことから，井堰は支流１の時期に構築されたと考えられる。その後，支流３は埋められ，井堰の機能は必要ではなくなり，支流３の時期にはほぼ埋まってしまったものと考えられる。

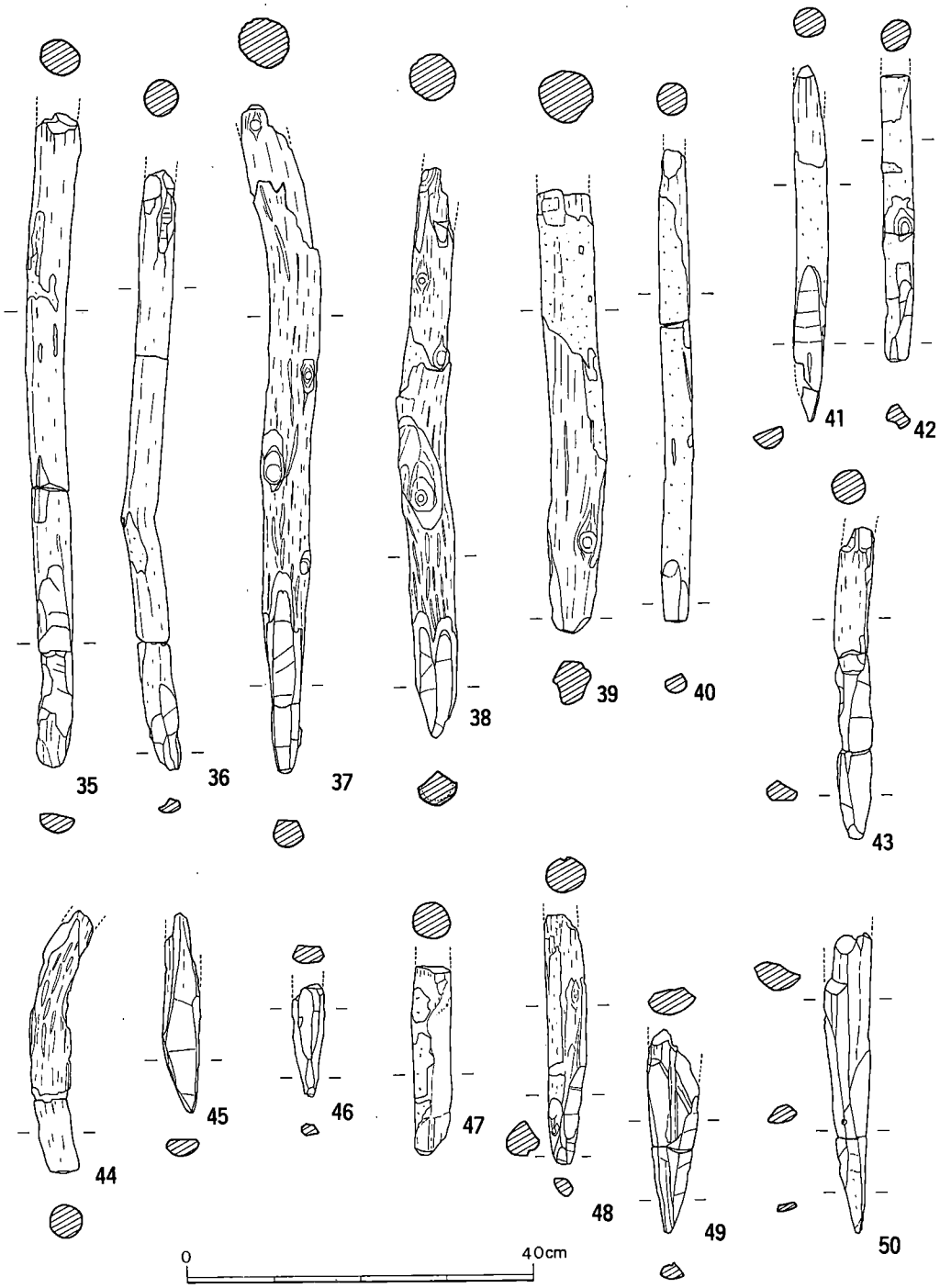
杭（図版15～18，第43～46図，表４）31・45・51～75・77～81・86が南側杭列である。51が最も長く，現存長137.9cm，径5.8cm，加工部長14.6cmで２面カットしている。全体として（上部は欠損するが），径８cmの自然木を70～140cm程の長さに切断して，先端部を２～５面程カットして杭としている。枝葉側をカットして尖らせている例が多いが，根っこ側を尖らせている例も数本存在する。枝葉は，カットしている。56は完形品で，長さ88.9cm，径11.0cm，上下両方をカットしているが鋭くない。材質は，シイである。

支流１北端杭列（第５図）

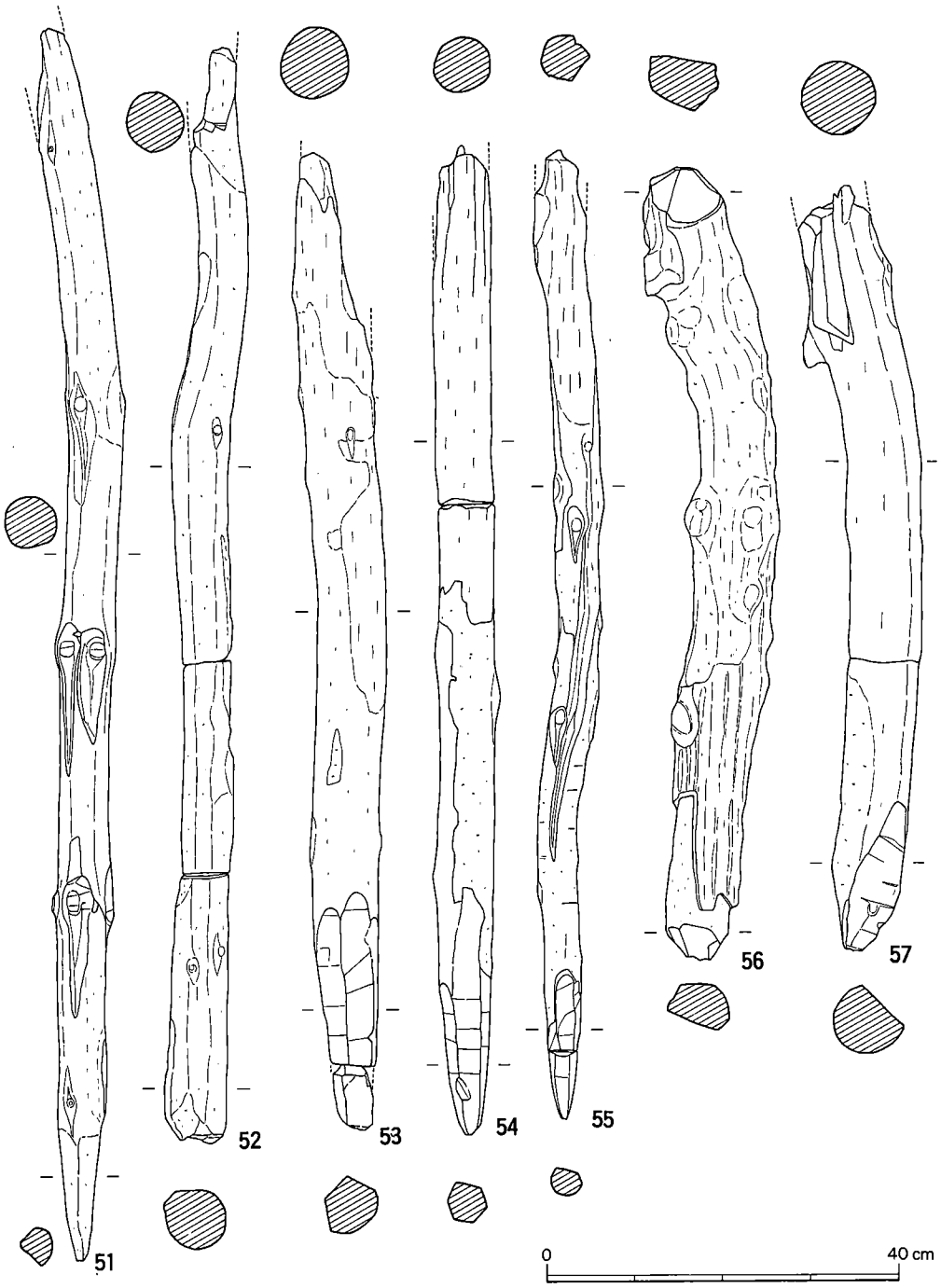
Ｄ13区に位置し，支流１に接続する形態をとり，両岸に５～７本あまり打込まれていた。杭は，先端部だけ残すものから50cm程の長さを測るものまであり，全体的に残存状態は悪い。

また，支流１延長線上で北部落込み中にも杭が打込まれていたが，壁面の崩落とともに消失

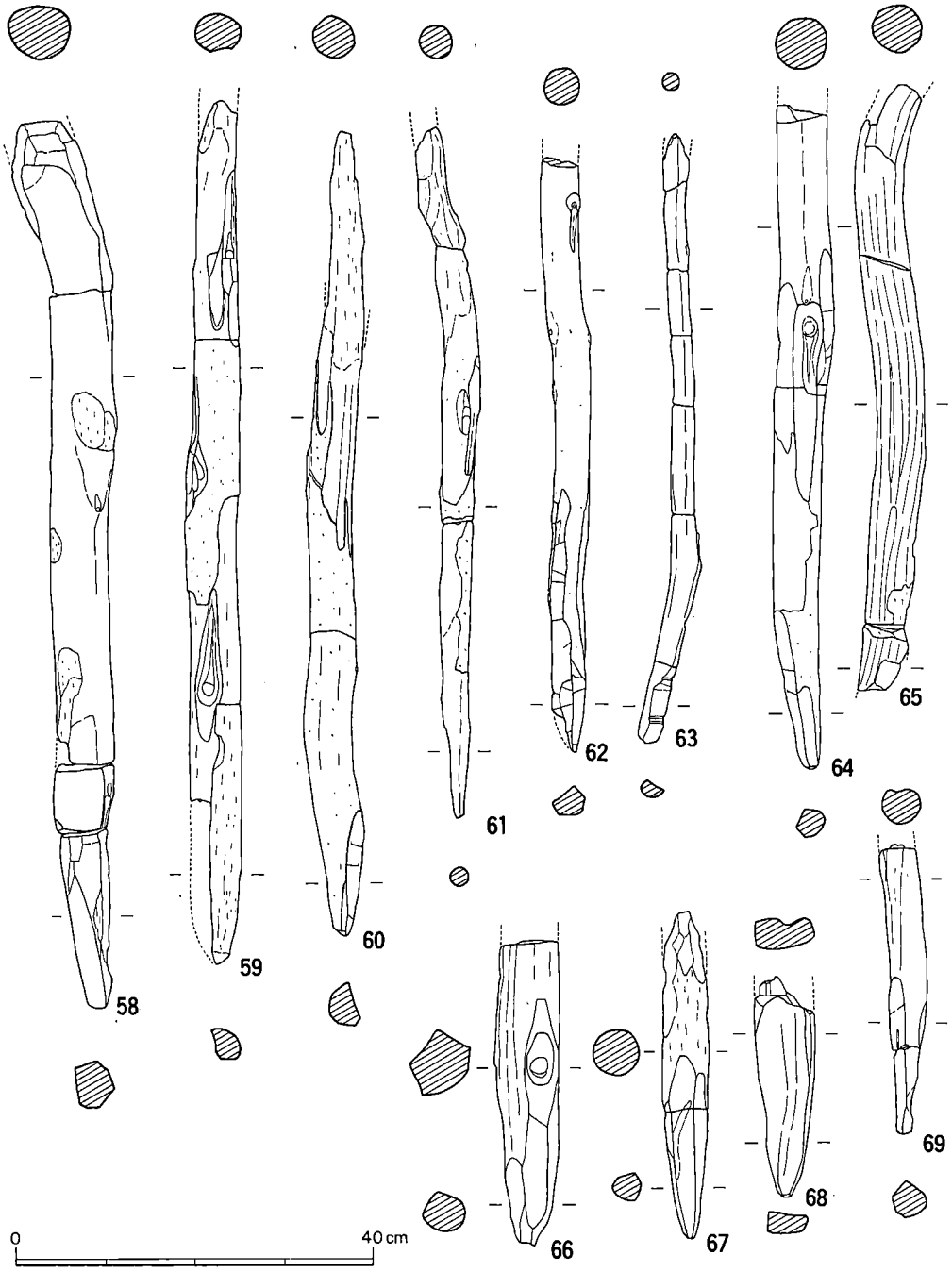
第 42 図　南側杭列実測図（1/40）



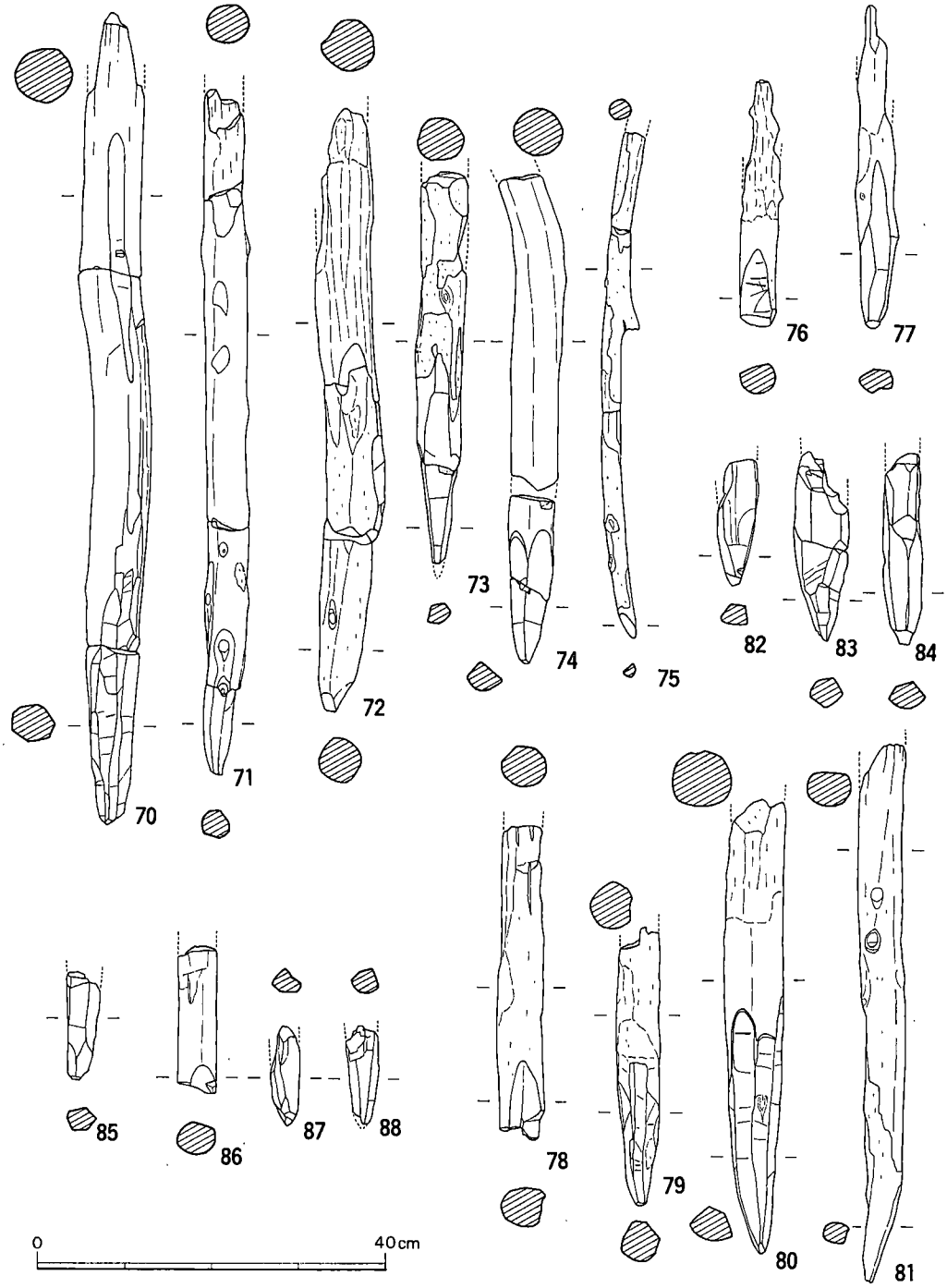
第 43 図　大溝 2 出土杭実測図③（1/8）



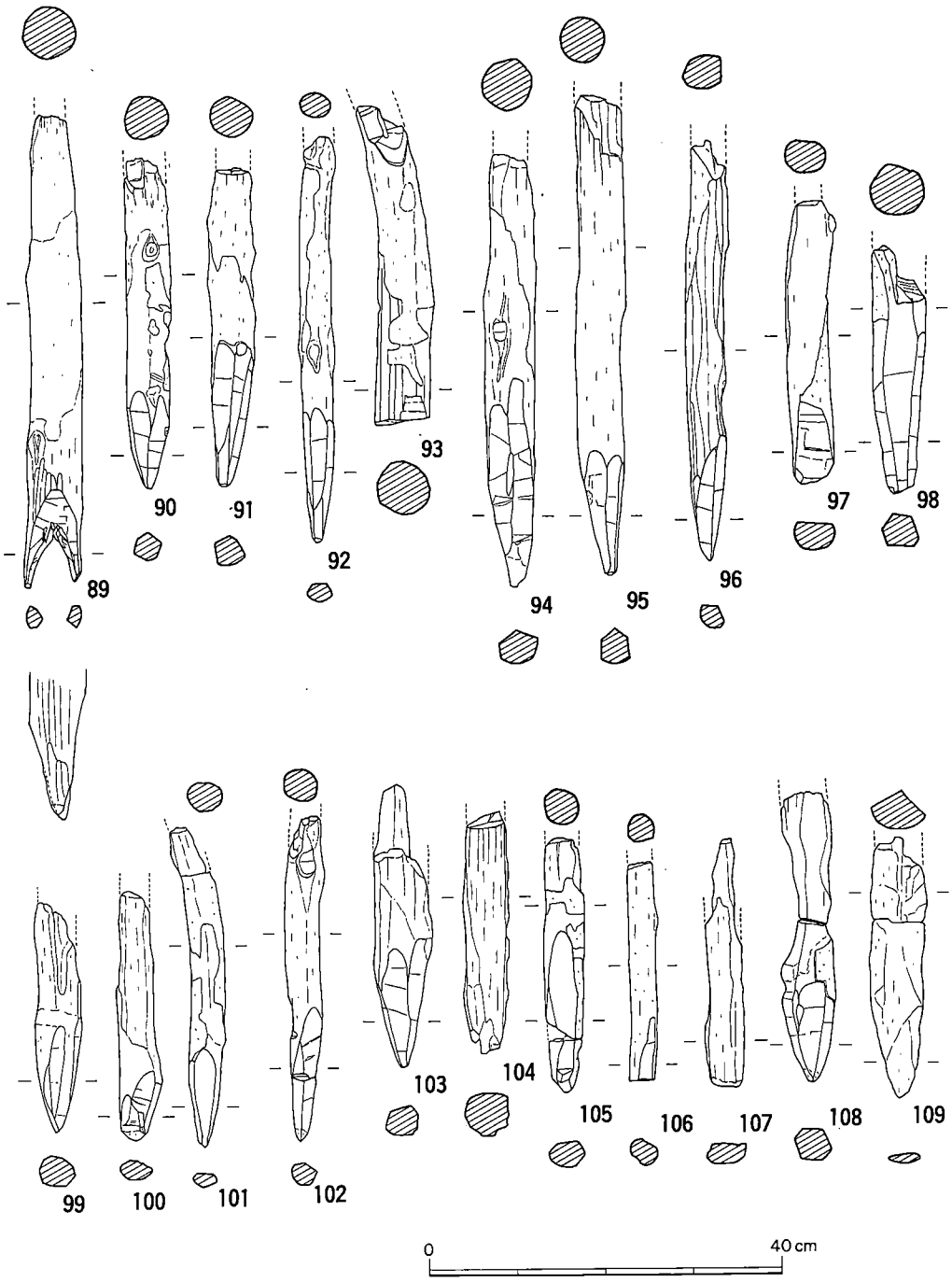
第 44 図　大溝 2 出土杭実測図④ (1/8)



第 45 図　大溝 2 出土杭実測図⑤（1/8）



第 46 図　大溝 2 出土杭実測図⑥ (1/8)



第 47 図　大溝 2 出土杭実測図⑦（1/8）

した。

杭（図版19，第47図，表４）76・82・85・87・91・92・95・97～100・105～107は，支流１北端杭列である。95は残存長53.6cm，径5.2cm，加工部長14.0cmを測り，枝葉側を４面カットして杭としている。材質はタブノキである。（小田）

表４　大溝２出土　杭一覧表

（単位cm）

No	杭列番号	残存長	加工部長	径	カット面数	備考	材質
1	北側杭列 41	100.7	12.4	5.5	5	先端部は全面カット 天側部分的カット、枝葉カット	
2	〃 40	96.5	9.4	4.3	3	天側部分的カット、枝葉カット	フサザクラ
3	〃 50	83.8	13.8	4.8	3	天側部分的カット、枝葉カット	
4	〃 55	72.3	10.2	4.8	3	天側部分的カット	
5	〃 46	68.8	36.8	7.5	4	天側部分的カット	サカキ
6	〃 48	66.0	14.2	6.0	5	天側部分的カット、外皮調整カット	カシ
7	〃 36	58.1	19.2	4.9	2	地側部分的カット	カシ
8	〃 44	86.8	7.0	5.9	4	天側部分的カット、枝葉カット・外皮調整カット	イヌガヤ
9	〃 14	12.3	12.0	3.0	5	先端部のみ残存、天側カット、枝葉カット	
10	〃 21	21.3	15.3	3.0	4		
11	〃 18	14.8	11.7	3.8	4	先端部のみ残存	
12	〃 17	9.3	9.3	3.1	6	先端部のみ残存、全面カット	
13	〃 28	29.1	7.3	3.7	3	天側部分的カット	
14	〃 27	26.3	11.1	2.7	2		
15	〃 9	22.2	22.2	2.7	5	全面カット	
16	〃 8	29.0	14.1	3.0	2		
17	〃 23	43.6	14.3	3.8	3	天側部分的カット、枝葉カット	
18	〃 26	43.4	13.6	5.1	2	地側部分的カット、枝葉カット	
19	〃 25	40.9	13.9	3.1	2	天側部分的カット、枝葉カット　上部は切断	
20	〃 6	30.6	14.6	3.0	2	天側部分的カット、枝葉カット　上部は切断	
21	〃 35	44.3	25.1	5.6	3	天側部分的カット、枝葉カット　上部は切断	
22	〃 4	39.8	21.0	3.2	1	片面カット	
23	〃 38	51.5	12.3	6.0	7	天側部分的カット、先端部全面カット	
24	〃 13	59.0	11.0	3.3	3	天側部分的カット、枝葉カット	
25	〃 11	57.2	13.2	3.8	3	天側部分的カット、枝葉カット	
26	〃 20	40.3	3.0	3.3	1	天側部分的カット、先端部は切断のまま使用	
27	〃 32	37.4	20.2	5.8	6	先端部全面カット	
28	〃 22	44.1	6.4	3.2	2	天側部分的カット、枝葉カット	
29	〃 34	52.2	18.7	4.5	2	天側部分的カット、枝葉カット	
30	〃 3	41.9	14.1	3.7	2		
31	南側杭列 47	40.0		2.6		先端部磨滅	

32	北側杭列 12	51.0	3.7	3.1	1	天側部分的カット、枝葉カット	
33	南側杭列 9	47.2				天側カット	
34	北側杭列 10	44.0		6.0			
35	〃 54	74.6	23.2	4.8	1	天側部分的カット	
36	〃 43	68.4	9.8	3.8	3	天側部分的カット、枝葉カット	
37	〃 37	70.1	15.8	5.8	3	天側部分的カット、枝葉カット	
38	〃 47	65.1	14.6	5.8	2	天側部分的カット、枝葉カット	シイノキ
39	〃 42	50.7	9.3	6.3	1	天側部分的カット、枝葉カット 先端部は磨滅顕著	
40	〃 24	54.8	7.1	3.7	2	天側部分的カット、先端部は切断のまま使用	
41	〃 1	40.4	17.7	3.6	1	片面カット	
42	〃 7	32.5	9.1	3.7	2	天側部分的カット、枝葉カット 先端部は切断のまま使用	
43	〃 19	35.4	21.0	3.9	5	天側部分的カット	
44	〃 16	29.9		4.8		先端部は切断のまま使用	
45	南側杭列 51	22.9	13.3		3		
46	北側杭列 5	13.2	13.2	3.6	8	先端部のみ残存、全面カット	
47	〃 51	21.4		4.4		火熱を受けた痕跡あり	クリ
48	〃 45	28.4	11.1	6.0	2	枝葉カット	
49	〃 2	23.2	23.2	6.0	3	先端部のみ残存	
50	〃 15	34.2	34.2	5.4	3		
51	南側杭列 44	137.9	14.6	5.8	2	天側部分的カット、枝葉カット	イヌガヤ
52	〃 59	122.8		6.5		地側部分的カット、先端は欠損したまま使用	カシ
53	〃 32	109.6	27.2	7.9	3	天側部分的カット、枝葉カット	ミズキ属
54	〃 28	111.0	22.8	6.4	6	天側部分的カット、枝葉カット　全面カット	マンサク
55	〃 35	108.7	17.0	5.0	2	両端ともカット、天側を埋めていた	
56	〃 57	88.9	地側4.1 天側6.8	11.0	地側3 天側2		シイノキ
57	〃 58	85.8	16.8	8.6	1	天側部分的カット、天側にはホゾ状の溝あり	シイノキ
58	〃 26	98.8	20.0	7.0	5	天側部分的カット、枝葉カット	ガマズミ属
59	〃 23	95.8		6.1		地側カット、先端は磨滅顕著	
60	〃 19	87.6	14.2	5.5	3	枝葉・外皮カット、先端は磨滅顕著	
61	〃 53	76.5		3.9		枝葉カット、先端は磨滅顕著	
62	〃 24	65.8	14.8	4.2	4	天側部分的カット、枝葉カット	
63	〃 45	69.0	9.0	2.3		先端のカットは新しいものかもしれない	
64	〃 36	75.2	17.2	5.7	3	天側部分的カット、枝葉カット	
65	〃 27	73.6		5.4		先端部欠損、外皮調整カット	ミズキ属
66	〃 20	33.8	14.5	7.3	2	天側部分的カット、枝葉カット	フサザクラ
67	〃 43	36.2	20.2	5.2	3		イスノキ
68	〃 54	24.3			4	全面カット	
69	〃 49	32.3	17.3	4.3	3	天側部分的カット	
70	〃 22	91.7	28.6	7.1	7	天側部分的カット、外皮調整カット	ハシドイ

71	南側杭列 48	77.5	16.4	5.0	3	天側部分的カット、枝葉カット	ミズキ属
72	〃 41	67.1	17.8	6.5		天側部分的カット、枝葉カット 先端部は磨滅顕著	
73	〃 10	44.2	23.8	5.4	3	天側部分的カット	
74	〃 17	54.0	15.2	5.7	2	天側部分的カット、中間部分なし	
75	〃 18	57.1	3.3	2.6	1	天側部分的カット、枝葉カット	
76	杭 T	28.5	8.3	4.2	1	天側部分的カット、先端部は切断のまま使用	
77	南側杭列 52	36.5	19.0		4	天側部分的カット	
78	〃 8	35.9	14.1	5.2		先端部は切断のまま使用	
79	〃 40	31.7	17.1	4.9	7	天側部分的カット	
80	〃 39	51.8	29.2	6.9	4	天側部分的カット	アワブキ属
81	〃 37	61.2	21.8	5.1	3		
82	杭 X	14.8			5	全面カット	
83	杭 H	22.1	13.4		6		
84	杭 ⓑ	22.2	14.1	4.6	3		
85	杭 S	12.5			6	先端部のみ残存	
86	南側杭列 60	16.9		4.4		両端欠失	
87	杭 Q	11.6				全体的に磨滅顕著	
88	杭 J	11.7			4	先端部のみ残存	
89	杭 B	52.7	14.6	6.2		先端部は二又、枝葉カット	クロバイ
90	杭 K	36.9	10.0	5.1	5	天側部分的カット	
91	杭 M	35.4	16.3	5.0	4	天側部分的カット	
92	杭 W	45.1	14.9	3.5	3	天側部分的カット	
93	杭 C	35.6		6.2	16	先端部は切断のまま使用、外皮調整カット	
94	杭 E	48.3	23.3	5.8	3	天側部分的カット、枝葉カット	
95	杭 U	53.6	14.0	5.2	4	天側部分的カット	タブノキ
96	杭 G	47.1	14.1	4.5	4	天側部分的カット、外皮調整カット	
97	杭 Z	31.6	9.3	4.9	1	地側カット	
98	杭 N	27.8	17.9	6.1	6	全面カット	
99	杭 R	25.8	17.5	5.4	9	全面カット	
100	杭 P	28.0	7.8		3		
101	杭 ⓓ	36.1	11.0	4.0	3	天側部分的カット	
102	杭 L	36.5	14.9	4.0	3	天側部分的カット、枝葉カット	
103	杭 O	31.7	14.2	6.5	4		
104	杭 A	27.2				両端とも欠失	
105	杭 Y	28.6	18.1	4.6	4		
106	杭 ⓐ	24.7	6.9	3.0	1	天側部分的カット	
107	杭 ⓒ	27.9	21.0		1	先端部は欠損したまま使用	
108	杭 I	32.8	11.3		6	天側部分的カット、全面カット	
109	杭 D	29.4		7.8	2	丸木の1/3本分	

小溝1

大溝1と一部重複する溝で，大溝1の上層を切り込んでいる。B1区からA3区・B3区の境目を通り，A7区までは直線的な流路で，そこから東北に蛇行・屈曲する。

幅0.3～0.5m，深さ0.1～0.3mのU字形断面を呈す溝で，黄色粘土や白色粘土粒まじりの暗灰色土ないし黒茶褐色の埋土が詰まっている。なお大溝1の東肩部は，黄色粘土・白色粘土が固まっているものの，溝に平行して幾つもの亀裂を生じていて，この亀裂に上部の黒色土・暗灰色土が入り込んだりしたものがあり，溝と区別し難い。黒色土等を取り除きながら，溝と亀裂の区別をしたが，確実に溝といえるものは小溝1のみであった。溝底の高さからして北から南へ流下する溝であり勾配は緩い。

埋土中から，弥生土器・土師器片が出土したものの，図示しうるような資料はない。

小溝2

大溝1と大溝2の間を流れる小溝で，大溝2の東肩部から1～2mの距離に平行している。南端部は大溝2の支流3と重複しているが，前後関係ははっきりしない。おそらく支流3に流れ込んでいたものと思われる。その北側では井戸1の西上縁部を僅かに切り，B8区まで延びている。幅0.2～0.4m，深さ0.15mの断面U字形を呈し，溝内には黒色土が堆積するものの遺物の出土はない。

小溝3

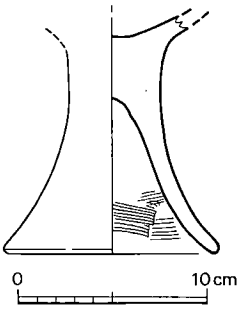
大溝2の西方を流れる溝。D13区とE13区の境目から南へ流れ，E12区からは南西方に，更にH8区からはまた南方へと流れるが，H4区の南西隅部で消える。E11区ではC12区方向から西南西に流れる支流と合わさる。

幅0.5～0.7m，深さ0.3～0.4mの断面U字形の溝で，白色粘土粒を含む暗緑灰色粘性土が詰まり，底面近くには黒色粘土が堆積していた。ただ，北東方向に延びる支流はやや浅めになり，暗青灰色～暗緑灰色粘性土のみで，黒色土は堆積しない。

この溝は，大溝2の支流1，西側の落ち込み堆積土を切り，F10区からH7区にかけての部分で暗茶褐色・緑灰色・青灰色土が入り混じって堆積する落ち込み部分も切っている。ただし大溝2全体を覆う黒色土よりは先行するものの大溝2堆積土との前後関係を明らかにしえなかった。小溝3では，溝下部に弥生土器片を含むものの，遺物の出土は極めて少ない。前述の落ち込み部分では下部で弥生土器片がやや多めに出土したが，G8区の肩部よりやや下がった位置から，高台のある土師器底部小片が出土している。小溝3は，これらの溝・落ち込みの埋没後の溝ということになるので，高台付土師器の時期より新しく，大溝3上面の時期との間におく以上の判断をしえない。

小溝4

調査区の南西部に検出された溝で，東西方向の流路をとる。大溝2及び西側落ち込みの堆積土よりも先行する溝であり，両者に切られる。霜柱などの影響で西側落ち込みの肩部がかなり下がってしまった為に，もとよりさほど深くはなかった小溝が，西部で消失してしまったが，遺構検出時には長さ11m強，幅0.6～0.8mを有しており，深さは東部で0.6mを越す。断面形はU字形を呈す。溝内には黒色土が堆積しており，弥生土器片が若干出土した。また途中から浅く細い溝が南西方向に延びる。この支流からは遺物は出土しなかった。 (小池)



第48図 小溝4出土土器実測図 (1/4)

土　器 (第48図) 高杯の脚部破片で，脚径11.5cmを測る。脚部はラッパ状に開き，端部は丸い。調整は，外面がヘラミガキ，内面はハケ目，端部はヨコナデである。胎土は，長石・石英・金雲母粒を含む。焼成は良く，内外面とも淡黄白色を呈す。時期は，弥生時代後期に属するか。

表5 大溝1出土弥生土器観察表

単位はcm (R)は反転復原

番号	地区	器種	器高	口径	底径	胎土	色調	調整	備考
1	A11区	甕	3.0 (残)		5.1	長石・石英	内)灰黄色 外)紫灰色	内)ナデ 外)ハケ目，ユビオサエ	・ミニチュア品 ・外底部に黒斑
2	A10区	壺	3.4 (残)		6.5 (R)	長石・石英	内)黒灰色 外)淡灰黄色	内)ナデ 外)ナデ	
3	A10区	壺	3.5 (残)		7.0 (R)	長石・石英 (2～3mm大)	内)緑灰色 外)褐灰色	内)ナデ 外)磨滅により不明	
4	B4・5区	壺	6.1 (残)			長石・石英	内)明淡黄色 外)黒灰色	内)ハケ目→ナデ 外)タタキ→ナデ	
5	A11区	壺	6.1 (残)	13.0 (R)		長石・石英	内)灰色 外)灰色	内)ハケ目→ミガキ 外)ハケ目	・外面にスス遺存
6	A7区	甕				長石・石英・金雲母	内)黄灰色 外)黄灰色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ナデ	
7		甕				長石・石英	内)黄褐色 外)黄褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
8		甕				長石・石英・金雲母	内)褐色 外)褐色	口)ヨコナデ	
9	A9区	甕	5.0 (残)		9.0 (R)	長石・石英・金雲母	内)暗灰色 外)淡黄色	内)ナデ 外)ハケ目→ナデ	
10	A11区	甕	6.1 (残)		8.0 (R)	長石・石英・金雲母	内)黄褐色 外)黄褐色	内)ナデ 外)ハケ目	
11	A・B4区	高杯	6.0 (残)	12.9		長石・石英 (2mm大)	内)黄褐色 外)淡黄褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ナデ	

A地区の調査

12	A 7 区	器台	9.0 (残)			長石・石英・金雲母	内)淡黄色 外)淡黄色	内)ナデ 外)ハケ目	
13	A 6 区	甕	5.2 (残)			長石・石英・金雲母	内)黄褐色 外)黄褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	・外面にスス遺存
14	B・C 2 区	壺	7.6 (残)		6.9	長石・石英・金雲母 (2 mm大)	内)灰白色 外)灰白色	内)ナデ　外)ハケ目 (9～10条/cm)	・外底部に黒斑
15	A12区	高杯	8.0 (残)			長石・石英	内)灰黄色 外)灰黄色	内)ハケ目→ナデ 外)ミガキ	
16	A・B12区	鉢	7.9	17.2 (R)		長石・石英・金雲母 くさりれき	内)淡黄褐色 外)灰色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ケズリ	
17	A・B12区	台付鉢	9.1 (残)	19.0 (R)		長石・石英	内)淡黄色 外)淡黄色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ケズリ	
18	A 6 区	蓋	1.8 (残)	13.0 (R)		長石・石英	内)灰褐色 外)灰褐色	内)ナデ 外)ナデ	・穿孔有り

表 6　大溝 2 出土弥生土器観察表

単位はcm　(R)は反転復原

番号	地　区	器　種	器　高	口　径	底　径	胎　　土	色　　調	調　　整	備　　考
1	C 4 区	壺	5.7 (残)	21.4 (R)		長石・石英・金雲母	内)黄褐色 外)黄褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
2	C 4 区	壺	3.9 (残)	19.2 (R)		長石・石英・金雲母	内)茶褐色 外)暗茶褐色	口)ハケ目→ナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
3	C 5 区	壺	7.6 (残)	20.5 (R)		長石・石英・金雲母 くさりれき	内)黄灰色 外)黄灰色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ハケ目	
4	C 4 区	壺	27.6 (残)			長石・石英	内)黄褐色 外)暗黄褐色	内)ハケ目→ナデ 外)ハケ目	・胴中位に黒斑
5	C 5 区	壺	13.4 (残)	13.2 (R)		長石・石英・金雲母	内)明黄褐色 外)灰黄色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ハケ目	
6	C 4 区	甕				長石・石英	内)黄褐色 外)黄褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
7	C 5 区	鉢	11.2	23.6 (R)	6.1	長石・石英・くさりれき(2 mm大)	内)灰褐色 外)灰白色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ナデ	・胴中位～底部に黒斑
8	B11区	壺	11.3	16.6 (R)		長石・石英 (2 mm大)	内)灰褐色 外)暗黄褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ナデ	・黒斑
9	C 5 区	支脚	10.1	11.0 (R)	12.0 (R)	長石・石英 (2 mm大)	内)灰黄色 外)暗黄灰色	口)ヨコナデ 内外共)ユビオサエ	・雑なつくり
10	D 2 区	椀	6.9	8.0 (R)		長石・石英 (2～3 mm大)	内)灰黒色 外)灰白色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ユビオサエ	・手捏ね土器
11	C 5 区	高杯	6.0 (残)	31.6 (R)		長石・石英・金雲母 くさりれき	内)明褐色 外)淡褐色	口)ヨコナデ 内)ミガキ　外)ミガキ	
12	C 5 区	甕	8.4 (残)	42.0 (R)		長石・石英・金雲母	内)黄褐色 外)暗黄灰色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ハケ目	
13	C 5 区	甕	8.3 (残)	48.0 (R)		長石・石英	内)明黄灰色 外)暗黄灰色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	・口縁部に黒斑
14	D 5 区	甕	4.5 (残)	48.8 (R)		長石・石英	内)白黄色 外)黄褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ナデ	

15	D5区	甕	5.3 (残)	50.0 (R)		長石・石英	内)明茶褐色 外)暗茶褐色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ハケ目	
16	C5区	甕	9.6 (残)	22.2 (R)		長石・石英	内)褐色 外)褐色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ハケ目	
17	C6区	甕	11.6 (残)	21.0 (R)		長石・石英	内)黄褐色 外)黄褐色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ハケ目	
18	C5区	甕	16.7 (残)	24.2 (R)		長石・石英	内)灰褐色 外)褐色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ハケ目	・頸部～胴部にスス遺存
19	B12区	甕	10.9 (残)	24.2 (R)		長石・石英・金雲母 (2mm大)	内)黒茶色 外)灰褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	・口底部にスス遺存
20	C4区	甕				長石・石英 (2mm大)	内)灰褐色 外)緑灰色	内)ナデ，ユビオサエ 外)剝離により不明	
21	C4区	甕	2.8 (残)		8.9 (R)	長石・石英	内)明褐色 外)暗褐色	内)ハケ目 外)ナデ	
22	C4区	甕	8.8 (残)	31.0 (R)		長石・石英・金雲母	内)淡黄褐色 外)暗黄褐色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ハケ目	
23	C4区	壺	9.2 (残)		4.7 (R)	長石・石英・金雲母 くさりれき	内)灰白色 外)緑灰色	内)板ナデ 外)ハケ目→ナデ	・黒斑有り
24	C5区	甕	6.6 (残)		7.3	長石・石英	内)黄灰色 外)暗黄灰色	内)ハケ目 外)ハケ目	
25	D4区	壺	3.8 (残)			長石・石英 (2mm大)	内)灰白色 外)紫灰色	内)磨滅のため不明 外)ユビオサエ	・黒斑有り
26	E12区	甕	7.2 (残)		5.2 (R)	長石・石英 (2mm大)	内)灰褐色 外)緑灰色	内)ハケ目 外)ハケ目	・外面にスス遺存
27	C10区	壺	7.5 (残)			長石 (2～3mm大)	内)灰白色 外)	内)剝離により不明 外)ハケ目(4～5条/cm)	・黒斑有り
28	C・D6区	壺	8.8 (残)	20.0 (R)		長石・石英 (3mm大)	内)暗灰褐色 外)赤褐色	口)ナデ 内)ハケ目　外)ハケ目	
29	C4区	壺	5.9 (残)	16.8 (R)		長石・石英 (1～2mm大)	内)緑褐色 外)緑灰色	口)ヨコナデ 内)ミガキ　外)ハケ目	
30	C・D6区	甕	6.5 (残)	17.6 (R)		長石・石英 (1～2mm大)	内)緑褐色 外)明灰褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ミガキ	
31	C・D6区	甕	11.1 (残)	22.0 (R)		長石・石英・金雲母 (1～2mm大)	内)灰褐色 外)茶灰色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	・外面は2次焼成により赤変
32	C5区	甕	6.2 (残)	29.0 (R)		長石・石英	内)明灰色 外)明灰色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
33	C10区	甕	8.0	29.4 (R)		長石・石英 (1～3mm大)	内)灰白色 外)灰白色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
34	C4区	甕	12.6	16.6 (R)	6.5 (R)	長石・石英・金雲母 (2～3mm大)	内)黄褐色 外)灰白色	口)ヨコナデ 内)ハケ目　外)ナデ	・底部に黒斑有り
35	C9区	高杯	4.0 (残)	19.8 (R)		長石・石英・金雲母 (2～3mm大)	内)紫灰色 外)緑灰色	口)ヨコナデ 内)ミガキ　外)ミガキ	
36	D5区	甕	7.0 (残)		8.0 (R)	長石・石英	内)黒灰色 外)黒白色	内)ハケ目 外)ハケ目	
37	C4区	壺	6.4 (残)		6.6	長石・石英 (2～5mm大)	内)黄褐色 外)褐灰色	内)ハケ目(5条/cm) 外)ハケ目(5条/cm)	・外底面に植物圧痕有り
38	C5区	甕	6.5 (残)		7.0	長石・石英 (2mm大)	内)暗灰褐色 外)黄褐色	内)ナデ 外)ハケ目(11条/cm)	
39	C9区	甕	6.8 (残)		8.0 (R)	長石・石英・金雲母 (1～3mm大)	内)緑褐色 外)緑灰色	内)剝離により不明 外)ハケ目(7～8条/cm)	
40	D6区	甕	7.3 (残)		8.6	長石・石英 (2～3mm大)	内)灰白色 外)灰白色	内)ナデ 外)ハケ目(5条/cm)	

A地区の調査

41	D 6 区	甕	5.3 (残)			長石・石英 (2 mm大)	内)灰褐色 外)緑灰色	内)剝離により不明 外)ハケ目(5～6条/cm)	
42	C 5 区	甕	5.1 (残)		6.2	長石・石英 (1～2 mm大)	内)紫灰色 外)灰白色	内)ナデ 外)ハケ目	
43	D 6 区	甕	4.6 (残)		7.0	長石・石英・金雲母 (2～3 mm大)	内)灰白色 外)灰褐色	内)ナデ 外)ハケ目(9条/cm)	
44	D 6 区	甕	5.8 (残)		5.9	長石・石英・金雲母 (2 mm大)	内)緑褐色 外)灰褐色	内)ナデ 外)ハケ目(4条/cm)	
45	C 4 区	甕	11.1 (残)		6.6 (R)	長石・石英	内)灰黄色 外)白黄色	内)ナデ 外)ハケ目	
46	C・D 6 区	甕	2.7 (残)		8.6 (R)	長石・石英 (2 mm大)	内)灰白色 外)黄白色	内)ハケ目 外)ナデ	
47	C 5 区	甕	2.7 (残)		6.1	長石・石英 (2～3 mm大)	内)灰褐色 外)黄褐色	内)ナデ 外)板ナデ	
48	C 5 区	甕	2.3 (残)		6.0	長石・石英 (2～3 mm大)	内)灰青色 外)灰青色	内)ナデ 外)ハケ目	
49	C10区	甕	2.8 (残)		6.6	長石・石英 (2～3 mm大)	内)灰白色 外)暗灰色	内)ナデ 外)ハケ目	
50	C 5 区	甕	4.4	6.9 (R)	3.3 (R)	長石・石英・金雲母 (2 mm大)	内)灰褐色 外)灰白色	口)ヨコナデ 内外共)ユビオサエ	・ミニチュア品
51	C 5 区	椀	5.4	9.0 (R)	2.4 (R)	長石・石英・金雲母	内)黄褐色 外)黄褐色	内)ナデ 外)ナデ	
52	C 4 区	高杯	6.5 (残)		10.8	長石・石英 (1.5mm大)	内)淡黄褐色 外)黄褐色	内)ナデ 外)ハケ目→ナデ	
53	C 8 区	甕	4.0 (残)		8.0 (R)	長石・石英	内)茶褐色 外)茶褐色	内)ナデ 外)ナデ	
54	C 5 区	椀	6.3 (残)	15.0 (R)		長石・石英	内)淡褐色 外)黒色	内)ハケ目→ナデ 外)タタキ，ケズリ	
55	D 5 区	支脚	7.3	9.5 (R)	9.1 (R)	長石・金雲母 (2 mm大)	内)淡灰緑色 外)灰褐色	内)シボリ痕 外)ナデ	
56	C 5 区	蓋	6.3 (残)		6.0	長石・石英 (1～3 mm大)	内)淡赤灰色 外)淡褐色	内)ナデ 外)ハケ目(10～12条/cm)	
57	D 2 区	壺	6.4 (残)	25.8 (R)		長石・石英 (1～2 mm大)	内)灰褐色 外)灰褐色	口)ヨコナデ 内)ミガキ　外)ミガキ	
58	D 2 区	壺	6.5 (残)	18.4 (R)		長石・石英・金雲母 (2 mm大)	内)灰色 外)暗灰色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ミガキ	
59	C・D 2 区	壺	5.0 (残)	15.3 (R)		長石・石英 (2 mm大)	内)灰色 外)暗灰色	口)ヨコナデ 内)ハケ目→ナデ	
60	D 3 区	壺	4.1 (残)	25.0 (R)	5.0 (R)	長石・石英 (1～3 mm大)	内)灰黄色 外)黄褐色	内)ナデ 外)ミガキ	
61	D 3 区	壺	6.4 (残)	31.0 (R)	8.0 (R)	長石・石英・金雲母	内)灰褐色 外)茶灰色	内)板ナデ 外)ミガキ	
62	B10区	甕	6.2 (残)	28.0 (R)		長石・石英	内)淡黄褐色 外)淡黄褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
63	B12区	甕	4.7 (残)	29.2 (R)		長石・石英・金雲母 (1～2 mm大)	内)茶灰色 外)暗褐	口)ヨコナデ	
64	B12区	甕	5.1 (残)	28.0 (R)		長石・石英・金雲母	内)黄褐色 外)黄褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	・外面にスス遺存
65	B12区	甕	4.2 (残)	29.2 (R)		長石・石英・金雲母 (2 mm大)	内)灰褐色 外)暗灰褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
66	D 3 区	甕	8.5 (残)	28.4 (R)		長石・石英・金雲母 (2 mm大)	内)灰黄色 外)暗灰褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	

67	D 3 区	甕	2.6 (残)	38.2 (R)		長石・石英	内)淡黄褐色 外)淡黄褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ	
68	C12区	甕	6.6 (残)	39.0 (R)		長石・石英	内)灰色 外)暗灰色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
69	B 9 区 C 6 区	甕	8.1 (残)	42.8 (R)		長石・石英・金雲母	内)灰褐色 外)灰褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
70	B・C11区	甕	10.1 (残)	44.6 (R)		長石・石英	内)明灰黄色 外)暗灰黄色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
71	D 5 区	甕	5.2 (残)	32.2 (R)		長石・石英 (2～3mm大)	内)茶灰色 外)茶褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
72	D 4 区	甕	3.4 (残)	26.2 (R)		長石・石英 (2～3mm大)	内)灰褐色 外)緑褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	・外面にスス遺存
73	D 3 区	甕	11.9 (残)	21.6 (R)		長石・石英	内)灰色 外)灰色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
74	D 3 区	甕	4.5 (残)	19.0 (R)		長石・石英・金雲母	内)淡褐色 外)灰褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	・外面にスス遺存
75	B12区	甕	5.2 (残)	19.4 (R)		長石・石英・金雲母	内)白黄色 外)灰黄色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
76	B・C11区	甕	10.4 (残)	36.0 (R)		長石・石英・くさりれき	内)白黄色 外)淡灰黄色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
77	C 7 区	甕	7.5 (残)	22.0 (R)		長石・石英	内)灰黄色 外)茶褐色	口)ナデ　内)ハケ目 外)磨滅により不明	
78	D 4 区	甕	16.4 (残)	34.0 (R)		長石・石英・金雲母	内)灰褐色 外)灰褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
79	D 3 区	壺	3.5 (残)		4.1	長石・石英 (1～3mm大)	内)灰白色 外)暗灰白色	内)ナデ 外)ハケ目→ナデ	・ミニチュア品 黒斑有り
80	D 3 区	甕	7.0 (残)		4.2	長石・石英 (2mm大)	内)灰褐色 外)灰褐色	内)板ナデ 外)ハケ目(6条/cm)	・ミニチュア品
81	D 3 区	甕	9.0 (残)	10.8	6.0	長石・石英	内)淡灰黒色 外)灰白色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ナデ	・ミニチュア品
82	D 4 区	椀	5.9 (残)	8.2 (R)		長石・石英	内)褐色 外)暗褐色	口)ヨコナデ 内)ナデ　外)ハケ目	
83	D 4 区	器台	8.5 (残)			長石・石英・くさりれき	内)灰色 外)暗灰色	内)ナデ 外)ナデ	
84	C 6 区	壺	4.0 (残)		9.5	長石・石英 (1～3mm大)	内)灰褐色 外)緑灰色	内)ナデ 外)板ナデ	
85	D 3 区	甕	3.3 (残)		7.9	長石・石英 (1～2mm大)	内)明灰白色 外)暗灰色	内)磨滅により不明 外)ハケ目	
86	D 2 区	甕	4.3 (残)		7.8	長石・石英・金雲母	内)赤褐色 外)赤褐色	内)ナデ 外)ナデ，ユビオサエ	
87	B12区	壺	5.5 (残)		7.3	長石・石英 (2mm大)	内)黄白色 外)明灰黄色	内)ナデ 外)ハケ目→ミガキ	
88	B12区	甕	7.7 (残)		9.5	長石・石英・金雲母 (2～3mm大)	内)暗緑色 外)暗灰色	内)ナデ 外)ハケ目，ユビオサエ	
89	D 2 区	甕	5.5 (残)		6.9	長石・石英 (2mm大)	内)緑灰色 外)灰褐色	内)ナデ 外)ナデ	
90	C 9 区	甕	5.7 (残)		5.3 (R)	長石・石英	内)黒灰色 外)灰褐色	内)ナデ 外)ハケ目	
91	D 2 区	甕	5.3 (残)		4.8	長石・石英・金雲母	内)灰褐色 外)灰褐色	内)ナデ 外)ハケ目(10条/cm)	
92	D 5 区	甕	4.5 (残)		5.3	長石・石英 (2mm大)	内)緑灰色 外)灰褐色	内)板ナデ 外)ミガキ	

A地区の調査

93	B10区	甕	3.5 (残)		6.8	長石・石英 (2～3mm大)	内)茶黒色 外)灰褐色	内)ナデ 外)ハケ目(4条/cm)	・外面にススの遺存
94	D4区	甕	6.6 (残)		5.7	長石・石英 (1～2mm大)	内)灰褐色 外)暗灰褐色	内)ナデ 外)ハケ目(6条/cm)	
95	B9区	甕	8.1 (残)		6.0	長石・石英 (2mm大)	内)灰色 外)灰白色	内)ナデ 外)ハケ目(5条/cm)	
96	D2区	甕	7.0 (残)		8.8	長石・石英 (2mm大)	内)灰黄色 外)灰褐色	内)剝離により不明 外)ハケ目(6～7条/cm)	
97	D5区	甕	6.7 (残)		7.0	長石・石英・金雲母 (2mm大)	内)紫灰色 外)緑褐色	内)ナデ 外)ハケ目(5条/cm)	
98	C9区	甕	5.5 (残)		5.7 (R)	長石・石英・金雲母 (1～3mm大)	内)灰褐色 外)緑灰色	内)ナデ 外)ナデ	・外面に黒斑有り
99	D4区	甕	1.8 (残)		6.5 (R)	長石・石英 (2mm大)	内)灰黄色 外)灰黄色	内)ナデ 外)ナデ	
100	D4区	甕	2.7 (残)		9.0 (R)	長石・石英・金雲母 (1mm大)	内)緑褐色 外)緑褐色	内)ナデ 外)ナデ	
101	D2区	甕	7.1 (残)		6.6	長石・石英・金雲母 (2mm大)	内)黄褐色 外)灰色	内)ナデ 外)ハケ目(6～7条/cm)	
102	D4区	甕	4.8 (残)		6.8	長石・石英 (1～2mm大)	内)緑紫色 外)褐色	内)ナデ 外)ハケ目(6条/cm)	
103	D5区	甕	4.2 (残)		6.9	長石・石英 (1～1.5mm大)	内)灰白色 外)灰褐色	内)ナデ 外)ハケ目(4条/cm)	・外面に黒斑有り
104	B12区	台付甕	6.2 (残)		10.7	長石・石英・金雲母 (2mm大)	内)灰褐色 外)灰褐色	内)ナデ 外)ハケ目(6～7条/cm)	
105	D3区	台付甕	6.6 (残)		11.6	長石・石英 (1～2mm大)	内)灰緑色 外)淡灰緑色	内)ナデ 外)ハケ目→ナデ	・内面にススの遺存
106	B12区	高杯	6.4 (残)		12.2	長石・石英・金雲母 (2mm大)	内)淡灰紫色 外)灰褐色	内)ユビオサエ，ナデ 外)ハケ目(5～6条/cm)	・内面に黒斑有り
107	D3区	台付椀	6.6 (残)		6.4	長石・石英 (2mm大)	内)灰緑色 外)灰緑色	内)ナデ 外)ナデ	
108	D2・3区	高杯	7.3 (残)		8.8	長石・石英・くさりれき	内)暗黄白色 外)暗黄白色	内)ナデ，ケズリ 外)磨滅により不明	
109	B10区	器台	11.0 (残)		9.6	長石・石英・金雲母 (2mm大)	内)灰白色 外)灰白色	内)ナデ 外)ハケ目(5～6条/cm)	
110	B12区	器台	15.5		8.0 (R)	長石・石英	内)淡灰黄色 外)暗灰黄色	内)ナデ 外)ハケ目	
111	D2区	器台	13.6 (残)			長石・石英	内)灰色 外)灰色	内)ナデ 外)ハケ目	
112	D2区	甕	3.1 (残)		6.1	長石・石英 (2mm大)	内)灰白色 外)淡褐色	内)ナデ 外)磨滅により不明	・甑として使用
113	C6区	蓋	5.5 (残)		5.9	長石・石英 (2mm大)	内)灰褐色 外)灰褐色	内)ナデ 外)ハケ目(5～6条/cm)	
114	D2区	蓋	6.3 (残)		7.1	長石・石英 (1～3mm大)	内)灰紫色 外)黄灰色	内)ナデ 外)ハケ目(7～8条/cm)	・内外面に黒斑有り
115	D4区	蓋	5.3 (残)			長石・石英・金雲母 (2mm大)	内)灰色 外)灰色	内)ナデ 外)板ナデ	
116	D4区	蓋	6.0 (残)			長石・石英・金雲母	内)淡灰黄色 外)淡灰黄色	内)ナデ 外)ハケ目	

6．その他の遺構と遺物

落込み状遺構

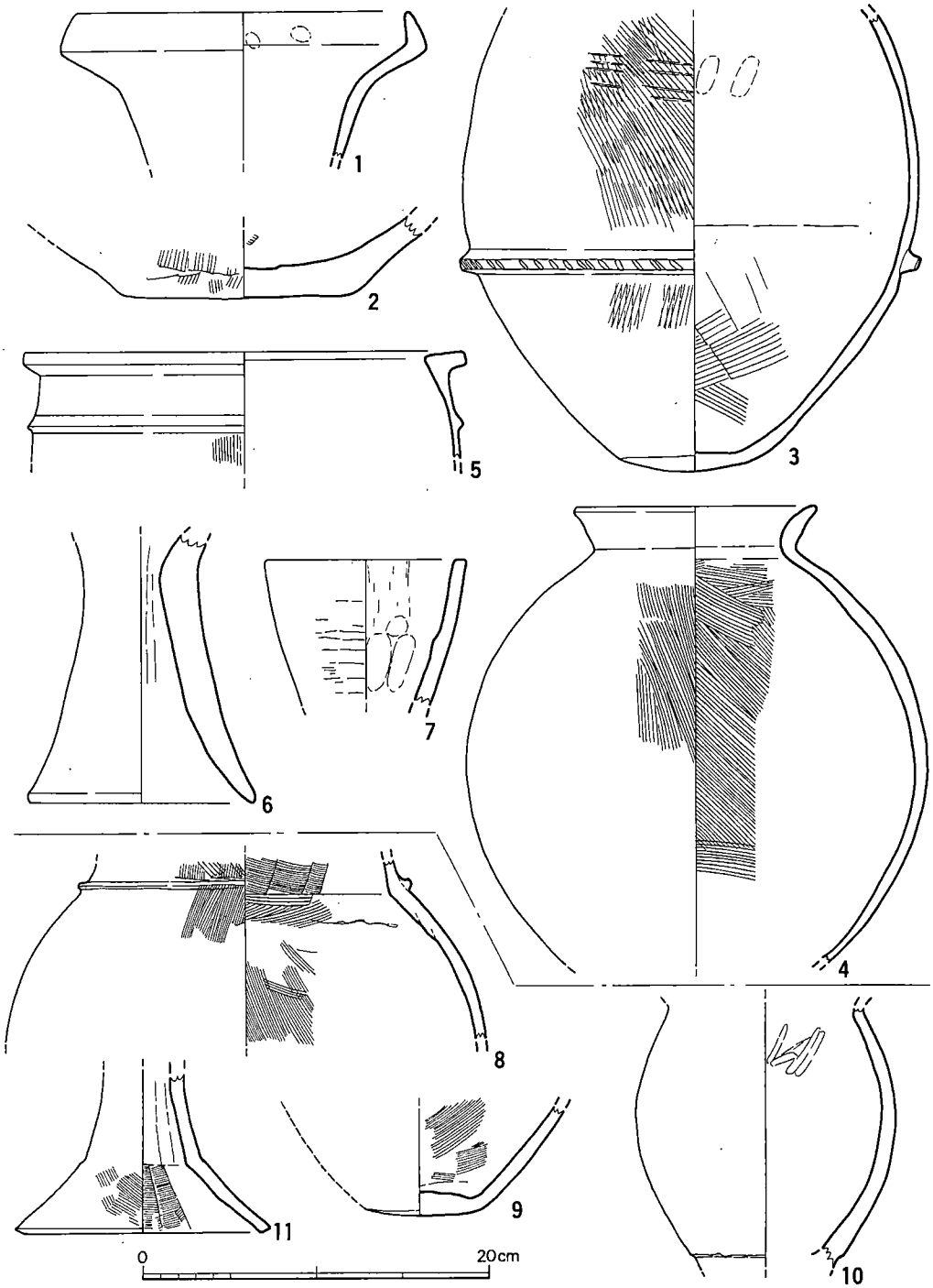
調査区の北端部（大溝分岐点付近一帯）及び西端部には，青灰色粘土層が堆積していた。遺物の取りあげ上，北部（A～D13区）・北西部（F・G12・13区）・西部（G・H 9・10区）・南西部（H・Ⅰ 2区）落込みとした。西部及び南西側においては，1m×3mのトレンチを設定し，深さを確認したが，何しろ湧水が著しく，掘って行くそばから壁が崩れるという有様であった。暗青灰色粘質土が2mあまりも堆積しており、間に灰白色の粗砂をかんでいた。南西部落込み出土の弥生土器は，32層（土層図参照）からの出土である。上層，下層に分けているが，上層は31層の下部出土で，下層が32層に該当する。西部落込み出土土器も暗青灰色粘質土中からの出土である。北部落込みは，西部・南西部落込みに比して，砂層が厚く，粘土層は黒味がかっていた。これらの落込みは，調査区の西側を流れる秋光川に起因するもので，秋光川の氾濫原と考えられる。砂層の堆積は弱く，青灰色粘質土を主体とすることから，堆積のスピードは遅く，弥生時代では淀み状を呈していたと考えられる。また，北西部の大溝1及び支流1の時期（奈良時代初め頃）には，ほぼ完全に埋ってしまったものと考えられる。

北部落込み上層出土土器（図版20，第49図）1は袋状口縁壺の破片で，復原口径19.0cmを測る。口唇部は丸く，屈曲部の稜は不明瞭である。内外面とも磨滅顕著であり，調整は不明。胎土には，2mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は不良で，内外面とも淡赤褐色を呈す。2は平底を呈する底部であるが，胴下位が大きく開いているので壺の底部であろう。調整は，内外面ともハケ目（5～6条/cm）である。胎土には2mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は良く，内外面ともに暗灰白色を呈す。

3は口縁部を欠くが，恐らく袋状口縁壺であろう。残高26.2cm，底径8.cmを測る。胴部中央のやや下位にタタキ目を施した断面コ字状の貼付凸帯を巡らす。底部は丸底化が進んでいる。調整は，外面がタタキ目の後にハケ目（4条/cm）を施し，内面はハケ目の後にナデている。胎土は，2mm大の長石・石英粒を含み、概して粗雑である。焼成は不良で，内面が灰褐色，外面が灰白色を呈す。また，胴部凸帯の上位外面に黒斑が有る。

4は「く」字状口縁を呈する甕で，復原口径14.0cmを測る。頸部はよく締り，胴部は球形に膨らむ。調整は，内外面ともハケ目で，口唇部は丸い。胎土は，長石・石英・金雲母粒子を含む。焼成は良好で，内外面とも茶褐色を呈する。5は逆L字状口縁を呈する甕で，復原口径25.6cmを測る。頸部のやや下位に断面三角形の貼付凸帯を巡らし，それ以下はハケ目である。内面はナデ，口縁部はヨコナデである。胎土は，1.5mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成はやや軟質で，内面が灰褐色，外面は黄褐色を呈す。

6は支脚で，上部を欠く。底径13.0cmを測る。外面は磨滅しているため，調整は不明。胎



第 49 図　北部落込み出土土器実測図①（1/4）

土は，2～3mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成はやや軟質で，内外面とも灰白色を呈す。7は復原口径11.5cmを測る椀で，底部を欠く。調整は，内外面ともナデである。器面には整形時のシボリ痕を残す。焼成は良く，内外面ともに灰白色を呈す。

時期は，5の甕が弥生時代中期初頭，3は底部が丸底化していることから終末期，4は古墳時代に属するか。

北部落込み中層出土土器（図版20，第49・50図）8は壺の頸部破片であり，恐らく袋状口縁壺を呈するであろう。頸部と胴部の境界に断面コ状凸部を巡らす。調整は，内外面ともハケ目である。胎土は，長石・石英・金雲母粒子を含む。焼成は良く，内面が褐色，外面は黄褐色を呈す。9は丸底化が進んだ底部破片であるが，壺か甕か判然としない。調整は，外面がナデで，内面はハケ目の後を部分的にナデ消している。胎土は，長石・石英・金雲母粒を多量に含む。焼成は良く，内面が褐色，外面は白黄色を呈す。10は口縁部と底部を欠くが，胴部の張りが弱いことから小型の甕であろう。調整は，外面が板状工具によるナデ，内面はヘラ状工具によるミガキを部分的に施す。胎土は，2～3mm大の長石・石英粒を含み，概して雑である。焼成は良く，内面が灰褐色，外面は茶褐色を呈す。また，全体的に黒光りしている。

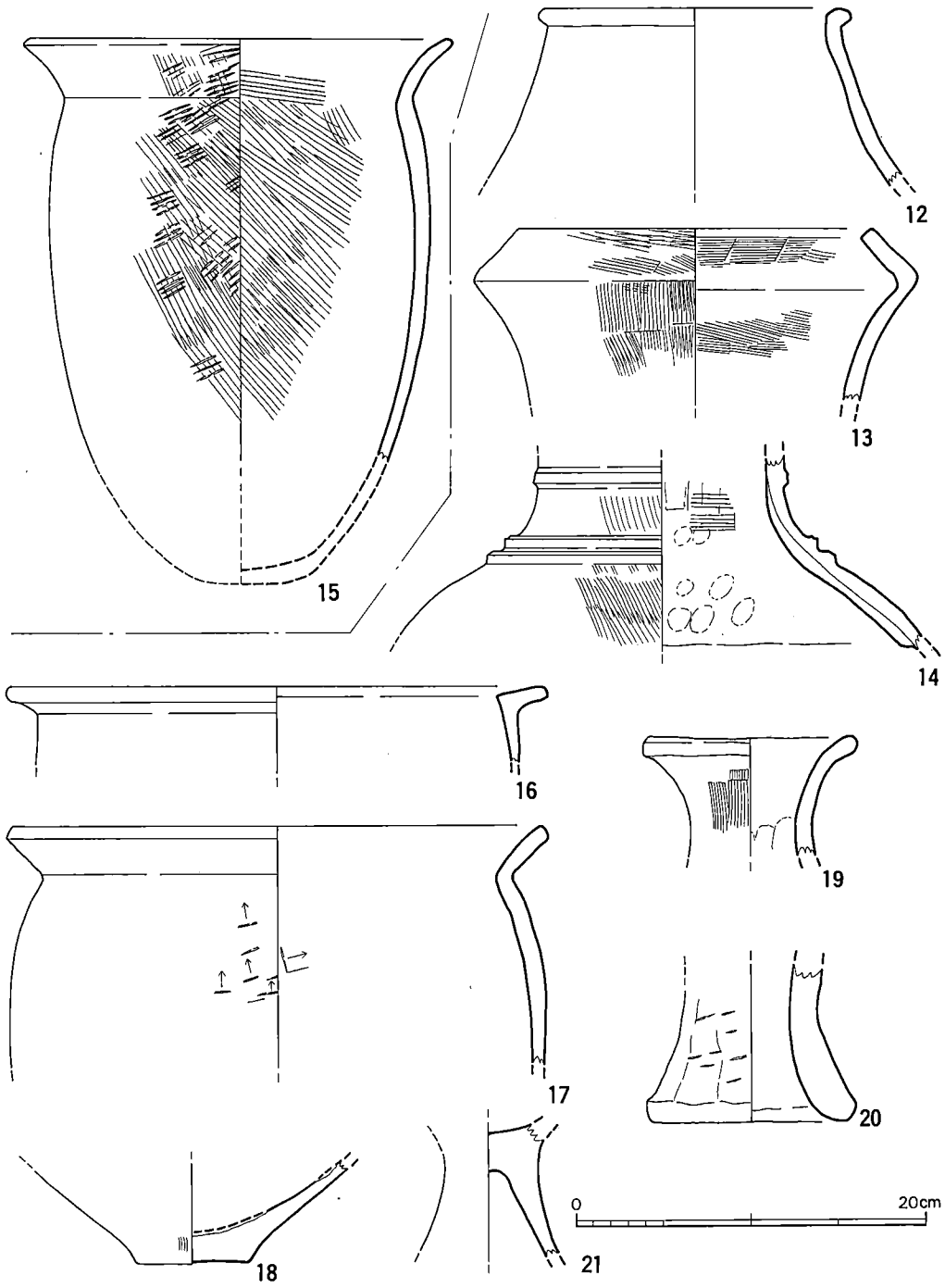
11は高杯の脚部破片で，脚径14.8cmを測る。脚裾部は一旦屈曲して開く。端部はシャープな稜を残す。調整は，脚柱部外面がヘラミガキ，脚裾部は内外面ともハケ目（9～10条/cm）で，内面のハケ目は蜘蛛の巣状である。胎土は，2mm大の長石・石英・金雲母粒を含む。焼成は良く，内外面ともに灰白色を呈す。

12は口唇部が丸く肥厚する壺である。調整は，内外面ともにヘラミガキである。焼成はやや軟質で淡黄色を呈す。13・14は壺である。13は袋状口縁壺の口縁部破片で，復原口径20.2cmを測る。調整は，内外面ともハケ目（7条/cm）である。胎土は，2mm大の長石・石英粒を含む。焼成は良好で，内外面とも緑灰色を呈す。14は頸部破片である。頸部に1条，頸部と胴部の境界に2条の断面台形の貼付凸帯を巡らす。調整は，内外面ともハケ目（4～6条/cm）である。胎土は，2mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は良好で，内面が灰褐色，外面が灰白色を呈す。

15は「く」字状に外反する口縁部を有する甕で，復原口径24.4cmを測る。口唇部は丸く，胴部はあまり張らない。調整は，外面がタタキ目整形の後にハケ目（4条/cm），内面はハケ目（4条/cm）である。ハケ目は粗い。胎土は，2mm大の長石・石英粒を多く含む。焼成は良く，内面が緑灰色，外面が黄褐色を呈す。

12の壺は弥生時代前期であろうか。10の小型甕は中期の所産であろう。他は，終末期に属するであろう。

北部落込み下層出土土器（第50図）16・17は甕である。16は逆L字状口縁を呈し，口縁部平坦面は内傾する。調整は内外面ともにナデである。復原口径は31.0cmを測る。胎土は2mm大



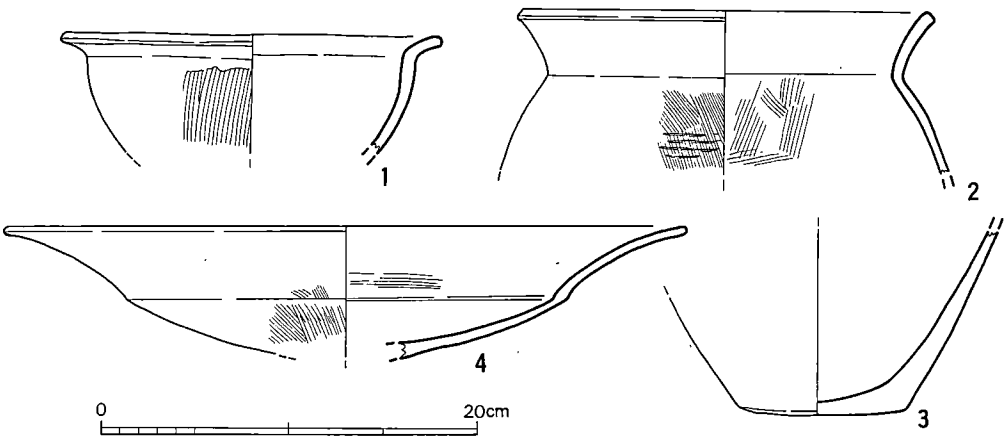
第 50 図　北部落込み出土土器実測図②（1/4）

の長石・石英及び金雲母の粒を含む。焼成は良く，内外面とも灰褐色を呈す。17は「く」字状を呈する甕で，胴部が若干張るようである。復原口径は31.0cmを測る。調整は，内外面ともに板状工具によるナデである。胎土は，2mm大の長石・石英粒を多く含む。焼成は良好で，内外面とも灰白色を呈す。18は底径6.5cmを測る底部破片で，胴下半部が開いていることから壺の底部であろう。調整は，外面がハケ目の後にミガキで，内面は器面剝離が著しい。焼成は不良で，内外面ともに灰白色を呈す。

21は高杯の脚柱部破片である。調整は，外面がヘラミガキで，内面はナデである。胎土は，長石・石英粒を含む。焼成は良く，淡黄灰色を呈す。19は器台である。調整は，外面がハケ目，内面はナデ，口縁部はヨコナデである。胎土は，長石・石英粒を含む。焼成は良く，内外面とも茶褐色を呈す。20は器厚が厚いので支脚とした。調整は，外面がタタキ目の後にナデており，内面はナデである。胎土は，長石・石英粒を含む。焼成は良く，内外面とも灰褐色を呈す。

16が弥生時代中期前半，17は「く」字状口縁を呈することから後期に属すものであろう。

北西部落込み上層出土土器（第51図）1は復原口径20.0cmを測る口縁部破片で，鉢である。底部を欠失するが，脚台が付く可能性もある。調整は，外面がハケ目で，内面はナデである。胎土は，長石・石英粒子を含む。焼成は良く，内面が灰色，外面は橙色を呈す。2は「く」字状口縁を呈する甕で，復原口径22.0cmを測る。口唇部は若干窪む。調整は，外面がタタキ目の後にハケ目で，内面はハケ目を部分的にナデ消している。胎土は，長石・石英粒を多量に含む。焼成は良く，内面が淡黄灰色，外面が褐色を呈す。また，外面に煤が遺存する。3は底径8.7cmを測る底部破片で，甕の底部であろう。底部は平底を残している。調整は，内外面ともナデである。胎土は，長石・石英などの粒を含む。焼成は良く，内外面とも黄褐色を呈す。



第 51 図　北西部落込み出土土器実測図①（1/4）

4は高杯の杯部破片で，復原口径36.2cmを測る。口縁部は長く外反し，屈曲部の稜はシャープさが残る。口唇部は丸い。調整は，外面がハケ目，内面はナデ，口縁部はヨコナデである。胎土は，長石・石英粒を含む。焼成は良く，淡黄灰色を呈す。

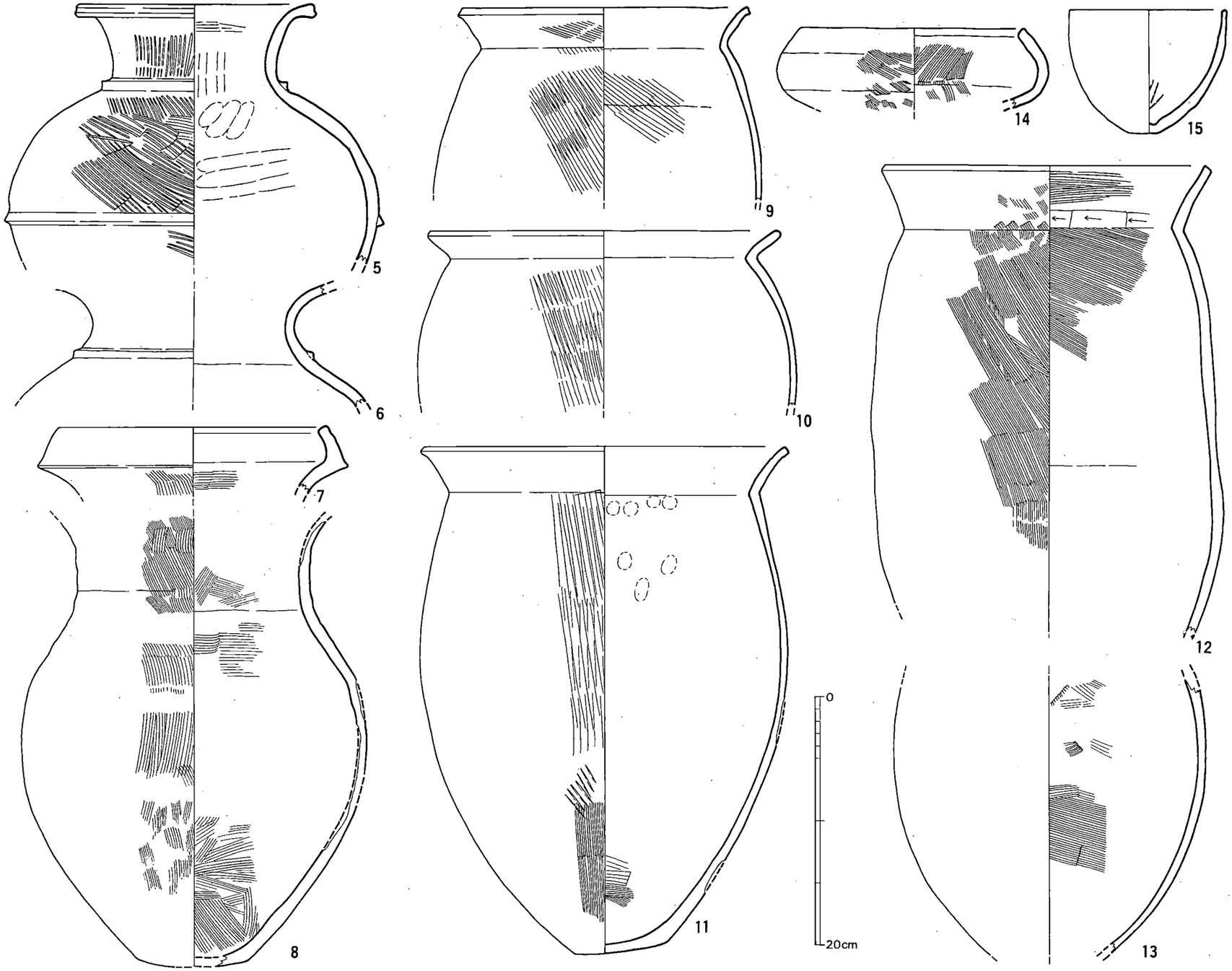
1は弥生時代後期で，2・4は終末期の様相を呈する。

北西部落込み下層出土土器（図版20・21，第52・53図）5～7は壺である。5は緩やかに外反する口縁部を有し，復原口径18.9cmを測る。口唇部は窪む。頸部と胴部の境界及び胴部最大径の部位に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。調整は，外面が粗いハケ目（4条/cm）で，内面はユビオサエナデとも言うべきナデである。胎土は，2～4mm大の長石・石英粒を多く含む。焼成は良好で，内外面とも灰褐色を呈す。6は頸部破片であるが5よりも強く外反している。頸部に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。調整は，内外面ともナデである。胎土は，長石・石英・金雲母・くさりれきなどの粒を含む。焼成は良く，内外面ともに淡茶灰色を呈す。7は袋状口縁壺の口縁部破片で，復原口径21.6cmを測る。屈曲部の稜はシャープである。8は口縁部を欠失する。頸部のやや下位に凸帯が剥離した痕がある。底部は丸底化が進んでいる。調整は，両者とも外面がハケ目で，内面はハケ目を部分的にナデ消している。胎土は長石・石英・金雲母・くさりれきなどの粒を含む。焼成は良好で，内外面とも淡黄灰色を呈す。

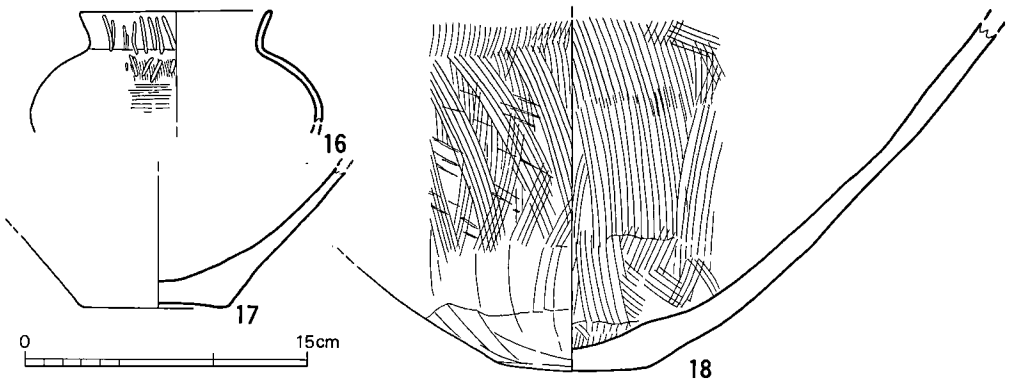
9～13は甕である。9～12は「く」字状口縁を呈する。10は屈曲の度合いが最も強く，12はやや立ち上がり，胴部はあまり張らない。11は器高40.8cm，口径29.6cm，頸径24.9cm，胴径29.6cm，底径7.6cmを測る。調整は，外面がハケ目で，内面はハケ目の後にナデ消している。また，12の屈曲部内面は板状工具によるナデである。胎土は長石・石英粒を主体とし，金雲母粒も含む。焼成は，9は良好で，内外面とも茶灰色を呈す。10は，内面が灰褐色，外面が茶灰色を呈し，外面には煤が遺存する。11は，やや軟質で，内面が灰白色，外面は茶褐色を呈す。12は，内面が灰褐色，外面は灰黄褐色を呈する。外面は，2次焼成により赤変・剥落し，煤が遺存する。13は胴部のみの破片である。調整は，外面がナデで，内面はハケ目である。胎土は長石・石英粒を多量に含む。焼成は良好で，内面が黄灰色，外面は淡黄灰色を呈す。

14は袋状口縁を呈する器台の口縁部破片であろう。調整は，内外面ともハケ目の後にナデている。胎土は，長石・石英粒を含む。焼成は良く，淡黄灰色を呈す。15は復原口径12.6cmを測る椀である。口唇部は丸く，底部は平底を残している。調整は，外面がヘラミガキで，内面は板状工具によるナデである。胎土は1.5mmの長石・石英・金雲母粒を含む。焼成は良く，内外ともに明灰褐色を呈す。

16は直口壺の破片で，胴部はよく張っている。調整は，外面がハケ目の後にヘラミガキ，内面はナデである。胎土は，1mm大の長石・石英粒を含み，精良である。焼成は良好で，内面が灰褐色，外面は茶褐色である。また，外面には黒斑がある。17は壺の底部破片で，底径8.0cmを測る。調整は，外面がヘラミガキで，内面はナデである。胎土は2mm大の長石・石



第 52 図　小郡正尻遺跡Ａ地区北西部落込み出土土器実測図②（1/4）



第 53 図　北西部落込み出土土器実測図③（1/4）

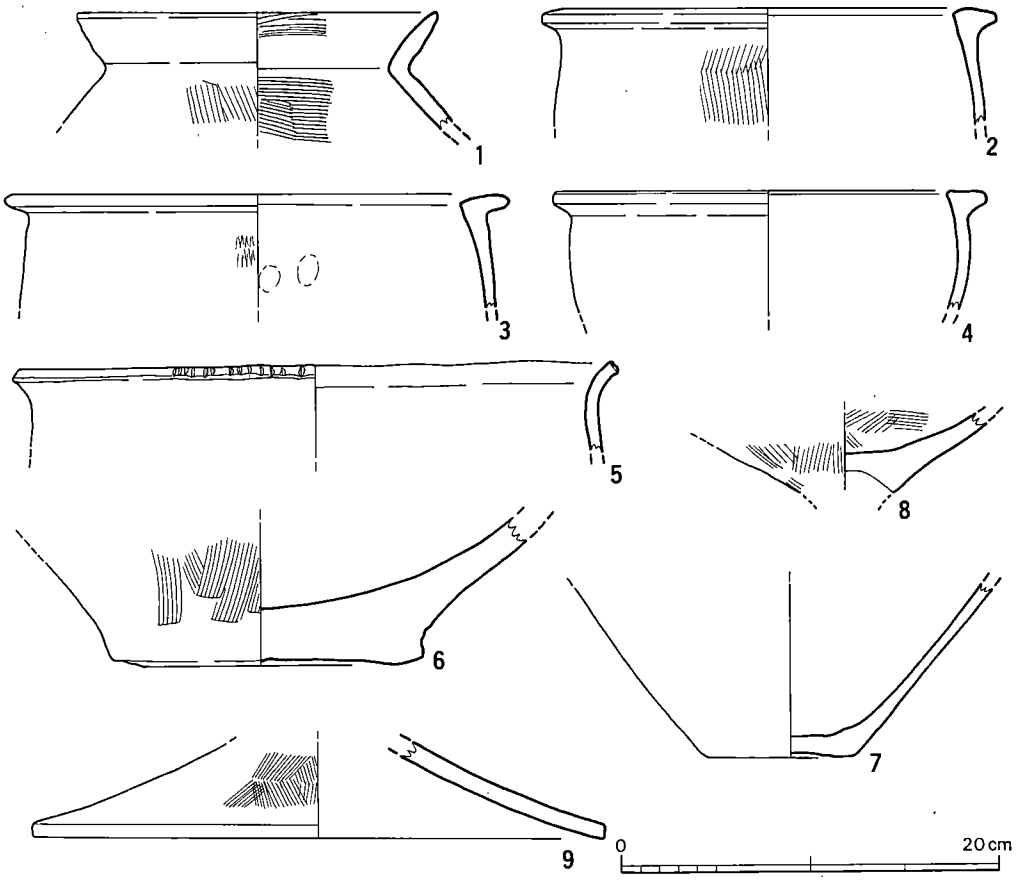
英・金雲母粒を含む。焼成は良く，内面が茶褐色，外面が緑灰色を呈する。

18は底部破片で，丸底化が進んでいる。調整は，内外面とも粗雑なハケ目である。胎土は長石・石英粒を含む。焼成は良く，黄灰色を呈す。

5・6の壺は，胴部が球状に張っていることから弥生時代中期初頭であろう。10の甕は，後期前半，9・12が終末期よりの後期後半，7・8・12・13は終末期頃であろう。

西部落込み出土土器（図版20，第54図）1～3・5は甕である。1は「く」字状を呈する口縁部破片で，復原口径19.0cmを測る。調整は，内外面ともハケ目で，口縁部はヨコナデである。胎土は，長石・石英粒を含む。焼成は良好で，内外面とも淡黄灰色を呈す。また，口縁部外面には煤が遺存する。2・3は逆L字状口縁を呈する甕である。2の復原口径は24.0cm，3は26.8cmを測る。3の口縁部平坦面は内傾している。調整は，両者とも，外面がハケ目で，内面はナデである。胎土は，長石・石英・金雲母粒を含む。焼成は良好で，2が内外面とも茶褐色で，3は外面が茶褐色である。4は逆L字状口縁と亀ノ甲タイプ口縁の中間形を呈し，復原口径23.0cmを測る。胴部のカーブからして鉢であろうか。調整は，外面がヘラミガキで，内面はナデである。胎土は，長石・石英・金雲母粒を含む。焼成は良く，内外面とも茶褐色を呈す。5は口縁部破片で，緩やかなカーブを描き，復原口径32.0cmを測る。口唇部には，ヘラ状工具によるキザミ目を付している。調整は内外面ともナデである。胎土は，長石・石英・金雲母粒を含む。焼成は良く，内外面とも淡黄色を呈す。

6は平底を呈する底部破片で，底径16.5cmを測る。胴部下半が大きく開いているので壺であろう。調整は，外面がハケ目を部分的にナデ消しており，内面はナデである。胎土は，長石・石英粒を含む。焼成は良く，内外面とも淡茶色を呈す。7は内外面とも磨滅顕著であるが，部分的にヘラミガキが認められるので壺の底部と考えられる。底径は7.8cmを測る。胎土は，長石・石英粒を含む。焼成は良好で，内面が淡黄灰色，外面が灰褐色を呈す。

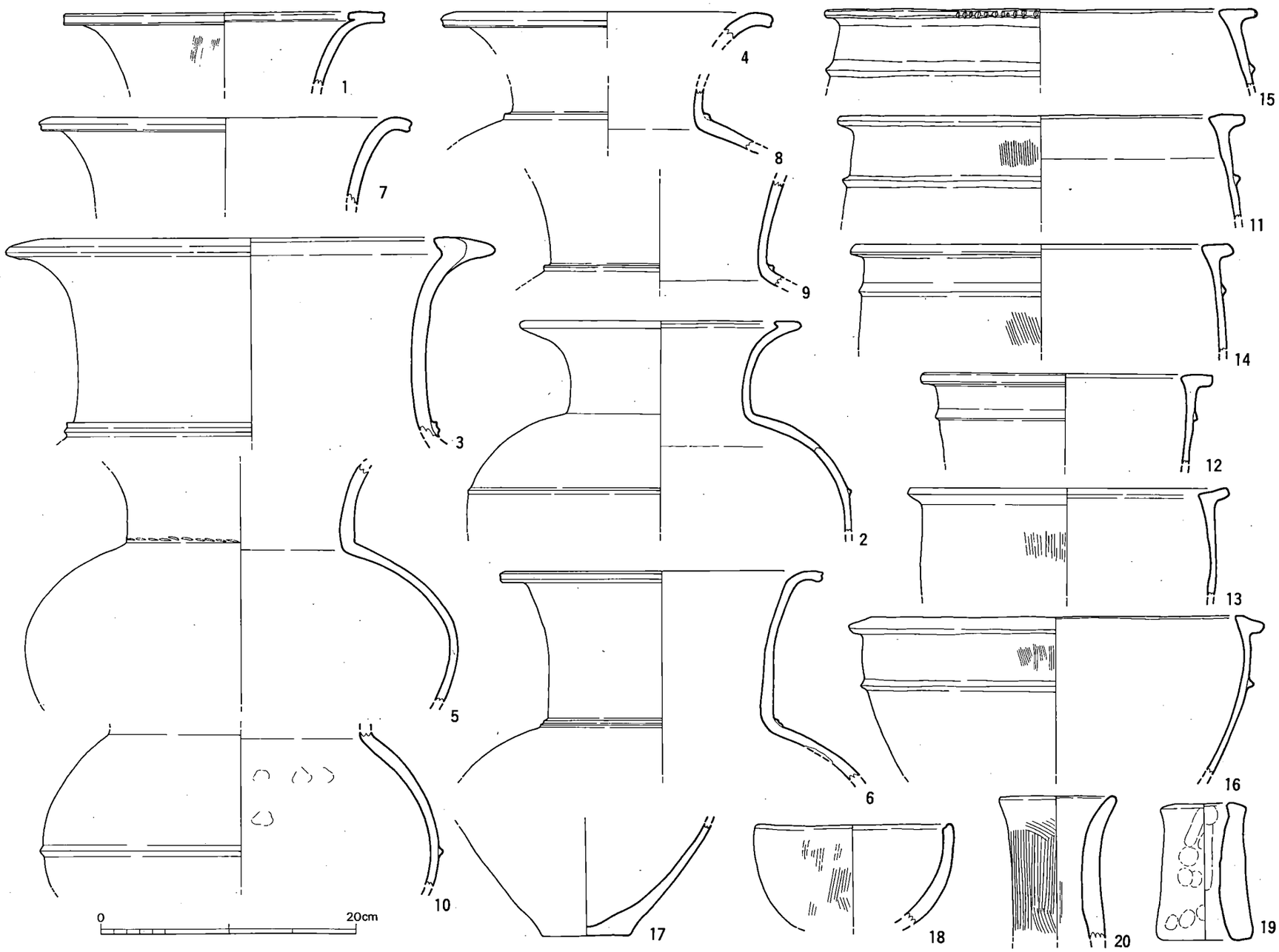


第 54 図　西部落込み出土土器実測図（1/4）

8は高杯の杯部破片であろうか。内外面ともハケ目である。胎土は，長石・石英粒を多く含む。焼成は良好で，内面が淡黄色，外面が灰茶色を呈す。9は蓋で，把手部を欠く。復原口径28.2cmを測る。調整は，外面がハケ目（6条/cm）で，内面は板状工具によるナデである。胎土は，長石・石英・金雲母の粒を含む。焼成は良く，内外面ともに灰褐色を呈す。また，外面の一部に黒斑がある。

時期は，5が外反する口縁を呈し，口唇部にキザミ目を付していることから弥生時代前期末頃であろう。2～4は肥厚する逆L字状口縁を呈することから中期前半であろう。

南西部落込み出土土器（図版21，第55図）1～10は壺である。1は口縁部を折返したのみで，所謂，鋤先状口縁をなさないもの。復原口径25.0cmを測る。口唇部は窪む。調整は，外面がハケ目の後にナデ消しており，内面はナデである。胎土は，長石・石英粒を含む。焼成は良く，内外面ともに淡黄灰色を呈す。2・3は頸部から緩やかに外反して開く鋤先状口縁を呈す。復



第 55 図　小郡正尻遺跡Ａ地区南西部落込み出土土器実測図（1/4）

原口径は，2が22.0cm，3は38.0cmを測る。口唇部は丸く，内側の稜は，シャープさに欠ける。胴部は良く張って球状を呈し，シャープな断面三角形の貼付凸帯を巡らす。3は頸部と胴部の境界に断面M字形の貼付凸帯を巡らす。調整は，2の外面及び口縁部内面がヘラミガキ，内面はナデで，3は内外面ともナデで，口縁部外面に雑なヘラミガキを部分的に施す。胎土は両者とも長石・石英粒を含み，3には金雲母・くさりれき粒も含まれる。焼成は，2が軟質で内外面とも灰白色を呈し，3は良好で内外面とも茶褐色を呈す。

4・6・7は外反する頸部がそのまま開くもので，口唇部は窪む。復原口径は，4が26.0cm，6が25.2cm，7が29.0cmを測る。6は頸部と胴部の境界に断面M字形の貼付凸帯を2条巡らす。調整は，4・7が内外面ともにナデで，6は磨滅顕著のため不明であるが，恐らくヘラミガキであろう。胎土は三者とも長石・石英粒をベースとし，4・7にはくさりれき粒も含まれる。焼成はともに良好で，4・7が内外面ともに淡灰黄色で，6は内外面とも灰褐色を呈す。5・8～10は口縁部を欠き，頸部及び胴部にかけての破片である。8・9は頸部に，10は胴部に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。5の胴部は良く張っており，頸部と胴部の境界にヘラ状工具による刺突痕を残す。調整は，5・8・10の外面がヘラミガキ，内面はナデで，9は内外面ともに板状工具によるナデである。胎土は，長石・石英粒をベースとし，5・8は金雲母粒を含む。焼成はともに良好で，内外面とも淡灰黄色を呈する。

11～15は逆L字状口縁を呈する甕である。復原口径は，11が32.0cm，12が23.0cm，13が25.2cm，14が30.0cmを測る。13を除き，頸部のやや下位に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。また，15の口唇部にはヘラ状工具によるキザミ目を付している。調整は，ともに外面がハケ目で，内面はナデである。胎土は，長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は良好で，11が黒褐色，12が淡灰褐色，13が漆黒色，14が黄灰色を呈す。また，11・13の外面には煤が遺存する。

16は亀ノ甲タイプの口縁を呈す鉢である。頸部のやや下位に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。調整は，凸帯までの外面が細かいハケ目で，それ以下はヨコ方向のミガキであり，内面はナデで，部分的にヨコ方向の雑なヘラミガキを施している。胎土は，長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は良く，内面が茶褐色，外面は褐色を呈す。また，外面には煤が遺存する。

17は平底を呈する壺の底部である。復原底径6.8cmを測る。調整は，内外面ともナデである。胎土は，長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は良く，白黄灰色を呈す。

18は復原口径15.4cmを測る椀で，半円形を呈す。口唇部は段がつく。調整は，外面がハケ目の後にナデており，内面はナデである。胎土は，長石・石英・金雲母・くさりれきなどの粒を含む。焼成は良好で，淡褐色を呈す。

19は支脚である。器高10.8cm，口径6.6cm，底径7.4cmを測る。器内外面には無数のユビオサエ痕が残る。胎土は，2mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含み，概して良好である。焼成はやや軟質で，内面が灰緑色，外面が灰褐色を呈す。20は復原口径9.4cmを測る器台であ

る。調整は，外面がハケ目，内面はナデ，口唇部はヨコナデである。胎土は，長石・石英粒を多量に含む。焼成は良く，淡黄灰色を呈す。

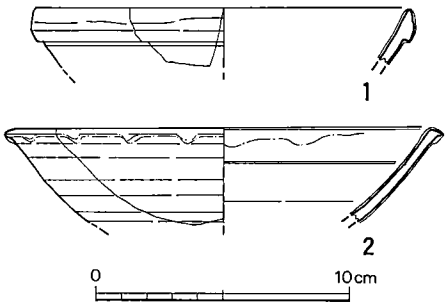
1～7の壺は，口縁部が弧を描いており，頸部の締りがよくないことから弥生時代中期初頭と考えられる。11～15の甕は，肥厚する逆L字状口縁を呈するので中期初頭の城ノ越式と考えられる。16も同様な時期であろう。（小田）

土坑，ピット

住居跡，井戸等の遺構以外の土坑，ピット類は，調査区の東南隅部，小溝1や小溝3の付近などに幾つか集っている。しかし，小溝1の周辺のものは前述したように亀裂に伴うものが多い。遺物を含むピット等も掘り方は不整形であり，埋土に水田耕作土も混じるので攪乱坑的な性格のものだろう。

東南隅部のピット・土坑群では，溝状の例もあるが，これはすぐ横を流れる水路の一時的な水路変更等による可能性が高い。近世陶磁器等が含まれていた。

陶磁器（図版11-5，第56図）小溝4の周辺の包含層に白磁片2，北東隅部の溝状落ち込み内に白磁片1，東南部の土坑・ピット群等に近世陶磁器が出土しているが白磁片2点のみ図示する。1は北東隅部の溝状落ち込み，2は小溝4の北西部包含層から出土した。



第56図　包含層出土磁器実測図（1/3）

白　磁（1，2）1は玉縁の口縁部をもつ椀。灰白色の胎土に透明の釉をかけている。2は復原口径17.2cmの椀口縁部破片。口縁部はく字形に短く外反し，端部は水平。体部内面に浅く細かい横沈線があり，体部外面はヘラケズリ調整されている。灰色の胎土にうす黄色味を帯びた透明の釉をかけているが，口縁部内外面に釉が垂れ，外面では滴状を呈している。

石製品（図版13-2，第32図4）滑石製石鍋片2点が，1・2号住居跡の南西側の上層から出土している。1点は胴部小破片で，1点は底部付近の破片。このうち後者を図示するが，厚さ約2.5cmで，外面に削り痕，内面は平滑な面をなすが工具先端の傷痕が残る。外面は煤が付き黒変するが，紫灰色を呈している。

県境付近の試掘結果

福岡・佐賀両県境は，遺跡付近ではほぼ南北方向に延びている。この南北に真直ぐ延びる県境は，北の高原川左岸から，南の福童地区まで5km以上に及ぶ。このため，条里の基準線，西海道に想定する意見もある（註9）。

横断道路線内に含まれる，県境の長さは，約88mだが，この部分は水路に使用されていて，佐賀県側に幅２m余りの農道が設けられている。県境に隣接する水田は，３枚分で，大字小郡字才町の1641～1649番地であり，A地区調査中には，1649番地の水田299.5m^{2}分のみ用地が解決し，他は未解決分と，農道，水路であった。

県境付近の堆積状況を確認するための試掘溝を設定し得たのは，このため1649番地のみであり，幅2.4m，西端から長さ22m分を，重機で掘り下げた。

既に，水田耕作土と，水田床土の一部は除去されており，床土の下は，青灰色粘土と灰白色砂が互層となっている。この部分の堆積土では，特に掘り込みや，盛土の痕跡は見られなかった。上部の青灰色粘土は0.7m～1.2mで西側に厚く，その下に0.3～0.5m程度の淡青灰色砂（細砂と粗砂が入り混っており，青灰色粘土や青灰色細砂も薄く互層状に挟まる）が堆積する下にも，青灰色粘土が厚く堆積（この中にも灰白色・黄灰色砂が薄く入り込む）しており，湿潤である。全体として西側に深くなっており，約３m下位まで掘り下げたが，湧水が激しく側壁が崩壊したため中止した。

59年１月11日からは，佐賀県側で，基山町大字長野字三川下の14・15番地の試掘調査が始まったが，水田耕作土下の砂が厚く，この下に青灰色系の粘土が堆積するようであった。先の試掘時の堆積状況と比べるとやや上部の堆積土が褐色っぽく，湿潤さも少ないように思われた。

２月下旬には，字才町の1641～1648番地での工事が開始され，爆気坑の壁面を観察したが，1649番地の状況と大差がなく，A地区調査区西部の堆積状況よりも深く下っていくことが理解しえたが，深さは５m程度で砂が中心になっている。ここでも，水田床土下の堆積土に，掘り込み等は認めえなかった。

県境に接した農道は，工事の進行に伴う迂回路の設置を待っていたが，２月末に，この農道にかかる工事が実施されたので，立合い調査した。位置は路線幅のほぼ中央に相当する。農道上面は，砂と砂利礫が３～５cm程度置かれており，その下は砂が約15cm堆積している。この砂は農道の幅員とほぼ同じで，道路に伴うものであろう。その下は，水田耕作土で，さほど厚くない。耕作土の下には約10cmの厚さで暗黄褐色粘土の水田床土があり，更に下は暗灰色，青灰色の粘質土・粘土が堆積している。この粘性土・粘土は，1649番地の暗青灰色粘土より色調が淡いものである。しかし，それより下は徐々に色調が暗くなるものと思われる。水路部分は，現況の水路よりも，やや広めの幅1.2m程度が暗茶灰色の粘性土になっていたが，深さは，道路面より約１．５mであった。

これらの状況からは，古代官道の西海道は，この部分を通じていたとは理解し難い。氾濫原の真中よりも，むしろ段丘上に通じていたと想定する方が妥当であろう。　　（小池）

7．小　結

A地区においては，住居跡2軒・大溝2条・小溝4条・井戸2基・落込み状遺構・ピットなどの遺構が確認された。遺構面は，後世にかなりの削平を受け，住居跡は柱穴を残すのみであり，本来，B地区と同程度の標高であったと考えられる。大溝は，各時代によって流れを変え，大溝2南端において水利施設の一部である井堰が検出された。ここでは，大溝の水流変遷についてふれ，小結としたい。

大溝2Ⅰ期

大溝2本流が北東から南西方向へ流れる時期で，下層からは，弥生時代中期～後期末にかけての遺物が出土した。大溝2は，少なくとも中期初頭には掘削され，その当時は，北部落込みはまだ埋っておらず，沼状を呈していたと考えられる。その後，旧秋光川の氾濫などによる土砂の堆積作用により，徐々に埋っていき後期末～古墳時代前期に至ってはある程度埋ったものと考えられる。

大溝2Ⅱ期

支流1が大溝2に接続して流れる時期で，古墳時代後期と考えられる。支流1の北端には，水流を導くための杭が打込まれており，南端には井堰が付設され，支流3側へ水流を通している。また，北端部の杭列は，北部落込み埋土中に打込まれており，これは，北部落込みがほぼ完全に埋ったことを意味している。

大溝2Ⅲ期

大溝2本流北端が人意的に埋められ，大溝1が弓状に流れる時期で，支流1とほぼ同時期と考えられる。支流1と大溝1は，併存する時期があり，その後，支流3は埋められ，大溝1のみが流れることになる。

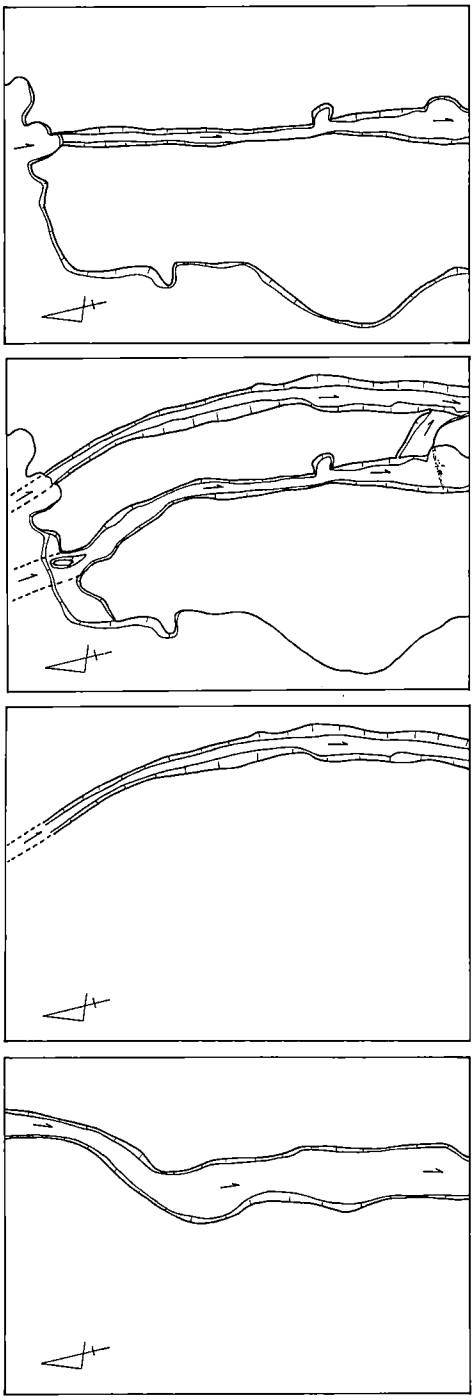
大溝1は，上層（Ⅲ層）を除き，中・下層は粗砂が堆積しており，中層からは13世紀後半頃の遺物も出土しており数次にわたって埋没したものと考えられる。

大溝2Ⅳ期

支流2が北東から南へ蛇行して流れる時期で，大溝1の北端部が完全に埋没した時期（13世紀後半以降）以降と考えられる。南端部での幅は，大溝2Ⅰ期に比して2m余りも大きくなっている。その後，Ⅲ層が堆積し，支流2は完全に埋没する。

以上，大溝の水流変遷について概略を述べたが，次に溝の持つ意義について考えてみたい。

弥生時代溝の機能に関して，和島誠一氏は，「その機能の第一は，集落を区画すること」としており（註10），他に防禦機能・農耕機能を付与することが可能である。農耕機能という点に関して，菅原康夫氏は，「溝に用水路としての機能を予想できる属性としては基本的属性として，溝底勾配をもつこと，溝底の急激な段差をもたないこと，一定の幅員をもつこと，低地



第 57 図　大溝流路変遷模式図

集落に付属すること，条溝を呈すこと，…また，直接的には溝中への施設，分水路を有すほか，一定空間の中にあって水田，水源を有機的関連を示す場合には水路としての機能を与ええよう」としており（註11），本遺跡における大溝は，これらの要因を十分満しうる。

また，同氏は，水利施設をその機能的側面から導水施設・分水施設・取水施設に大別しており，「堰」についても調整堰・分水堰・取水堰の3タイプがあるとしている（註12）。本遺跡における大溝2南端の井堰は，同氏分類による取水堰と考えられ，類例として古照遺跡例，利倉遺跡例，長越遺跡例などを挙げている。

岡山県百間川原尾島遺跡三ノ坪調査区においては，弥生時代中期の溝171・溝173が検出され，溝内に井堰が付設されていた（註13）。これは，上流からの水流を塞き止め，溝の東側に存在する水田に分水する機能を有していた。

水稲耕作地域においては，水利経営が大前提となる。水稲農耕が最初に行われた北部九州においても，水路・柵列などの水利施設は当初から存在していた（註14）。自然現象による水位の上昇・下降・涸渇などに対処すべく適宜な処置がなされたと考えられ，水利施設の維持・管理が円滑化されることにより水田経営の成功が約束される。また，水利施設の整備による水田面積の拡大は，安定した収穫並びに余剰生産性を高め，さらには人口増加の要因となり，集落自身を膨張させる結果となる。

以上のように，水利施設（灌漑施設）は水稲農耕において不可欠のものであり，「営田の阿を離ち，其の溝を埋め」た須佐之男命には，「千位の置戸を負せ，亦鬚を切り手足の爪をも抜かしめて，神やらひ」などの重い罰が下された（註16）ことからも重要であったと言えよう。

最後になったが，本遺跡において水田面は確認できなかったが，水田面が存在したことは否定されるものではなく，調査区外の南側（大溝の南延長線）に指摘でき，今後，この地域の開発行為に十分目を光らす必要がでてきた。

末筆ではあるが，溝状遺構に関して武田光正氏に御教示を頂いた。記して感謝します。

（小田）

2．B地区の調査

1．はじめに

B地区は，A地区の東側に水路を挟んで隣接し，この水路と都市計画道路三沢・西福童線（自衛隊バイパス）の間に挟まれた東西約40m，南北約80mの範囲で，字正尻1574-1・1574-2・1575番地と，字寺田1679-1～4・1679-7番地に相当する。このうち，1574-1の南半部は標高18.5mの畑地で，1574-1の北半・1574-2・1575番地の標高16.6m位に比して，一段高い地形をなしていた。この一段高い部分とその周辺までの表土を剝いだところ，高い部分で住居跡・貯蔵穴などの遺構を検出できたが，他の部分は2mにも及ぶ削平を受けていた。1574-1の北部に設定した試掘トレンチでは，削平された地山面の砂層が広い範囲にわたって攪乱されていた。また字寺田分では，盛土があり，路線バスの折返し駐車場や，大型貨物車の駐車場となっていたことと，1679-3・1679-7番地の西部に設定した試掘トレンチでは，約0.6mの再堆積土の下に旧表土が僅かにあり，その下は塵芥・汚物などの詰まった攪乱が数10cmに及ぶようで，攪乱の中途の高さで既に1574-1の試掘トレンチやA地区の調査区の標高よりも低くなるため，全面発掘しないことにした。従ってB地区では，全面発掘調査区は字正尻分の一段高い部分のみとなった。

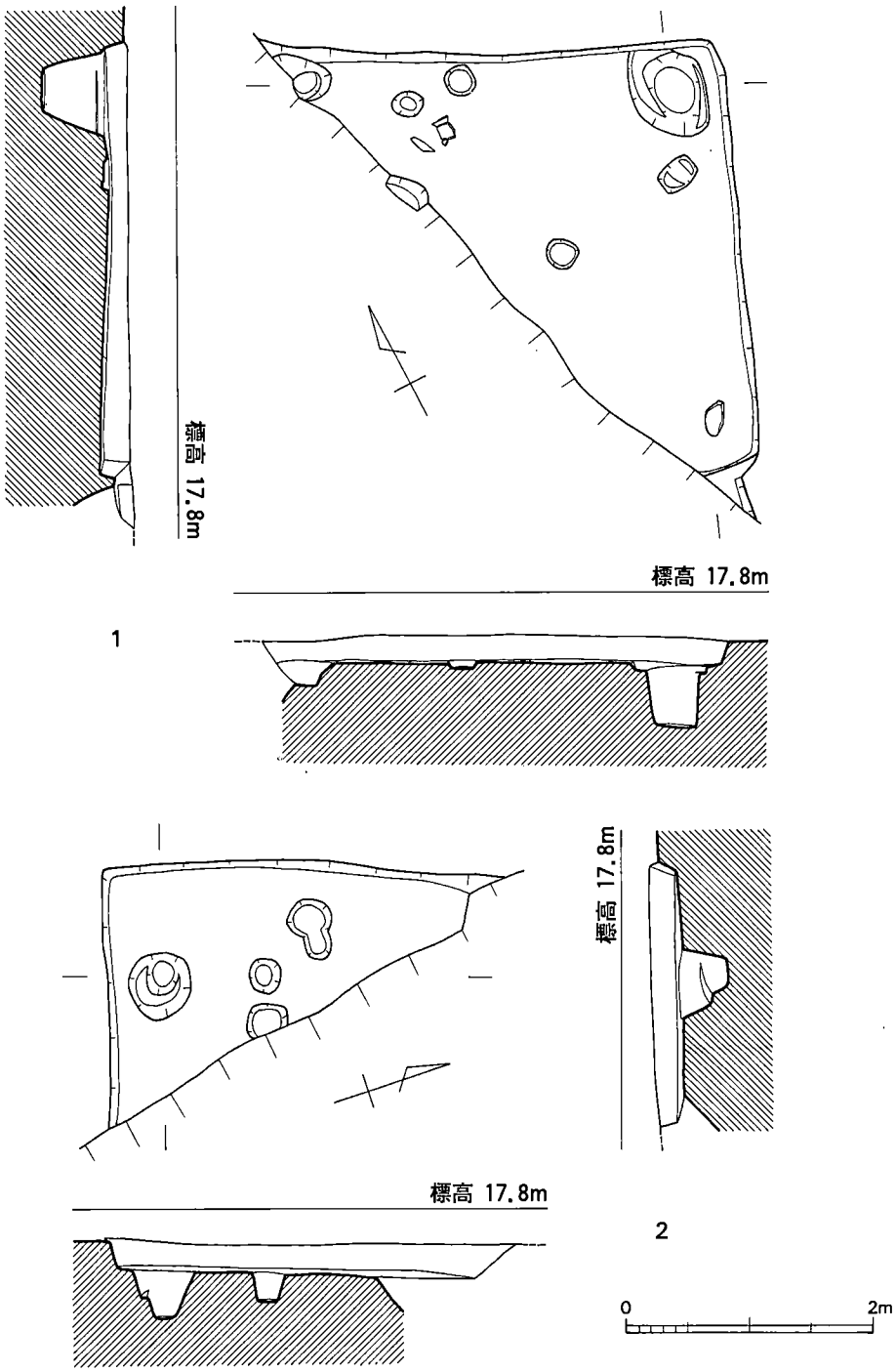
B地区の調査区では，弥生時代中期1軒・後期3軒の住居跡と，弥生時代前期の貯蔵穴32基，奈良時代の土壙・大溝などの遺構調査した。

2．住居跡

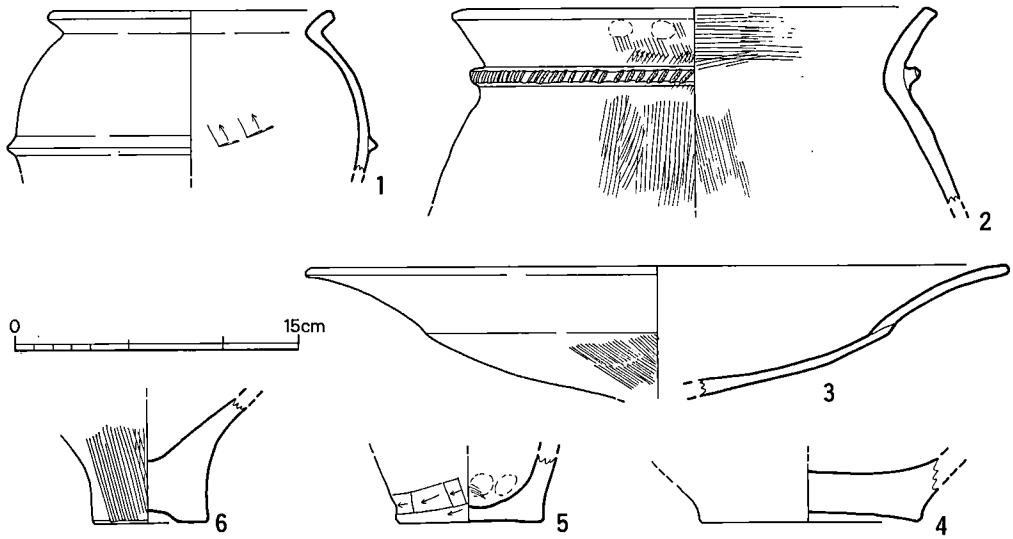
1号住居跡（第59図）

調査区の西北部にあり，大溝によって南西部を失う。東壁は3.5mを，北壁は3.7m以上を

第 58 図　小郡正尻遺跡Ｂ地区遺構配置図（1/100）



第 59 図　1・2号住居跡実測図（1/60）



第 60 図　1号住居跡出土土器実測図（1/4）

測るが，南西側の大溝肩部にまで住居跡が及ばないことからみて，東西に4mを大きく上回ることはないだろう。南東隅部で，2号住居跡に伴うと推定する周壁と重複し，この壁を1号住居跡が切る。床面はやや堅緻であるが焼土はみられない。床面を掘り込む柱穴様のピットは，北東隅の一穴が深く，北西隅になるかとも思える一穴とその約0.5m東南方にある一穴が次いで深いが，他のものはさほど深くはない。住居跡の四隅に主柱穴があったと仮定した場合，東南隅の柱穴がないことになる。ただしこの部分は，大溝に引き続き重複する4号貯蔵穴を先行して掘り下げた為に充分な検討をなしえなかったもので，4号貯蔵穴上縁にあるやや扁平な石を柱穴に供うものと考えれば，さきの仮定も可能性が高くなろう。

住居跡内からは，床面より7～8cm浮いた状況で高杯・甕の口縁部破片が出土し，床面直上では，壺・甕底部破片などが出土したが，この住居跡に直接伴わない可能性の方が高い。

土　器（第60図）1～3は埋土，4～6は床面直上から出土した。壺(1)は復原口径15cmのくの字に外反する口縁と，胴最大径の位置に三角凸帯を有す。内外面共板状工具のナデ調整。甕(2)は復原口径25.4cmの大きさで頸部にキザミ目凸帯を有す。内外面共ハケ目調整され，キザミ目もハケ目原体の押圧による。高杯(3)は復原口径36.9cmの杯部破片で，杯外反部の立上りは低い。甕底部（5・6）のうち，5は平底で板ナデ調整の外面を有すが，6は底径が小さく肉厚な上げ底で外面はハケ目調整される。4は壺底部であろう。

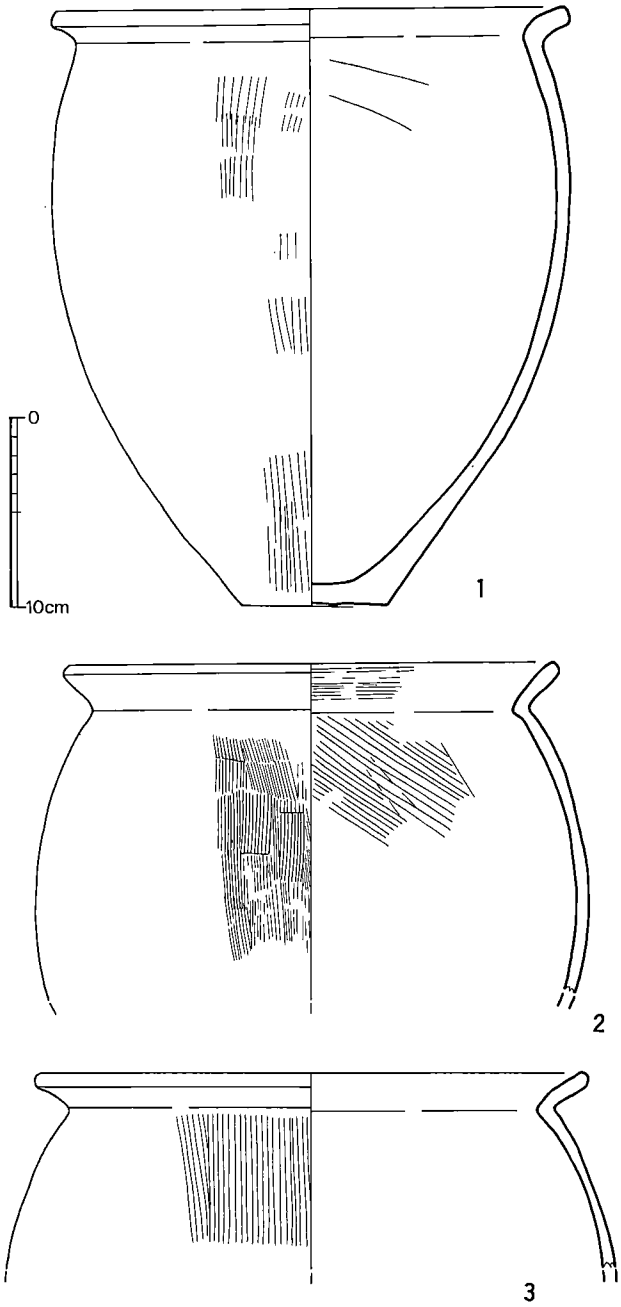
これらの土器のうち，2・3は弥生終末期頃の特徴を有しており，1号住居跡の時期をこの頃に考えたい。

2号住居跡

（図版22-2，第59図）

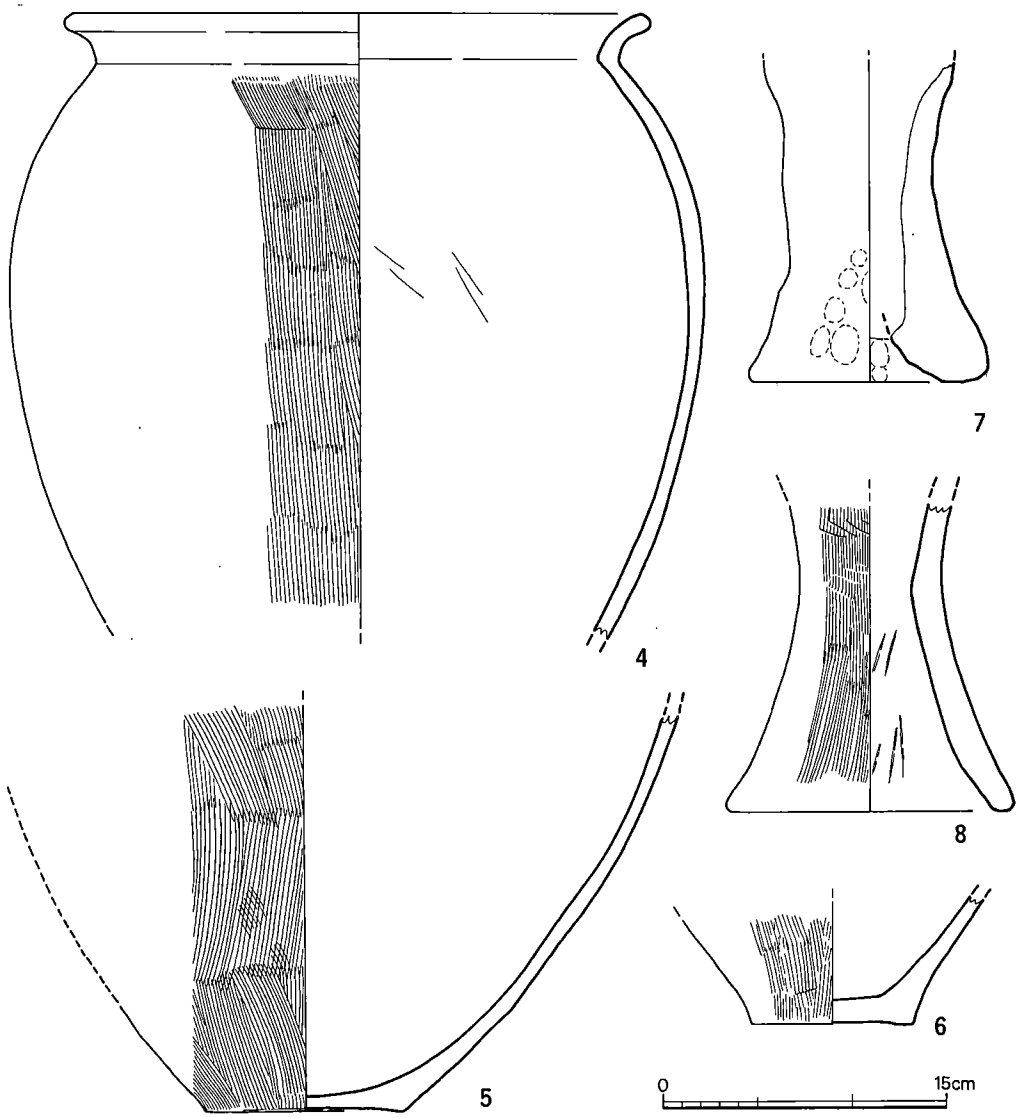
調査区の西端部にあり，大半を大溝によって失う。西壁の現存長3.3m，南壁の現存長2.1mを測るが、1号住居跡と重複し，1号住居跡と重複する壁を東壁とすれば，この壁の位置からみて東西の長さは約4.0mであろう。周壁の高さは約0.2mを残す。床面は堅緻で，床面を掘り込む柱穴様ピットの内，南西隅に近い大きめの穴が約0.4mの深さを有し，次いでその北側の穴が深い。他の2穴は0.1m前後の深さである。

住居跡内の南西隅部から土器のまとまった出土をみたが，床面より5cm程度浮いて甕口縁・支脚・器台片が出土し，他の大半の土器破片は床面直上の高さで出土したが，前述した一番深い柱穴様ピットの部分に集中しており，このピットの埋没後余り時間を空けずに土器が埋まったと考えうる。また埋土の上部からすり石の小破片1点が出土したが，図示しえなかった。



第61図　2号住居跡出土土器実測図①（1/4）

土　器（図版34-1，第61・62図）甕（1～6）のうち完形に復原しうる1は，復原値で口径27.5cm，器高31.5cmの大きさ。く字形に屈折して外反する口縁部は肉厚で，器内面は板状工具でナデられる。外面は



第 62 図　2号住居跡出土土器実測図②（1/4）

粗いハケ目調整のあとナデ消しが加わる。また2～4の甕はく字形に外反する口縁部が1に比して扁平で，2の甕は内外面共にハケ目調整され，外面には二次焼成による赤変がみられる。3～6は外面をハケ目調整，内面は板ナデないしナデ調整されている。なお4・5は同一個体と考えるが，歪みがあり，うまく接合しえない。

支脚7は，上端を欠くが残存器高17cm，裾径12.5cm，胴部径7.7cmの大きさ。裾部は肉厚で上部内面が脆弱で器壁が剝落して薄くなっている。外面はナデ調整とユビオサエで，一部に

籾の圧痕がみられる。

器台(8)は，残存器高16.2cm，裾部径15.2cm，胴部径7.5cmの大きさ。外面に縦方向のハケ目，胴部内面に板状工具によるナデ痕がみられる。

これらの土器からみて，弥生後期前半の時期を考えておきたい。

3号住居跡（図版22-3，第63図）

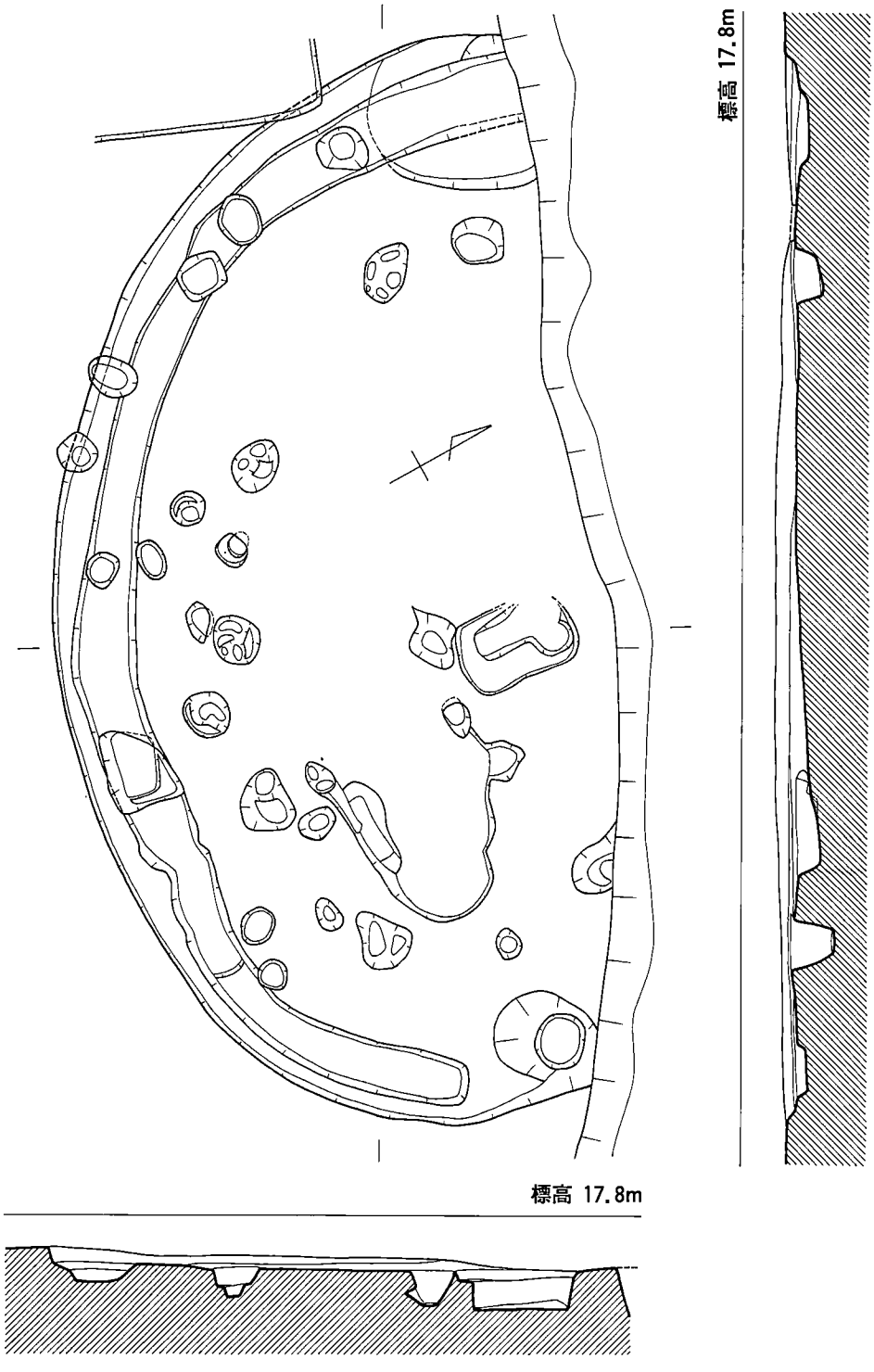
調査区の中央部にあり北側半分を水田開削によって失う。周壁は最も高い所で0.1mを越すが殆んど数cmの高さを残す程度で，西側の周壁の一部が1号住居跡東北隅の周壁によって切られている。埋土は暗茶褐色の砂質粘性土で，床面直上では黒褐色の粘性土になる。床面は黄褐色粘性土に黒褐色粘性土が少し混った土で固められ堅緻な床面を呈している。北側の崖面に露呈していた3号貯蔵穴を先行して掘り下げたが，埋土の上面にも住居跡の貼り床が確認できており，焼土を検出しえなかったが，この付近の床面直上で木炭粒をやや多めに検出している。床面を掘り込んだ柱穴様ピットのうち，周壁の約1.5m内側に円形に並ぶピットが，南側では狭くなるものの，1.8～2m間隔に位置している。ただこの際，東端部のピットと周壁が接近している。周壁の円弧からみて，直径9～10m規模の円形プランになる住居跡となるが，東端で検出した周壁が内側に入り込むことになる。

貼り床部分を取り除くと，周壁に沿った幅0.4m前後，深さ0.1m程度の溝，中央部の東寄りに浅い落ち込みと不整形なピットが，そして住居跡より確実に先行すると思える貯蔵穴が幾つか検出できた。周壁に沿った溝は東端部を除いて周壁の内側に約0.2m程の間隔を空けて全周することと，11・13・14・20号貯蔵穴埋土よりも確実に後出することから，住居跡構築時の湿気抜き等の目的をもつ施設であろう。この溝が東端部で途切れることと，周壁が内側に入り込んで，主柱穴と思われるピットが接近しすぎることを考えれば，この部分が既に床面に達する削平を受けていたため判断し難いが，本来この台地の高い側に位置していてそれほど湿気抜きを必要としなかったか，あるいは住居跡の入口部になっていたのかもしれない。なお，この周壁の東側外で，崖との間にある小ピットは比較的深さを有している。

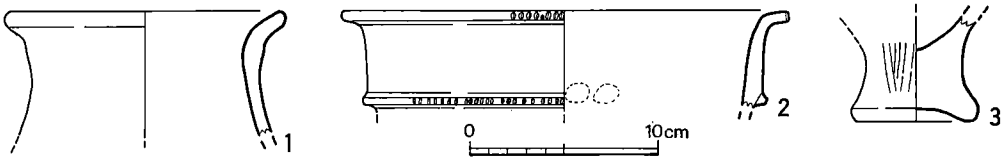
住居跡内埋土からは，弥生土器片と，掻器・石鏃が出土したが，西半部よりも東半分に多めに出土した土器片も図示しうる資料は少ない。

土　器（第64図）壺(1)は内外面共にヘラミガキ調整される口縁部破片で，口縁はゆるく外反する。甕口縁部(2)は，強く外反した如意形の口縁端部と口縁部下にめぐる凸帯にキザミ目をもつもので，凸帯下の器壁は薄くなる。甕底部(3)は厚みの割に底径が小さく，上げ底になるもので，外面に粗いハケ目がみられる。

これらの土器のうち，2は前期末頃，1・3は中期初頭頃の土器で，住居跡下に重複する貯蔵穴群に所属するものであろう。



第 63 図　3号住居跡実測図（1/60）



第 64 図　3号住居跡出土土器実測図（1/4）

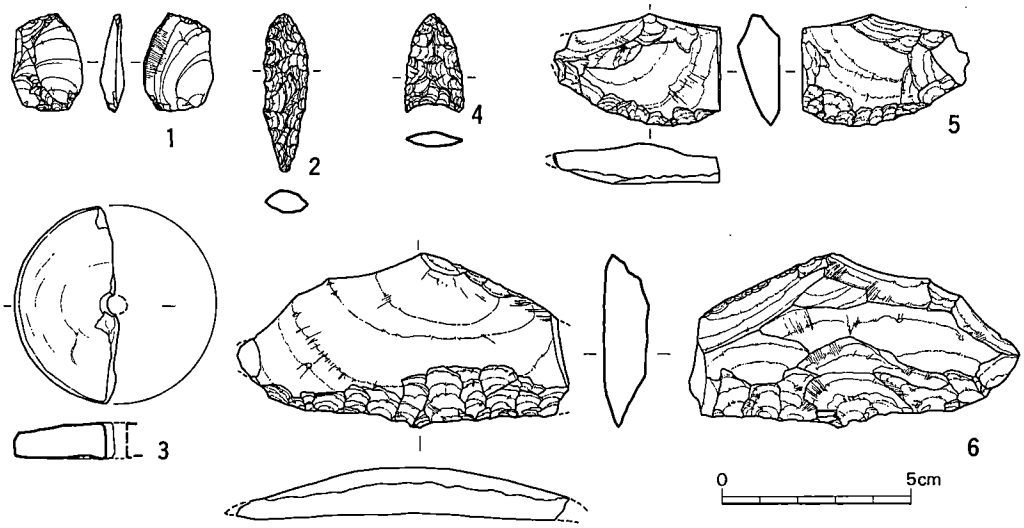
石　器（図版34-2，第65図）1は，黒色を呈す黒曜石の剝片先端部を調整した掻器で，長さ2.6cm，幅1.8cm，最大厚0.7cmを測る。

2は，安山岩製の柳葉形を呈す打製石鏃。全面に調整剝離が及ぶ。長さ4.2cm，幅1.2cm，厚さ0.6cm，重量2.95gを測る。

これらの遺物は、いずれも弥生時代前期に属すと思われる資料で，住居跡に先行する貯蔵穴群に帰属する可能性が高い。住居跡プラン検出時の上層から出土した土器片の中に中期に属す資料もあり，中期の住居跡ではないかと考えている。

4号住居跡（第58図）

調査区の南東部に検出した住居跡で，南半分は調査区域外に拡がる。方形ないしは長方形プランになると思われるが，北西隅以外の隅部は区域外のため，全体の規模は不明。周壁は北壁3.9m，西壁3.3mの長さ以上になり，壁高は0.2m程度を有す。床面はさほど堅緻でなく，床面下の地山は暗黄灰色ないし黄灰色の砂である。多くの貯蔵穴と重複し，調査中連日のように襲



第 65 図　3・4号住居跡出土石器・土製品実測図（1/2）

う霜柱に妨げられて柱穴等の検出に失敗した。ただし西壁から約2m，北壁から約1.5mの位置で約0.45mの深さをもった柱穴様ピットが29号貯蔵穴を掘り込んで検出できており，これが主柱穴の一つになる可能性がある。

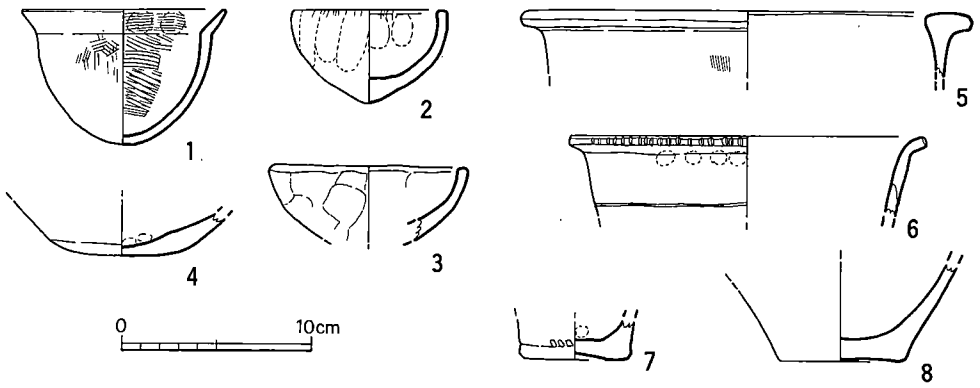
住居跡内埋土から，弥生時代前期～末期の土器片・石鏃・削器・鉄鎌・鉄斧が出土したが，鉄鎌は，南西部の床面直上，調査区域ぎりぎりの位置から出土し，鉄斧は西北寄り埋土のやや上位から出土した。

土　器（図版34-1，第66図）小型の鉢形土器(1)は，復原口径10.8cm・器高7.1cmの大きさ。半球形の体部から外反して口縁が開く。内外面共にハケ目調整されるが，外面はナデ消されている。手捏の鉢形土器(2)は，復原口径8.2cm，器高4.9cmの大きさで，底部は砲弾形を呈す。ユビオサエの残るナデ調整だが，口縁部にシボリ痕も残る。(3)も手捏の鉢か椀であろう。甕底部(4)の外底面は，レンズ状の丸味をもつ。器面は風化するが，外面にハケ目の痕跡，内面にユビオサエ痕がみられる。

甕口縁（5・6）のうち，5は逆L字形の口縁，6は口縁下に粘土帯貼付けの段をもつ如意形口縁部で，6の口縁部外面にはキザミ目が付けられる。また底部（7・8）破片のうち，7は平底の甕，8は器種不明だがナデ調整される器面のうち一部にヘラ状工具による押圧痕がみられる。

これらの土器のうち，5は弥生中期・6は弥生前期に属すもので，8も5・6の時期幅の中におさまるものであろう。1～4は弥生後期後半～終末期に属す。従って，この住居跡に伴う土器は1～4であり，他の土器は住居跡への混入品と考えたい。

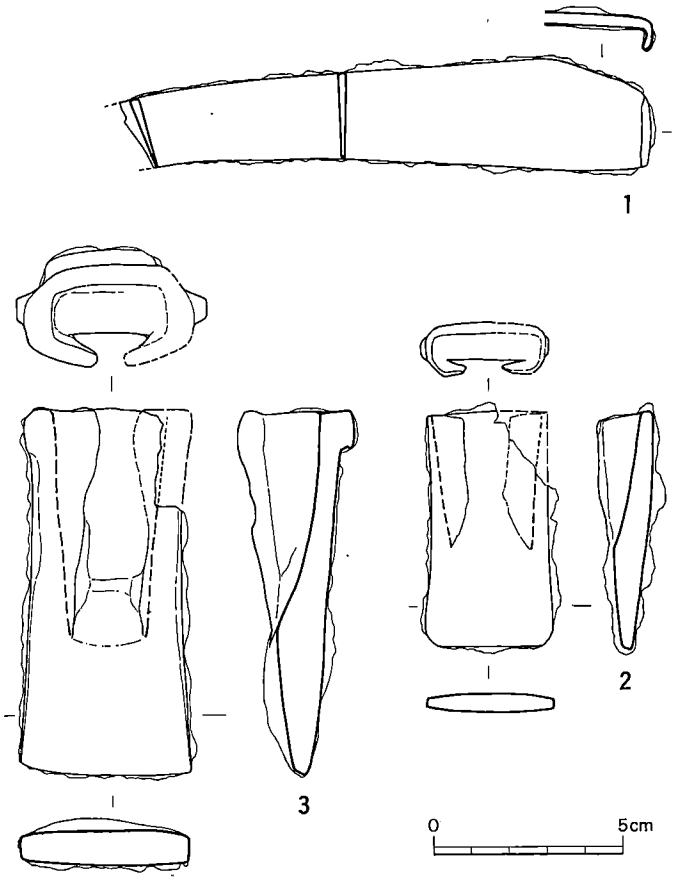
土製品（図版34-2，第65図3）土製紡錘車の半欠資料で，復原外径5.3cm，厚さ0.9cm，重量の現存値13.3gを測る。金雲母・細砂粒を胎土に含み，淡い黄褐色に焼成される。整形は丁寧。



第 66 図　4号住居跡出土土器実測図（1/4）

石　器（図版34-２，第65図）４は，安山岩製の打製石鏃。全面に調整剥離が及ぶ。浅い凹基のもので，長さ2.6cm，幅1.5cm，厚さ0.4cmの大きさの完形品で重量1.5gを測る。

５・６は，安山岩の横長剥片の先端部を調整して刃部にする削器で，５は打面及び打瘤部にも加工が及ぶ。２点共に端部を欠くが，５は長さ4.4cm，幅2.9cm，厚さ1.1cm。６は長さ8.8cm，幅4.6cm，厚さ1.3cmの大きさ。



第 67 図　４号住居跡他　出土鉄器実測図（1/2）

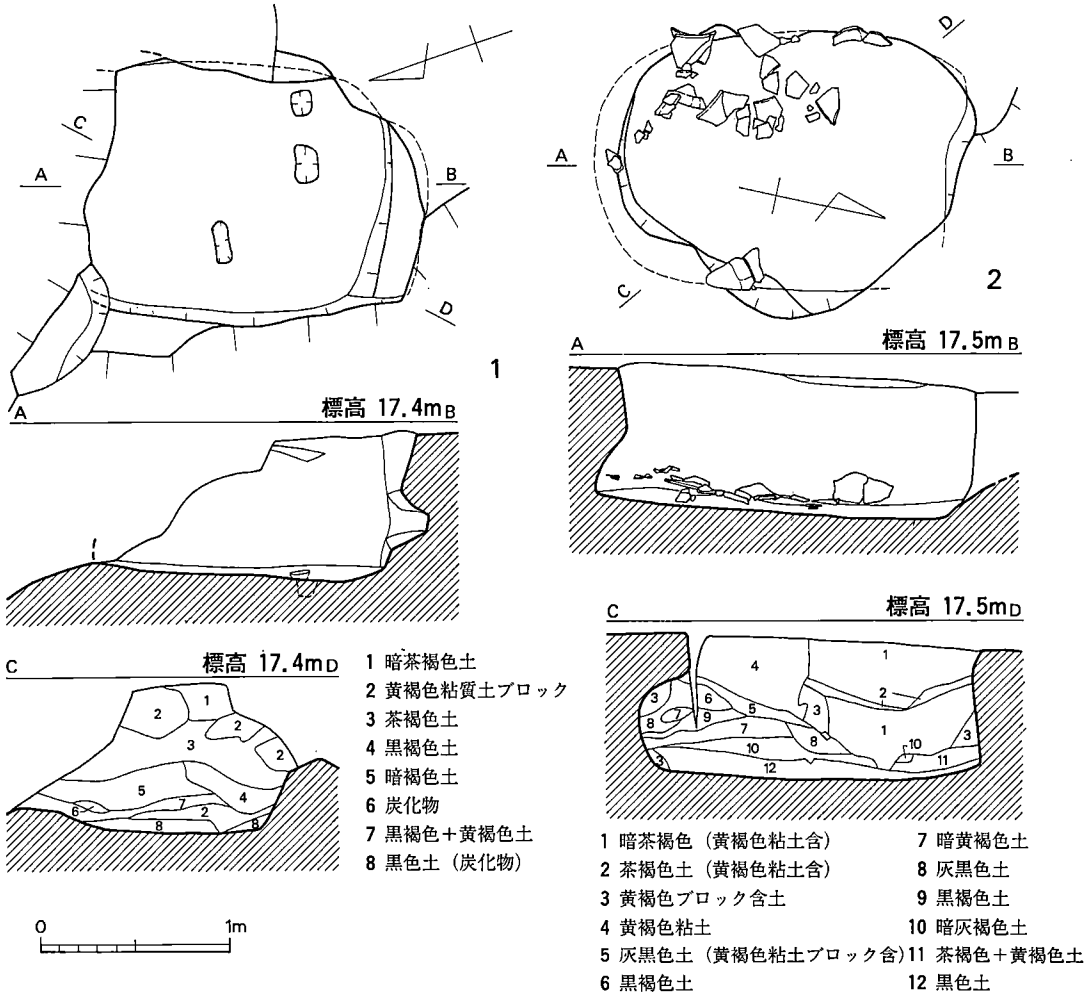
鉄　器（図版34-３，第67図）１は，鉄鎌で先端を欠失するが，長さ14.1cm，最大幅2.9cm，厚さ0.3cmの大きさ。最大幅の位置は，右端部から2.9cmの位置にあるが、背側は端部に向って幅が細まり、折返しのある右端部では幅は1.9cmである。刃部はわずかな内反りになっている。重量の現存値40.8gを測る。鍛造品であろう。

２は，鉄斧で基部の一部を欠失する。両側を折り返してソケットを造り出している。長さ6.2cm，刃部幅3.4cmを測り，袋部に向って体部両側縁はわずかに窄まるが，袋部の幅の現存値は3.4cm，袋部厚さ1.5cmで，重量の現存値44.5gを測る。鍛造品である。

３．貯蔵穴

１号貯蔵穴（図版23-１，第68図）

調査区の北西隅部に位置し，西を大溝，北を崖によって失う。床面は，残存する長辺1.5m，短辺1.3mの広さで隅丸長方形プランであったものと思われる。床面の南半に小孔が３ヶ所あ



第 68 図　1・2号貯蔵穴実測図（1/40）

る。内壁は0.7m程度の高さを残すが，南壁の下位に棚状のオーバーハングがある。埋土中の下位と上部に内壁の崩落土である黄褐色粘土がブロック状にあることから，本来の上縁が更に上位にあったものと考えられる。埋土中から木炭片と土器小片が出土したものの，図示しうる資料はない。

2号貯蔵穴（図版23-2，第68図）

調査区の北西部に位置する袋状竪穴。北東側の一部を崖によって失うが，上縁は1.9m・短径1.1m前後の楕円形を呈す。上縁から0.2～0.3m，下位までは垂直あるいは若干窄まり気味

ながら，それより下位の周壁は南東部で広がり深さ0.7～0.8mの床面に至る。床面は，長径1.85m，短径1.35mの楕円形に近いプランを呈す。堆積土を観察すると南東側の上部内壁が崩落した状況を示しており，上部にかなり窄まっていたと思われる。

貯蔵穴内西南部の床面から5cm程度浮いた位置に中形壺破片がまとまって出土し，壺底部は西壁下面にほぼ接していた。その他，壺2・鉢1・磨製石斧と石剣片かと思える石器片が各1点出土した。

土　器（図版35，第69図）1は，底部がうまく接合していないが口径25.2cm，胴部最大径37.5cm，復原器高45.5cmの中形壺で，口縁部はくの字に外反し，口唇部外面がやや肥厚する。口縁部外面は横方向のヘラミガキ，それ以下はヘラナデ調整されるが，細砂・金雲母を含む胎土で，黄褐色ないし褐色に焼成されている。

2・3は甕口縁部破片。2の口縁部は短く反り，丸味をもっておさまる。口唇端部外面にヘラ状工具によるキザミ目が施される。口縁部から胴上部まではヨコナデ，胴下半はタテナデ調整される。細砂・金雲母・角閃石を含み黄褐色ないし茶褐色に焼成される。復原口径27.4cmの大きさ。3は，口縁と凸帯が一体に整形されるもので口縁部は反らない。外面のキザミ目はヘラ状工具で刻まれている。器面はナデ調整され，褐色に焼成されている。

4は，甕胴部破片で低い凸帯にはヘラ状工具による長めのキザミ目が付されている。細砂を多く含み黄褐色に焼成されている。

5は鉢の底部破片で底径8.0cm。内外面共ヘラミガキの痕跡をとどめる。やや軟質の焼成で暗灰色味を帯びた黄褐色を呈す。これらの土器は前期後半頃であろう。

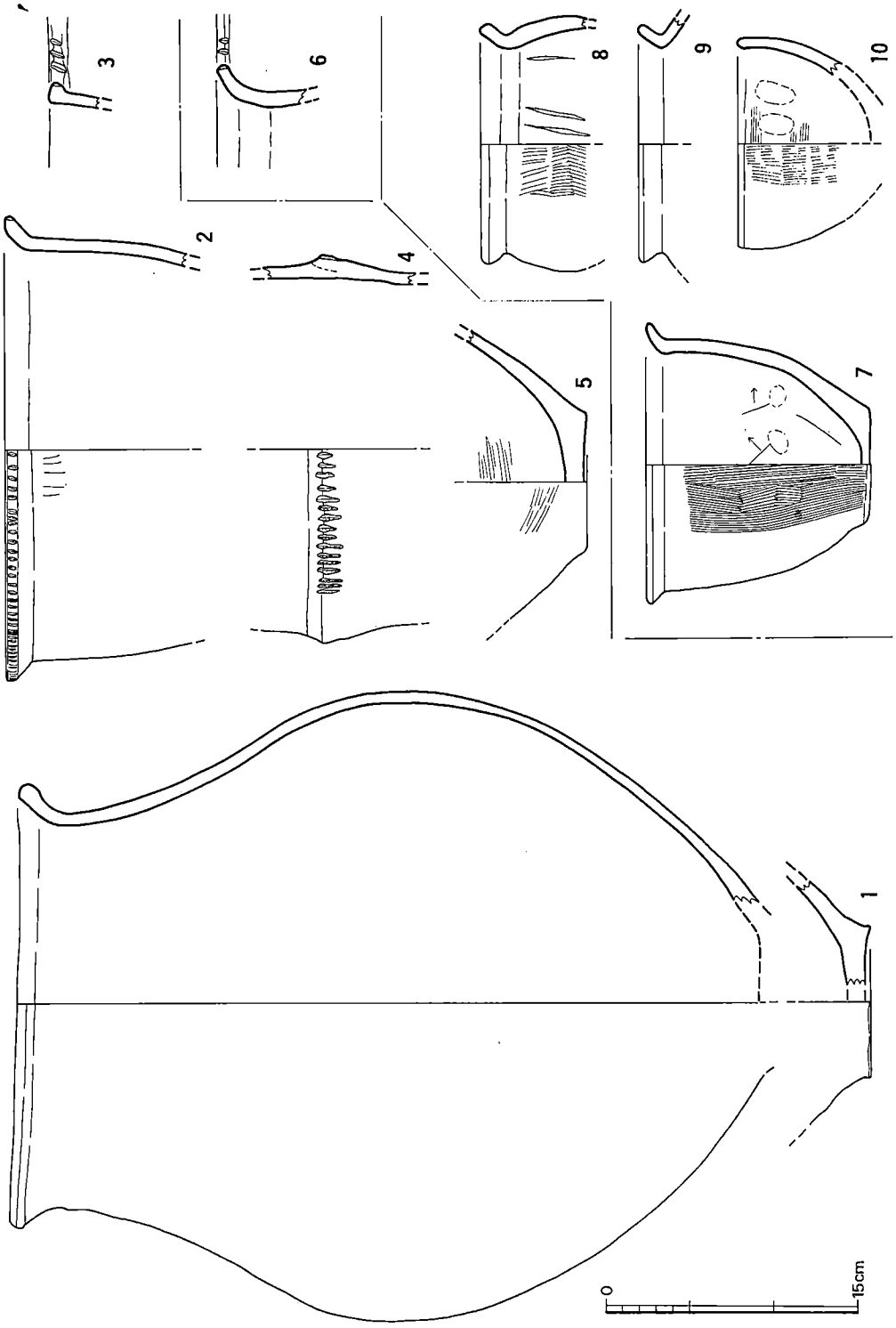
石　器（図版38-2，第96図）1は玄武岩製の磨製石斧で，折損品の再利用であろう。頭部・刃部共に剝離が加わっている。現存長8.45cm，幅6.4cm，厚さ3.1cm，重量127gを測る。

2は，硬砂岩を研磨した石器の小破片で，全体の形状は不明。オリジナルな面では研磨痕が顕著だが，磨製石剣かとも思える資料である。幅5.6cmを測る。

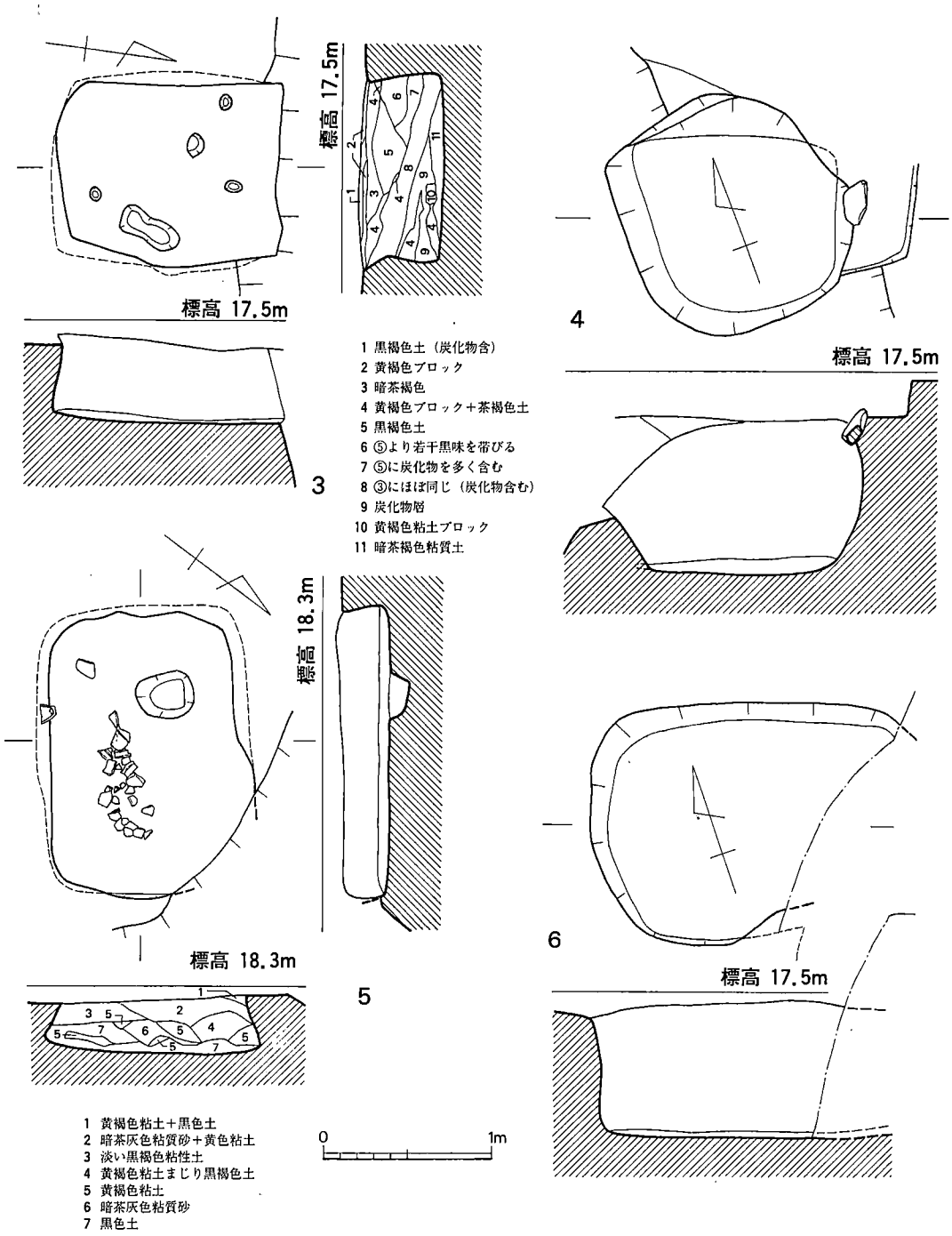
3号貯蔵穴（図版23-3，第70図）

調査区の北部，3号住居跡中央部の床面下に位置し，北側を崖で失う。上縁は長辺1.3m以上，短辺1mを測る不整な長方形であっただろう。約0.5mの周壁はわずかに裾広がりで，地山の黄褐色砂質粘性土と暗黄灰色粘質砂の境目で床面になる。床面は現存長1.35m，幅1.15mの長方形に近いプランを呈し，東側に直径0.15m程度の浅いピットが重なり，南・西壁寄りと中央寄りに直径・深さ共に0.10m以下の小ピットがある。

土　器（第69図）6は緩やかに外反する甕口縁部破片で，口唇部外面にヘラ状工具によるキザミ目が付される。この他に，床面より少し浮いた位置から壺底部破片が出土したものの，脆弱で水洗時に崩壊し，図示しえなかった。



第69図　2～4号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）



第 70 図　3～6号貯蔵穴実測図（1/40）

4号貯蔵穴（図版24-1，第70図）

1・2住居跡・大溝と重複する位置にあり，大溝によって西半分を大きく切られる。上縁形は不整円形であろうか。東側上縁に長さ25cm，幅20cm，厚さ6～7cmの扁平石が，落ち込み加減にある。この石については，1号住居跡の項でも述べたが，1号住居跡の柱を支える石であった可能性があり，貯蔵穴埋土中に内壁崩落土がかなり含まれることからみても，この貯蔵穴に伴う石とは考え難い。

貯蔵穴の床面は，長辺1.2m，短辺0.8mの不整方形プランを呈し，深さは0.9mを有す。

埋土の上部から，拳大よりやや大きめの軽石が1点出土したものの，軽石に加工痕がはっきりしないので図示しなかった。

土　器（図版35，第69図）いずれも埋土上部から出土したもので，1・2号住居跡，大溝埋土出土破片と区別し難いものが多い。7の土器は，完形になる鉢だが，大溝埋土・1号住居跡埋土・4号貯蔵穴埋土から出土した破片が接合する。口径16.3cm，器高13.3cm，底径6.8cmの大きさで，口縁部は外反する。外面はハケ目調整，内面は板状工具によるナデ調整。細砂粒・金雲母を胎土に含み，灰褐色に焼成される。胴下半から底面の一部にかけて黒斑がある。

8は，埋土のやや下部から出土したが，8・9共に，くの字に外反する口縁部を有し，外面には縦方向のハケ目を認めることができる。8の内面には板状工具によるナデ痕がみられる。

10は，口径12cmの大きさの直口縁の鉢で，外面は縦方向，内面は横方向のハケ目が施されている。細砂・角閃石・金雲母を含み，灰褐色に焼成されている。

これらの土器は，弥生時代後期以降の土器で，この貯蔵穴に伴うよりむしろ，2号住居跡等に伴う可能性がある。

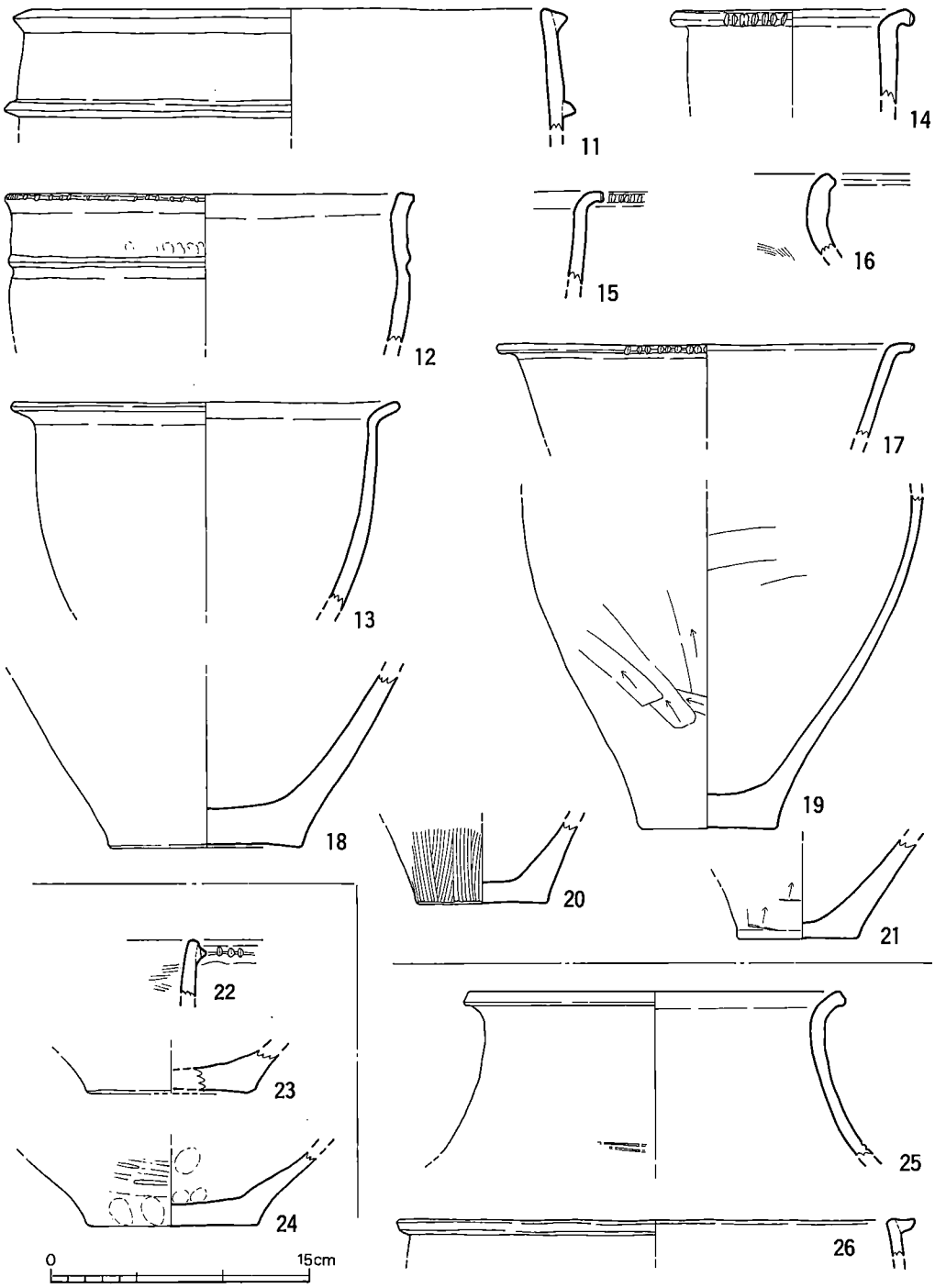
5号貯蔵穴（図版24-2・3，第70図）

調査区の東部に位置する長方形プランの袋状竪穴で，北隅部を崖で失う。上縁の長辺1.6m・短辺1mで，床面に向って広がる周壁は0.3mの高さのみ残る。床面は長辺1.7m，短辺1.2mの隅丸長方形プランを呈す。床面より5cm程度浮いた高さに土器片がややまとまって出土した。

土　器（図版35，第71図）11は，復原口径29.5cmを測る破片資料で，もう少し傾きは開くかもしれない。口縁端部と口縁下に三角凸帯を付しており，凸帯上にキザミ目はない。砂粒を多目に含み焼成はあまい。

12は，わずかに外反する口縁部をもつ甕の上半部で口径22.3cmの大きさ。口唇部外面に小さなキザミ目が付くものの，口縁部下につまみ出された低い凸帯にはキザミ目がない。内外面共にナデ調整されるが，胎土には細砂粒がかなり含まれる。

13は，復原口径22.1cmの外反する口縁部を有す甕で，内外面共に横方向のヘラミガキがみ



第 71 図　5～8号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

られる。口縁部にキザミ目はない。14・15は，如意形口縁をもつ甕の口縁部破片で，口縁部外面にヘラ状工具によるキザミ目が付されている。

16は，小破片のためはっきりしないが，壺の口縁部であろう。口縁部直下がわずかに肥厚する。内外面共に，横方向にヘラミガキされるが，内面の下のハケ目の痕跡がある。

17は，如意形口縁を有す鉢の口縁部破片で，復原口径24cmの大きさ。口縁部上面がわずかに凹み気味で，外面にヘラ状工具によるキザミ目が付される。

18～21は甕の底部破片で，胴上半部を欠く。19では残存高19cm，底径8.2cmを測り，内外面共に板状工具によるナデ調整がみられる。内底面と胴部の上位に煤の付着がある。

6号貯蔵穴（第70図）

調査区の南西部にある袋状竪穴で，一部調査区域外にかかる。隅丸長方形プランを呈し，深さは0.80mを有す。上縁は崩落によって広がっているが，床面は長辺1.62m，短辺1.25mの規模である。遺物の出土量は少ない。

土　器（第71図）22は，口縁端部外面の三角凸帯にキザミ目が付されるもので，内面に板状工具によるナデ調整痕がある。

23・24は底部破片。壺底部の24は，外面に横方向にヘラミガキがみられる。　（小池）

7号貯蔵穴（図版25-1・2，第72図）

3号住居跡の南側に位置し，北壁は住居跡に切られ，南壁は8号貯蔵穴と重複する。上面・床面とも隅丸長方形を呈し，断面はフラスコ状をなす。上面幅1.08m，床面幅1.34m，深さ0.69mを測り，床面は平坦である。

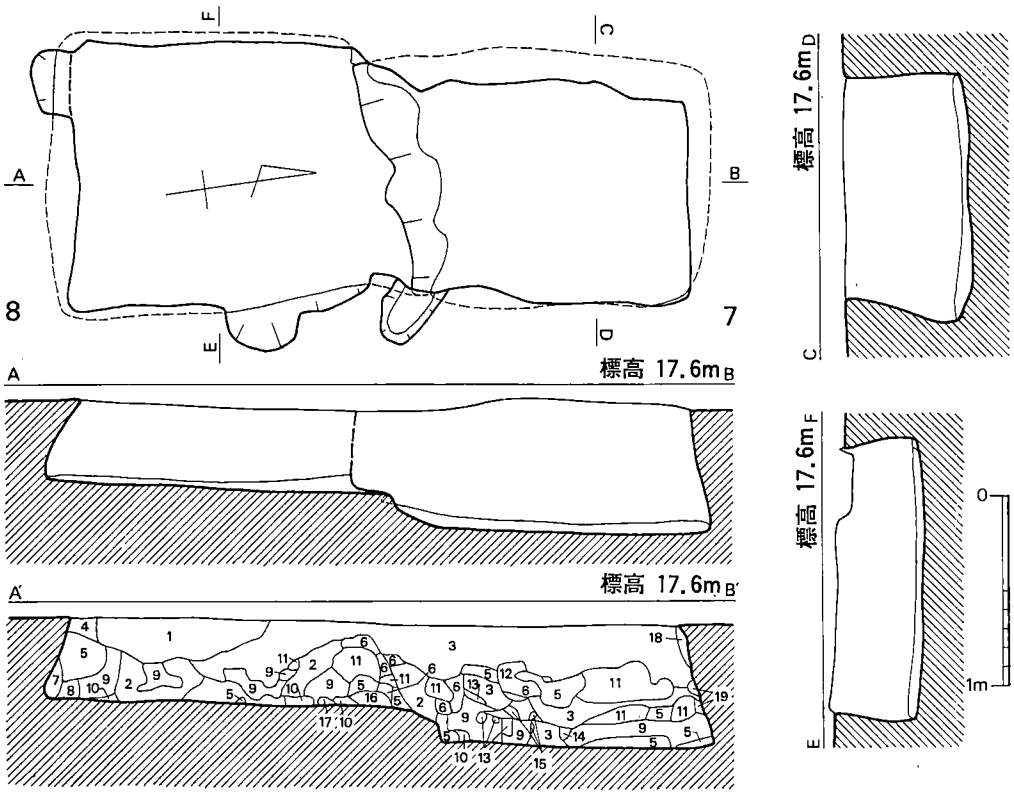
8号貯蔵穴との前後関係は，土層の堆積状態からみて7号貯蔵穴の方が新しい。

8号貯蔵穴（図版25-1・3，第72図）

調査区中央の南寄りに位置し，7号貯蔵穴に切られる。上面・床面とも隅丸方形を呈し，断面はフラスコ状をなす。上面幅1.37m，床面幅1.48m，深さ0.45mを測る。床面は北側に緩傾斜している。

土　器（第71図）25は復原口径21.3cmを測る壺の口縁部破片で，八字状を呈する。口唇部は若干窪む。肩部にはヘラ描き沈線を2条巡らせている。調整は，内外面ともヘラミガキで，口唇部はヨコナデ。焼成は良く，内面が褐色，外面は黄褐色を呈す。26は復原口径30cmあまりを測る甕の口縁部破片で，貼付口縁である。調整はヨコナデ。長石・石英粒子を多く含み，黄褐色を呈する。

時期は，弥生時代前後後半であろう。　（小田）



1 黒茶色土―黄褐色土・赤褐色土のブロックと白色砂粒まじる
2 ①よりも黄褐色土のブロックが少ない
3 黒茶色土―①ほどブロックは混じらない
4 灰茶色土
5 黒色土
6 黒色土のブロック
7 黄褐色土と黒色土の混合土
8 ④に地山の灰色砂粒が混じった土
9 黒色土と黄褐色土との混合土
10 黒茶色と黄灰色砂粒との混合土
11 黒赤褐色土のブロック
12 黒赤褐色土
13 灰白色砂のブロック
14 灰白色砂と明赤褐色土とのブロック
15 明赤褐色のブロック
16 明赤褐色土に灰白砂粒まじる
17 灰白色砂粒
18 茶褐色土
19 黄灰褐色砂質土ブロック

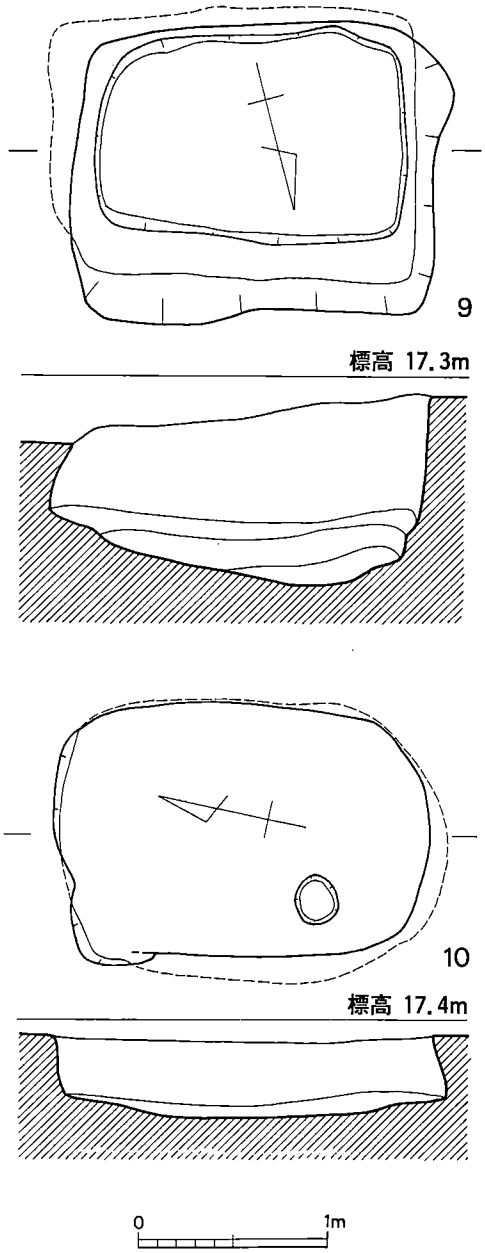
第 72 図　7・8号貯蔵穴実測図（1/40）

9号貯蔵穴（図版26-1・2，第73図）

調査区の東端に位置する袋状の竪穴。上縁は長辺1.92m，短辺1.51mの長方形プランで，深さ1.49mで床面に達し，床面は長辺1.50m，短径1.05mの不整な長方形プランである。埋土の堆積状態から、本来北側の上縁はもっと狭かったものと思われる。

土　器（図版35，第74図）27はやや大型の甕で，三角口縁下に2条の三角凸帯を貼る。凸帯

上にキザミ目はない。28・32は中型の甕で，28は如意形口縁下に三角凸帯を貼る。29・30・31は小型の壺で，30の肩部破片には連弧文が描かれている。33は小鉢である。　　（赤川正秀）



第 73 図　9・10号貯蔵穴実測図（1/40）

石　器（図版38-2，第96図3）安山岩製の掻器で，ほぼ完形。横長剝片を素材にしている。刃部には使用による磨耗が認められる。長さは6.4cm，最大幅2.3cm，厚さ1.2cm，重量17.1gを測る。

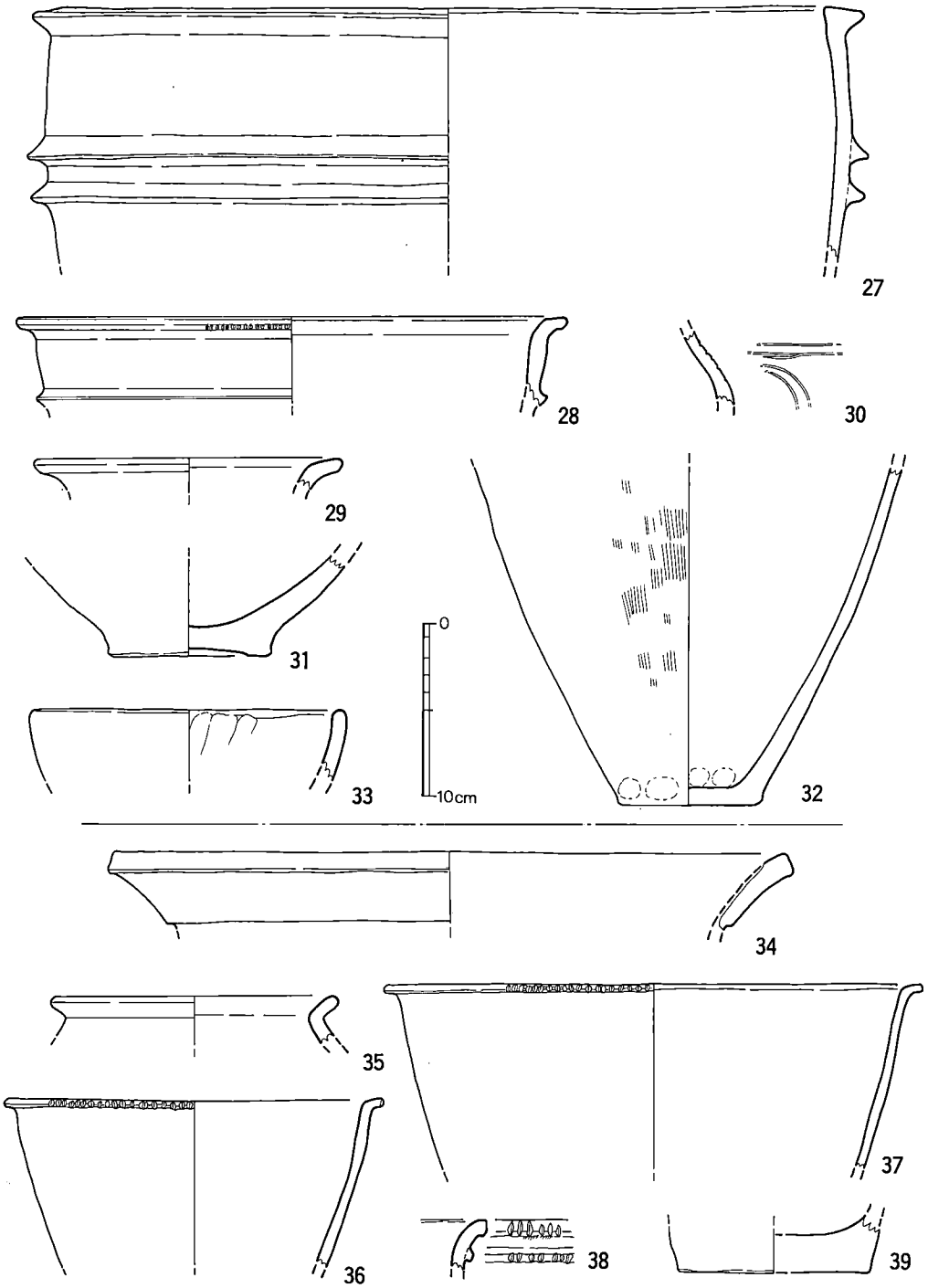
土製品（図版38-3，第92図4・5）2点共に土器片再利用の土製円板。周縁を打欠き調整するが，5は周縁に研磨が加わっている。4は未製品であろうか。4の径4.4～4.6cm，厚さ0.9cm，重量18.6g，5の径3.3～3.7cm，厚さ1cm，重量11.8g。

10号貯蔵穴（図版26-3，第73図）

調査区の北部に位置する竪穴で，3号住居跡の貼床下に検出された。住居跡によって削平されたのであろうが，オーバーハングする周壁は0.35m程度の高さしか残らない。床面は，長径2.00m，短径1.45mの楕円形プランを呈す。床面の中央部は凹み気味になり，南西寄りに浅いピットをもつ。

土　器（第74図）34・35は小破片からの復原で，径・傾きに誤りがあるかもしれないが，壺の口縁部破片。34は口縁部下に粘土帯貼付けの段を有す。35の口縁部は外反し，横方向のヘラミガキが認められる。

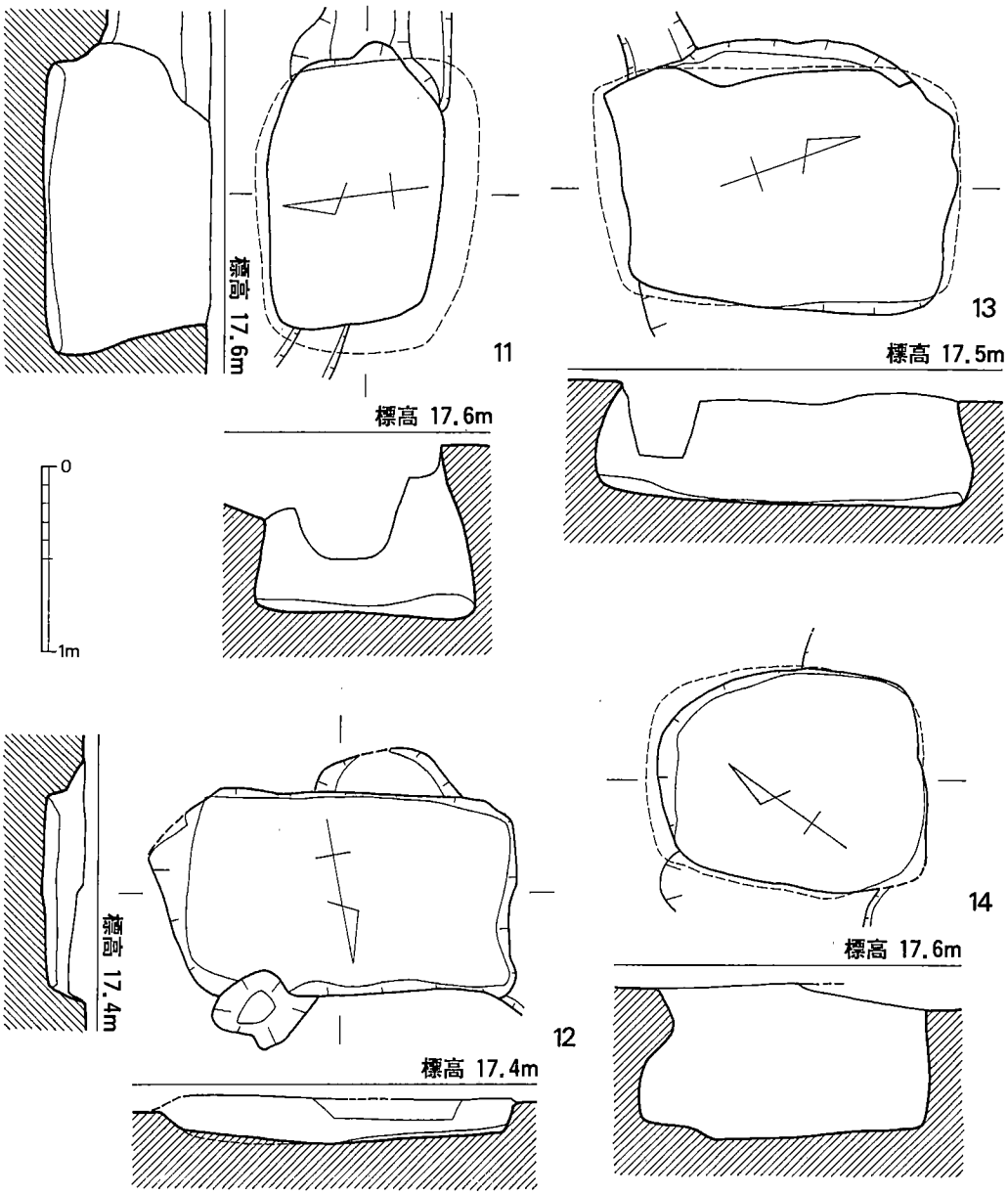
36・37は如意形口縁部をもつ甕。口縁部外面にキザミ目を有し，外面には煤が付着している。38も如意形口縁部の甕で，口縁部にキザミ目をもつが，口縁部直下にキザミ目凸帯が貼付けられている。39は平底の底部破片。内外面共にナデ調整されている。



第 74 図　9・10号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

11号貯蔵穴（図版27-1，第75図）

調査区の中央部に位置する袋状竪穴で，3号住居跡の周壁に上部を切られている。南西側の周壁では，深さ0.90mを有し，100°～105°の傾斜をもって床面に拡がる。床面は長辺1.55m,



第 75 図　11～14号貯蔵穴実測図（1/40）

短辺1.20mの隅丸長方形プランを呈す。埋土出土土器片は細片で図示しえない。　(小池)

12号貯蔵穴（図版27-2，第75図）

調査区の中央北寄りに位置する竪穴で，3号住居跡の貼床下から検出した。上縁はかなり削平されており，長辺で最大1.99m，短辺1.11m。不整な長方形プランであるが，床面プランの状況から長辺は1.90m程と思われる。深さは0.20～0.25m程で，床面は長辺1.75m，短辺1.00m程の長方形プランである。

土　器（第76図）40は甕の口縁で，口縁下に三角凸帯を貼付ける。41は甕のやや厚みのある底部。　(赤川)

土製品（図版38-3，第92図1）外径3.6～3.9cm，厚さ1.2cm，孔径0.4cmの土製紡錘車で，ほぼ完形。重量の現存値は20.5gを測る。細砂・金雲母を含む精良な胎土で淡茶褐色ないし黒褐色に焼成されている。各面共ナデ調整されている。

13号貯蔵穴（図版27-3，第75図）

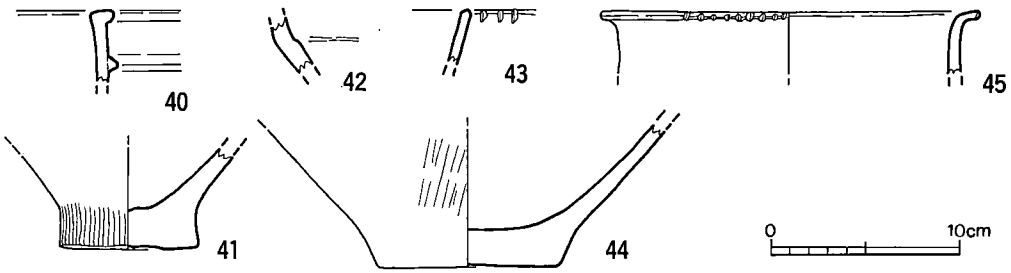
調査区の中央部東寄りに位置し，大半が3号住居跡の貼床下に入っていた。深さは0.70mを有し，周壁は外弯して床面に広がる。床面は長辺1.95m，短辺1.25mの隅丸長方形を呈す。埋土中に黄褐色粘土の大きめな塊が多く混じり，黒褐色・暗茶褐色の粘性土が堆積していた。

土　器（第76図）42は小破片だが，壺の肩部であろう。ヘラミガキされる外面に僅かな段がある。43は単口縁の甕口縁部破片。口縁端部にキザミ目が付く。44は壺底部で内外面共にヘラミガキされている。

石　器（図版38-2，第96図4）安山岩製削器で，刃部は両面から調整剝離が加えられている。長さ6.1cm，幅4.8cm，厚さ1.2cm，重量35.3gを測る。

14号貯蔵穴（図版28-1，第75図）

13号貯蔵穴の北東側に位置し，西隅の上縁はこの貯蔵穴によって一部切られるが，床面では



第 76 図　12～14号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

重複しない。東側の周壁は，約0.20m下位からオーバーハングし，約0.75mの深さを有すが，西側周壁はほぼ直に立ち上がっている。床面は，長径1.50m・短径1.20mの隅丸長方形プランを呈す。

土　器（第76図45）図示しうる資料はこの１点のみ。如意形口縁の甕で，強く外反する口縁部外面にキザミ目が付されている。口縁部下に凸帯が付くか否かは不明。内外面共にナデ仕上げされており，外面に煤の付着がみられる。

15号貯蔵穴（第77図）

調査区の中央部に位置し，不整形土壙によって東半を切られる。一方，西方で16・17号貯蔵穴とも重複するが，17号貯蔵穴より確実に後出することを確認したものの，16号貯蔵穴との切り合い関係は明瞭ではなかった。

深さ0.75mを有し，南・北の周壁は内傾する。床面は隅丸の長方形プランを呈し，長辺1.60m，短辺1.10mの大きさをもつ。

埋土の中位あたりから，壺・甕・鉢等の土器片，打製石鏃・磨製石剣片，土製紡錘車などが出土した。

土　器（図版35，第78図）46は，復原口径20cmの大きさの壺上半部破片。肩部に凸帯が１条巡り，頸部は直に立ち上がり，口縁部は外反する。胎土に細砂・金雲母・赤色粒を含み，淡黄褐色に焼成されるが，器面は磨滅し調整手法は不明。

47～50は，いわゆる亀ノ甲タイプの口縁を有す甕で，口縁部は厚めの断面三角形を呈し，口縁部下に１条の低い三角凸帯がめぐる。47・50の口縁部内面はわずかにくぼむ。胎土に細砂粒を多量に含み，金雲母・赤色粒を若干含む例もある。48の外面全体に煤の付着がみられる。

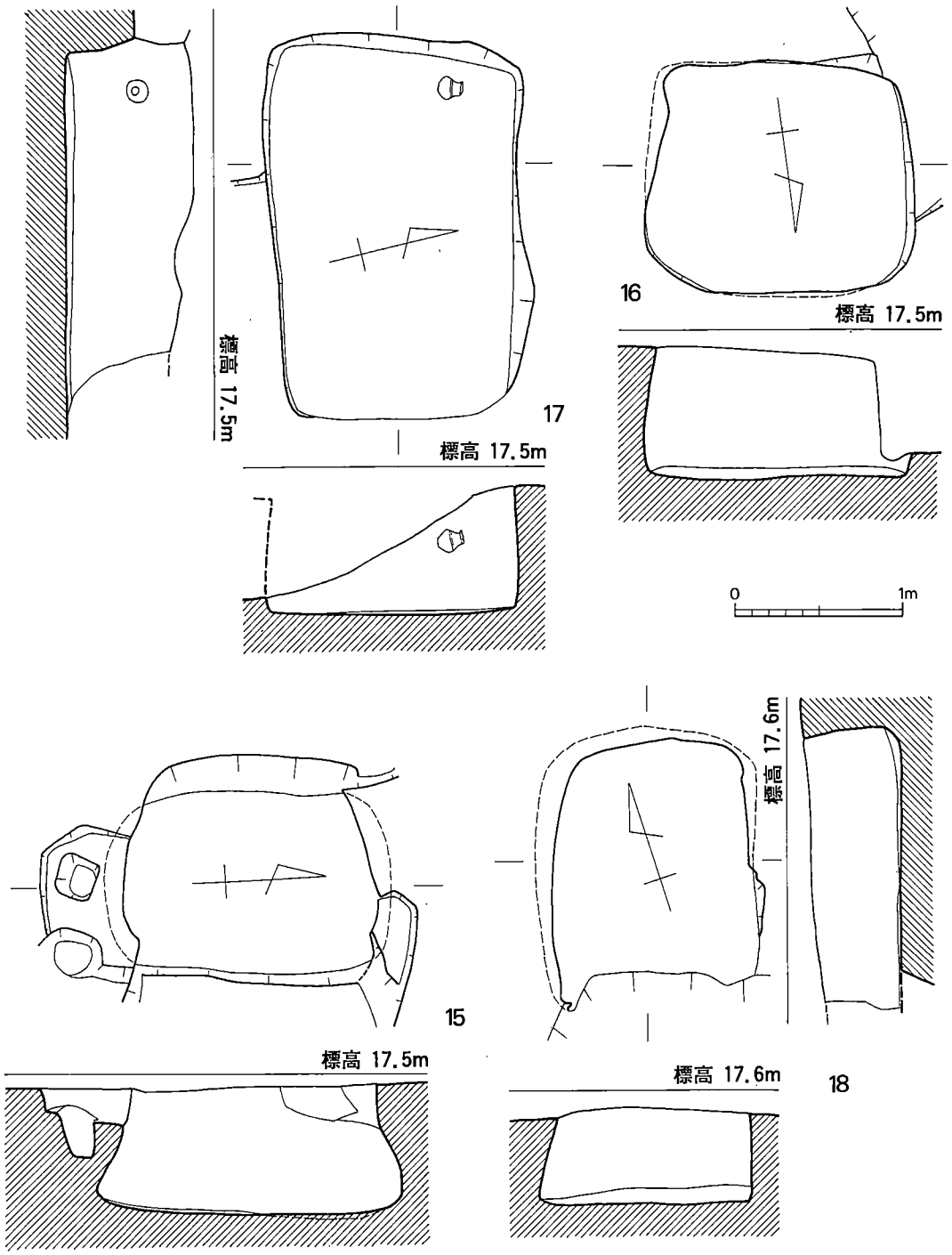
51～53は，如意形口縁をもつ甕で，53のように如意形が先端で短くわずかに屈折し，口縁部内面がくぼみ気味になる例もある。口縁部下に１条の三角凸帯がめぐる。キザミ目は付かない。胎土に細砂粒を多量に含み，金雲母・赤色粒も含まれる。外面は板状工具によるナデ及び，ハケ目調整のあとナデ消されるものの，53はハケ目がそのまま残る。内面はナデ調整だが，52のように凸帯貼付のユビオサエの痕跡を留めるものもある。

54は，如意形口縁で53に近いが，凸帯がめぐらない可能性のあるもの。

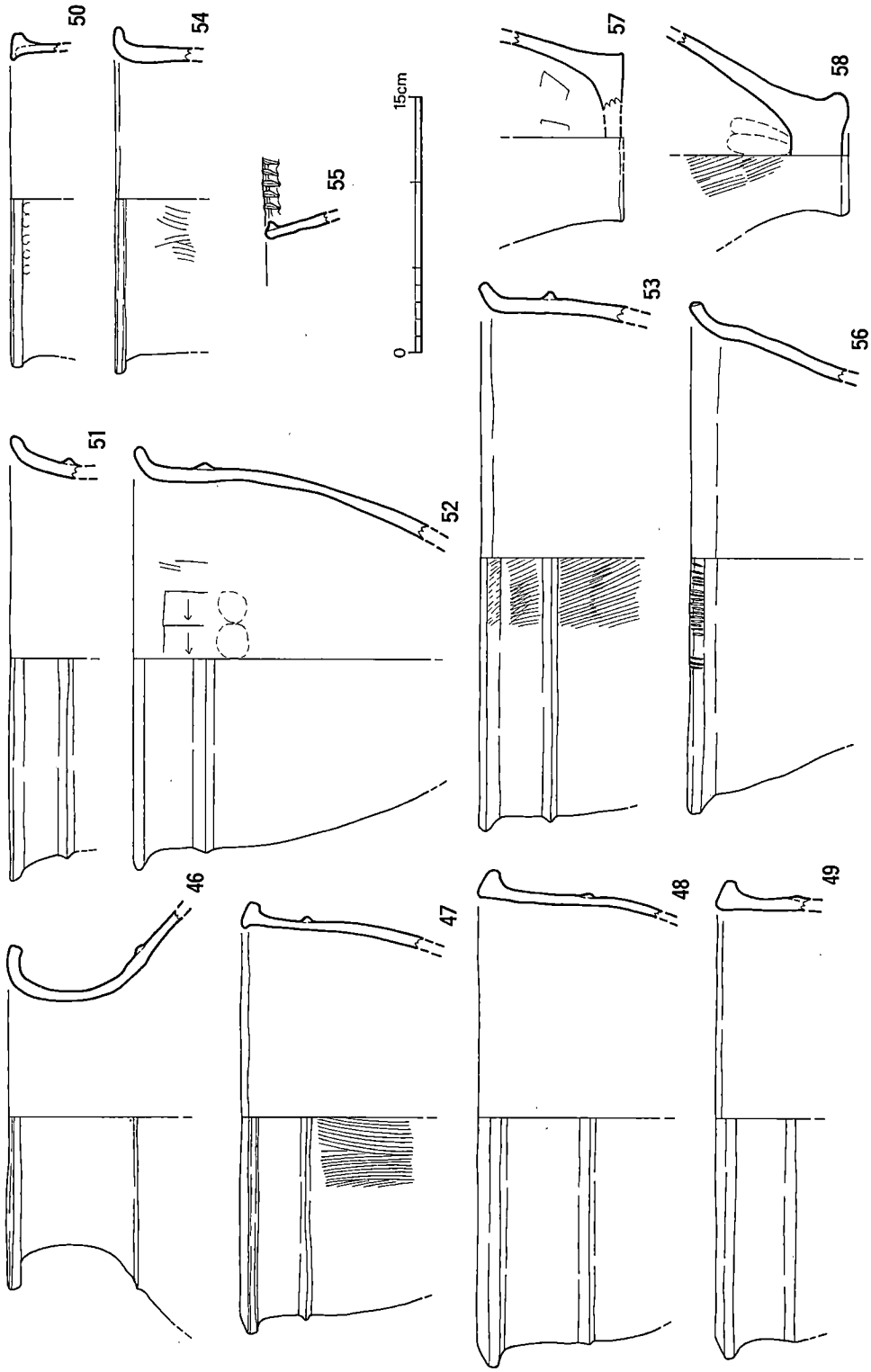
55は，口縁端部の三角凸帯にヘラ状工具によるキザミが付くもの。細砂粒・金雲母・赤色粒を含み，淡茶褐色に焼成されている。

56は，わずかに外反する口縁部をもつ鉢で，口唇部にはヘラ状工具による細かなキザミ目が付される。内外面共にナデ仕上げされる。胎土には細砂粒がかなり含まれ，赤褐色ないし黒褐色に焼成されている。

57・58は，甕の底部。57は平底で，内面に板ナデ痕が残る。外面はナデ仕上げされる。58は



第 77 図 15～18号貯蔵穴実測図（1/40）



第78図　15号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

径が小さく且つ厚みのある底部で上げ底になる。底面にはハケ目がみられ，内面にはユビオサエ痕が残る。

これらの土器では，壺の頸部に凸帯がめぐること，甕に亀ノ甲タイプのものがみられること，凸帯にキザミ目がみられなくなることなどからして，中期初頭頃を考えるべきであろう。

石　器（図版38-２，第96図）５は黒色黒曜石製の打製石鏃で，全面に調整剝離が及ぶ。先端・基部端を一部欠くが，長さ2.0cm，幅1.7cm，厚さ0.3cm，重量の現存値0.7gを測る凹基式の石鏃だが，わたぐりは浅い。

６は，粘板岩製の磨製石剣基部破片。基部は側面・端面共に平坦に面取りされ，両側面共に２ケ所づつ浅い抉りが設けられる。基部から刃部へは緩やかに広がり，刃部は両面から研がれ，ほぼ中央に鎬をつくる。現存長5.2cm，現存刃部幅3.2cm，厚さ0.8cm，基部幅は1.9～3.1cm，基部長3.5cm，重量の現存値20.5gを測る。

土製品（図版38-３，第92図２）完形の紡錘車で，各面共にくぼみ気味に整えられているが，穿孔部はわずかに膨らむ。細砂粒・金雲母を含むが精良な胎土で，淡褐色に焼成されている。外径4.2cm，厚さ1.4cm，孔径0.5cm，重量25.6gを測る。

16号貯蔵穴（第77図）

15号貯蔵穴と大溝の間にあり，大溝に切られるが，15号貯蔵穴との関係ははっきりしない。また，大溝に流下する小溝が重なっており，埋土の上半を失う。なお北側に重なる17号貯蔵穴よりは後出する。深さ0.80mの深さを有し，壁は内傾する。床面は隅丸方形に近い形を呈し，長辺1.55m，短辺1.35mの広さで，淡灰褐色の砂が露呈している。遺物の出土は極めて少ない。

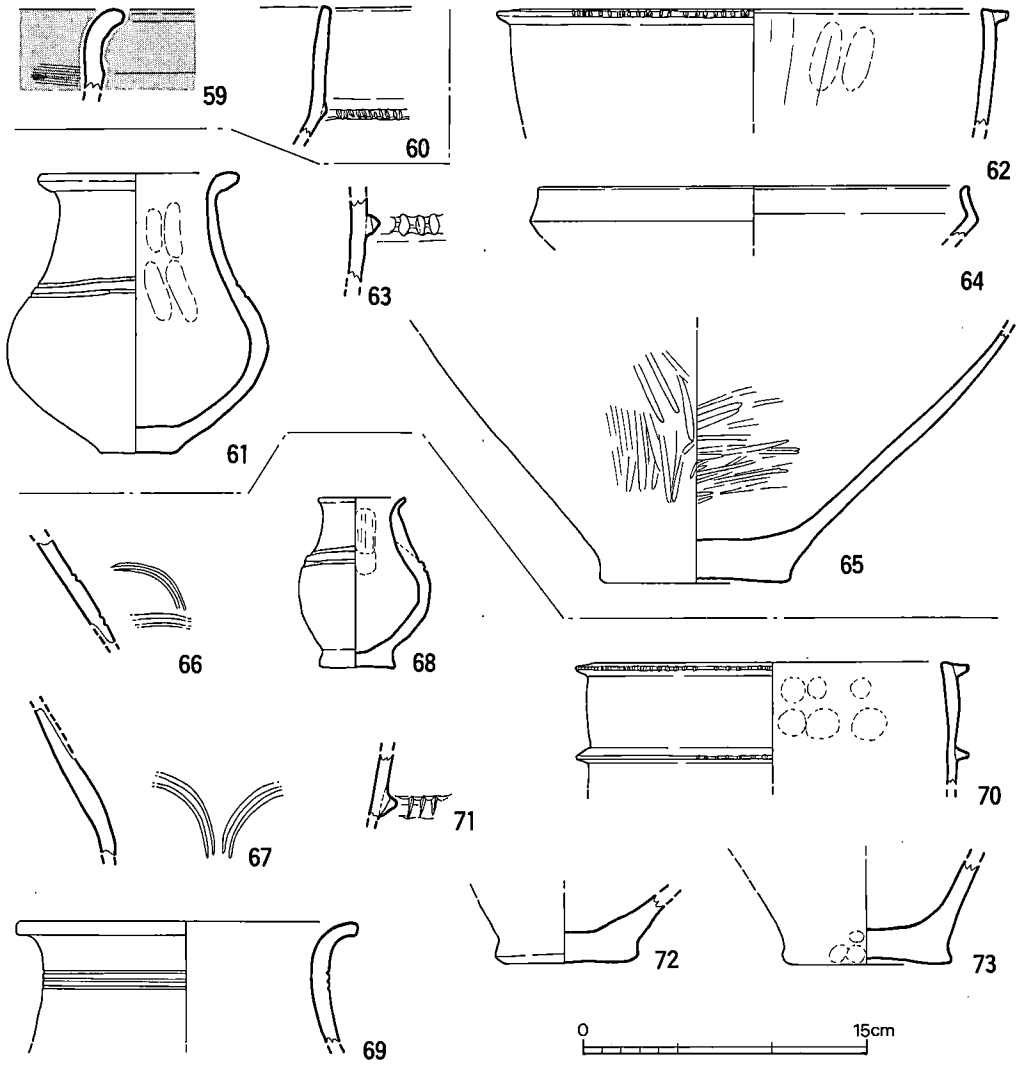
土　器（第79図）59は，壺の口縁部破片で，内外面共に赤色顔料塗布の痕跡がみられる。外反する口縁部下に低い段がある。内面の下位はハケ目のあとをナデているが，それ以外の部分は横方向のヘラミガキ調整されている。

60は，鉢の口縁部破片であろう。胴上半の屈折部に三角凸帯がめぐり，ヘラ状工具による細かなキザミ目が付される。細砂粒・赤褐色粒を胎土に含み，黄褐色に焼成されるが外面の調整は磨滅のために不明。

17号貯蔵穴（図版28-２・３，第77図）

16号貯蔵穴の北側に重複する貯蔵穴で，西側を大溝，東と南側を15号と16号貯蔵穴によって切られ，南半分はほとんど残らない。なお北側に重複する18号貯蔵穴よりは後出する。深さは0.75mを測り，長辺2.00～2.20m，短辺1.30～1.40mの長方形プランの床面をもつ。

埋土中から出土した遺物はそれほど多くないが，北西部のほぼ中程の深さの位置から，口縁部の一部を欠く程度のほぼ完形の壺が出土している。



第 79 図　16～18号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

土　器（図版35，第79図）61はほぼ完形の壺で，口径10.7cm，器高14.7cm，胴部最大径13.8cmの大きさ。胴最大径の位置は下位にあり，緩やかに反りながら窄まる頸部から，肥厚した口縁が外反する。肩部には２条のヘラ描き沈線が巡る。外面は全体に横方向のヘラミガキで調整される。細砂粒・金雲母を胎土に含み灰褐色に焼成されている。

62は，口縁端部にキザミ目のある貼付凸帯を有す甕で，外面ナデ仕上げされ，内面に板ナデ痕が残る。63は，口縁下にキザミ目のある貼付凸帯を有す甕の破片で，キザミは62に比して大きい。内外面共にナデ仕上げされている。

64は鉢か高杯かの区別をし難いが，く字形に屈折して内傾する体部と，わずかに外反する口

縁部をもつ。内外面共に横方向にヘラミガキされ，褐色に焼成されている。

65は，壺の底部で，底径10.1cmの大きさ。胴外面は縦方向，内面は横方向にヘラミガキ調整される。胎土に細砂粒・金雲母粒を多く含み，暗灰褐色に焼成されている。

18号貯蔵穴（図版29-1，第77図）

17号貯蔵穴の北側に位置し，17号貯蔵穴によって短辺側の一辺を切られる。上縁では長辺約1.5m，短辺1m前後の大きさで，約0.55m下がった床面の長辺1.6m以上，短辺1.2mの隅丸長方形を呈す底面に向かって，内壁は下に拡がる。

埋土は黒色・暗灰色の色調を呈す粘性土で，上縁から0.45m下がった高さの中央部に焼土が広がっていた。なお内壁に沿って0.2m前後の幅の部分はこの焼土が及ばない。

埋土中の遺物は，この焼土面及びそれより上位から出土し，焼土より下位からは遺物の出土は皆無である。

土　器（図版36，第79図）66・67は，複数連弧文を有す壺肩部破片で，外面はヘラミガキされている。

68は，完形になる小形壺で，口径4.6cm，器高8.9cm，胴最大径6.9cm，底径4.0cmを測る。肩部に2条のヘラ描き沈線が巡り，緩やかに窄まる頸部から外反する口縁部は薄い。底部は円盤貼付手法のそれに似た形を留めており，古い段階の壺を模倣したものであろうか。内外面共にナデ仕上げされ，頸部内面にはシボリ痕と指ナデ痕が残る。細砂粒・金雲母を胎土に含み，暗灰褐色ないし灰褐色に焼成されている。外底部にうるし状の膠着物がある。

69は，頸部の中程にヘラ先による浅い沈線が3条巡る壺口縁部破片。外面は磨滅しておりはっきりしないが，ヘラミガキされているようだ。

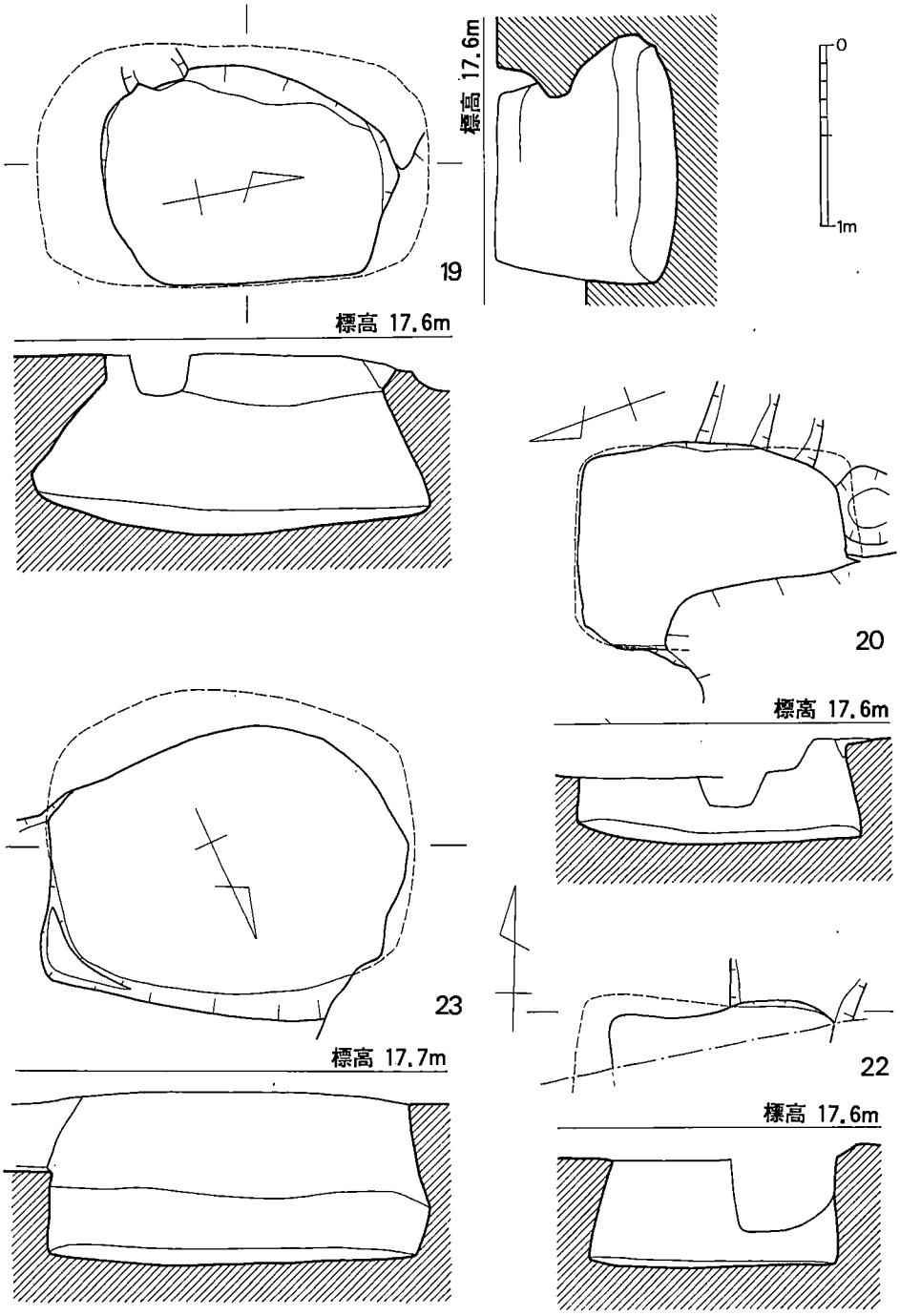
70は，口縁端部を口縁部下位にキザミ目のある貼付凸帯を有す甕で，外面はヨコナデ仕上げされ，内面はナデ仕上げされる。復原口径20.7cmを測る。胎土に細砂・金雲母・角閃石を含み灰褐色に焼成されている。71は，同様の甕と思われる胴部破片だが，凸帯上のキザミ目は深く長い。

72・73は，甕底部破片。平底でナデ調整されるが，底径9cmを測る。73の外底面には布状の圧痕がみられる。

これらの土器はいずれも弥生前期末におさまるものである。

19号貯蔵穴（図版29-2・30-1～3，第80図）

調査区の中央部西寄りに位置する袋状竪穴で，3号住居跡によって北東側の一部を切られる。上縁は長径1.55m，短径1.10mの不整な楕円形を呈すが，西側の内壁の状況からみて短径は更に狭かったものと思われる。深さ0.9m前後で床面に達すが，床面は隅丸長方形に近いプラン

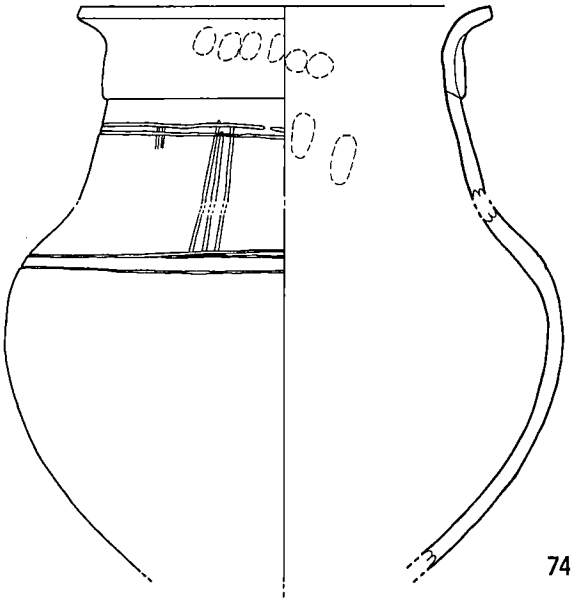


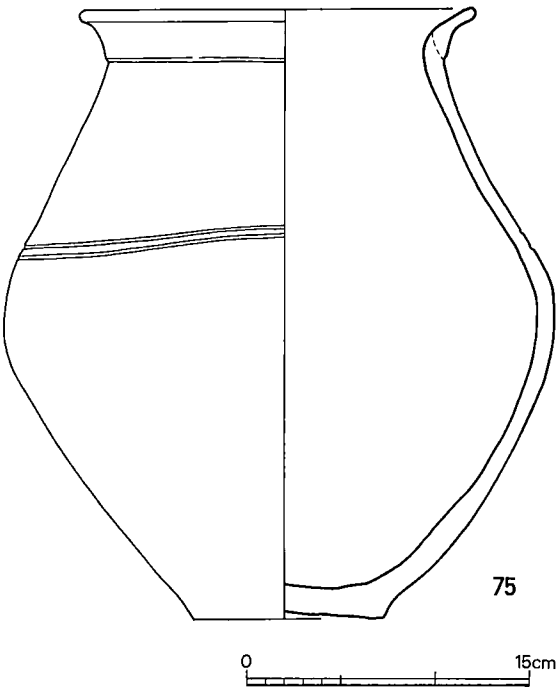
第 80 図 19・20・22・23号貯蔵穴実測図 (1/40)

で，長径2.15m，短径1.30mの規模をもち，中央部に向かってくぼむ。内壁はかなり急傾斜に内傾するが，壁面の地山は淡黄茶褐色の砂質粘土，床面と北壁の下部は黄色味が強くなり砂質が強くなる。

埋土中には黒色土と黄色粘性土の混じる黒色土が堆積する。床面から0.05～0.10m浮いた西及び南西壁側の位置に集中して土器の出土をみたが，壁面に接しているものも多い。土器以外には黒曜石製石刃・安山岩製削器が各1点出土した。

土　器（図版36・37，第81～85図）74は，復原口径22cmの壺で，肩部以下と直接接合しないので，胴部最大径・器高の復原に不安が残る。口縁部は強く外反し頸部との間に粘土帯貼付けによる段をもつ。内外面共に横方向のヘラミガキ調整され，粘土帯貼付け部にはユビオサエ痕が残されている。頸部と肩部にそれぞれ2条のヘラ描き沈線が巡り，それを連結するように2・3条単位の沈線が垂下するが，垂下する沈線の方





第 81 図　19号貯蔵穴出土土器実測図①（1/4）

が先に描かれる。細砂粒・角閃石粒などを胎土に含み，茶褐色に焼成されている。

75は，口径21.0cm，器高32.1cm，胴最大径29.3cmを測る壺で，ほぼ中位に最大径がある。肩部から頸部にかけては直線的に窄まり，口縁部は短く外反し粘土帯貼付けによる段をもつ。内外面共上半部は横方向にヘラミガキ調整され，胴下半の外面は左上がりの斜方向にヘラミガキ調整されているが，下部の方は雑になる。肩部に2条のヘラ描き沈線が巡る。細砂粒・角閃石・金雲母粒を胎土に含み，茶灰色に焼成されているが，胴下半の器面剝離が進んでいる。

76は，胴最大径34.1cm，残存器高38.6cmの壺で，口径は19cm前後になろう。口縁部は外反するが，粘土帯貼付けはみられず，そのまま口縁になるものと思われる。緩やかに窄まる頸部をもち，肩部のやや上位には螺旋状の沈線が時計廻りにヘラ描きされている。外面の上半分に横方向のヘラミガキがみられるものの，内外面共に器面の剝離が著しい。

77は，復原口径17.6cmの壺口頸部破片。口縁部は強く外反する。頸部以下の内面は縦方向のヘラミガキ，他は横方向のヘラミガキが施される。また，81の壺口縁部は，復原口径17.2cmの大きさ。強く外反した口縁部で粘土帯貼付けによる段をもつ。78は壺胴部破片で，3条の横位沈線とその上位に連弧文がヘラ描きされている。横位沈線を頼りに復原したが，胴径は更に大きくなる可能性があるものの丸味をもった胴部になる。器面には横方向にヘラミガキ調整がみられる。胎土に細砂粒・金雲母・赤褐色粒を含み，明褐色に焼成されている。

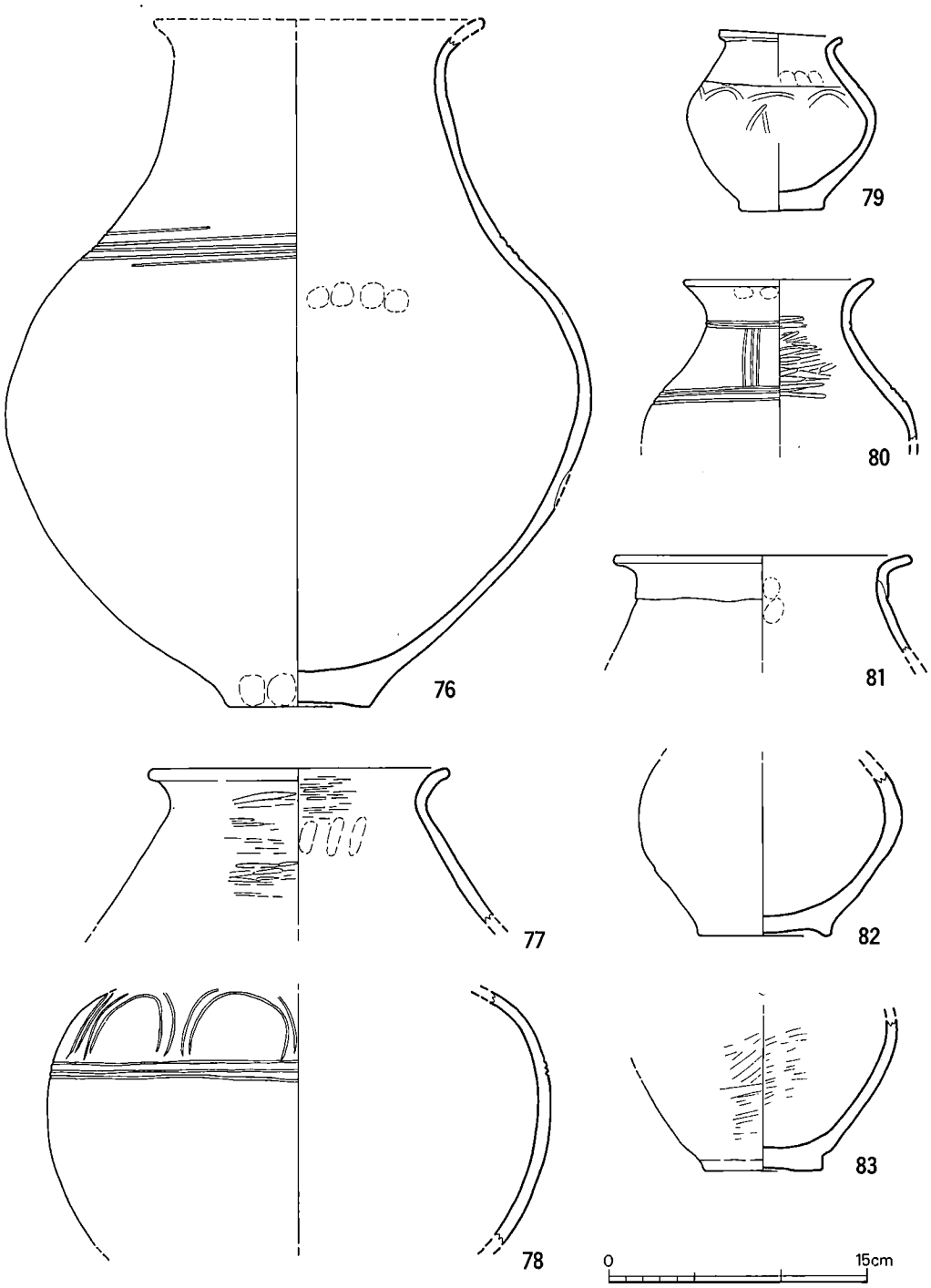
79は，口縁部を少し欠く程度の完形に近い小形壺。口径7.1cm，器高10.5cm，胴最大径10.9cmの大きさで，外面と口縁部内面は横方向にヘラミガキされる。肩部に細いヘラ描き沈線がめぐり，その下位の連弧文が描かれている。細砂粒・金雲母細粒などを胎土に含み，黄灰色に焼成されるが2ケ所に黒斑がある。

80は，復原口径11.0cm，胴部径15.9cm，残存高9.4cmの壺上半部で，最大径はこれよりさほど大きくならないだろう。頸部に2条，肩部に3条の沈線が巡り，両者をつなぐように3条の沈線が垂下して描かれている。内面は横方向にヘラミガキされており，器外面は磨滅しているが，ヘラミガキの痕跡を留めている。

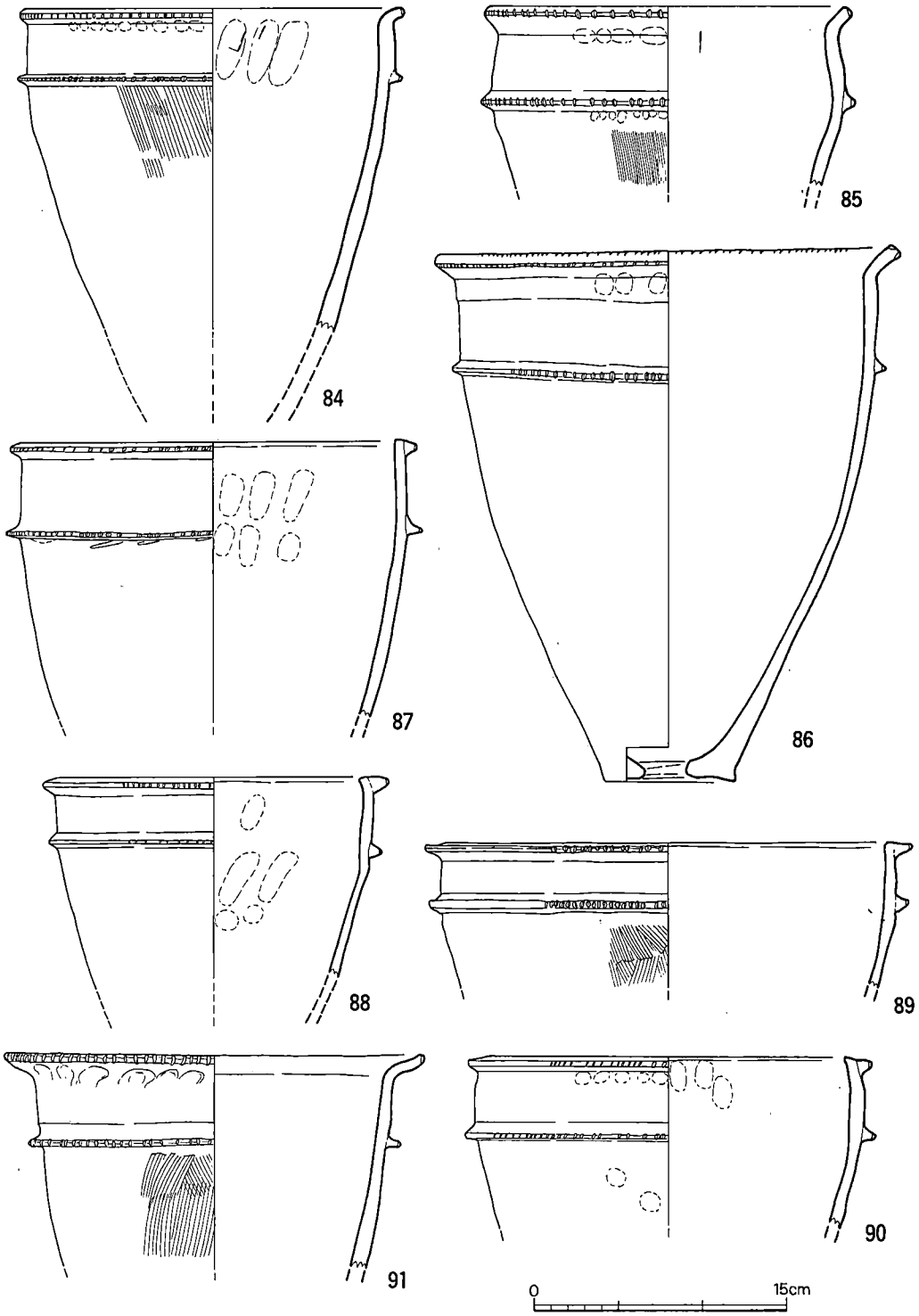
82・83は壺の胴下半部で，内外面共横方向にヘラミガキされ，外底面にはユビオサエ痕がある。

甕・甑は第83・84図に図示する。84～86・91は如意形口縁で，口縁下にキザミ目凸帯を貼付けるもの。いずれも外反した口縁端部にもキザミ目が付く。ほぼ完形で底面に焼成後穿孔のある86は，口径26.7cm，器高31.5cmの大きさを有し，口縁直下に粘土帯貼付けの段を残しており，口唇部の両端に細かなキザミ目が付けられている。器外面はナデ仕上げされるが，内面は器面剝離が著しい。84は口径22.6cm，残存器高21.2cmの大きさで，口縁部下の凸帯を境に器壁の厚さが異なり段を生じている。凸帯貼付けのあとにハケ目調整しており，下半はナデ仕上げされている。凸帯以下の外面は二次焼成を受けて赤変している。

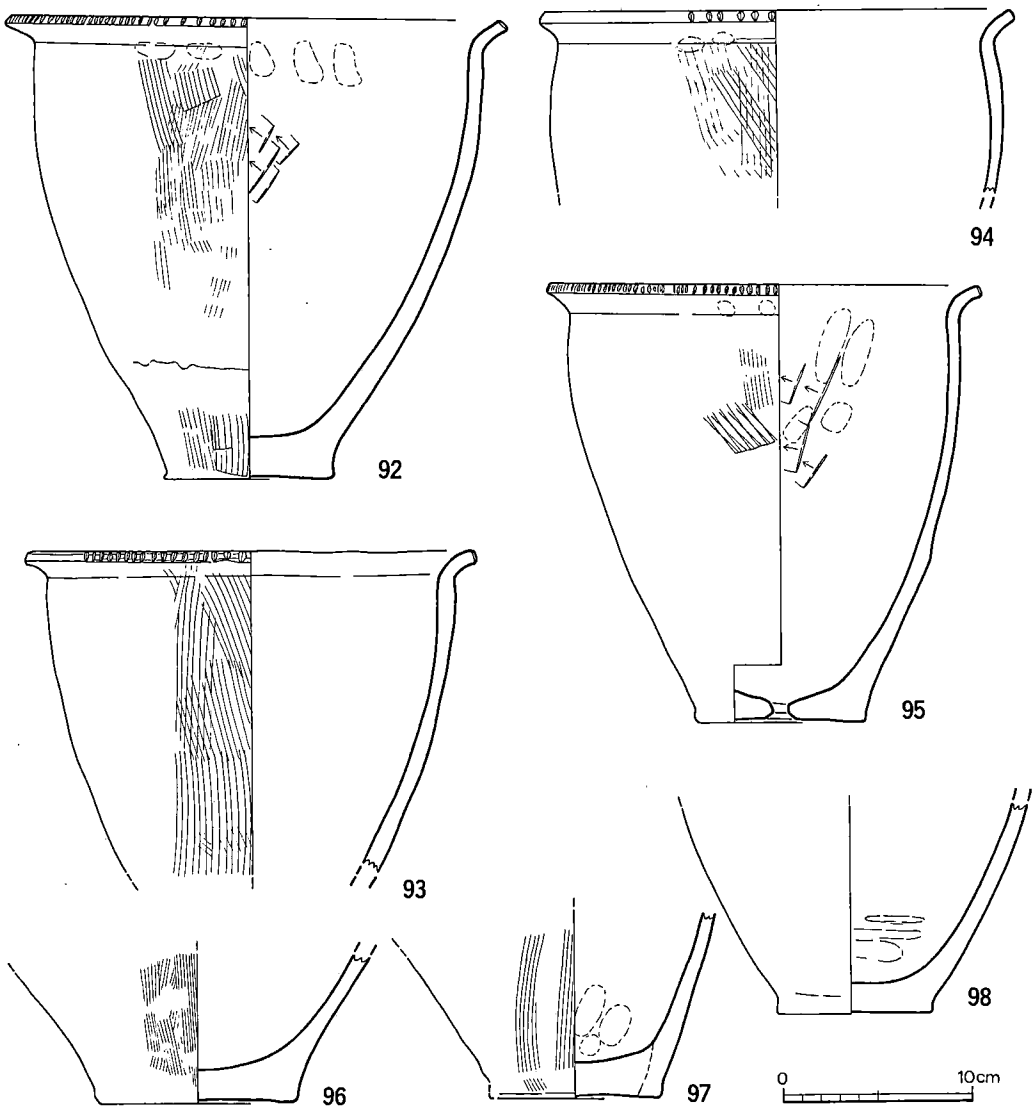
87～90は，口縁部と口縁部下にキザミ目の三角凸帯を貼付ける甕。88は，口径20.5cmの大



第 82 図　19号貯蔵穴出土土器実測図②（1/4）



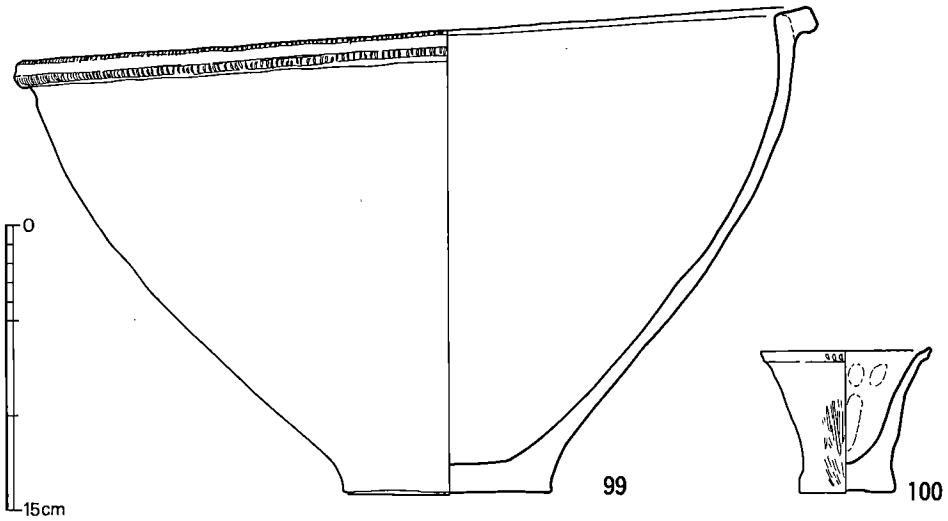
第 83 図　19号貯蔵穴出土土器実測図③（1/4）



第 84 図 19号貯蔵穴出土土器実測図④ (1/4)

きさで，二次焼成を受けて外面下半が赤変し煤の付着もみられる。また内面にも煤状の付着物がある。

92～95は，如意形に外反した口縁の端部にキザミ目の付く甕。いずれも粘土帯貼付けの段はなく，外面はハケ目調整されている。ほぼ完形の92は，口径25.6cm，器高24.2cmの大きさで，外面に二次焼成による赤変・器面剝離がみられ，内面では胴中位に煤状の付着物がある。また完形で底面に焼成後穿孔のある95は，口径22.5cm，器高23.1cmの大きさで，胴上半の外面に



第 85 図　19号貯蔵穴出土土器実測図⑤（1/4）

器面剝離・煤の付着がみられる。96～98は甕底部破片。86・92・95の底部も含めていずれも平底で，厚みのある上げ底の底部はない。

99は，口径41.7cm，器高24.7cmの鉢で底部の半分を欠く。口縁部にはコ字形の凸帯が貼付けられ，外面の上下にキザミ目が付く。全体にナデ仕上げされ，茶褐色に焼成されている。

100は，甕のミニチュア品で，如意形口縁を有しキザミ目も付される。口縁部内外面はヨコナデ，外面の胴部以下はヘラミガキされている。口径9.0cm，器高7.5cmを測る。

これらの土器から，弥生時代前期後半～末の時期に考える。

石　器（図版38-２，第96図）７は，安山岩製の削器。不定形剝片に調整剝離を加えて刃部を形成している。長さ3.9cm，幅2.7cm，厚さ1.3cm，重量9.9gを測る。８は，黒色を呈す黒曜石の縦長な剝片を用いた石刃で先端部を欠失し，現存長4.1cm，幅1.2cmを測る。

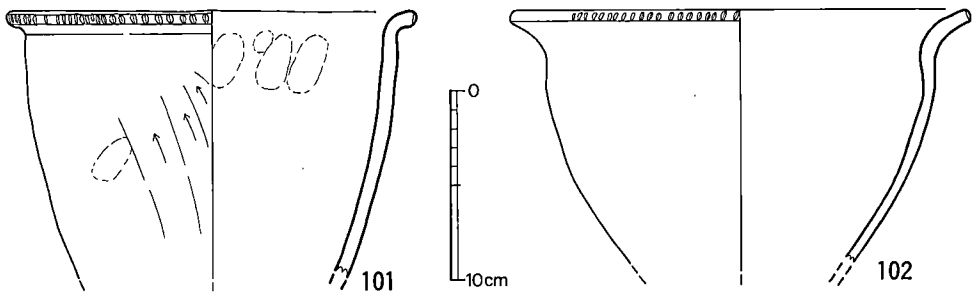
20号貯蔵穴（図版29-３，第80図）

３号住居跡及び19号貯蔵穴によって切られる袋状竪穴。一部を切られているが，上縁で長辺1.47m，短辺1.10mの隅丸長方形プランで，深さの最大0.57mで床面に達す。床面は長辺1.57m，短辺1.10mの長方形プランである。

土　器（第86図）101は如意形口縁の甕で，外面には煤が付着している。

21号貯蔵穴

大溝の南端部に位置し，大溝によってその殆んどを失って南西隅のみが残る。深さは0.6m



第 86 図 20・21号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

を有し，0.5～0.6mの辺を測る。埋土は他の貯蔵穴と同様であることから貯蔵穴として取り扱った。

土　器（第86図102）如意形口縁をもつ鉢で，復原口径24cmの大きさ。口縁部外面にヘラによるキザミ目が付され，胴部はナデ仕上げされている。外面には煤の付着がみられる。

22号貯蔵穴（第80図）

調査区の南端に位置し，その大半は調査区域外に及ぶので，一部のみ調査した。上縁では北辺が1.25mを測る。深さは0.55mを有し，床面での北辺は1.45mに広がる。不整形土壙によって北東側を切られる。埋土内から出土した土器片は細片で図示しうる資料はない。

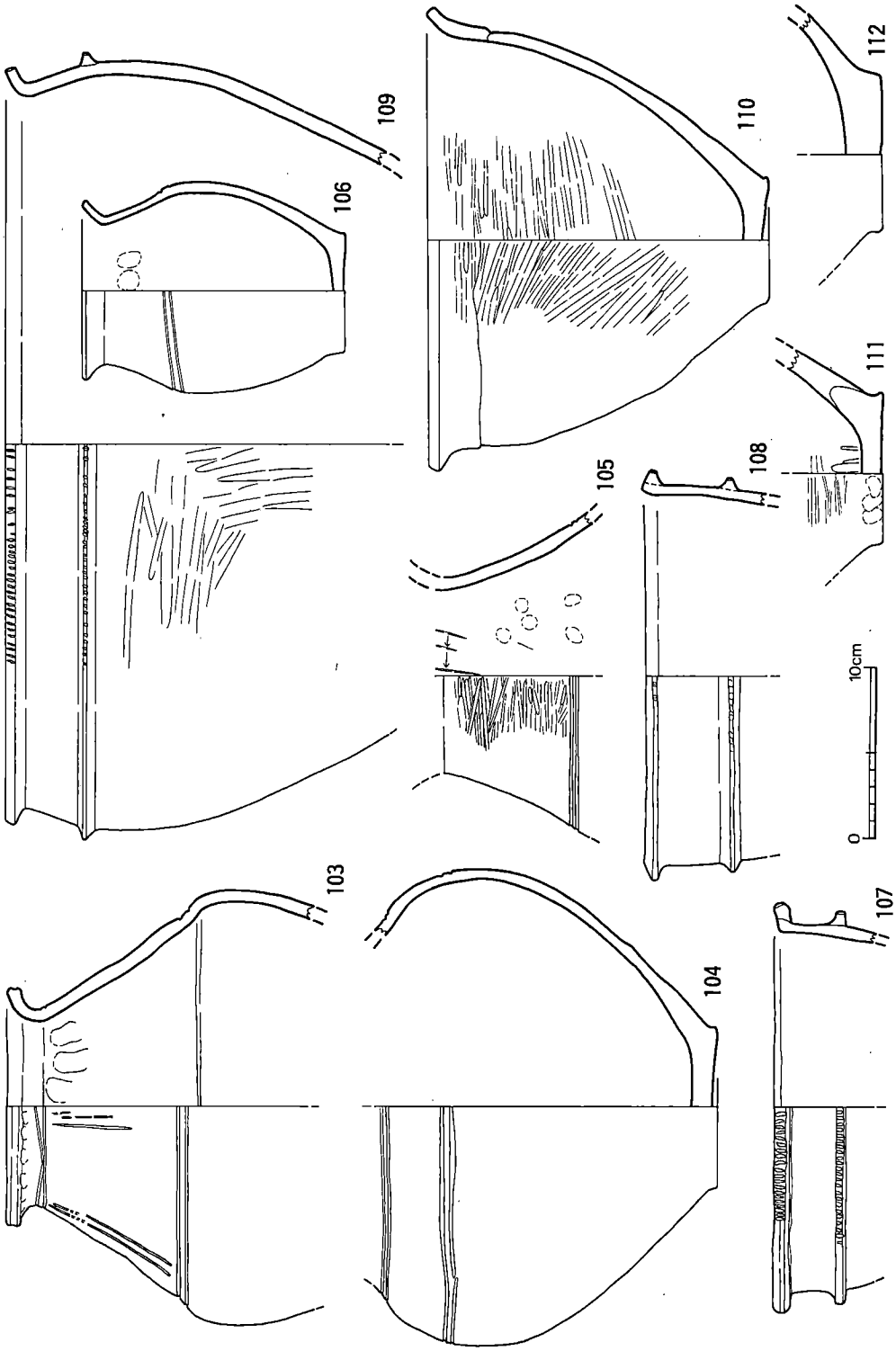
23号貯蔵穴（図版31-1，第80図）

調査区の南端に位置する袋状竪穴で，27号貯蔵穴と重複している。また接近して25号貯蔵穴が位置して27号貯蔵穴と重複しており，遺構検出に手間取ったために北東側をかなり掘り過している。0.95mの深さを有し，南から西側の内壁でみると，かなりオーバーハングするようである。床面は長径2.00m，短径1.70mの楕円形プランを呈す。

土　器（図版37，第87図）103は，復原口径13.8cm，残存器高18.3cmの壺。口縁部は強く外反し，端面は中くぼみになる。口縁部直下の頸部と，胴最大径の位置に近い肩部にそれぞれ2条の沈線を巡らせ，その間に垂下する2～3条単位の沈線をヘラ描きしている。104は肩部以上を欠くが，胴部と肩部にそれぞれ2条のヘラ描き沈線が巡る。105は頸部破片で，肩部に2条の沈線が巡る。口縁側の端は凝口縁になっており，内面に板状工具の圧痕が残る。

106は，口縁部の一部を欠くが完形の小形壺で，口径10.1cm，器高15.4cm，胴最大径12.5cmを測る大きさで，最大径の位置はほぼ中程で，頸部はさほど窄らない。肩部に2条のヘラ描き沈線が巡る。

107・108は，口縁端部と口縁下にキザミ目凸帯を貼付ける甕で，108の小さなキザミ目の付く三角凸帯に比して，107のキザミ目は深く，断面形は四角形に近い。



第87図　23号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

109は，口縁部下にキザミ目三角凸帯を貼付ける鉢で，外反する口縁端部にもキザミ目が付く。復原口径43.5cm，残存器高22.5cmを測る。胴外面はヘラミガキされるものの雑である。

110は，口縁部下に粘土帯貼付けの段をもつ鉢で，口径26.4cm，器高20cmの大きさ。内外面共にヘラミガキで仕上げられている。

111・112は底部破片で，112は壺，111は甕か鉢であろうが，平底。

これらの土器は，108にやや新しい要素があるものの，ほぼ弥生前期末に考えて妥当だろう。

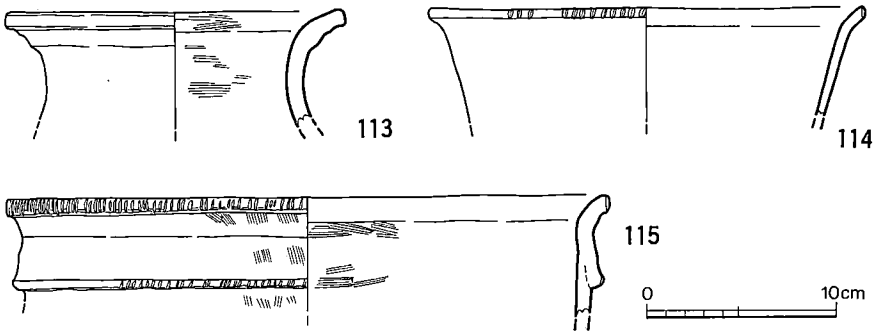
24号貯蔵穴（図版31-2，第89図）

調査区の東寄り，4号住居跡の東北隅部の下に位置する袋状竪穴で，25・26・31号貯蔵穴を切っている。約0.60mの深さを有し，直径1.90～1.95mの円形プランの床面に向かって内壁は下に広がる。床面は黄灰色の砂質粘土で，31号貯蔵穴の上部に相当する部分には貼床と思える粘土の面がみられた。

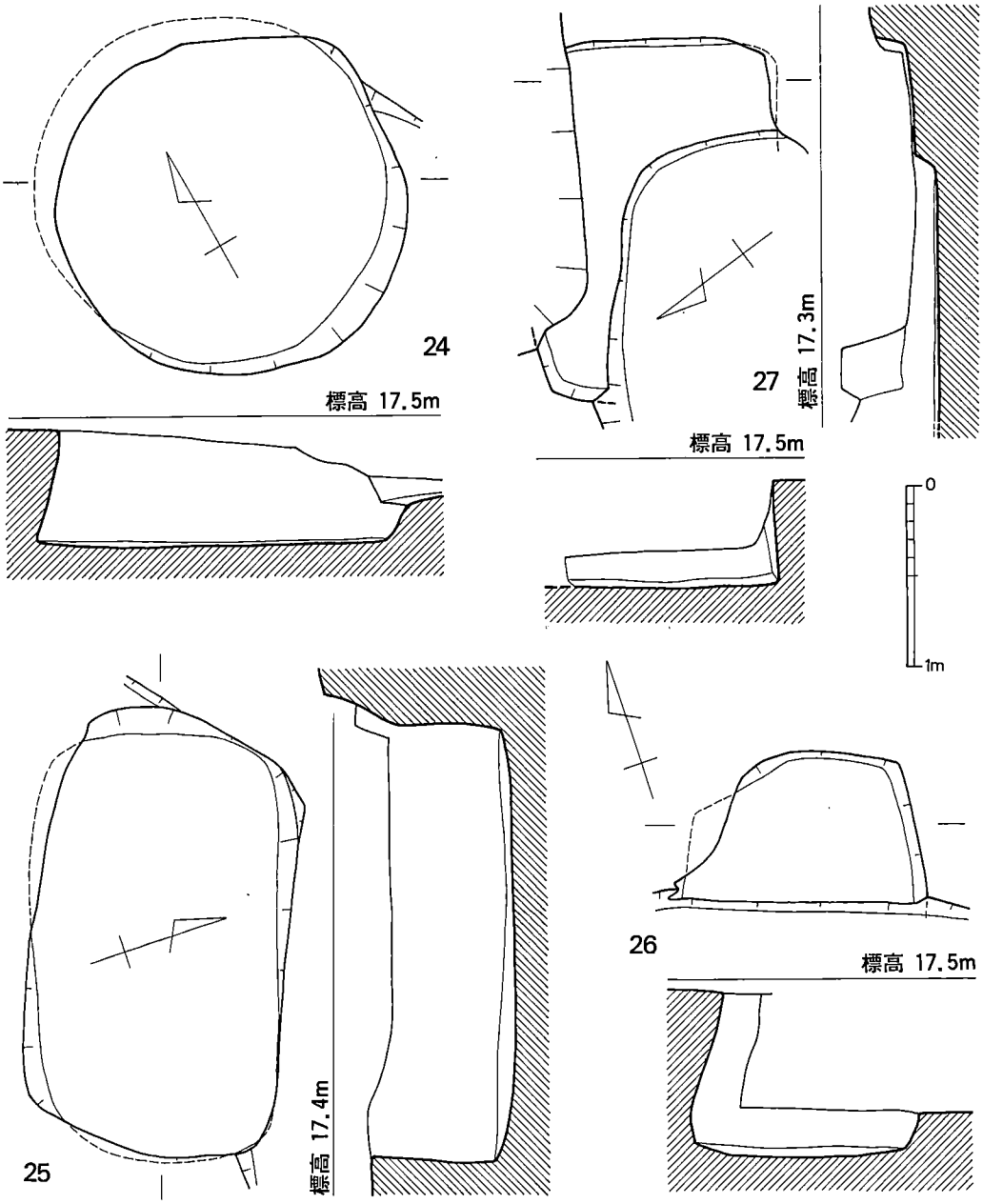
土　器（第88図）113は，復原口径17.6cmの壺口縁部破片で，外反する口縁部下が若干肥厚する。114は，ゆるやかに外反する口縁端部にキザミ目が付される甕。内外面共にナデ仕上げされ，外面に煤の付着が顕著にみられる。115は，甕か鉢の断定をしえないが，如意形口縁の下に粘土帯貼付けの段をもち，口縁部外面と段の部分にヘラ状工具による細かなキザミ目を付している。内外面共にハケ目調整後ナデ調整が加わっている。

25号貯蔵穴（図版31-3・32-1，第89図）

23号貯蔵穴と24号貯蔵穴の間に位置し，24号貯蔵穴に一部切られる。なお北側で26号貯蔵穴を，南側で27号貯蔵穴と重複し，2つの貯蔵穴を切っている。北西側の壁が最もよく残っていて1.05mの深さを有すことになるが，床面は長辺2.35m，短辺1.35mの隅丸長方形のプランを呈す。東壁寄りの床面より0.10m程度浮いた位置に，完形の甕・鉢等が，転倒・倒置した状況で出土している。埋土の下部から磨製石鏃片も出土した。

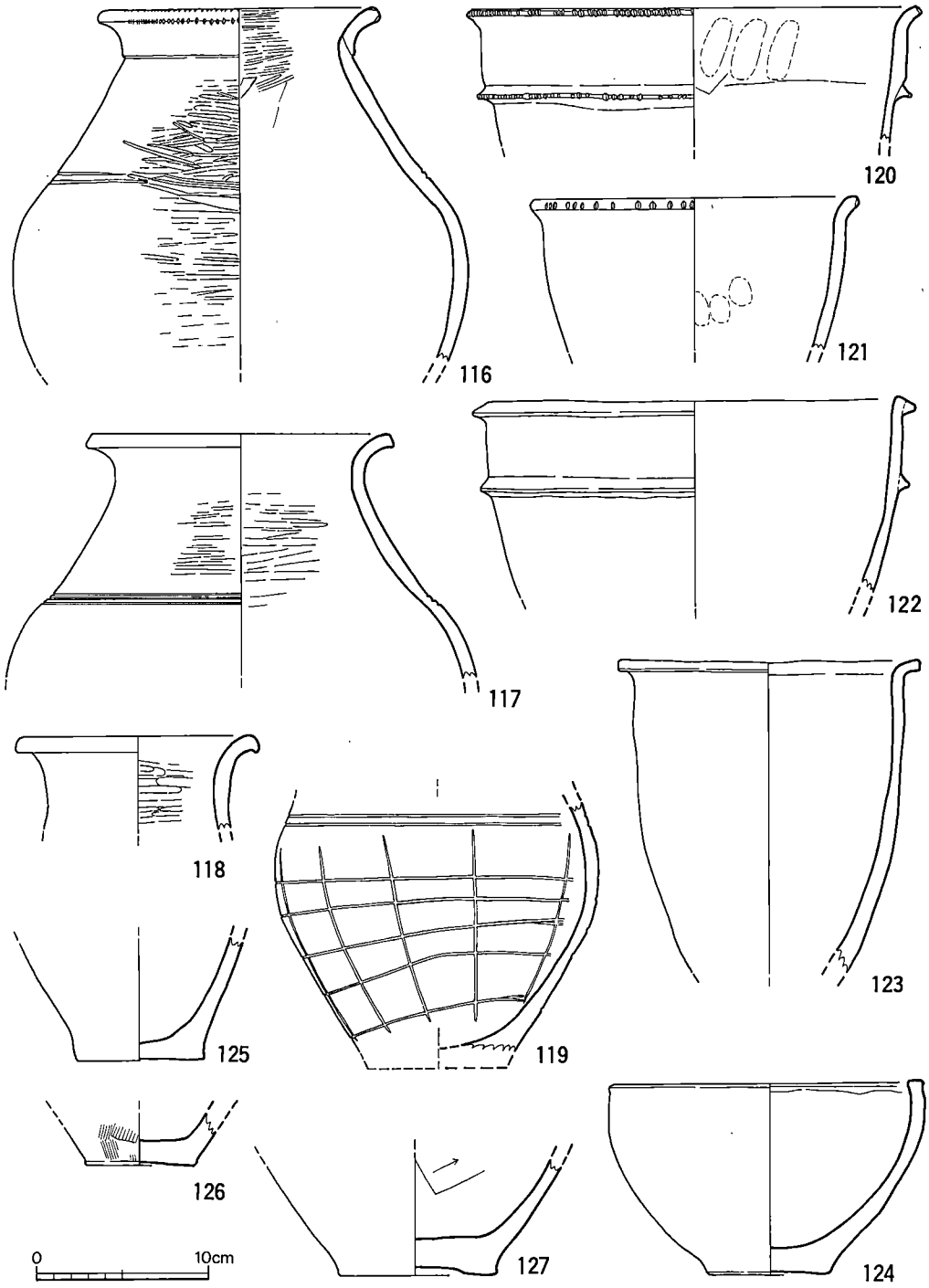


第 88 図　24号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）



第 89 図 24～27号貯蔵穴実測図（1/40）

土　器（図版38-1，第90図・第103図5）116の壺は，口縁部に小さなキザミ目が付く。肩部に2条のヘラ描き沈線を巡らせたのちに横方向ヘラミガキ調整を外面全体に施しており，内面の下半はナデ調整である。117・118の壺は口縁部が肥厚せずに外反する。内外面共にヘラミ



第 90 図　25号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

ガキされている。119は口頸部と底部を欠くが，肩部に2条のヘラ描き沈線が巡り，更に胴部から底部にかけて5条の沈線を巡らせて，これに交差する沈線を配して格子状の文様が描かれる。

120は，如意形口縁で口縁部下にキザミ目のある貼付凸帯をもつ甕口縁部破片。口縁部外面にもキザミ目が付され，口縁と凸帯の間の器壁は凸帯下の器壁よりも厚く，凸帯の部分で段になる。内外面共にヨコナデ調整されるが内面にユビオサエ痕が残る。

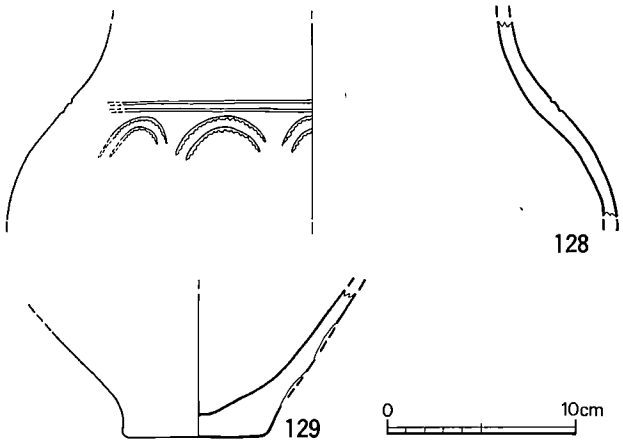
第103図5は，口径19.6cm，器高18.3cmの完形の甕で，口縁部は逆L字状に屈折し，口縁部下にキザミ目のある貼付凸帯をもつ。口縁部外面にもキザミ目が付される。外面はヨコナデないしはナデ調整,内面は板状工具でナデられる。底部は平底で底径7.2cm,厚さ1.6cmを測る。

121は如意形口縁の甕で口縁端部にキザミ目が付されるが，123の如意形口縁甕は口縁部が強く外反しキザミ目は付かない。123の外面上半に煤の付着，内面下半に器面剝離がみられる。122は口縁部と口縁部下に三角凸帯を貼付ける甕で凸帯上にキザミ目はない。

124は，口縁の一部を欠くが完形になる単口縁の鉢で，口径18cm，器高11.2cmの大きさ。内外面共にヘラミガキされるが，全体にわたって煤の付着がみられる。

125・126は甕の底部破片で平底。127は壺か鉢の底部であろうか。浅い上げ底を呈す。

石　器（図版38-1，第96図9）暗灰色粘板岩質の磨製石鏃片で，本来長大な有茎式のものであろうが，身・茎共先端側を欠く。現存長48.5mm，刃の現存長44.5mm，身の厚さ3.9mm，幅17.2mm，関部幅14.3mm，茎の幅7mm，重量の現存値4.95gを測る。身は鎬を残すが研ぎ減りによるものか，真直ぐに通らず，断面形も関部で菱形に近い形を呈すものの，先端側では扁平になる。茎部の断面も本来六角形であったと思われるが，鎬の部分に研ぎが加わって不整形な八角形になっている。



第91図　26号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

26号貯蔵穴

（図版32-2，第89図）

24号と25号の貯蔵穴に切られる袋状竪穴で，北西部に残る内壁は約0.9mを有すが，北東側0.2m程度を残すのみ，南側半分は床面すらも失う。床面の東西幅は1.1～1.3m，南北幅は0.5～0.8mを測る。

土　器（第91図）128は壺の肩部破片。肩部に2条のヘ

ラ描き沈線が巡り，その下位にアナダラ属の貝殻腹縁を押圧した連弧文が描かれている。内外面共に横方向のヘラミガキが施されるものの内面はやや雑。129は，24号貯蔵穴の床面直下になる埋土から出土した甕底部で，底径7.8cmの大きさ。外面は二次焼成を受けて赤変し，内面は器面剝落が著しい。

27号貯蔵穴（図版32-3，第89図）

23号と25号貯蔵穴に切られる貯蔵穴で，北東側・南西側の大半を失う。残された床面からみて，隅丸長方形プランで長辺1.85m・短辺1.25m程度の規模であろう。埋土出土遺物では若干土器細片があるものの，図示しうる資料はない。

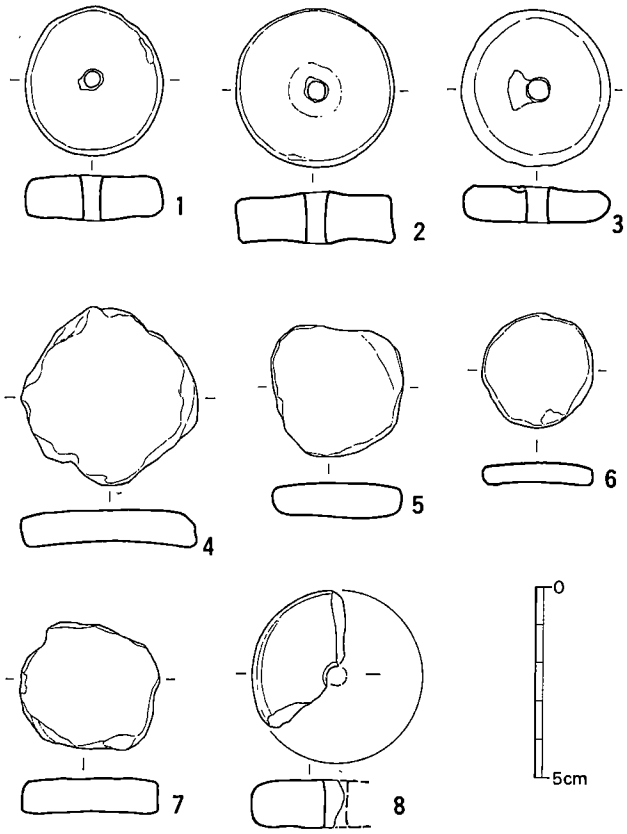
28号貯蔵穴（図版33-1，第93図）

調査区の東部に位置し，4号住居跡北壁の下に検出されたが，南側は調査区域外の為未掘。上面では北辺1.3m，西辺約1.5mの不整方形プランだが，西壁は崩壊しており，深さ0.7m余の床面は北辺1.4m，西辺1.6mの隅丸長方形プランを呈す。出土遺物は，土器細片と土製紡錘車で，土器の図示しうる資料はない。

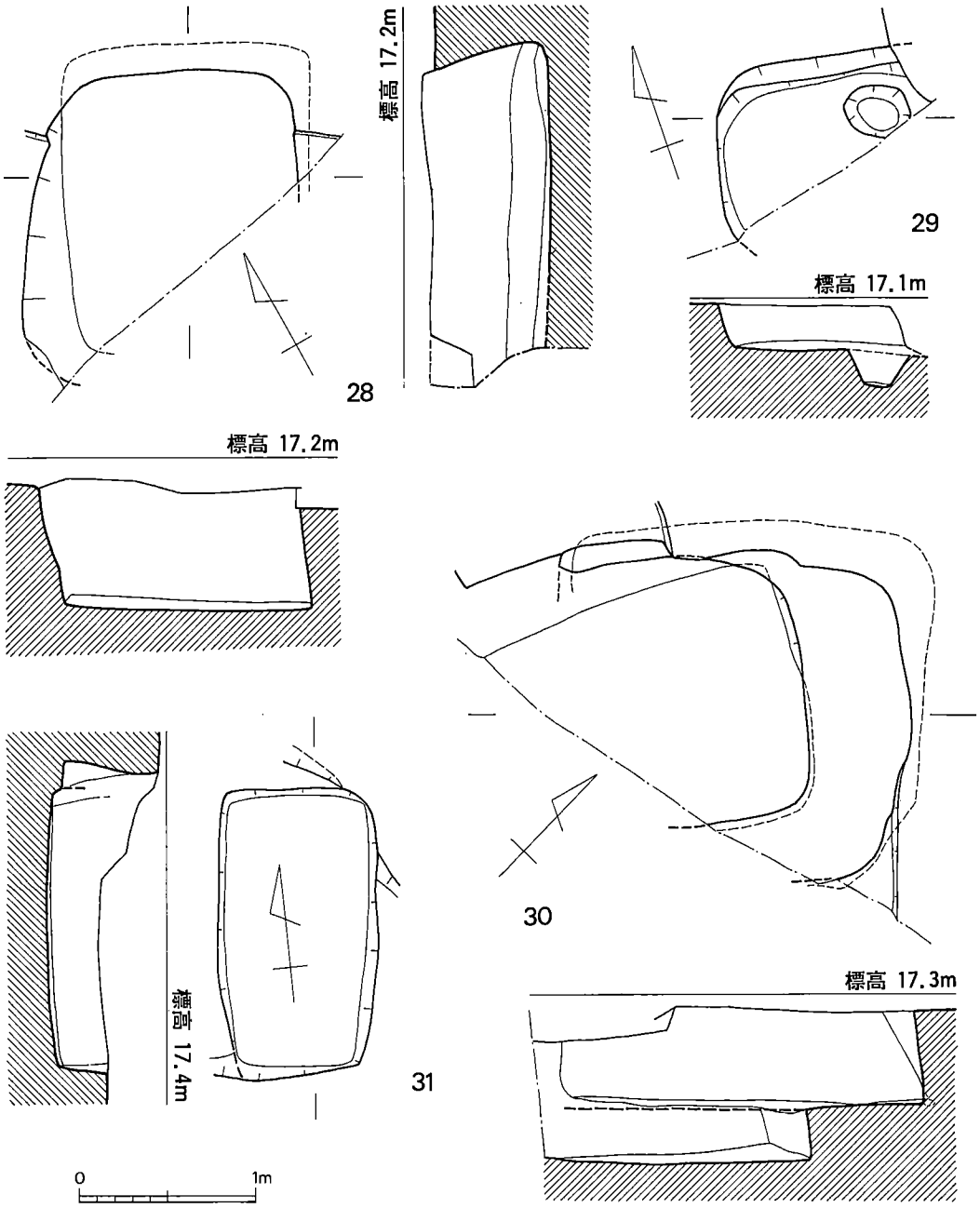
土製品（図版38-3，第92図3）土製紡錘車の完形品で，外径3.9～4.1cm，孔径0.5cm，厚さ1.0cm，重量16.7gを測る。胎土に砂粒を含み，灰褐色ないし黝黒色に焼成されている。

29号貯蔵穴（第93図）

4号住居跡の床面下に検出されたが，28号貯蔵穴の西側に重複し切られる貯蔵穴で，大半は南側の調査区域外に続



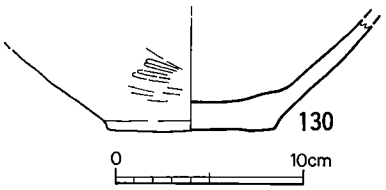
第 92 図　貯蔵穴等出土土製品実測図（1/2）



第 93 図 28～31号貯蔵穴実測図（1/40）

く。深さは0.2m余り。北辺1.2m以上，西辺0.7m以上の床面は，隅丸の方形ないし長方形プランであろう。床面に掘り込まれるピットは，上の4号住居跡に伴うピットであろう。

土　器（第94図）壺の底部破片で底径8.8cmの大きさ。外面はヘラミガキ，内面はナデ仕上げされている。



第 94 図　29号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

30号貯蔵穴（図版33-2，第93図）

28号貯蔵穴と重複し，南側の一部は調査区域外に及ぶ。東北辺は上縁で約1.6m，床面で約2mに拡がり，壁面は約0.5mの高さをもつ。床面の北西辺は約2mを有し，隅丸方形プランであったものと思われる。床面の大半は28号貯蔵穴に切られている。

埋土中から出土した遺物のうち，土器片少量は小片のため図示しえないが，石器も出土した。

石　器（図版38-2，第96図10・11）10は，石包丁の刃部片で，刃部の長さ2.4cm分が残る。粘板岩質の石材を用いているが，風化が進みややざらつく。厚さ0.4cm。

11は，花崗岩質の石材を用いた砥石片。上面はよく使用されており光沢をもつが，破損面以外の他の面は原面のまま残り，下面の一部には敲打痕がみられる。おそらく作業台的な性格を有していたもので，幅は25cm前後であろう。周縁部長13.5cm分が残り，厚さは7.1cm，重量の現存値は2.1kg。

31号貯蔵穴（第93図）

24号貯蔵穴と4号住居跡とによってその大半を削平される貯蔵穴で，24号貯蔵穴の貼床下に5～7cmの深さを残していた。遺構配置図では25号貯蔵穴と重複するが，31号貯蔵穴の南西隅は，25号貯蔵穴の内傾する器面に達していなかった。（ただ次の日には，霜柱によって壁面が崩壊して重複したかのようになってしまったが…。）床面は隅丸長方形プランを呈し，長辺1.5m，短辺0.6～0.8mの規模で，東北側の内壁は0.6mの深さを有す。若干土器細片が出土したものの，図示しうるものはない。

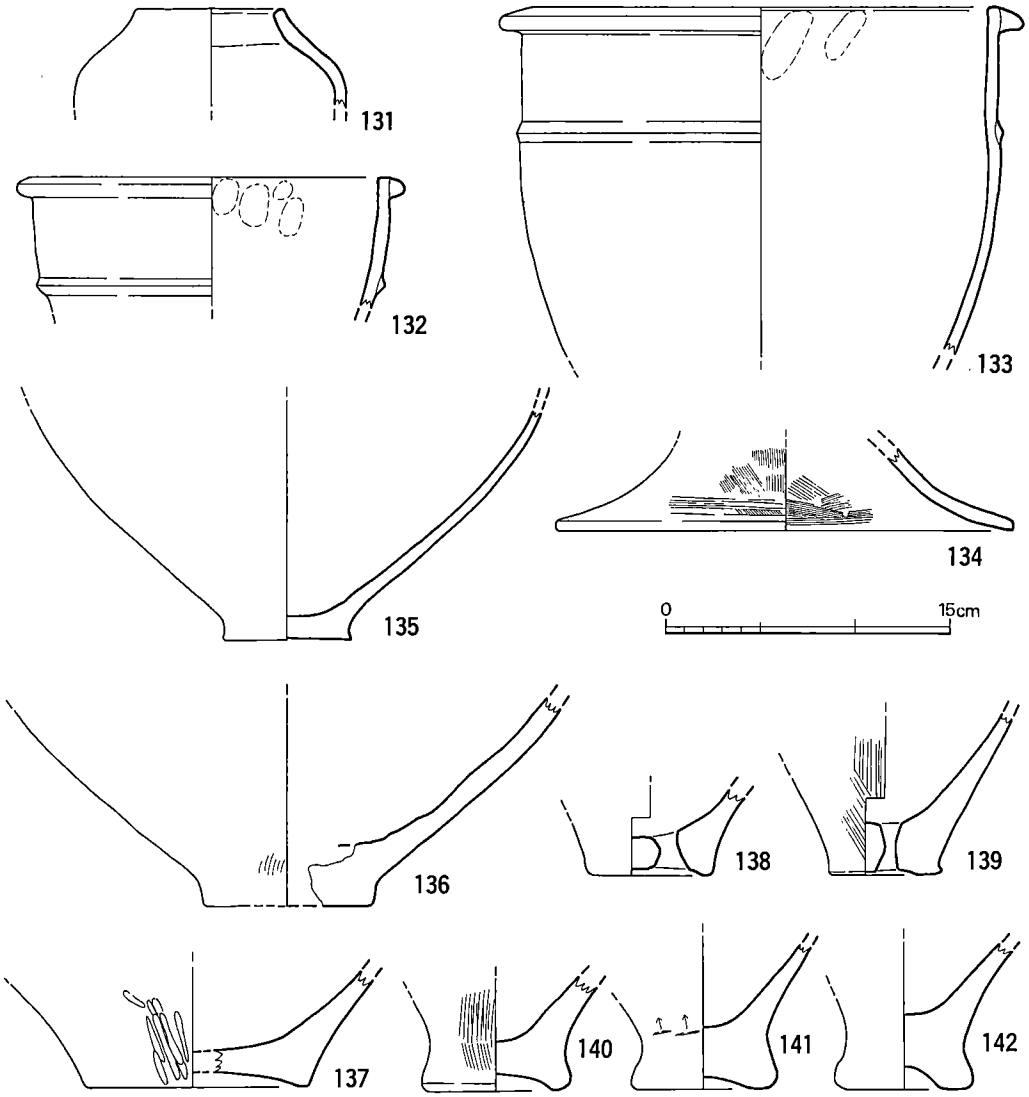
32号貯蔵穴（不整形竪穴）

調査区の南部にあり，15号貯蔵穴と22号貯蔵穴を切る。上縁が不整形で，特に22号貯蔵穴と重複する部分で壁がだらだらと落ち込んでいたことから不整形竪穴として掘り下げた。しかし不用意に掘り下げてしまい，結果的には北壁の壁が直に立ち上がっており，貯蔵穴と重複していた可能性が高い。北辺が1.6m，南に向かって狭くなっており南北2.5mの大きさだが，一辺1.2mの不整方形な床面が一段低くなっている。北壁での深さは0.65mを測る。

土　器（第95図）貯蔵穴か不整形竪穴出土かの区別はしえない。

131の壺は，器面が磨滅しており，短頸壺か，口縁部の剝脱した擬口縁か不明。

132・133は，口縁部外面と口縁部下に三角凸帯をもつ甕。凸帯上にキザミ目はない。ヨコナ

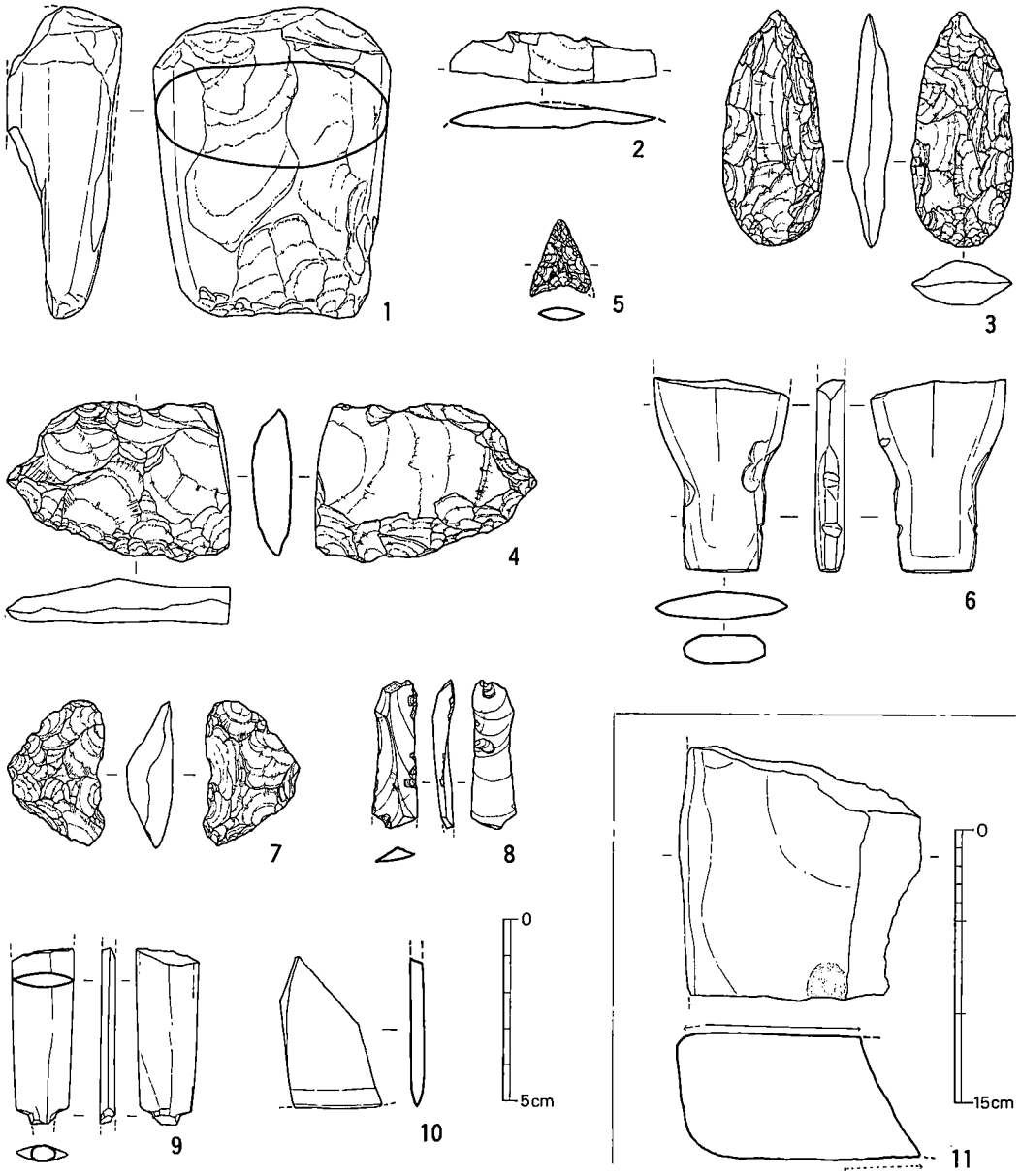


第 95 図 32号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)

デないしナデ仕上げされている。133の凸帯下に多く煤が付着している。

134は蓋形土器だろう。復原口径24cmの大きさで，内外面共にハケ目調整され，外面には雑なミガキも加わる。口縁端の一部に煤が付着する。

135・137は壺ないしは鉢の底部。137の外面・外底面はヘラミガキされている。138・139は甑の底部。138は底径5.9cmと小さめの割に厚めの底部で，底面に焼成前穿孔がある。139は138より低平な底部で外底面からの焼成前穿孔がある。140～142は甕底部。小さな底径の割に



第 96 図　貯蔵穴出土石器実測図（1/2・1/4）

厚みがあり，上げ底を呈す。

これらの土器では，甕などに中期初頭以降の特徴をみることができる。

土製品（図版38-3，第92図6・7）2点共に土器片再利用の土製円板で，周縁を打欠き調

表7　B地区貯蔵穴一覧表　(単位cm)

	底面形	底面規模		深さ	主軸方位	出土遺物	備考
1	隅丸長方形	150＋α	130	75	N22° 40′E		
2	楕円形	190	110	75	N12° 30′W	壺・甕・鉢・磨製石斧	
3	長方形	135＋α	115	50	N6° 40′E	壺・甕	3号住居跡貼床下
4	不整方形	120	80	90	N67° 40′W		1・2号住居跡に切られる
5	隅丸長方形	170	125	30	N39° 50′E	壺・甕・鉢	
6	〃	165	125	80	N67° 10′W	壺・甕	一部調査区域外
7	〃	190	135	70	N7° E		8号を切る
8	〃	180	148	45	N4° 20′E	壺・甕	7号に切られる
9	不整長方形	150	105	100	N73° 10′W	壺・甕・鉢・掻器・土製円板	
10	楕円形	200	145	38	N13° W	壺・甕	3号住居跡貼床下
11	隅丸長方形	155	120	90	N82° 50′W		3号住居跡に切られる
12	長方形	175	100	25	N77° 10′W	甕・土製紡錘車	3号住居跡貼床下
13	隅丸長方形	195	125	70	N18° 40′E	壺・甕・削器	〃
14	〃	150	120	80	N57° 50′E	甕	
15	〃	158	110	75	N4° E	壺・甕・鉢・打製石鏃・石剣・土製紡錘車	17号を切る
16	隅丸方形	155	135	80	N79° 50′W	壺・鉢	17号を切る
17	長方形	220	140	75	N74° 10′W	壺・甕・鉢	15・16号に切られ、18号を切る
18	隅丸長方形	160＋α	120	55	N20° E	壺・甕	17号に切られる
19	〃	215	130	100	N12° E	壺・甕・甑・鉢・削器・石刃	20号を切る
20	長方形	157	110	55	N33° 40′W	甕	3号住居跡、19号に切られる
21		50＋α	60＋α	60		鉢	大溝で大半を失う
22	方形ないし長方形	14.5	55＋α	60	(N2° 20′E)		大半が調査区域外
23	楕円形	200	170	95	N40° 40′W	壺・甕・鉢	
24	円形	195	190	65		壺・甕・鉢？	25・26・31号を切る
25	隅丸長方形	235	135	105	N73° W	壺・甕・鉢・磨製石鏃	24号に切られ26・27を切る
26	不整方形？	80＋α	125	90	N22° 50′W	壺・甕	24・25号に切られる
27	隅丸長方形	185	125	60	N61° 10′W		23・25号に切られる
28	〃	160	140	75	N42° 50′E	土製紡錘車	一部調査区域外
29	〃	120＋α	70＋α	30	(N12° E)	壺	28号に切られ一部調査区域外
30	隅丸方形	205＋α	205	50	(N47° E)	石包丁・砥石	〃
31	隅丸長方形	150	80	60	N4° 30′E		24号に切られる
32	不整方形	120	120	65	(N25° E)	壺・甕・鉢？・土製円板	15・22号を切る

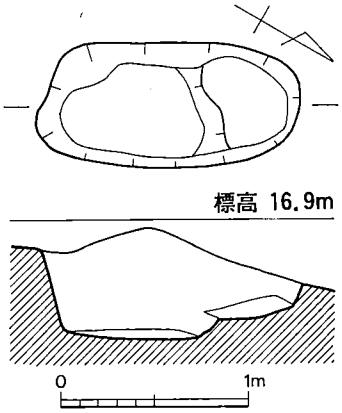
整しており，6では周縁に研磨が加わっている。6は径2.9～3.0cm，厚さ0.5cm，重量5.1g，7は径3.3～3.7cm，厚さ0.9cm，重量13.7gを測る。

4．土　壙（図版39-1，第97図）

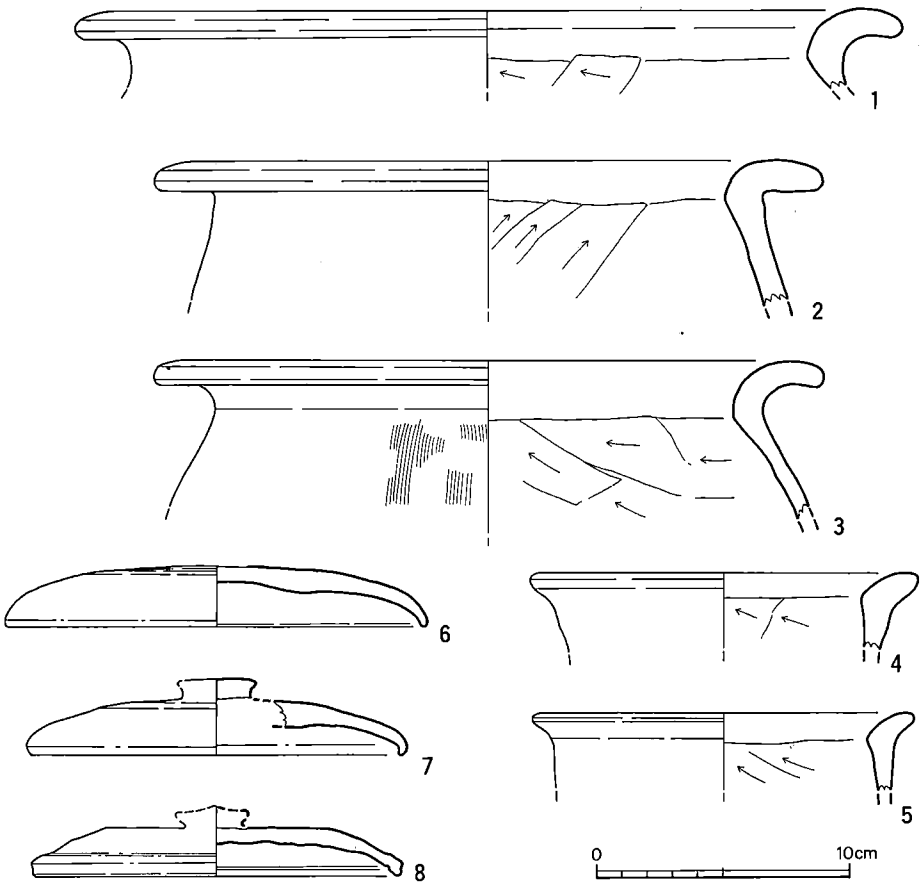
調査区の東端に1基検出されている。遺構検出に手間取り上部を削平してしまったが，長径

1.4m，短径0.6m，深さ0.6m以上の規模を有し，主軸方位をN30°Wにとる。床面は北側の約1／3が0.1m程高くなっている。黄灰色の砂質土に掘り込まれており，上部では暗茶褐色土，中位では黄褐色粘土塊まじりの暗黄褐色土，下部では炭化物粒・黄褐色粘土塊まじりの茶褐色土が詰まっていた。

土　器（第98図）1～3は土師甕の口縁部。口縁端部は外側に折れ曲がり，2では弥生中期の逆L字形口縁に近い形状を呈す。外面はハケ目のあとヨコナデが加わり，頸部以下の内面はヘラケズリされている。4・5は小破片ではっきりしないが，復原口径15cm程度の土師器小形甕。



第 97 図　土壙実測図（1/40）



第 98 図　土壙出土土器実測図（1/3）

厚めの口縁部はゆるく外反する。内面の頸部以下はヘラケズリされている。

6・7は土師器杯蓋。小破片のため接合しないが，6・7共に扁平なつまみが付くだろう。端部はわずかに内弯する。胎土に砂粒をほとんど含まず，明褐色に焼成される。

8は須恵器杯蓋。復原口径14.4cmの大きさで，扁平なつまみが付くとみられる。端部は下方へ屈折して尖り気味にまとまる。

杯蓋の形からして，8世紀中頃前後であろう。

石　器（図版39-3，第102図8）抉入の柱状片刃石斧の完形品。灰色に白い縞の入る頁岩製。大きさは，長さ11.9cm，幅3.1cm，厚さ3.3cm，重量210g。体部断面は厚い蒲鉾形を呈す。50°程度の片刃を有し，背側の体部1／3の位置に深さ0.4cmの抉りが設けられている。弥生時代前期～中期の石器で混入だろう。

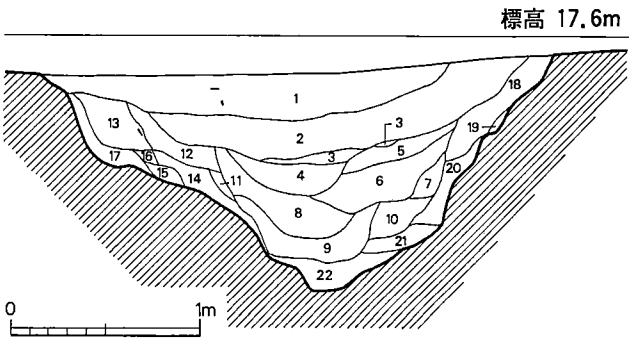
5．大　溝（図版22-1，第58・99図）

調査区の南西部と北西隅との間に検出された溝状遺構。1号・2号住居跡，1号・4号・17号・22号貯蔵穴などを壊している。上縁での幅2.7～3m，深さ約1.2mの，逆梯形ないしU字形に掘り込まれ，底面の中央部に幅0.5～0.7mの細い溝が付く。溝の方向は直線的で，真北に対し約15°ほど西に偏った方向である。

大溝の中程やや南に寄った部分で堆積状況を観察したが，第99図に示すように，西側の肩部が崩落しながら埋没した可能性があり，また1～10の堆積土は溝がある程度埋没した後の二次的な溝かと思われる。遺物の出土状況では，この一次的・二次的の区別を明確にしえなかった。

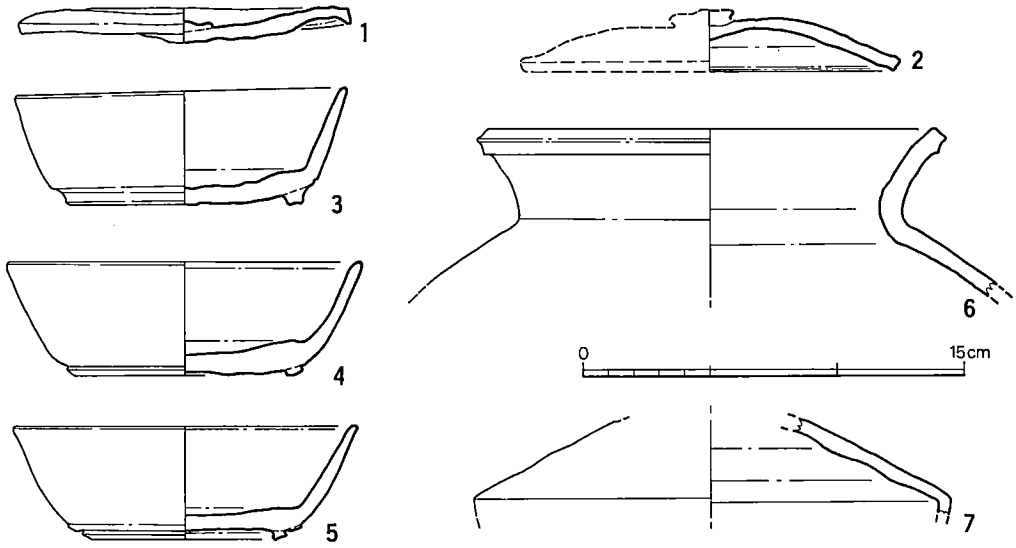
溝底面では，北部と南部でほとんど高低差がない。周辺の地形からして北から南へ流下していたものと考えたい。

なお，16・17号貯蔵穴の上面に相当する位置には，大溝に流下する小さな溝状遺構が検出さ



1 暗茶灰色砂泥
2 茶灰色砂泥
3 灰色砂泥に黄灰色粘質土が混じる
4 暗灰色砂泥にやや多く砂礫が混じる
5 ④に黄灰色砂が混じる
6 暗灰色泥土に砂礫やや多く混じる
7 淡灰色泥土＋明灰色砂礫
8 暗灰色砂質土に灰色泥土が少し混じる
9 ⑧＋灰色泥土
10 明茶灰色砂質土に少し灰色砂泥が混じる
11 暗灰色砂質土
12 ②と色調は同じで砂質
13 茶灰色砂質土
14 黄灰色砂質土＋灰色砂質土
15 黄色砂泥
16 黄灰粘土ブロック
17 淡茶褐色砂泥＋灰色砂質土
18 ⑲と同じ
19 灰色砂泥
20 淡茶灰色砂礫
21 暗灰茶色砂質土
22 茶灰色泥土＋暗灰色砂礫

第 99 図　大溝土層断面図（1/40）



第 100 図　大溝出土土器実測図①（須恵器）（1/3）

れた。大溝に接する部分では，上面幅１m・床面幅0.2m・深さ0.5mを有すが，東北方へ向かって浅くなり，約２mで消失している。大溝の上部の埋土と同様の埋土が堆積していた。

土　器（図版39-２，第100・101図）８・15は一次的な埋土，10は支流埋土，５・11・14は二次的な埋土として区別しうるもので，その他は一次的・二次的の区別がしえない。

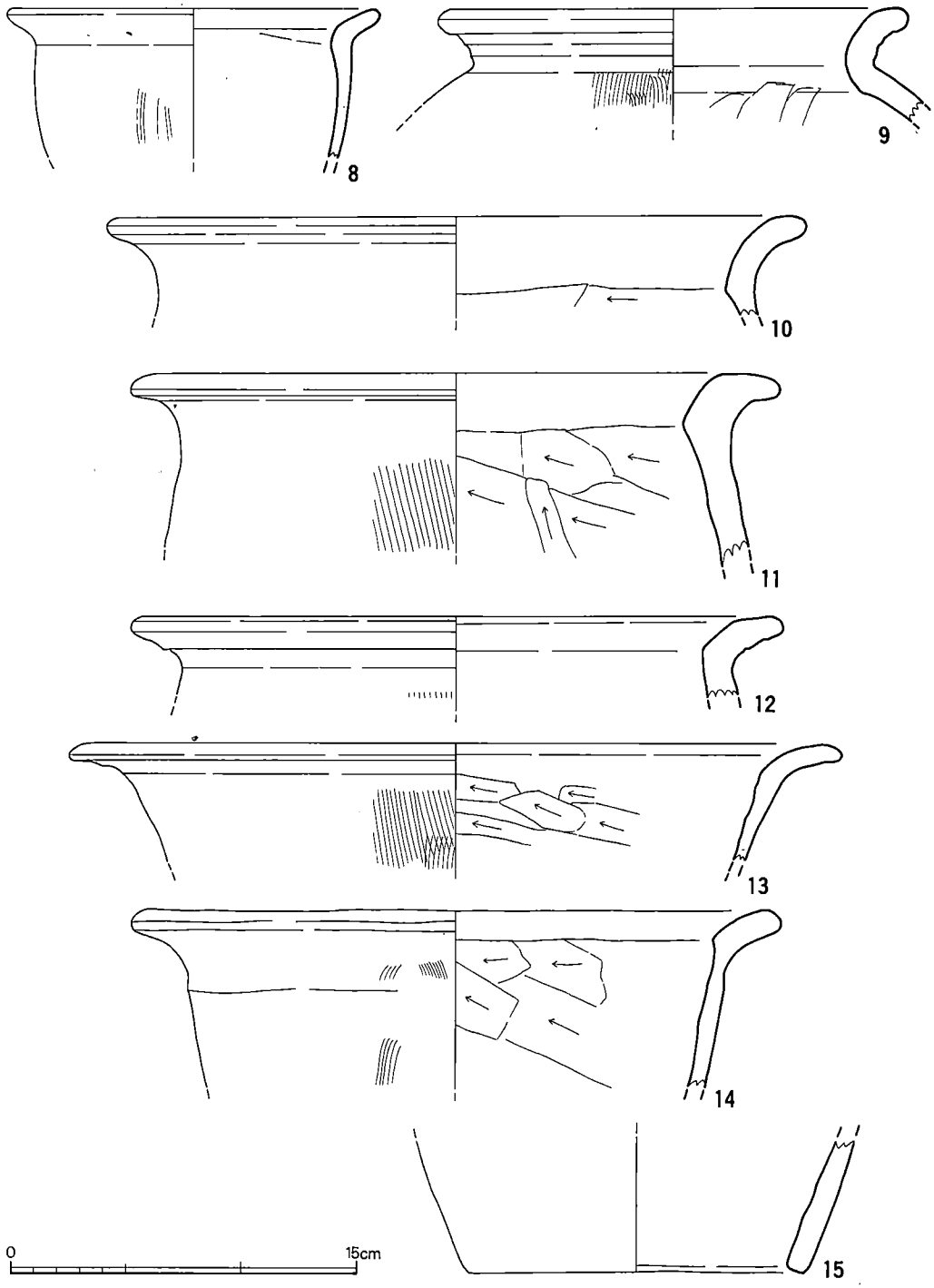
須恵器杯蓋（１・２）は２点共に歪つで，１は天井部が体部より落ち込んだ状態になっている。１は口径13cmの大きさで扁平凝宝珠形のつまみが付く。端部は下方につまみ出されて，短く尖り気味にまとまる。２の端部は尖らない。

須恵器杯身（３～５）は３点共に高台を有す。３は口径13.1cm，器高4.4cm，高台径9.4cmを測る。体部は直近くに立ち上がる。４は器高4.3cm，復原値の口径・高台径が14cm・9.3cm。５は器高4.3cm，復原値の口径・高台径が13.6cm・8.1cm。４・５は３に比して体部の立ち上がり方が緩やかで，底部端より内側に高台が貼付けられる。

須恵器甕(6)は，復原口径18.4cmの大きさで，口縁端部下につまみ出した低い凸帯をもち，口唇部は角張り，胴部外面に格子目タタキ，内面に青海波文が付く。

須恵器壺片(7)は，長頸壺の肩部であろう。胴部復原径18.4cmを測る。内外面共にヨコナデ調整されている。

８～15は土師器で，８は復原口径16cmの小形甕。器面の風化が進み，胴部外面にハケ目の痕跡をみとめるのみ。９は復原口径20cmの甕。くびれの強い外反口縁を有す。10～12は復原口径28～30cmになる甕。11・12の口縁は強く外反し，上面は平担に近い。いずれも胎土に細砂粒を多く含み，金雲母粒も含んでおり，胴部外面に縦方向ハケ目，内面にヘラケズリがみられる。

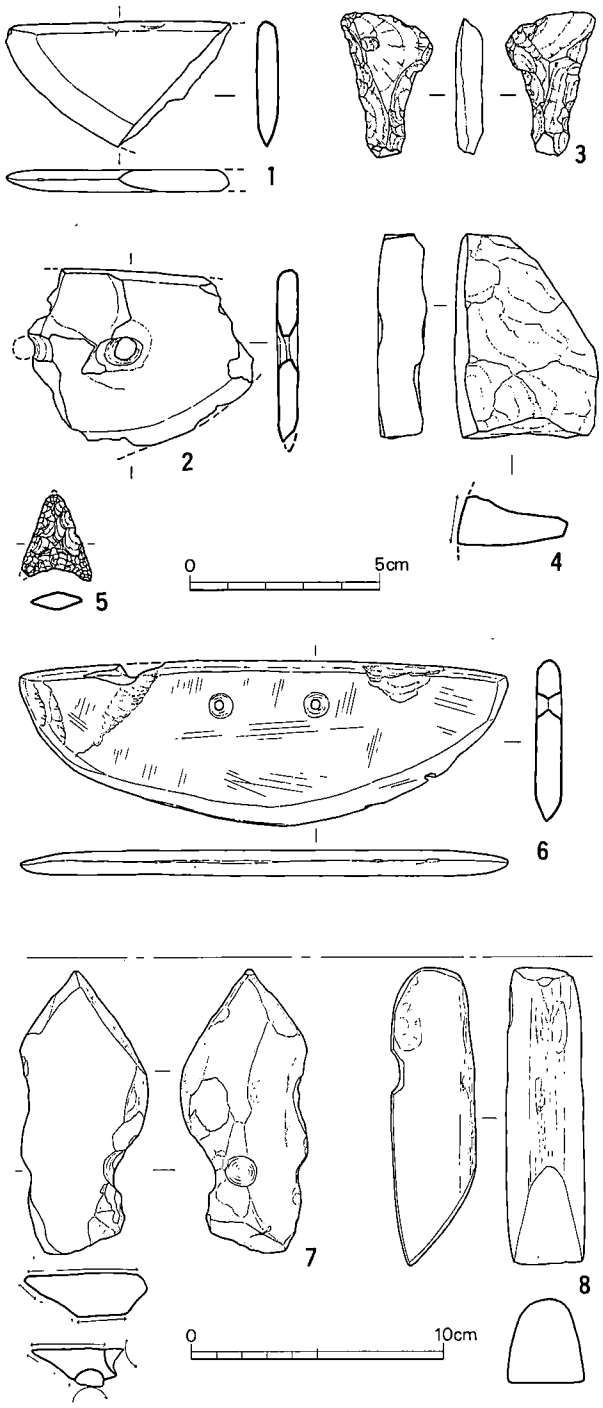


第 101 図　大溝出土土器実測図②（土師器）（1/3）

13・14は甑か鉢の口縁部であろう。直線的に開く胴部から口縁部がゆるく外反して開く。13の口縁部は扁平だが，14のそれは肥厚気味。器面調整は甕と大差ない。15は甑の底部破片で，復原口径14.2cm。端部はやや丸味をもっておさまり，器面はナデ調整されているが，外面の上部にハケ目の痕跡がみられる。この他図示しなかったが，把手片も出土している。なお，弥生前・後期の土器片も出土しているが，直接伴わないと思われるので省略した。

これらの土器のうち，須恵器杯身の特徴は，8世紀の中頃～後半を示すもので，大溝は8世紀後半頃に埋没したものと考えたい。

石　器（図版39-3，第102図1～4・7）1～2は粘板岩質の磨製石包丁片。3は安山岩製の石錐。これら3点は，直接この遺構に伴わない混入品であろう。4は硬砂岩製の砥石ないしはすり石片で，よく擦れた使用面は僅かに残るのみ。7は粘板岩の砥石。長さ11.4cm・幅5.1cm・厚さ1.9cmを測る。上・下両面共に砥面としてよく使用されて磨耗している。側縁の一部に円形孔の痕跡がある。また一方の面に直径1cm強の半球形凹みがあり，凹みの内側が擦れている。砥研の対象物に先端円形



第 102 図　大溝等出土石器実測図（1/2・1/3）

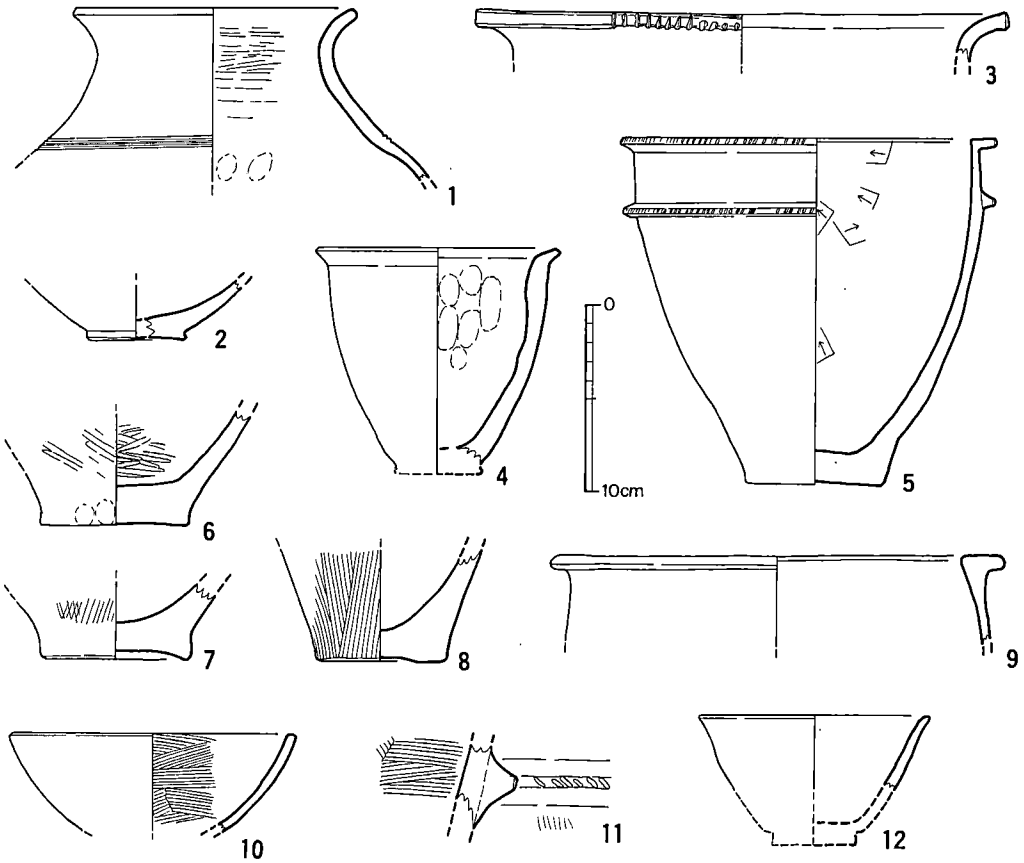
の器種を想定すべきであろうか。

土製品（図版38-3，第92図8）土製紡錘車の破片で，約1／3残る。復原外径4.5cm，厚さ1.2cm，重量の現存値11.3gを測る。

6．その他の遺物

23～27号貯蔵穴上部出土土器（第103図1～4）遺構検出時に出土した土器で，どの貯蔵穴に伴うか不明。1は内外面共に横方向ヘラミガキ調整され，肩部に3条のヘラ描き沈線が巡る。復原口径14.7cmの口縁は肥厚しない。2は壺底部で，径5.2cmの円盤貼付状の底部を有す。

3・4は，如意形口縁の甕。3は強く外反する口縁部外面にキザミ目が付される。4は復原口径12.8cm・器高12cm程度の小形甕で，口縁部にキザミ目は付かない。弥生前期後半ないし



第 103 図　包含層出土土器実測図（1/4）（5は25号貯蔵穴出土）

前期末におさまる。

ピット出土土器（第103図6・7・12）50ケ所以上の柱穴様ピットのうち，15ケ所のピットから遺物の出土があったものの，図示できるような土器片は3点のみと少ない。

6・7は，1号住居跡の東南隅部の東壁に切られるピットから出土した底部破片。6は平底で，胴内外面共にヘラミガキされている。鉢の底部であろうか。7は凹レンズ状の上げ底で，外面にハケ目が施されている。

12は，6号貯蔵穴の南西側に隣接するピットから出土した。天目椀。復原口径12cmで，残存器高2.6cm。胴部側にかけて施釉が厚くなる。

包含層の土器（第103図8～11）遺構検出時に出土した資料で，どの遺構に伴うか不明。このうち10・11は東南部の上層から出土しており，4号住居跡に伴うものかもしれない。

8は甕底部破片。9は逆L字状口縁の甕で，弥生中期中頃であろう。

10は復原口径15.1cmの椀形土器。内面にハケ目，外面に板状工具によるナデ痕がみられる。11は大形のキザミ目凸帯を有す破片で，器種は不明。内外面共にハケ目がみられ，ハケ目原体押圧のキザミ目である。10・11は弥生終末期頃であろう。

石　器（図版39-3，第102図5・6）遺構検出時に出土した石器で，5は3号住居跡南方出土の，わたぐりが浅い凹基式打製石鏃。黒色黒曜石不定形剝片を素材にし全面に調整剝離が及ぶ。先端部を欠くが，現存値で長さ2.3cm，幅1.8cm，厚さ0.4cm，重量1.2g。6は2号住居跡南方崖際から出土した。アズキ色輝緑凝灰岩製磨製石包丁。大きさは，長さ12.8cm，幅4.4cm，厚さ0.7cm，主さ63g。背は直線的で，刃は均整のとれた二等辺三角形を呈す。

鉄　器（図版34-3，第67図3）1号貯蔵穴の上縁東辺，崖に接したピットから出土した鉄斧が1点ある。袋部の一部を欠くが，長さ9.6cm，刃部幅4.5cm，袋部の長さ6.2cm，袋部の厚さ2.6cmを測るが，袋部の外面に肥厚する部分があり，今のところは銹なのか本来帯状に肥厚していたのか解らない。重量の現存値は195g。

7．小　結

B地区の住居跡は，円形住居跡1と方形住居跡3の4軒のみである。このうち1号住居跡と4号住居跡は弥生終末期，2号住居跡は弥生後期前半頃と出土土器から判断し得る。3号住居跡は遺物の出土が少なく時期を明確にし得ないが，弥生前期後半～中期前半頃の貯蔵穴の上に貼り床を施していることと，この地域では中期中葉以降に方形プランの住居跡が出現していることを考慮すれば，中期前半以降中葉迄の時期幅に縮めることが可能である。

貯蔵穴は，32基を数えるが，貯蔵穴内に，口縁の一部を欠く程度の完形資料を含めて，完形土器の出土する例は少なく，僅かに17号・19号・25号の3基のみであった。19号貯蔵穴では周

壁沿いに何個体もの土器が押し当てられたかのような出土状況を呈していたものの，床面からかなり浮いた位置からの出土である。他の貯蔵穴でも，そのほとんどが床面より浮いており，貯蔵穴本来の状態を留めているとはし難い。周壁が崩壊しては次の穴を刳り貫くというようなことが繰り返されたのかも知れない。

貯蔵穴からの石器類・土製品の出土量は少なく，破損資料が主である。また種子類を含めて植物質の遺物も残されておらず，貯蔵された対象物について判断しえない。土製紡錘車・削器，掻器類・砥石は再生産用具であり，石剣・磨製石鏃は狩猟具ないし武具というべき性格を持つもので，石包丁は明らかに収獲具だが，破片資料である。こうしてみると，いずれも貯蔵穴に貯蔵すべき性格の道具とはいい難いものばかりで，むしろ廃棄された道具とみる方が妥当であろう。

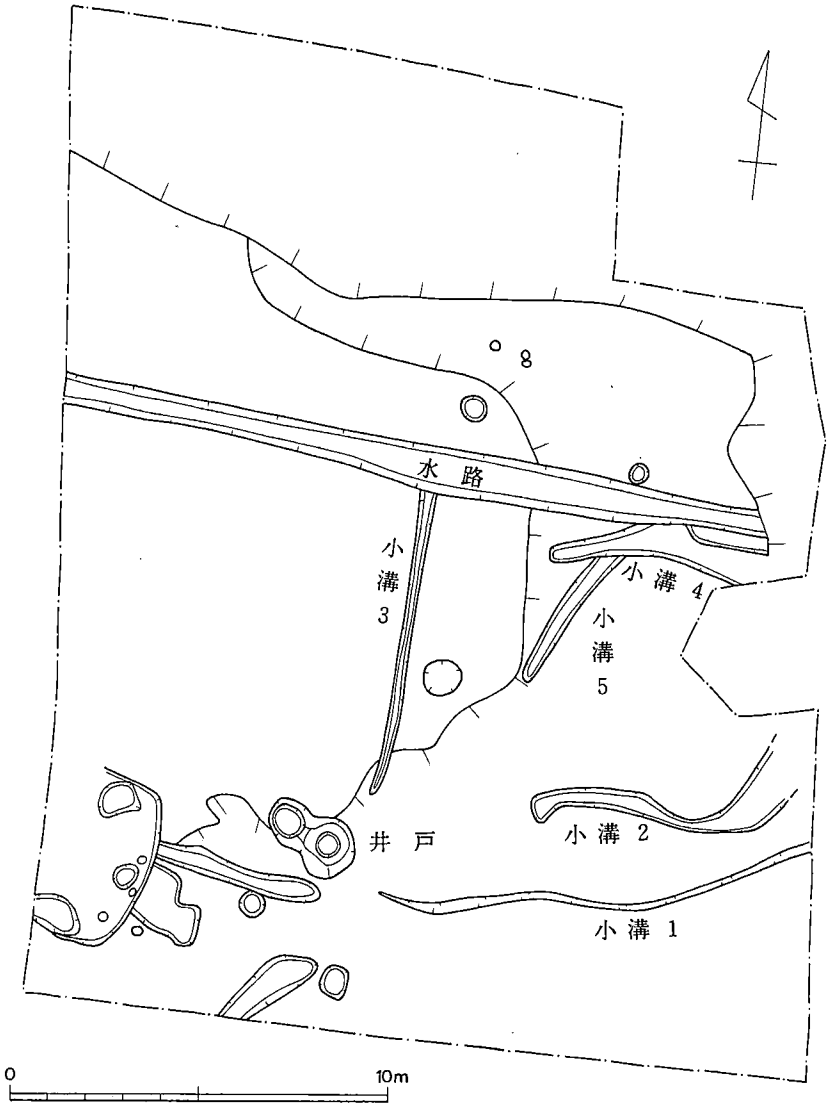
貯蔵穴の形態では，円形プランを呈すものと長方形ないし隅丸長方形プランを呈すものがある。通説的には，方形プランより円形プランが新しくなるとされているが，当該遺跡の重複関係では，円形プランに隅丸長方形・長方形プランの貯蔵穴が切られる。3号住居跡周壁に切られる貯蔵穴，貼り床下の貯蔵穴には，円形プランの例はなく，不整方形ないし楕円形プランの例では3号住居跡の周辺部に距離をおいて位置している。これらのプランを呈す貯蔵穴と3号住居跡の時期がほぼ近接している可能性は高いと考えたい。

奈良時代の遺構として，土壙1基と大溝1条があり，大溝は微高地を縦断する形に掘り込まれていることになる。調査区では土壙以外に奈良期の遺構がないため，この大溝がどのような性格を有していたかを判断し難いが，A・C地区の調査結果からして，自然堤防状の微高地の先端部から中央部を縦断していることになり，南の調査区域外にどのように延びるかが問題点として残る。なお奈良時代の時代以降は鎌倉期頃の遺物が若干出土するのみで，密度は極めて低い。

3．C地区の調査

1．はじめに

C地区は，B地区の東側に都市計画道路三沢・西福童線を挟んで隣接する。南北55m，東西80m弱の範囲がC地区の調査対象で，字正尻1570-1，1571-1，1572-1番地と，字寺田1677-3，1678-1～3，1680-1，1681-8，1685-5番地に相当する。このうち，1572-1，1677，1678番地の部分は既に盛土されていて標高17.3～17.5mを有すが，他は16.3m程度の水田である。この水田部分には南北方向に流れる水量の豊富な水路があり，水路に挟まれた部分が，自然堤防上で



第 104 図　C地区遺構配置図（1/200）

あると想定しえたので，まずこの部分の再堆積土，表土を除去することにしたが，再堆積土は約1m，表土・床土は約0.3mの厚みをもっている。道路側では，道路建設時の迂回路に使用されていたようで，アスファルトの舗装部分もみられた。また東側へ傾斜して深くなることも判ったので，字寺田の部分へと拡張したが，こちらも急激に深くなり，排土の置場のこともあり，1678番地の中途で拡張を中止した。

一方，水路よりも東側では1570-1，1571-1番地を試掘した。1570-1番地では，耕作土の下に水田床土，暗青灰色粘性土とつづき，表土下約１mで，淡青灰色の硬くしまった砂層に達する。この砂層は約0.2mで淡青灰色の粘土を薄く挟み，また約0.2m程度砂になる部分もあるが，砂でなく暗青灰色粘土になる部分もみられた。更にその下に黒色味の強い粘性土があり，土器片や，木材も含まれるが，かなり深くなり，この層の間に挟まれている強砂層（表土下約２m）から涌水が激しいので，これ以上は掘り下げていない。1570-1番地でも継続して試掘を実施したが，水路側に向かって更に深くなる。ただ水路に近い（水路から10m余り）あたりからは西側に浅くなるようで，そのまま1572-1番地側の方へ続く。字寺田の部分も，同様の状況と思えたので，調査を実施せず，結果的には，1572-1番地と1678-１～３の南半のみ全面発掘した。

調査区では，字境に水路が流れ，北と東端部は深く落ち込んでいくが，井戸と，土杭・ピットが若干，東西方向・南北方向に流れる小溝が数条検出されたのみで，大半は削平されているものと思われる。

2．井　戸

調査区の南西部に位置する素掘りの井戸。２基重複しており，上縁は長さ2.6m，北西部径1.2m南西部径1.6mの瓢形を呈すが，大きめの南西側の方が後出する。

南西側の井戸は，深さ0.9mを有し，上縁から約0.4mは摺鉢状に，それより下位は直に掘り込まれているようだが，水位の上面がこのあたりにあった為か周壁は崩壊してオーバーハングする。底面は，約0.4～0.5mの円形プランを呈している。埋土は，下位に緑灰色粘土が，その上に黒緑色粘土が堆積して上縁の周壁沿いまで黒緑色粘土が及ぶ。中央部の上位では更に黒茶褐色の砂質粘性土が堆積する。この堆積土の上縁には人頭大の角礫が内側に傾いて乗っかっている。ただ北西側は，古い井戸の堆積土が崩壊して埋まり込んでいる状況が観察された。埋土の中位より内黒土器，土師器細片が出土した。

北西側の井戸は，深さ0.65mを有し，上縁から0.25m下位まで摺鉢状，それ以下はやや直に掘り込まれている。底面は，径0.6～0.7mの不整円形を呈すが，本来0.5～0.6m程度であったものと思われる。埋土は下位に黒緑色の粘質砂，中位に黒緑色粘土，上位に，黒茶褐色粘土，暗紫茶褐色粘質砂が堆積する。埋土の中程でもやや下位から砥石が１点出土した。

内黒土器（第106図１・２）２点共に底部破片，内面はヘラミガキされるが別個体。１は復原底径8.3cmの大きさで，体部外面は丁寧にヘラナデ（ヘラミガキかも知れない）され，高台部はヨコナデ，外底面はナデ調整。２は体部外面，高台部共にヨコナデ調整されており，外面の色調は黒っぽい灰色を呈している。復原底径は9.3cmになる。

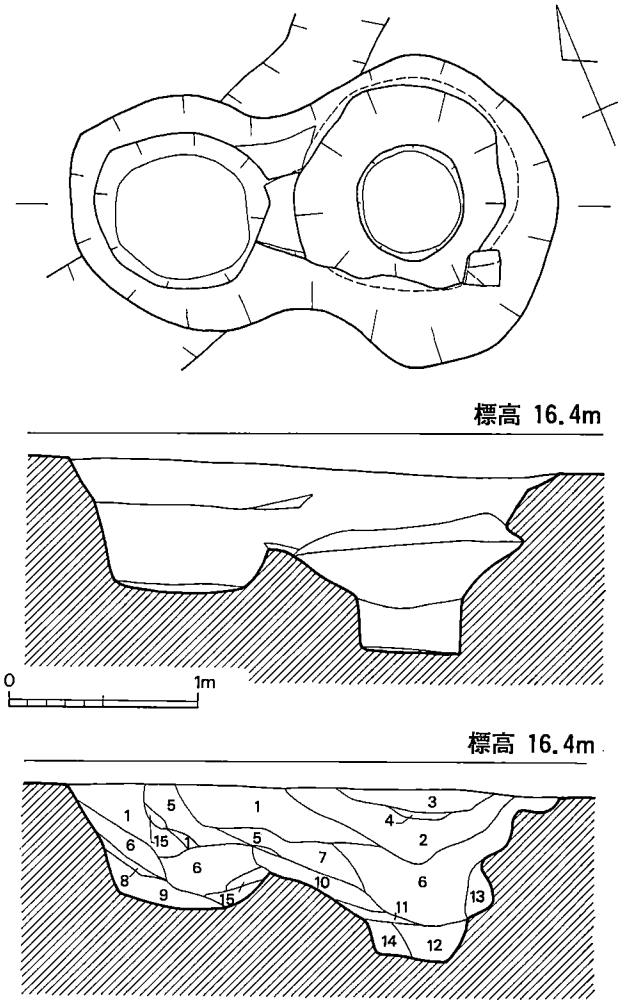
石　器（図版40-4，第107図10）雲母片岩質の砂岩製砥石。ほぼ完形で長さ10.6cm，幅3.2cm，厚さ2.4cm，重量115gの大きさの棒状を呈す。3面はよく使用されているが，1面はそれほどではない。

3．溝状遺構

小溝1

調査区の南部を東西方向に流れる溝で，井戸の南西側では削平のため途切れる。西端部は攪乱坑によって切られる。幅は0.3～0.5m，深さは最深部の東端で0.7mを有し梯形ないしU字形の断面を呈す。勾配は16／1,000程度で，東へ流下する。溝内からは弥生土器片，土師器片，石器片が出土したものの，図示しえる資料は石斧片1点のみで，土師器片は内面ヘラケズリの厚手甕片が，最も新しい。

石　器（図版40-4，第107図6）灰色を呈す頁岩製の柱状片刃石斧の刃部破片。幅2.1cm，長さ4.5cmが残る。



1 黒茶褐色粘土―黄緑色の小土塊(0.5～1cm大)を含み、若干砂質ぽい
2 ①より黄緑色の小土塊の量は少ない
3 緑褐色土―白色砂粒多くふくむ
4 暗緑褐色土―②より色調が濃い
5 暗紫色粘砂―①同様黄緑色の小土塊を含む
6 黒緑色粘土―粘性が極めてつよい
7 ⑤と①の混合土
8 地山の土と⑤との混合土
9 黒緑色粘砂⑤に灰色微砂がまじったもの
10 ⑤と⑥との混合土
11 ⑤と地山の土との混合土（砂質）
12 緑灰色粘土（粘性強い）
13 ⑤と地山の土との混合
14 ⑪と地山の土（灰黄色粘土）との混合
15 地山（灰黄色粘土）

第 105 図　井戸実測図（1/40）

小溝2

小溝1の北側にあり東西方向に流れるが，蛇行し，東部では北へ屈曲する。深さは0.2～0.5m，幅0.4～1.2mでU字形の断面を呈す。溝内からは，弥生土器片・土師器片が出土したものの図示しうる資料はない。

小溝3

調査区の中央部を南北に流れる幅0.3～0.4m，深さ0.1m弱の浅いU字形断面の溝で，北は字境の溝につながりそれ以上には延びない。南端は，段落ちの為不明だが，埋土は水田耕作土に近いもので，時期的にかなり下降する溝と思われる。

小溝4

調査区の東北部にあり，字境の溝に一部切られる。深さは0.2～0.3mを有し，東部に広くなる。溝内埋土は暗茶褐色土で，弥生土器片・土師器片・近世陶磁器片が出土した。

小溝5

小溝4に切られる溝だが，溝内埋土は小溝4よりも若干灰色っぽい。溝内からの遺物の出土はみられなかった。この溝の延長線に沿って調査区の東南部が削平されたような段落ちになる。

4．その他の遺構と遺物

調査区の北部から北東部にかけては崖状に落ち込んでいる。青灰色系の粘性土，粘土が堆積しているが，余り深く掘り下げなかった。埋土中からは，弥生中期土器片，土師器片が出土している。土師器片は，把手付甕の破片かと思える破片だが図示していない。またこの落ち込みのやや高所に柱穴様ピットが数個検出されたものの，近世陶器片等を含んでいるもので建物等に伴うものではない。

一方，南西部にも攪乱坑内の小ピットや，攪乱溝の東に土坑・ピット・溝状の遺構がある。溝状を呈す遺構の上縁，調査区域ぎりぎりの位置から土錘1点，土坑に接した上縁から須恵器片が出土した。いずれも遺構に直接伴うか否かはっきりしない位置からの出土のため，包含層出土として一括した。これらの掘り込みの内からの遺物の出土はない。

南西部包含層出土の遺物

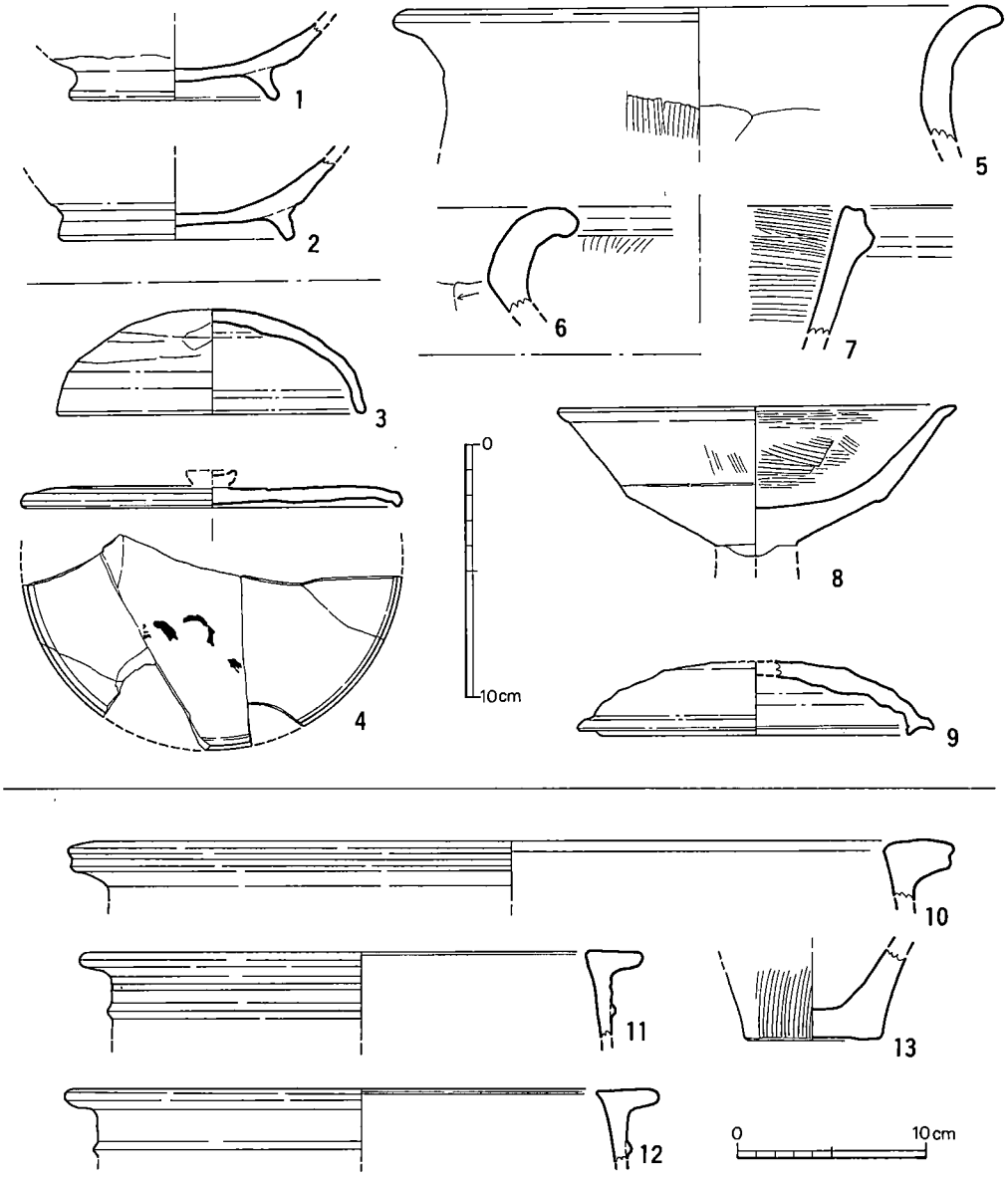
須恵器（第106図3）復原口径12.0cm，器高4.1cmの大きさの杯蓋。天井部外面はヘラケズリされ，他はヨコナデ・ナデ調整されている。6世紀後半頃のものである。

石　器（図版40-4，第107図11）花崗岩質の石材を用いた棒状の砥石片。さほど使いこまれていないもので，長さ5.8cm，径2.8～3.2cmの大きさ。

土製品（図版40-4，第107図3・4）2点共に管状土錘。3は完形品で，長さ4.6cm，外径1.3cm，孔径0.3cm強，重量6.95g。4は端部を欠失し，現存長3.6cm，外径1.1cm，孔径0.3cm。孔はやや歪つな位置に穿たれている。4は溝状の遺構上縁，3はそれより7mほど東方から出土した。

中央部包含層出土の遺物

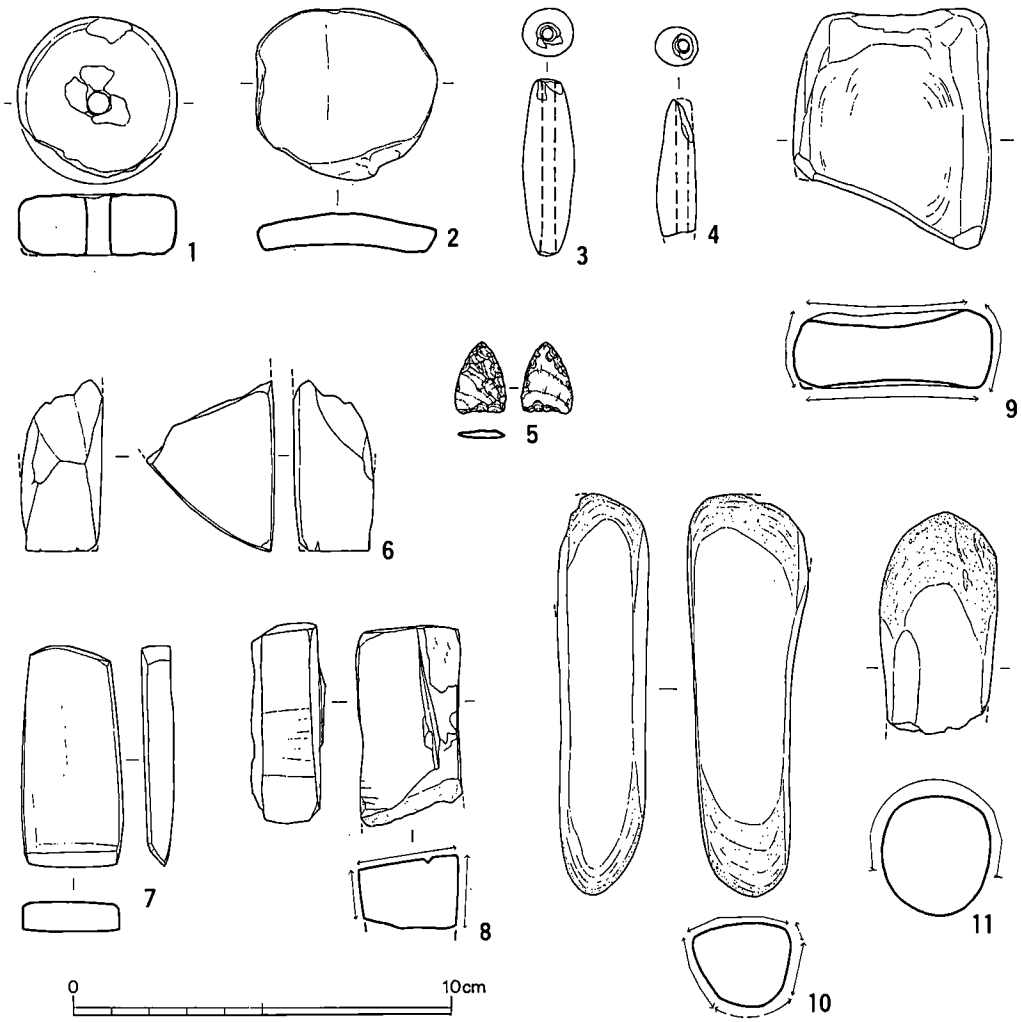
須恵器（図版40-3，第106図4）扁平なつまみが付くと思われる杯蓋の破片。復原口径15.



第 106 図　C地区出土土器実測図（1/3・1/4）

2cmの大きさで，体部の深みはなく，天井部から僅かに口縁端部が屈折する。天井部は回転ヘラケズリ，他はヨコナデ調整されている。天井部内面に墨書の痕跡がみられるものの，ほとんど消えて判読しえない。

土師器（第106図５・６）２点共に甕の口縁部破片。５は復原口径24.0cmの大きさで，口縁



第 107 図　C地区出土石器・土製品実測図（1/2）

部は緩やかに外反する。胴部外面を縦方向のハケ目調整，内面はヘラケズリされている。傾きはもう少し口縁部が開く可能性もある。6は口縁部が強く外反する。口縁部外面は縦方向ハケ目調整のあとヨコナデ調整されている。

弥生土器（第106図）4点のみ特徴ある土器を図示したが，10は大型の甕，他は中型の甕。10は逆L字状の肥厚した口縁部で口唇部外面は沈線状に凹む。11，12は逆L字状口縁で口縁下に三角凸帯が巡る。13は底径7.4cmの平底底部。弥生時代中期中頃のものである。

石　器（図版40-4，第107図5・9）5は安山岩製の打製石鏃，長さ1.9cm，幅1.4cm，厚

さ0.2cm，重量0.55gを測る。小剝片を利用しており，主要剝離面の残る平基式。9は，黄灰色を呈す凝灰岩質砂岩製の砥石。現存長6.3cm，幅5.2cm，厚さ2.1cmの大きさ。四面共よく使用され，上・下両面は中凹みになる。

土製品（図版40-4，第107図1・2）1は土製紡錘車。約1／4を欠失するが，外径4.2cm，厚さ1.6cm，孔径0.6cm，重量の現存値26gを測る。2は土器片再利用の土製円板，外径4.5～5.0cm，厚さ0.9cm，重量21.2gの大きさで，周縁部は打欠き整形のあと研磨を加えている。

北東部包含層出土の遺物

石　器（図版40-4，第107図7・8）7は灰白色を呈す頁岩製の扁平片刃石斧。完形。長さ5.8cm，幅2.7cm，厚さ0.8cm，重量23.7gを測る。8は凝灰岩製の砥石片。長さ5.2cm，幅2.8cm，厚さ1.9cmの現存値で，三面共よく使用されており，一面には鋭利な刻線がある。

東側水田出土の遺物

土師器（図版40-3，第106図8）口径15.5cm，残存器高5.8cmの高杯の杯部。柱状部以下を欠く。柱状部との接合はソケット状になる。杯底面から120°前後の屈折をして口縁部が開く。口縁端部はわずかに外反する。杯部の深さは3.9cmを有す。内外面共にハケ目調整のあとをナデ消している。古墳時代前期の土器であろう。

須恵器（第106図9）復原口径14.0cm，器高3cm弱の杯蓋。身受けのかえり部は内傾気味に下方に尖る。ヨコナデ調整され，天井部はヘラナデされる。7世紀初頭頃のものであろう。

5．小　結

この地区は，B地区の遺構検出面よりも約1m低くなっていることからして，かなり削平が加わっているものと考えうる。井戸出土の土器は11世紀前半頃であろう。井戸の上縁が削平されていることを考慮すれば，隣接する小溝1は遺物に新しい要素がみられないものの，時期的に下降する可能性を残している。また南西部の包含層や東側水田に古墳時代の遺物が出土することに注目しておきたい。A・B両地区の出土遺物中に古墳時代前期の資料は少なく，後期の資料もA地区大溝支流などに若干あるもののB地区では少ない。土器の遺存状況からみて，該期の遺構が近い周辺に存在したものと思える。

東側水田部のトレンチでの状況は，B地区の微高地状地形が，C地区調査区の東端あたりまでで，以東の部分が低湿地になっていることを示しており，A地区の落ち込みまでの約120mの間が自然堤防状の地形であったことが窺える。更に北東側から北西側につづく落ち込みの崖線は東部の後背湿地的な部分へ流れ込む浸蝕面であることが想定できる。字正尻地区の北西隅部からさほど遠くない部分に自然堤防状地形の突端部が位置するものと考えたい。従って，古墳時代の遺構は本来この突端部付近に占地していた可能性が高い。（小池）

4．D地区の調査

1．はじめに

D地区の調査は，昭和60年5月22日～6月1日まで行った。調査面積は，560m^{2}程である。昨年，調査を行ったC地区から東へ70m程の地点である。調査区の北側は，宅地化が進んでいるが，南側には水田面が存在する。また，調査区の現状は畑地であるため周辺より一段高いが，北側にある墓地が続いており，為に，遺構は著しい削平を受けていた。

遺構として，弥生時代の貯蔵穴・土坑・小土坑・落込み状遺構・ピットなどがある。

2．貯蔵穴

1号貯蔵穴（図版42-1，第109図）

調査区の南西隅に位置する。平面形は楕円形を呈し，床面は平坦である。深さが18cmと非常に浅く，上部はかなりの削平を受けている。

遺物は，床面よりやや浮いた状態で土器が出土し，石包丁片及び黒曜石剝片も出土した。

土器（図版48，第110図）1～3は甕である。1は内傾する逆L字状口縁部の破片であり，復原口径28.0cmを測る。内面の稜はシャープであり，その直下を強くヨコ方向にナデている。胎土は，2mm大の長石・石英粒子を含む。焼成は軟質で，内外面とも黄褐色を呈す。2・3は底部破片で，2が7.5cm，3が6.8cmを測り，3は胴下半部より残る。2・3とも底部はかなり厚く，3は内窪みの上底を呈す。外面調整は，両者ともハケ目であるが，2のそれは粗い（4条/cm）。2・3とも1～3mm大の長石・石英粒を含み，2には金雲母粒も含まれる。焼成は，2は良好で黄褐色を呈し，3はやや軟質で茶褐色を呈す。

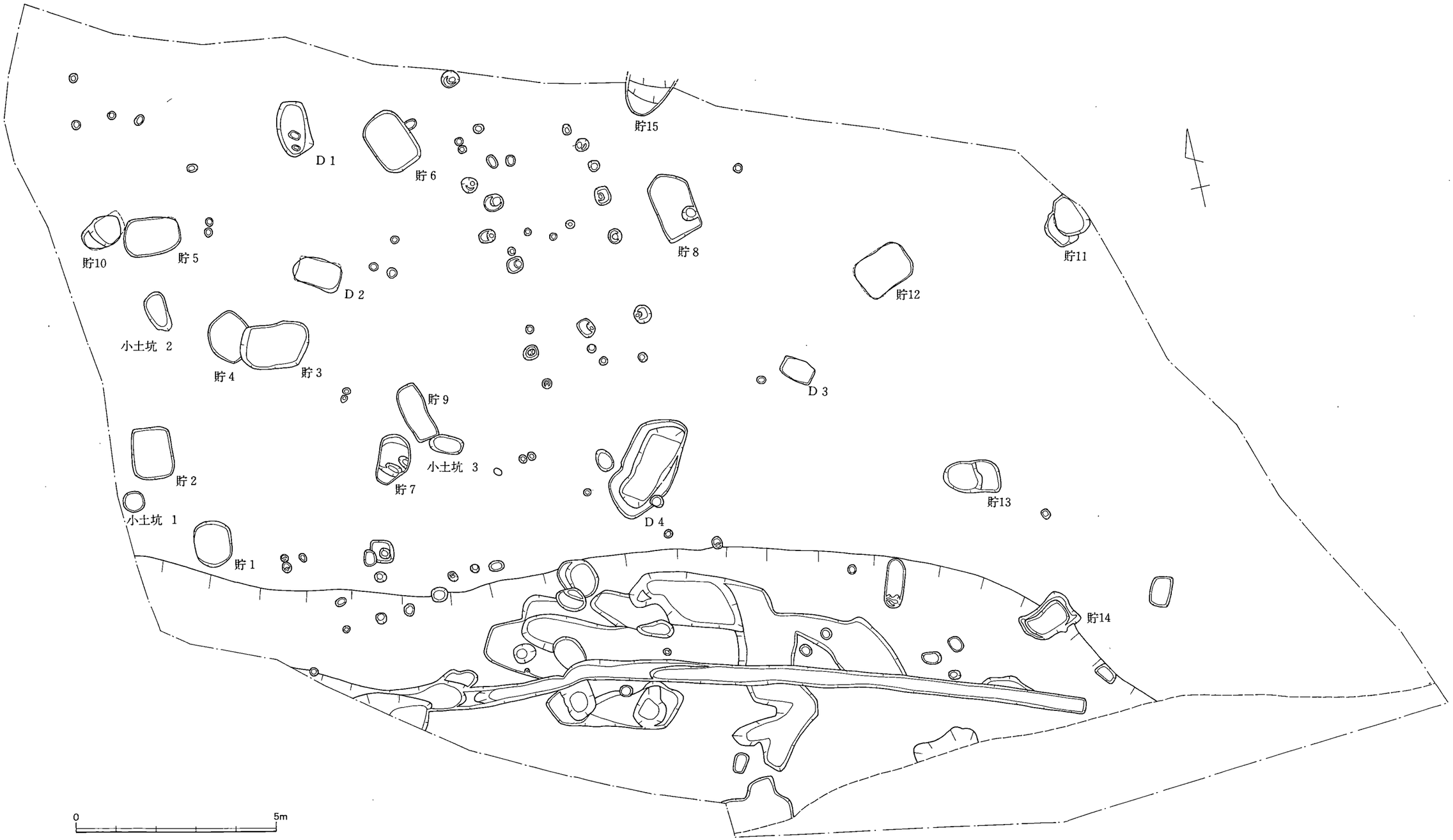
4は底径6.4cmを測る壺の底部破片であり，底径の1/4周程残存する。調整は，外面がヘラミガキで，内面はナデである。胎土に2mm大の長石・石英粒を含む。焼成は良好で，内面が緑灰色，外面は暗褐色を呈す。

時期は，1の逆L字状口縁部及び上底の厚い底部からして，弥生中期初頭であろう。

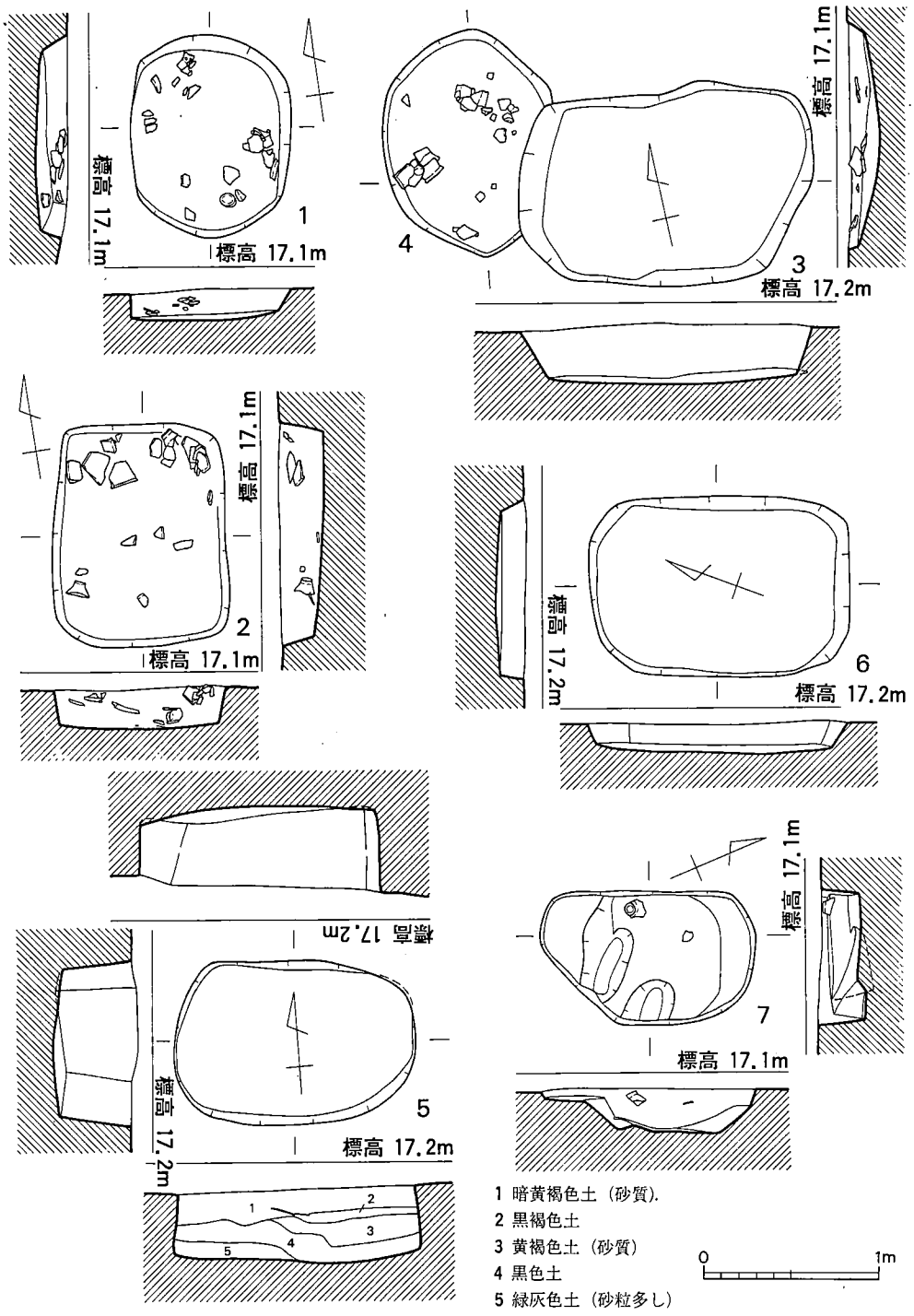
石器（図版50-3，第111図）粘板岩製の石包丁で左右を欠損する。幅5.6cm，厚さ5.5mmを測る。刃部は外弯気味で，刃こぼれする。

2号貯蔵穴（図版42-2，第109図）

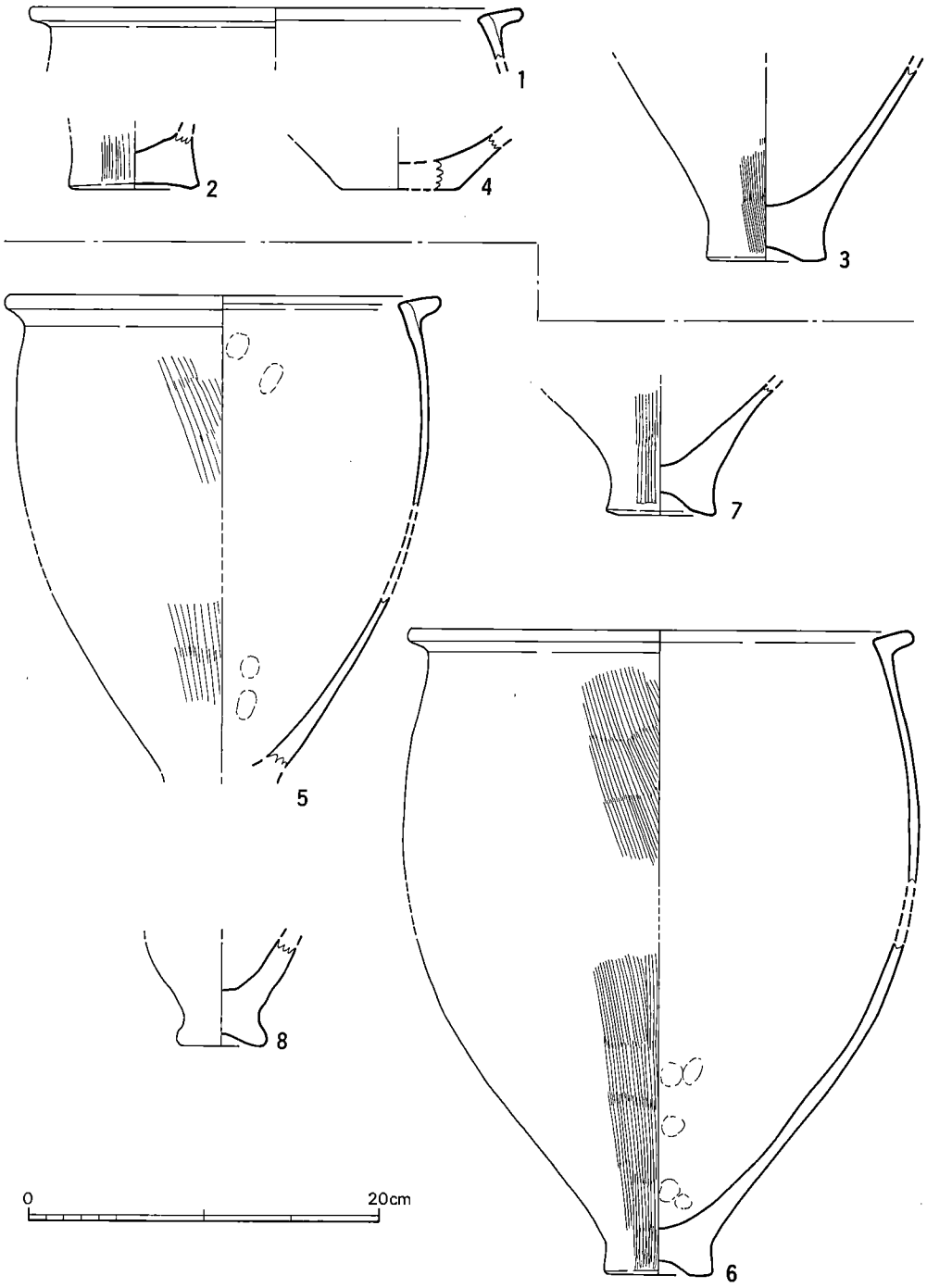
1号貯蔵穴の北西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，床面は北側に緩傾斜している。



第 108 図　小郡正尻遺跡D地区遺構配置図（1/100）

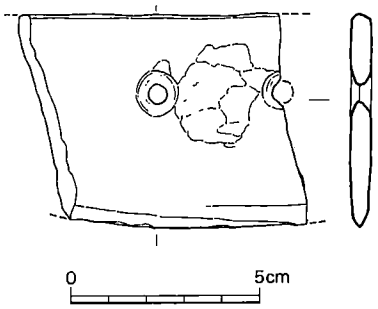


第 109 図　1～7号貯蔵穴実測図（1/40）



第 110 図　1・2号貯蔵穴出土土器実測図 (1/4)

深さ0.23mと，1号貯蔵穴同様に浅い。埋土は黒褐色土であった。遺物は，すべて床面より浮いた状態で出土した。



第111図　1号貯蔵穴出土石器実測図（1/2）

土器（図版48，第110図）5～7は甕である。5は復原口径24.8cmを測り，胴部中位と底部を欠く。6は復原口径28.8cm，底径6.2cmを測り，胴部中位を欠く。5・6の口縁部は，肥厚する逆L字状口縁で，内傾する。内面の稜はさほど明瞭ではないが，その直下は強くヨコ方向にナデている。6の底部は，内窪みの上底を呈す。調整は，両者とも口縁部はヨコナデ，外面はハケ目，内面はナデであるが，5のハケ目は1cm間に4条と極めて粗く，タタキ目状である。胎土は，ともに2～3mm大の長石・石英粒を含む。焼成は，5がやや軟質，6は軟質である。色調はともに灰白色を呈す。7は底部のみの破片であり6.2cmを測る。内窪みの上底を呈する。調整・胎土は6と同様である。焼成は良好で，内面が黄白色，外面は紫灰色を呈す。

8は甕か台付椀のミニチュア品であろうか。底部は上底をなす。外面には，ヘラ状工具によるミガキ痕が残り，内面はナデ調整を施す。

時期は，6の甕は，逆L字状口縁で，厚い上底の底部を有すことから，弥生中期初頭と考えられる。7は甕の底部としたが，蓋の把手部となる可能性がある。

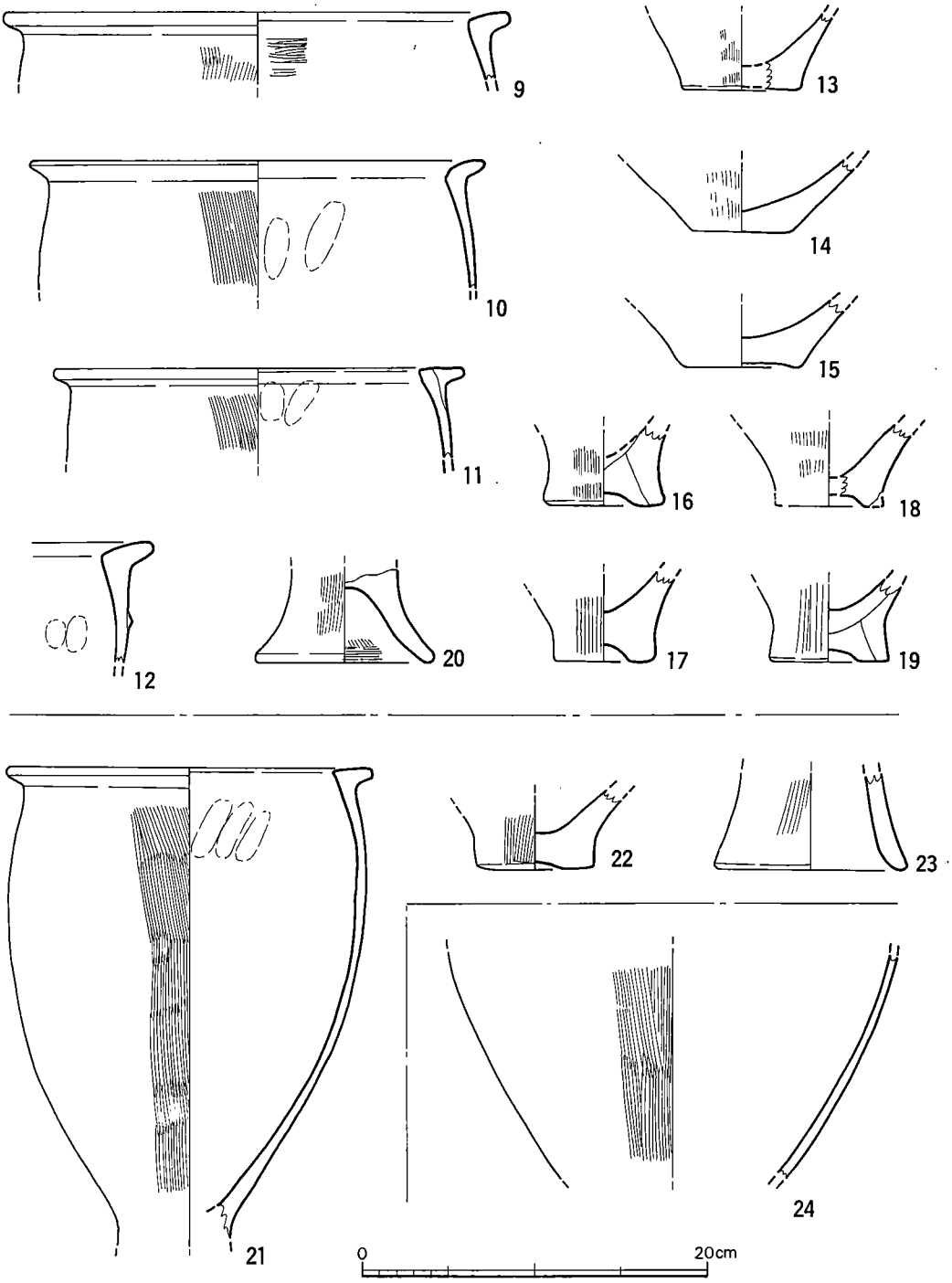
3号貯蔵穴（図版42-3，第109図）

調査区の西側に位置し，4号貯蔵穴を切っているが，両者に時期差はみられない。平面形は不整長方形を呈し，床面は平坦である。遺物は，甕が多く出土したが，完形になしうる個体はなかった。また，黒曜石の剝片が出土した。どれも，床面より浮いた状態であった。

土器（図版48，第112図）9～12は，甕の口縁部から胴部上位にかけての破片である。口縁部の形状は，9は肥厚する逆L字状の口縁で，内傾する。10も逆L字状口縁をなすが，外弯している。11は逆L字状口縁を呈し，口縁部平坦面はほぼ水平である。12も逆L字状口縁であり，その外面直下に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。調整は，9～11が外面はハケ目で，内面はナデである。12は凸帯までがヨコナデで，それ以下はヘラミガキである。

14・15は底部破片であるが，胴下半部が開いているので壺の底部と考えられる。胎土はともに1mm大の長石・石英粒を含み，概して良い。焼成は，14はやや軟質であるが，15は良好である。色調は，14が内外面ともに灰褐色を呈し，15は内面が暗灰色，外面が黄褐色を呈す。

13・16～19は甕の底部で底径は7cm程である。13はやや上底気味で，16～19は内窪みの上底を呈す。調整は，ともに外面がハケ目で，内面はナデである。胎土に1～3mm大の長石・



第 112 図　3～5号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

石英粒を含む。焼成は13・16・19が軟質で，17・18は良好である。色調は，黄褐色が主流である。20は脚部のみの破片であるが，脚台付甕になるか。調整は，外面がタテ方向のハケ目で，内面はヨコ方向のハケ目である。

時期は，逆L字状の口縁部，上底を呈する底部から，弥生中期初頭と考えられる。

4号貯蔵穴（図版43-1，第109図）

3号貯蔵穴に切られる。平面形は不整円形を呈す。床面は，中央部に深くなっている。深さは上部が削平されているために0.17mと浅い。遺物は，床面より浮いた状態で出土した。

土器（図版48，第112図）21・22は甕である。21は底部を欠き，22は底部のみであるが，両者は別個体である。21の口縁部は逆L字状で，若干内傾する。内面の稜はシャープである。胴部はあまり張らず，底部へ移行する。調整は，外面がハケ目（7～8条/cm）で，内面はナデである。胎土に1～3mm大の長石・石英粒を含む。焼成は良好で，内面が暗褐色，外面は茶褐色を呈す。また，外面は二次的焼成を受け，赤変・剝落し，煤が薄く遺存する。22は上底の底部破片である。調整は，両者とも外面がハケ目で，内面はナデである。

23は器台の脚部破片であり，端部は丸味をもつ。調整は，外面がハケ目で内面はナデである。

時期は，弥生中期初頭と考えられる。

5号貯蔵穴（図版43-3，第109図）

3・4号貯蔵穴のやや北側に位置する。平面形は楕円形を呈し，床面は東側に緩傾斜している。深さは他の貯蔵穴に比して深く，0.47mを測る。壁面は鉛直に立ち上がる。遺物は，①層中より出土しているが，少量である。

土器（図版48，第112図）図示できうる土器は1点のみであった。24は甕の胴部破片である。調整は，外面がハケ目（6条/cm）で，内面は剝落して不明だが，恐らくナデであろう。胎土に2mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は不良で，内面が灰褐色，外面は緑灰色を呈す。胴部破片のみの出土で，時期の詳細は判別できないが，弥生中期頃であろう。

6号貯蔵穴（図版43-2，第109図）

1号土坑の東側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，床面は平坦である。深さは0.16mと浅く，著しい削平を受ける。埋土は黒褐色土で，遺物は床面より浮いて出土した。

土器（第113図）25は復原口径26.4cmを測る壺の口縁部破片である。端部は丸く納めてある。外面には無数のユビオサエ痕が残る。胎土に1mm大の長石・石英・金雲母粒を含み，概して良好である。焼成は良く，内外面とも灰褐色を呈す。

26・27は甕である。26は復原口径29.0cmを測る口縁部破片であり，逆L字状を呈す。27は

底部付近の破片である。調整は，外面がハケ目（5条/cm）で，内面はナデである。胎土に1～2mm大の長石・石英粒を含む。焼成はやや軟質で，内面が灰褐色，外面は暗褐色を呈す。

時期は，弥生中期初頭と考えられる。

7号貯蔵穴（図版44-1，第109図）

3号貯蔵穴の南東側に位置する。平面形は不整形を呈す。床面は西側に段がつき，東側へ傾斜している。深さは0.25mを測る。遺物は，床面より浮いた状態で出土した。

土器（第113図）28は蓋の把手部破片であり，中央が窪む。調整は，外面がハケ目（5～6条/cm）であり，内面はナデである。胎土に1～2mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は良好で，内面が灰白色，外面が黄灰色を呈す。

出土遺物は少量であり，時期を明確にしえないが，恐らく弥生中期頃であろう。

8号貯蔵穴（図版44-2，第114図）調査区の北寄りに位置する。平面形は不整長方形を呈す。床面はほぼ平坦であり，東側に浅いピットがある。埋土は黒褐色土を基調とするが，①・②層間に焼土層が嵌入し，①層には焼土粒が混る。遺物はすべて床面より浮いた状態で出土した。

土器（図版48・49，第113図）29～35は甕である。29・30は内傾する口縁部の破片で，逆L字状を呈する。両者とも外面が磨滅しているために調整は不明である。胎土に2mm大の長石・石英粒を含む。焼成は29が軟質で，内外とも黄灰色，30は良好で，内面が緑灰色，外面は灰白色を呈す。31は口径29.6cmを測る。口縁部より胴部中位まで残存する。口縁部は逆L字状を呈し，頸部のやや下位に断面三角凸帯を巡らす。胴部はあまり張らない。調整は，外面がハケ目（9～10条/cm）で，内面はナデである。胎土に2mm大の長石・石英粒を含む。焼成は良好で，内面がくすんだ灰色，外面が灰黄白色を呈す。32・33は口縁部のみの小破片である。口縁部は平坦な逆L字状を呈し，器壁は薄い。32は頸部下位に断面三角凸帯を巡らす。肥厚する逆L字状口縁を呈する29・30に比して，32・33は新しい要素を持つ。

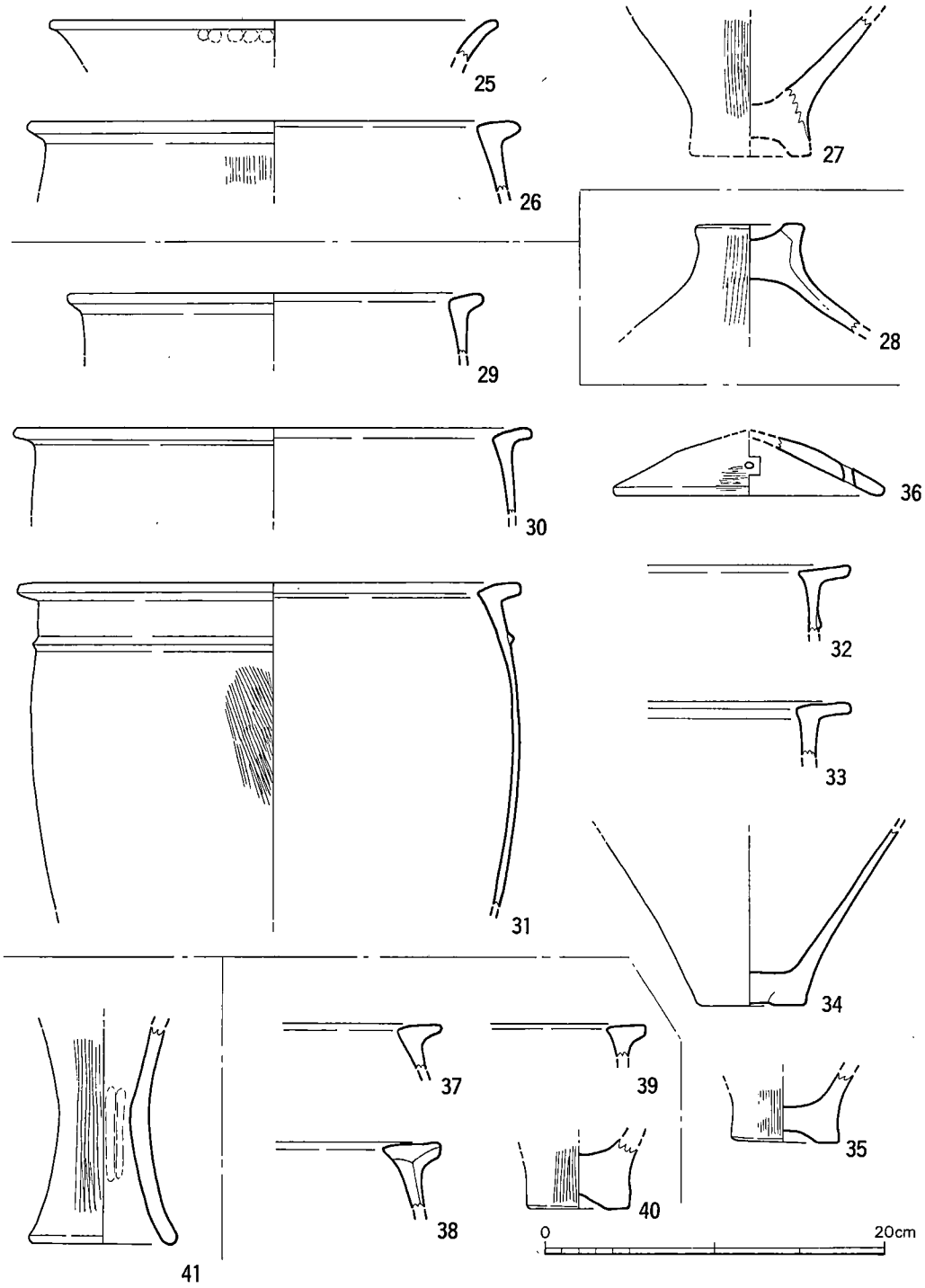
34・35は底部破片である。34は平底で，35は内窪みの上底を呈す。胎土に1～3mm大の長石・石英粒を含み，34には金雲母，35にはくさりれきの粒を含む。焼成は良好で，内面が紫灰色，外面は灰褐色を呈す。また，34の外面は二次焼成により，赤変・剝落している。

36は傘形の蓋である。小破片なために，円孔は1つしかないが，本来は対となるものである。

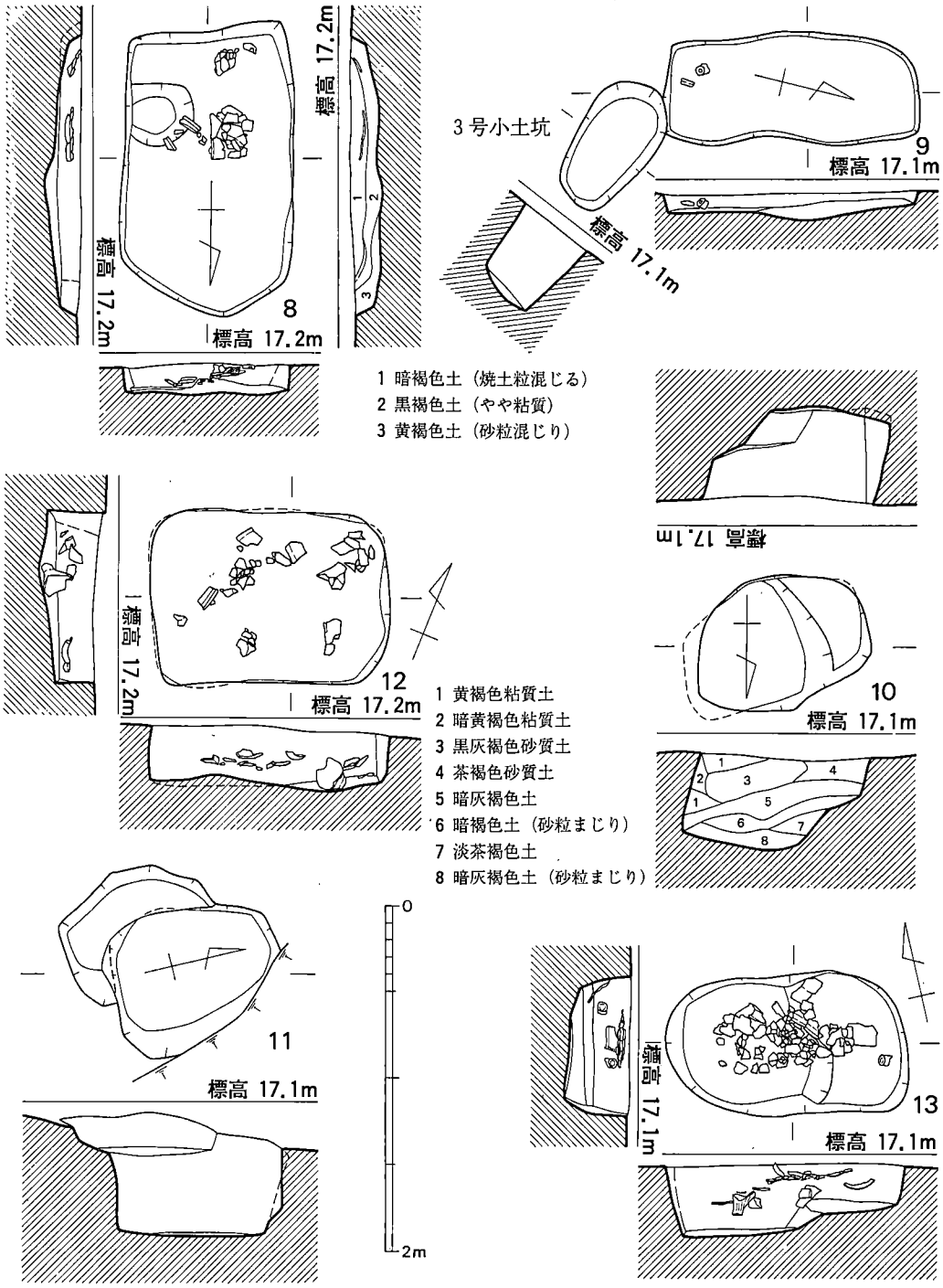
時期は，逆L字状口縁を呈する29～31が弥生中期初頭で，口縁部が平坦な逆L字状口縁を呈する32・33がそれより後出し，中期前葉と考えられる。

9号貯蔵穴（図版45-1，第114図）

7号貯蔵穴の東側に隣接する。平面形は不整長方形を呈し，床面は起伏している。深さは0.



第 113 図　6～10号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）



第 114 図　8～13号貯蔵穴実測図（1/40）

13mと非常に浅い。南端を3号小土坑に切られている。遺物は，浮いた状態で出土した。

土器（第113図）37～40は甕である。37～39は口縁部のみの小破片である。胎土に2mm大の長石・石英粒を含み，39には金雲母粒も含まれる。焼成は，37・38が軟質で内外ともに灰黄色を呈す。39は，焼成は良好で，内面が黄褐色，外面が緑灰色を呈す。40は内窪みの上底を呈する。底径6.1cmを測る。胎土に1～3cm大の長石・石英粒を含む。焼成は良く，内面が紫灰色，外面が灰褐色を呈す。

時期は，弥生中期初頭と考えられる。

10号貯蔵穴（図版45-2，第114図）

5号貯蔵穴の西側に隣接している。平面形は不整楕円形を呈す。床面は1段ステップがつき，東側の壁面はオーバーハングしている。深さは他の貯蔵穴に比して深く，0.50mを測る。遺物は，器台が1点出土したのみである。

土器（第113図）41は器台である。上端を欠く。下端は8.8cmを測り，丸く納めている。調整は，外面がハケ目（5条/cm）で，内面はナデである。胎土に1～2mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は良好で，内外面ともに黄灰色を呈す。

出土遺物は器台1点であり，時期を明確にしえないが，弥生中期前葉頃であろう。

11号貯蔵穴（図版45-3，第114図）

調査区の東端に位置する。東側は大きく削られ，西側には攪乱坑があるため平面形は判然としないが，隅丸長方形を呈するか。床面は平坦である。深さは0.57mを測る。埋土は黒褐色土であった。石斧片かと思われる破片が出土した。

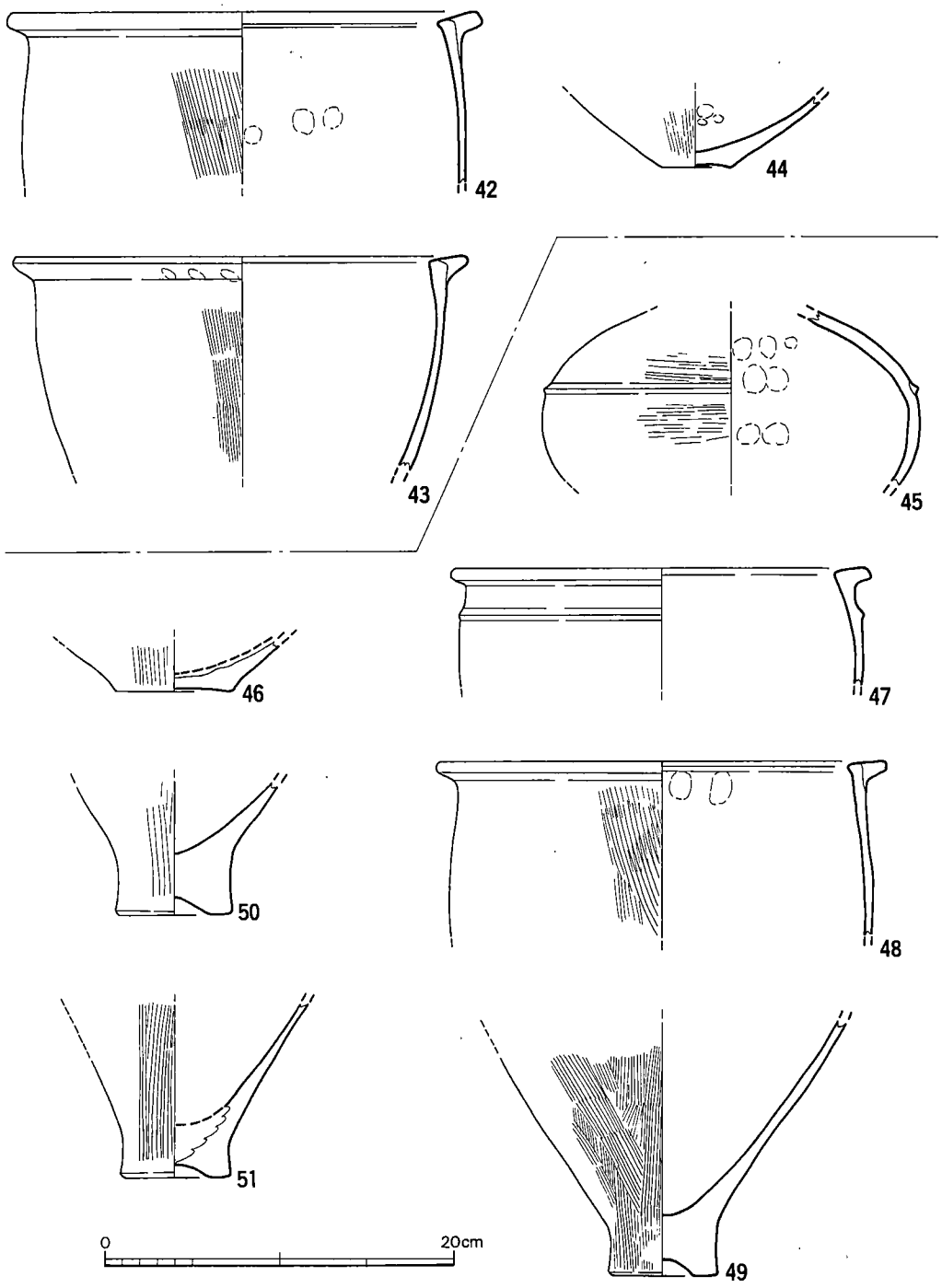
土器（図版49，第115図）42・43は甕である。両者とも，肥厚する逆L字状口縁を呈する。復原口径は，42が27.4cm，43が26.0cmを測る。調整は，外面がハケ目で，内面はナデであり，口縁部はヨコナデである。胎土は2mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は42が良好で，43は軟質である。色調は，42の内面が灰紫色，外面が淡緑褐色，43の内面が淡灰褐色，外面が灰白色を呈す。

44は壺の底部であり，底径4.0cmを測る。調整は，外面がヘラミガキで，内面はナデである。胎土に2mm大の長石・石英・金雲母粒を含むが，概して良好である。焼成はやや軟質で，内面が灰褐色，外面は茶灰色を呈す。

時期は，弥生中期初頭と考えられる。

12号貯蔵穴（図版46-1，第114図）

調査区の東寄りに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，床面は起伏がある。壁面は若干



第 115 図　11・12号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

オーバーハングしている。深さは0.35mを測る。遺物は，浮いた状態で出土しており，また，黒曜石の小剝片も出土した。

土器（図版49，第115図）45は壺の胴部で，復原胴径21.6cmを測る。胴部最大径のやや上位に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。調整は，外面がヘラミガキで，内面はナデである。また，内面には無数のユビオサエ痕が残る。胎土に1～3mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成はやや軟質で，内面が緑灰色，外面が茶褐色を呈す。46は壺の底部で，やや上底を呈す。調整は，外面がヘラミガキで，内面は剝落しているので不明。胎土は，2mm大の長石・石英粒を含む。焼成は不良で，内外面とも暗褐色を呈す。

47～51は甕で口縁部平坦面はほぼ水平である。47は頸部のやや下位に断面三角形の貼付凸帯を巡らす。外面調整は，47は磨滅しているため不明，48はハケ目（4条/cm）である。内面調整は，両者ともナデである。胎土に1～3mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は，47は軟質で褐色を呈し，48は良好で内面淡紫色，外面淡茶色を呈す。

49～51は甕の底部である。三者とも底部はかなり厚く，内窪みの上底を呈す。調整は，外面がハケ目で，内面はナデである。また，50のハケ目は1cm間に4条と粗い。胎土に1～3mm大の長石・石英粒を含む。焼成は51が良好で他は不良。色調は緑灰色を呈す。

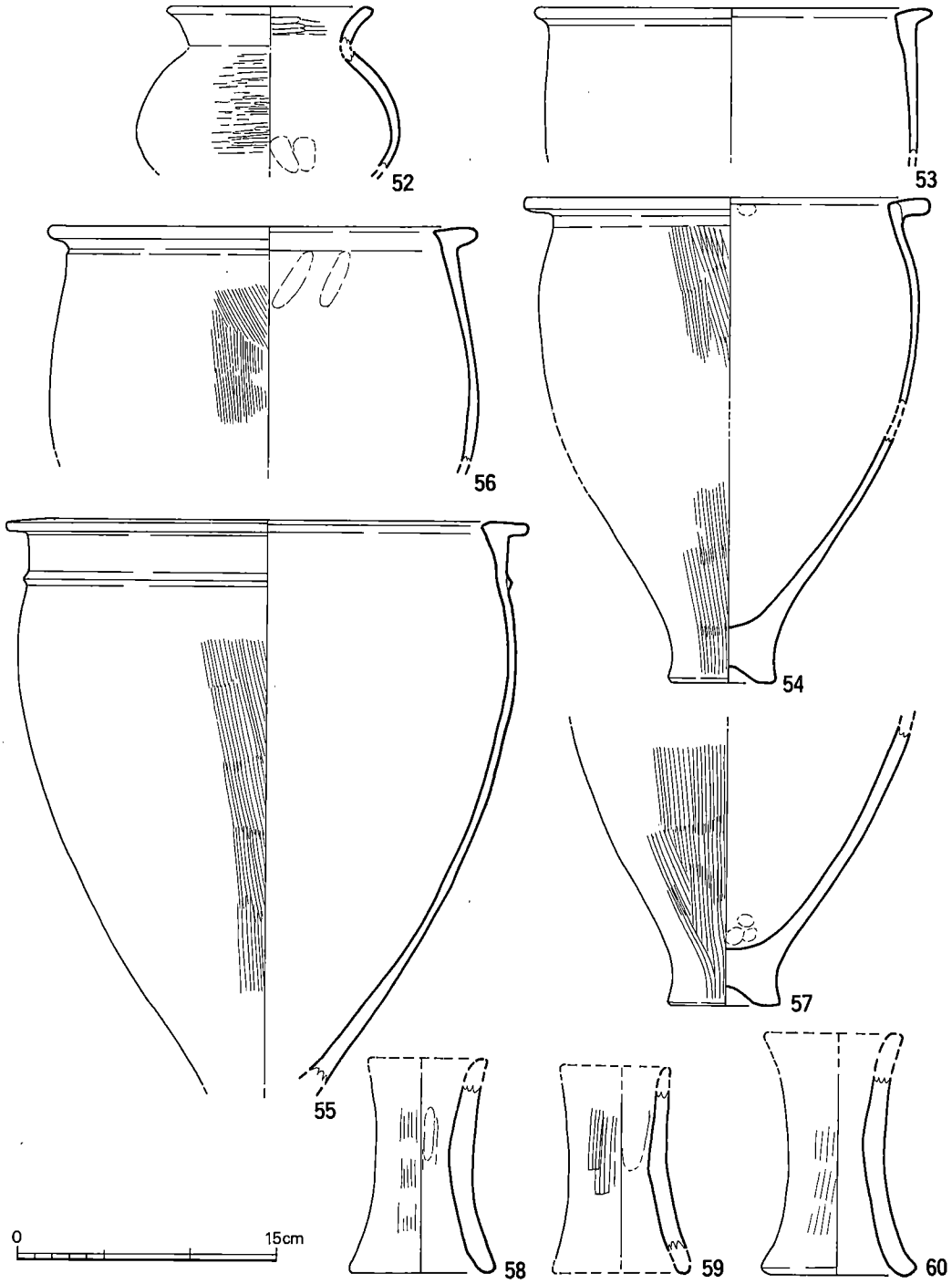
時期は，弥生時代中期初頭と考えられる。

13号貯蔵穴（図版46-2，第114図）

12号貯蔵穴の南側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し，床面は1段ステップがつき，西側に緩傾斜している。深さは0.40mを測る。遺物は浮いた状態で，壺・甕・器台などが出土しており，貯蔵穴中最も量が多かった。

土器（図版49・50-1，第116図）52は小型の壺である。口縁部は外弯し，端部は丸い。底部を欠くが，上底を呈すか。調整は，外面がヘラミガキで，内面はナデである。胎土に2mm大の長石・石英・金雲母などの粒を含み，割に精良である。焼成はやや軟質で，内面が暗黄褐色，外面が暗褐色を呈す。53～57は甕である。

53は口縁部から胴部上位にかけての破片である。口縁部は肥厚する逆L字状を呈し，内傾する。調整は，器面が磨滅しているため不明である。54は胴部中位を欠く。口縁部は逆L字状を呈し，口縁部平坦面は僅かに内傾する。底部は厚く，内窪みの上底を呈す。調整は，外面がハケ目（5～6条/cm）で，内面はナデである。また，外面には煤が遺存する。55は底部を欠く。口縁部は逆L字状を呈し，口縁部平坦面は若干外傾する。頸部のやや下位に断面三角形の貼付凸帯を巡らし，凸帯のやや下位に胴部最大径がある。調整は，口縁から凸帯にかけてがヨコナデで，外面はハケ目（6条/cm）で，内面はナデである。また，外面には煤が遺存する。56は胴部下半を欠き，57は胴部上半を欠くが，両者は別個体である。56の口縁部は逆L字状を呈す。



第 116 図　13号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

内面の稜はシャープで，その直下を強くヨコ方向にナデている。57の底部は厚く，内窪みの上底を呈す。調整は，両者とも外面がハケ目で，内面はナデである。胎土はともに1～3mm大の長石・石英・金雲母粒を含み，53にはくさりれき粒も含まれる。焼成は軟質気味で，灰褐色を呈す。

58～60は器台である。59は上下端部，58・60は上端部を欠く。両者の下端部は丸く納めている。調整は，三者とも外面が粗いハケ目で，内面はナデである。

時期は，53・54の甕が肥厚する逆L字状口縁を呈することから弥生中期初頭で，55は口縁部平坦面が外傾していることから新しい要素をもち，中期前葉と考えられる。

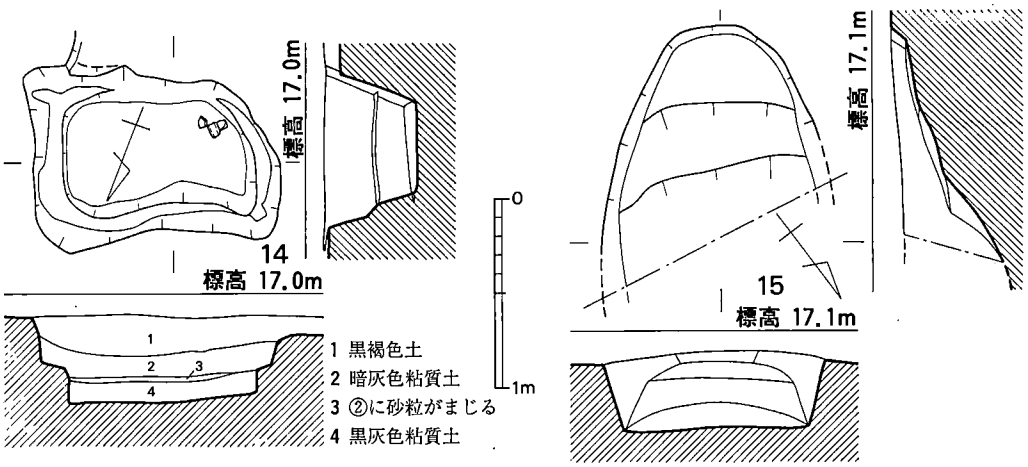
14号貯蔵穴（図版46-3，第117図）

13号貯蔵穴の西側に位置し，調査区南端の落込み状遺構と切合い関係にあるのでベルトを残して掘下げたが，両者の前後関係は把握できなかった。

平面形は不整形を呈し，テラスがつく。床面は平坦である。深さは0.45mを測る。

土器（図版50-1，第118図）61・62は壺である。61は口縁部破片で，頸部から外弯しながら開く。外面にタテ方向の暗文を施し，内面はヘラミガキ調整である。62は底部破片で，上底を呈す。調整は，内外面ともにナデである。胎土に1～2mm大の長石・石英粒を含み，概して良好である。焼成は軟質で，緑褐色を呈す。

63・64は甕である。63は肥厚する逆L字状口縁部の破片で，若干内傾する。調整は，ヨコナデである。64は底部破片で上底を呈す。調整は，外面がハケ目で，内面はナデである。胎土は，ともに1～3mm大の長石・石英粒を含む。焼成は63が軟質で暗黄灰色，64が良好で内面が紫灰色を呈す。



第 117 図　14・15号貯蔵穴実測図（1/40）

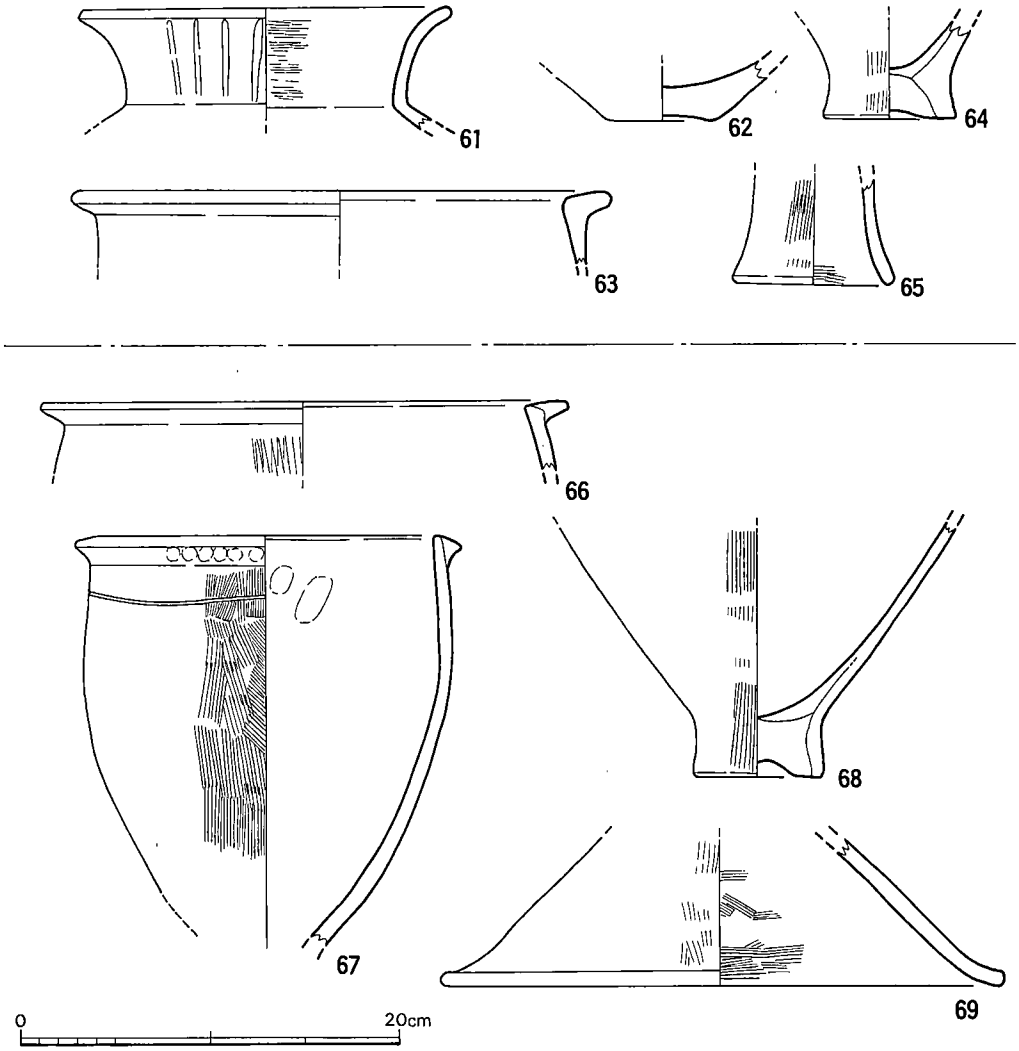
65は器台の下部破片で，端部は丸く納める。調整は，外面がハケ目（5条/cm）で，内面はナデである。胎土に1～3mm大の長石・石英・金雲母粒を含む。焼成は良く，黄褐色を呈す。

時期は，弥生中期初頭～前葉と考えられる。

15号貯蔵穴（第117図）

調査区の北端部で8号貯蔵穴の北側に位置する。北側は大きく削られているため平面形は判然としないが，隅丸方形を呈するか。床面は北側に傾斜している。深さは0.25mを測る。

土器（図版50-1，第118図）66～68は甕である。66は口縁部破片で，復原口径28.2cmを測



第 118 図　14・15号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

る。逆L字状口縁を呈し，若干内傾する。調整は，外面がハケ目（4条/cm）で，内面はナデである。67は底部を欠く。口縁部は断面三角形を呈し，所謂亀ノ甲タイプの甕である。口縁部のやや下位にヘラ描き沈線を巡らす。胴部の張りは弱く，底部へ移行する。調整は，外面がハケ目（7～8条/cm）で，内面はナデである。また，口縁部外面にはユビオサエ痕が無数に残る。68は胴下半から底部にかけての破片であり，内窪みの上底を呈す。調整は，外面がハケ目（6条/cm）で，内面はナデである。胎土はともに1～2mm大の長石・石英粒を含む。焼成は67が良好で内面が灰黄色，外面は赤褐色を呈す。66・68は不良でともに暗褐色を呈す。

69は復原口径29.8cmを測る蓋である。天井部を欠き，端部は丸く納める。調整は，内外面ともにハケ目であるが，外面はタテ方向で，内面はヨコ方向である。

時期は，弥生中期初頭と考えられる。

表8　貯蔵穴一覧表

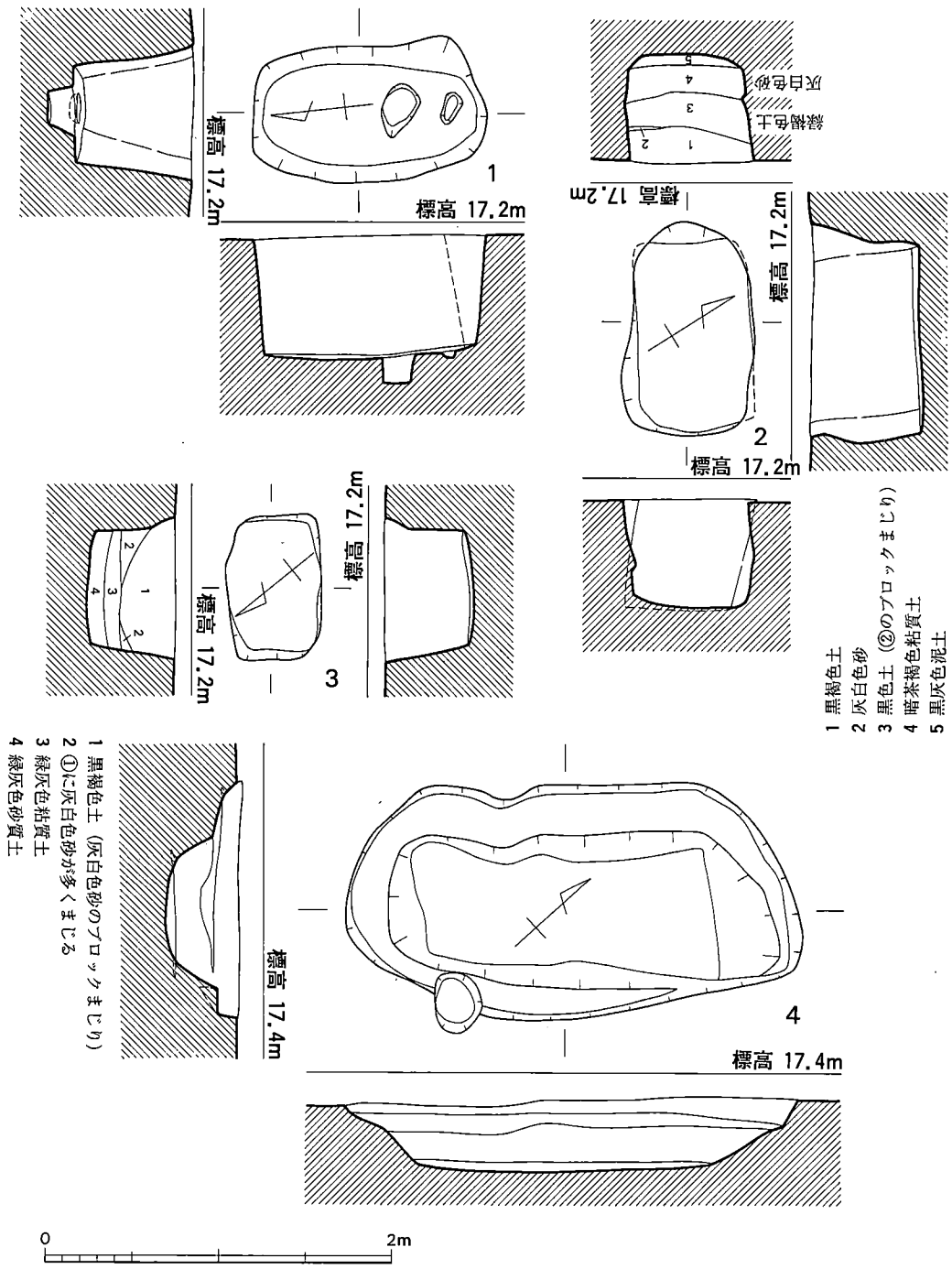
(単位cm)

No.	平面形	長軸長		短軸長		深さ	時期	備考
		上面	床面	上面	床面			
1	楕円形	116	102	93	86	18	中期初頭	
2	隅丸長方形	129	114	100	91	23	中期初頭	
3	不整長方形	168	142	110	96	34	中期初頭	4号貯蔵穴より新しい
4	不整円形	131	124	100	93	17	中期初頭	3号貯蔵穴より古い
5	楕円形	140	137	95	85	47	中期	
6	隅丸長方形	149	136	104	94	16	中期初頭	
7	不整形	125	120	77	72	25	中期	
8	不整長方形	167	156	97	94	18	中期初頭～前葉	焼土粒が混じる
9	不整長方形	147	142	66	60	13	中期初頭	3号小土杭より古い
10	不整楕円形	107	113	78	69	50	中期前葉	
11	隅丸長方形？	103	90	84	65	57	中期初頭	
12	隅丸長方形	138	133	98	98	35	中期初頭	
13	不整楕円形	140	126	80	64	40	中期初頭～前葉	
14	不整形	133	96	80	47	45	中期初頭～前葉	
15	楕円形？	115	100	120	106	25	中期初頭	

3．土　坑

1号土坑（図版47-3，第119図）

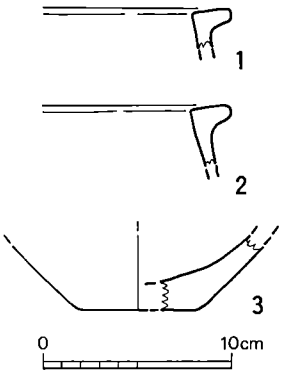
6号貯蔵穴の北西側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し，床面は平坦でピットを2つ有す。深さは0.70mと深く，砂層まで掘込んでいる。遺物は弥生土器が3点（何れも甕）出土しているが，小破片なため図示できなかった。



第 119 図　1～4号土坑実測図（1/40）

2号土坑（図版47-2，第119図）

3号貯蔵穴の北東側に位置する。平面形は不整長方形を呈し，床面は東側へ緩傾斜している。深さは0.62mを測る。1号土坑同様，砂層まで掘込んでおり，掘ってるそばから湧水してきた。遺物の量は少なく，黒曜石小剝片及び炭化した堅果類種子（ドングリか）などが出土した。



第 120 図　2号土坑出土土器実測図（1/4）

土器（第120図）1・2は肥厚する逆L字状口縁部の破片で，若干内傾する。調整は，ヨコナデである。胎土に1～2mm大の長石・石英粒を含む。焼成は，1は良好で黄褐色，2は不良で暗黄褐色を呈す。3は復原底径6.0cmを測る壺の底部破片で，平底を呈する。調整は，器面が磨滅しているので不明である。胎土に1～3mm大の長石・石英・くさりれきなどの粒を含む。焼成は不良で，内面が灰褐色，外面が灰黄色を呈す。

時期は，弥生中期初頭と考えられる。

3号土坑（図版47-1，第119図）

12号貯蔵穴の南西側に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し，床面は中央部が深くなっている。本土坑も1・2号土坑同様，砂層まで掘込んでおり，深さは0.50mを測る。遺物の出土はなく，時期は不詳。

4号土坑（図版47-4，第119図）

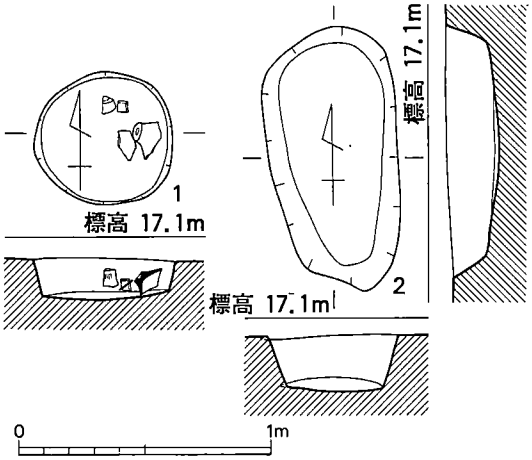
調査区のほぼ中央に位置する。平面形は不整長方形を呈し，床面は割合平坦である。1段テラスがつき，床面からテラスまでの高さは0.25mを測る。埋土は黒褐色で，他の土坑・貯蔵穴に比して堅く締っていた。遺物は黒曜石剝片が出土したのみであり，時期の詳細は不明。

4．その他の遺構と遺物

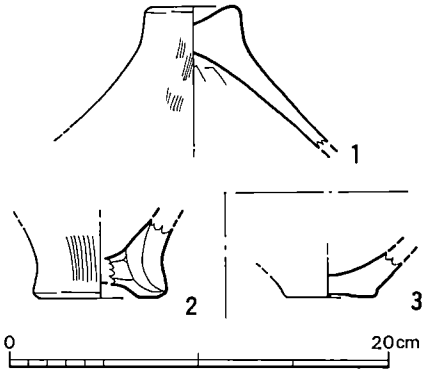
1号小土坑（第121図）

調査区の南端で2号貯蔵穴の南西側に位置する。長さ0.55m，深さ0.16mを測る。平面形は円形を呈し，床面は西側に緩傾斜している。遺物は浮いた状態で出土した。

土　器（図版50-2，第122図）1は蓋の把手部破片であり，中央部は窪む。調整は，外面がハケ目（7～8条/cm）で，内面はナデである。胎土に長石・石英・金雲母などの粒を含む。焼成は軟質で，内外面とも黄灰色を呈す。



第 121 図　1・2号小土坑実測図（1/30）



第 122 図　1・2号小土坑出土土器実測図（1/4）

2は底径7.0cmを測る甕の底部破片であり，上底を呈す。調整は，外面がハケ目（5内外6条/cm）で，内面はナデである。胎土に長石・石英などの粒を含む。焼成は軟質で，内面が緑紫色，外面は黄褐色を呈す。

時期は弥生時代中期前葉と考えられる。

2号小土坑（第121図）

5号貯蔵穴の南側に位置する。長さ1.05m，幅0.51m，深さ0.22cmを測る。平面形は不整楕円形を呈し，床面は中央部に深くなっている。埋土は黒褐色であった。遺物は土器が1点出土したのみである。

土　器（第122図）3は底径4.9cmを測る壺の底部破片で，若干上底を呈す。調整は，器面が磨滅しているので不明。胎土に長石・石英・金雲母粒を含む。焼成は不良で，灰白色を呈す。

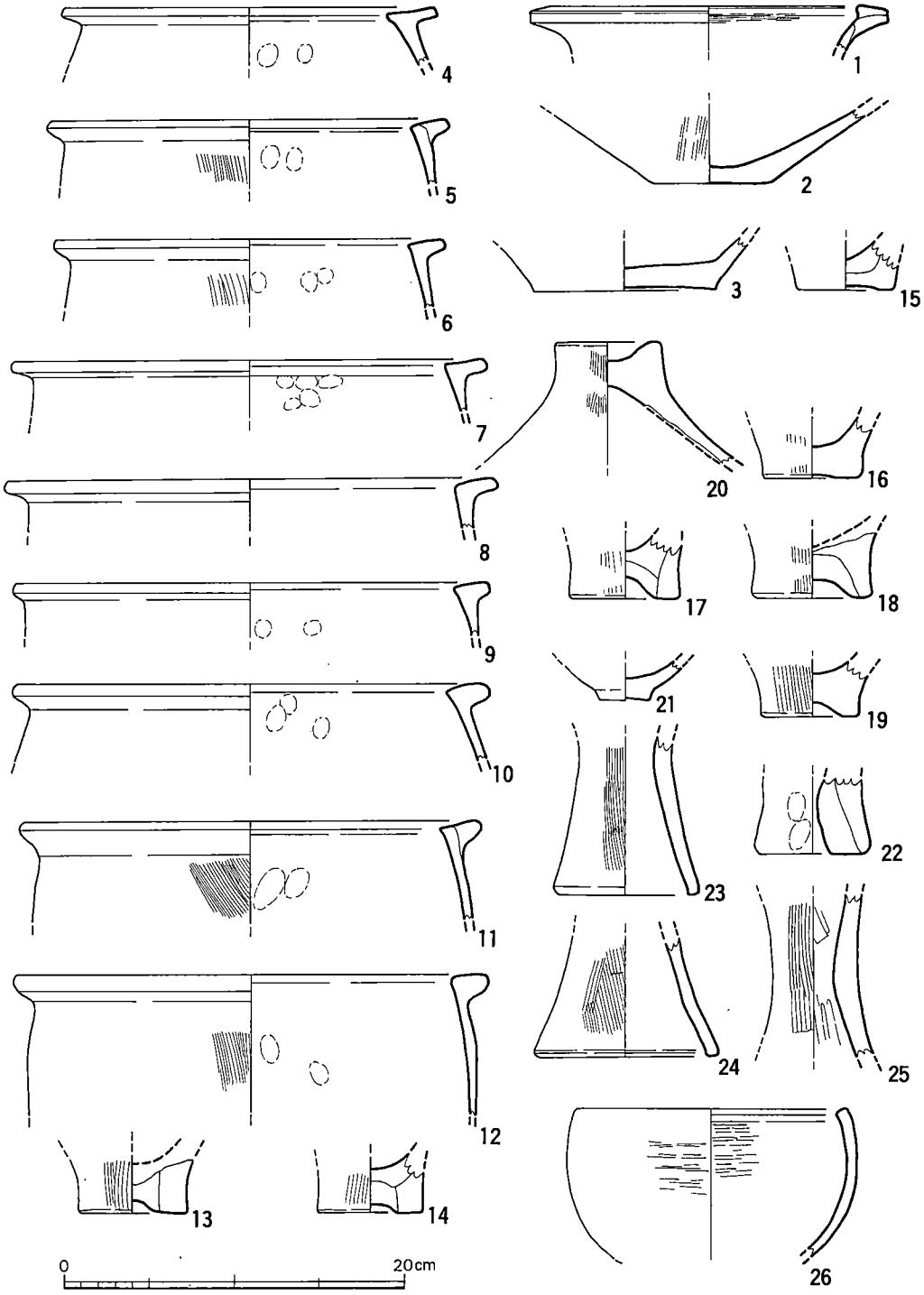
時期は，弥生時代中期前葉と考えられる。

3号小土坑（図版44-3）

長さ0.81m，幅0.45m，深さ0.52cmを測る。平面形は不整楕円形を呈す。2号小土坑よりもやや小型のピットである。埋土は3号土坑に類似しており，緑灰色粘土層の堆積がみられた。遺物の出土は皆無であったが，9号貯蔵穴を切っているのでそれよりも後出する。

落込み状遺構（第108図）

調査区の南端に位置し，東西に長い。貯蔵穴同様，上部はかなり削平を受け，南側には攪乱があるので詳細は不明。床面は南側へ緩傾斜している。埋土は貯蔵穴同様，黒褐色土である。遺物はすべて黒褐色土中より出土した。黒褐色土の下部分から小溝を検出したが遺物の出土はなかった。



第 123 図　落込み状遺構出土土器実測図（1/4）

土　器（第123図）１～３は壺である。１は復原口径21.0cmを測る。頸部から逆八字状に広がる口縁端部に粘土を貼付し，貼付口縁としている。調整は，内外面ともヨコナデで，内面の一部にヘラミガキがみられる。２・３は底部破片で，２は平底で，３は若干上底を呈す。調整は，ともに外面がヘラミガキで，内面はナデである。

４～19は甕である。４は逆Ｌ字状口縁を呈するが肥厚せず，かつ，内面の稜はシャープである。５・６・９～12は肥厚する逆Ｌ字状口縁を呈す。調整は，口縁部がヨコナデ，外面はハケ目，内面はナデである。胎土に１～３mm大の長石・石英・金雲母粒を含む。焼成はやや軟質で，黄褐色を主調とする。13～19は底部破片で，13・14・17～19は内窪みの上底を，15・16は若干上底を呈す。調整は，何れも外面がハケ目で，内面はナデである。胎土に１～３mm大の長石・石英粒を含み，15・17には金雲母粒も含まれる。焼成は軟質で，灰褐色を主調とする。

20は把手部破片で，中央は窪む。調整は，甕と同様で外面がハケ目（８条/cm）で，内面はナデである。胎土に１～３mm大の長石・石英などの粒を含む。焼成は不良で，内外面とも灰白色を呈す。

21は壺のミニチュア品で，底部のみ残存する。調整は，外面がヘラミガキで，内面は板状工具によるナデである。胎土に１～２mm大の長石・石英・金雲母粒を含み概して良好である。焼成はやや軟質で，内外面とも明灰色を呈す。

22は支脚で，下端部のみ残る。外面に無数のユビオサエ痕が残る。23～25は器台である。23・24は上端を欠き，25は両端部を欠く。調整は，ともに外面がハケ目で，内面はナデである。

26は椀であり，底部を欠く。端部は丸く納めている。胴部は緩やかに弧を描きながら底部へ移行する。調整は，内外面ともヨコ方向のヘラミガキである。胎土に１～２mm大の長石・石英粒を含む。焼成は良く，内面が明灰褐色，外面は赤灰色を呈す。

落込み出土の器種構成は，壺・甕・椀・器台・支脚・蓋であり，大半を甕が占める。時期は貯蔵穴と同時期の弥生中期初頭から前葉と考えられる。

５．小　結

Ｄ地区の調査面積は，560m^{2}あまりであったが，割合に密度が高く，貯蔵穴15基・土坑４基・小土坑３基・落込み・ピットなどの遺構を検出した。

貯蔵穴は，長さ1.0～1.7m程，深さは削平により0.2～0.6m程であり，楕円形・隅丸長方形・不整形を呈す。土器はすべて床面から浮いた状態であり，当初床面にあったのが土砂の流入による圧力で床面から浮上ったとも考えられようが，２・８・13号の場合はある程度埋った段階において土器が投棄されたと考えられる。また，完形品は１点も出土していないことから，本貯蔵穴群は穀物貯蔵という本来の使用目的を忘却した結果，廃棄坑として再度機能したと考

えられる。

貯蔵穴とは形態・埋土が異なるものを土坑とし，小土坑も含めて7基検出した。1号小土坑は楕円形を呈し，床面にピットを付設する。近年，この種の土坑を「落し穴」とみる説がある(註17)。

2・3号土坑及び3号小土坑は，形態に差異はあるものの，埋土は砂粒混じりの緑灰色粘土であり，弥生土器片が数点出土した。その性格については不明で，ただ貯蔵穴が砂層まで掘込んでいないのに対し，これらの土坑は砂層まで掘込んでおり，降水し水位が高くなると湧水するという点に問題解決の糸口があるように思われる。

最後に，B地区においては弥生時代前期末を主体とする袋状貯蔵穴が検出され，D地区においては中期初頭を主体とする貯蔵穴が検出された。これらの貯蔵穴は，穀物貯蔵という機能を有するが，中期前半頃で衰退し，より高度の貯蔵能力を有する高床式倉庫へ統合されてゆく。

D地区の貯蔵穴群は，そうした高床式倉庫による穀物貯蔵が普遍化する前段階的様相を呈すると考えられる。 (小田)

註1　福岡県教育委員会　1980　三雲遺跡Ⅰ　福岡県文化財調査報告書　第58集
註2　ピットの正確な位置は，上端の線を表現するよりも下端の線を表現した方が妥当と考えられる。
註3　小郡市教育委員会　1981　大板井遺跡Ⅰ　小郡市文化財調査報告書　第11集
註4　小郡市教育委員会　1983　三沢栗原遺跡Ⅰ　小郡市文化財調査報告書　第23集
註5　小郡市教育委員会　1985　横隈鍋倉遺跡　小郡市文化財調査報告書　第26集
註6　註3に同じ
註7　福岡県教育委員会　1979　山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第12集
註8　福岡市教育委員会　1982　原深町遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第71集
註9　日野尚志　1975　筑後川右岸における条里について——筑前国夜須・上座・下座三郡，筑後国御原・御井（一部）二郡の場合——佐賀大学教育学部研究論文集　第23集
註10　和島誠一・田中義昭　1966　住居と集落　日本の考古学Ⅲ弥生時代　河出書房
註11　菅原康夫　1980　弥生系農業における水利施設の意義と展開　上・下　古代学研究　第92・93号
註12　氏は，調整堰を堰体周辺に分水路，取水口をもたず，独立して存在するものとし，分水堰を調整堰と同構造を呈するものが多いが，分水路の付設によって区別され，取水堰とは堰体構造の対象となる流路の規模，流路閉塞の在り方に相違が認められるとし，取水堰を自然流路を全幅に亘って閉塞することによって決定される構造上の安定性と取水口・導水路を付属施設として有すとしており，本遺跡例は大溝2全幅に亘って閉塞していたと考えられる状況であり，かつ，道水路（支流3）を付設していることから取水堰—氏の言う井堰—とみなされる。
岡山県文化財保護協会　1984　百間川原尾島遺跡2
註14　福岡市教育委員会　1979　板付遺跡調査概報　福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集
唐津市教育委員会　1982　菜畑
註15　小学館　1973　古事記・上代歌謡　日本古典文学全集1
註16　後藤和民　1979　狩漁撈の技術と変遷　日本考古学を学ぶ(2)　有斐閣

Ⅳ．出土木製遺物の樹種

琉球大学　　林　　弘　也

小郡正尻遺跡　A地区（福岡県小郡市大字小郡字才町　所在）は弥生時代後期から7，8世紀に亙る遺跡であり，秋光川の支流であった旧河川敷きにある遺跡である。本遺跡は福岡県教育委員会が発掘調査を行ない，杭や用途不明の板材などの木製遺物が出土した。木製遺物の中から26点について樹種を同定したので，その結果を取りまとめた。出土した木製遺物の用途は主に杭であったが，板や加工跡のある棒状の遺物が少数含まれていた。しかし，これらの遺物の用途は不明であった。杭は丸太の先端を単に斜めに切り落とす加工を施したものであったが，樹皮が付着した状態の杭も多数出土した。

樹種の同定は，木材の3断面のプレパラートを作製し，顕微鏡で観察した。観察された木材の特徴に基づいて樹種を同定し，更に樹種が明らかな木材のプレパラートと対照して，樹種を決定した。

プレパラートの作製は，先ず一辺が5～8mmの立方体を資料から切り出し，切り出したブロックをポリエチレングコール#1540で包埋した。スライディングミクロトームを使用して，厚さ8～18μmの切片を包埋ブロックから採取し，水・グリセリン混合液で封入し，プレパラートを作製した。

同定した樹種は，針葉樹材が1樹種2点と広葉樹材が13樹種24点であった。資料のなかで，〝大溝2杭20-1〟と〝大溝2杭20-2〟は同一の遺物から採取した資料であるので，顕微鏡写真は〝図版51の(1)として示した。各資料の同定結果は表9に示し，顕微鏡写真は図版51～56の(1)～(26)に示した。利用された樹木は高木になる樹種が多く，低木はマンサク（*Hamamelis japonica*）とガマズミ属（*Viburnum* sp.）に属する樹木の2樹種であった。小径の丸太を利用した杭にもかかわらず，高木になる樹種が利用されていることから，周囲にはシイノキ（*Castanopsis* sp.），タブノキ（*Persea thunbergii*）やカシ（*Quercus* sp.）などの照葉樹林が成林していたものと思われる。

表9　樹種一覧表

資　　料	杭実測図No	和　　名	学　　名	顕微鏡写真
大溝2南側杭列　20-1	(66)	フサザクラ	*Euptelea polyandra*	図版51-1
20-2	(66)	フサザクラ	*Euptelea polyandra*	図版51-1
22	(70)	ハシドイ	*Syringa reticulate*	図版51-2
26	(58)	ガマズミ属	*Viburnum* sp.	図版51-3
27	(65)	ミズキ属	*Cornus* sp.	図版52-4
28	(54)	マンサク	*Hamamelis japonica*	図版52-5
32	(53)	ミズキ属	*Cornus* sp.	図版54-6
39	(80)	アワブキ属	*Meliosma mytiantha*	図版52-7
43	(67)	イスノキ	*Distylium racemosum*	図版53-8
44	(51)	イヌガヤ	*Cephalotaxus harringtonia*	図版53-9
48	(71)	ミズキ属	*Cornus* sp.	図版54-10
57	(56)	シイノキ	*Castanopsis* sp.	図版53-11
58	(57)	シイノキ	*Castanopsis* sp.	図版54-12
59	(52)	カシ	*Quercus* sp.	図版54-13
大溝2北側杭列　31		シイノキ	*Castanopsis* sp.	図版54-14
36	(7)	カシ	*Quercus* sp.	図版54-15
40	(2)	フサザクラ	*Euptelea polyandra*	図版54-16
44	(8)	イヌガヤ	*Cephalotaxus harringtonia*	図版55-17
46	(5)	サカキ	*Cleyera japonica*	図版55-18
47	(38)	シイノキ	*Castanopsis* sp.	図版55-19
48	(6)	カシ	*Quercus* sp.	図版55-20
51	(47)	クリ	*Castanea crenata*	図版56-21
大溝2木製品　5		クリ	*Castanea crenata*	図版55-22
杭　B	(89)	クロバイ	*Symplocos prunifolia*	図版56-23
杭　U	(95)	タブノキ	*Persea thunbergii*	図版56-24
木製品　3		カシ	*Quercus* sp.	図版56-25
木製品　1		シイノキ	*Castanopsis* sp.	図版56-26

V．おわりに

小郡正尻遺跡においては，弥生時代から中世に及ぶ遺構が確認され，A地区では石帯が発見された。D地区では，近年その類例を増している「落し穴状遺構」が確認された。

各地区における問題点は既述しているので，ここでは紙数の都合上，石帯と落し穴状遺構について若干説明を加えたい。

落し穴状遺構について

落し穴状遺構は，神奈川県霧ヶ丘遺跡や鳥取県青木遺跡などでその存在を指摘されて以来，類例を増している。県内でも数年前より検出されてはいるものの，貯蔵穴・土壙・竪穴として報告され，その性格については不明とされていた。ここでは，県下における報告を中心に説明を加えたい。

表10は県下の類例を挙げたものであり，大略3タイプに分類できる。また，袋状貯蔵穴で床面にピットを有する例やピットは有すが壁面の残りが悪い例は除いた。

Ⅰ　下原タイプ―方形ないし長方形を呈し，床面に深さ30～50cm程のしっかりした穴を1つ有す。下原遺跡・立野遺跡A地区・向山遺跡例など。

Ⅱ　門田タイプ―長方形ないし隅丸方形を呈し，床面に数個の小ピットを有す。門田遺跡辻田地区・同門田地区・道場山遺跡2地点例など。

Ⅲ　日上タイプ―円形を呈し，床面に数個の小ピットを有す。日上遺跡例など。

ここで，「落し穴」と判断する際に，床面に掘込まれたピットが重要な意味を帯びてくる。ピットの中には杭が立てられており（今村1983），杭は固定式の槍の役目を果す。今村啓爾氏は，「棒は動物に傷を負わせるためというより，落ちた動物が跳び上る姿勢をとらせないための仕掛けであろう」（今村1983）としているが，門田タイプ例のように数本も棒杭を立てた場合では，獲物が跳び上る以前に殺傷でき，しかも下原タイプ例よりは高い殺傷能力を有すのではあるまいか。

この種の土壙は，尾根上に規制惟をもって穿たれる。今村氏は霧ヶ丘遺跡の分析で，大型のものはイノシシ，小型のものは小動物を捕獲対象としたのであろうとしている（今村1983）。また，尾根上における場合と平地の場合では，対象物を異にしていたのであろうか。D地区は平地で，1例しか検出していないが，これは調査面積の狭小さによるものと考えられよう。

今後とも資料の充実を図ってゆきたい。　（小田和利）

表10　落し穴状遺構地名表

(単位はcm)

番号	遺跡名	所在	遺構番号	平面形	長さ	幅	深さ(ピット)	ピット数	タイプ
1	藤崎遺跡	福岡市西区百道二丁目	3号土壙	隅丸長方形	127	44	23 (25)	1	Ⅰ
			11号土壙	不整長方形	176	77	17 (18)	1	Ⅰ
2	門田遺跡門田地区	春日市大字上白水字門田	6号竪穴	長円形	140	110	74 (30)	2対	Ⅱ
3	門田遺跡辻田地区	春日市大字上白水字辻田	18号方形竪穴	長方形	130	90	58(10～20)	2対	Ⅱ
			20号方形竪穴	不整形	108	82	72 (33)	2	Ⅱ
			21号方形竪穴	不整長方形	140	81	58(37～51)	3	Ⅱ
			27号方形竪穴	楕円形	120	90	85 (35)	2	Ⅱ
			28号方形竪穴	不整隅丸方形	148	108	40(32～45)	2	Ⅱ
			29号方形竪穴	不整長方形	113	94	55(30～35)	2	Ⅱ
			30号方形竪穴	不整長方形	135	80	25 (30)	1	Ⅰ
			31号方形竪穴	長方形	108	76	37 (20)	2	Ⅱ
			33号方形竪穴	不整長方形	118	84	42(20～36)	2	Ⅱ
			34号方形竪穴	隅丸長方形	122	62	39 (13)	1	Ⅱ
			41号方形竪穴	不整長方形	130	90	56 (25)	2＋α	Ⅱ
			49号方形竪穴				40 (15)		
4	道場山遺跡2地点	筑紫野市大字武蔵	8号土壙	長方形	145	80	80(5～10)	4	Ⅱ
			9号土壙	不整形	165	110	80 (19)	5	Ⅱ
5	下原遺跡	甘木市大字一ツ木字下原	5号土壙	長方形	107	68	68 (20)	1	Ⅰ
			6号土壙	長方形	118	95	100 (46)	1	Ⅰ
			7号土壙	長方形	116	56	57 (20)	1	Ⅰ
			8号土壙	長方形	102	68	67 (23)	1	Ⅰ
			10号土壙	長方形	99	80	91 (16)	1	Ⅰ
			13号土壙	長方形	108	80	66 (22)	1	Ⅰ
			14号土壙	長方形	102	77	102 (21)	1	Ⅰ
			17号土壙	不整楕円形	146	112	113 (30)	1	Ⅰ
			18号土壙	隅丸長方形	133	78	88 (12)	1	Ⅰ
			19号土壙	長方形	104	62	70 (25)	1	Ⅰ
			23号土壙	長方形	106	80	75 (29)	1	Ⅰ
			24号土壙	不整方形	139	111	98 (35)	1	Ⅰ
6	立野遺跡A地区	甘木市大字下浦字立野	1号土壙	隅丸長方形	93＋α	76	84 (33)	1	Ⅰ
			2号土壙	隅丸長方形	108	78	56 (38)	1	Ⅰ
			3号土壙	隅丸長方形	104	71	60 (37)	1	Ⅰ
			4号土壙	不整形	119	83	65 (42)	1	Ⅰ
			5号土壙	円形	113	120	111 (44)	1	Ⅰ
			8号土壙	円形	174	161	105 (43)	1	Ⅰ

			9号土壙	不整円形	127	123	98 (39)	1	Ⅰ
			10号土壙	長楕円形	113	108	76 (48)	1	Ⅰ
			11号土壙	隅丸長方形	102	68	69 (47)	1	Ⅰ
			12号土壙	長楕円形	123	105	114 (40)	1	Ⅰ
			13号土壙	円形	123	115	92 (49)	1	Ⅰ
			14号土壙	長楕円形	128	103	96 (46)	1	Ⅰ
7	広田遺跡Ⅰ区	糸島郡二丈町大字吉井字広田	4号土壙	不整楕円形	117	90	90 (36)	1	Ⅰ
8	赤坂遺跡	飯塚市大字潤野字赤坂	12号袋状竪穴	長方形	196	100	40 (8)	1	Ⅰ
9	向山遺跡	鞍手郡鞍手町大字新北字向山	5号土壙	長方形	119	80	50 (50)	1	Ⅰ
			6号土壙	長方形	110	70	72 (46)	1	Ⅰ
10	日上遺跡	嘉穂郡穂波町大字椿字日上	11号袋状竪穴	円形	220	200	150(15～30)	4	Ⅲ
			15号袋状竪穴	円形	210	200	130 (30)	2	Ⅲ
11	干潟遺跡	小郡市大字干潟	5号土壙墓	隅丸長方形	102	73	81 (22)	1	Ⅰ
12	井上北内原遺跡	小郡市大字井上字北内原	6号土壙	隅丸方形	97	79	83 (29)	1	Ⅰ
13	三国小学校遺跡	小郡市大字力武	1号貯蔵穴	不整長方形	103	50	80 (14)	1	Ⅰ
			2号貯蔵穴	不整長方形	112	88	102 (40)	1	Ⅰ

1　福岡市教育委員会　1982　藤崎遺跡　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第80集
2　福岡県教育委員会　1977　山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第3集
3　福岡県教育委員会　1978　山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　第7集
4　福岡県教育委員会　1978　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XXV
5　福岡県教育委員会　1983　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　2
6　福岡県教育委員会　1984　九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　5
7　福岡県教育委員会　1982　二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告　Ⅱ
8　飯塚市教育委員会　1984　赤坂遺跡　飯塚市文化財調査報告書　第8集
9　福岡県教育委員会　1977　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XII
10　福岡県教育委員会　1971　日上遺跡　福岡県文化財調査報告書　第48集
11　福岡県教育委員会　1980　干潟遺跡Ⅰ　福岡県文化財調査報告書　第59集
12　小郡市教育委員会　1984　井上北内原遺跡　小郡市文化財調査報告書　第20集
13　小郡市教育委員会　1981　三国小学校遺跡　小郡市文化財調査報告書　第10集
註　今村啓爾　1983　陥穴　縄文文化の研究　2　雄山閣

石帯の出土に関して

小郡正尻遺跡のA地区大溝2の中層下面から石帯（丸鞆）が1点出土している。石帯は，皮製腰帯を飾る部品で，衣服令によって官位に応じた種類の規定がある。『続日本紀』や『延喜式』などの記事によると，銀製や白玉製の銙帯は高位の官人に着用が許され，下位では烏油腰帯や烏犀腰帯が許されている。烏油や烏犀は黒色を呈すもので，黒漆塗布などがそれに相当すると考えられる。

伝世品や出土例からみると，銙帯の部品は，鉸具・巡方・丸鞆・猪目・鉈尾があり，鋳銅製が多いものの，銀製や，渡銀の例も知られる。また巡方・丸鞆・鉈尾は平安期に入って大半が石製にとって変るが，石製の例を石銙帯・石帯とも称している。巡方・丸鞆では，下方に長方形の透し穴を設けるものと設けないものがあり，帯への装着の方法にも，かしめる例，鋲留め，かがり付ける例などの差がある。また銙帯の大きさの差によって位階を想定される向きもある。

銙帯については，伊藤玄三氏（伊藤1968），佐藤興治氏（佐藤他1975），阿部義平氏（阿部1976），亀田博氏（亀田1983）の研究があり，最近の亀田氏の研究によれば全国で186遺跡600余点の出土例があるという。このうち福岡県内例は8遺跡9例があげられている。

しかし最近の発掘調査の増加に伴い，銙帯の出土例は県内でも急激に増加しており，菅見に触れた石帯のみでも，遺漏はあろうが32遺跡53例を数える。これについては表11の一覧表にまとめたが，23例が大宰府条坊域内出土例で圧倒的に多く，一遺跡としては多々良込田遺跡の8例（同一個体かと思える別遺構出土例があり，7点の可能性もある）が最も多く，呉服町・柏原遺跡・大宰府右郭六条三坊・筑後国府等がこれに次ぐ。また形態的に古いと考えられる長方形透し穴・貫通する装着孔を有す例は，多々良込田・博多・柏原・大宰府条坊域から出土するが，量的に少なく大半は潜り孔の装着孔を有す例である。頁岩や粘板岩を用いた黒色を呈す例は，大宰府政庁から離れた条坊域や条坊外の地域に多く，下位官人の使用を傍証しうる。

多々良込田遺跡は，豊富な遺物や建物群から官衙施設の可能性も考えられているが，博多と共に湾内河口に近い立地条件は古代の交通要衝であったことは間違いない。SD04は下層に8世紀中頃，上層では10世紀中頃までの遺物が出土している。

一方，寺院に関係する遺跡として，三宅廃寺・九州大学筑紫地区遺跡群・観世音寺僧房・榎寺・杉塚廃寺などがある。榎寺の井戸Lは11世紀代が考えられている。

大宰府の南方では，筑前域の才田遺跡と筑後域の4遺跡で，才田遺跡では奈良時代と12・13世紀代の遺構・遺物が検出されている。筑後国府・御井郡衙の可能性があるヘボノ木遺跡では8～13世紀代の遺物が出土し出土状況では時期の特定は難しい。大道端遺跡のB区1号溝は10世紀中頃が下限とされている。

法量的な検討はしていないが，祇園町出土のように小形で潜り穴が2ヶ所の巡方は，位階よりもむしろ時期的に下降する可能性もあろう。石材についても不明な例が多く，個々の出土状

表11　福岡県出土石帯一覧表

（単位cm、〔　〕は復原値、かがり穴のうち潜り穴はV、双孔は‖、無印は貫通）

遺　跡　名	種類	石材・色	縦幅	横幅	厚さ	かがり穴	備　考
北九州市小倉北区菜園場　愛宕遺跡　Ⅳ区	鉈尾	うすい青白色の石	4.7	8.1	0.6～0.7		(1)
鞍手郡宮田町竜徳寺	丸鞆	硅岩・青色	2.8	4.4	0.7	3V	(2)
福岡市東区多の津　多々良込田遺跡　ＳＤ17	〃	白味青色				[2V]	(3)
ＳＤ04	〃	黒色	2.7	4.4	0.8	[3V]	(3)
〃	〃	蛇紋岩？青と白	2.6	4.2	0.6	3	長方形透し穴(4)
〃	〃	〃	2.6	4.2	0.6	3	〃 (4)
〃	〃	古銅輝石安山岩・黒	2.6	4.2	0.6	3	〃 (4)
〃	〃	白味青色				[2V]	ＳＤ17例と同一個体か (4)
〃	巡方	青色	4.1	4.3	0.6	4V	(4)
〃	〃		3.1+α	4.5	0.6	[8？]	(4)
福岡市博多区祇園町　本体部ＡＢ区　２号溝	〃		2.1	2.3	0.4	2V	(5)
福岡市博多区冷泉町(博多第22次)	丸鞆	玉質　緑灰色	2.7	2.9+α	0.7	3V	(6)
福岡市博多区店屋町　Ｄ区235号土壙	巡方	蛇紋岩	3.0	3.3	0.6	4	(7)
福岡市博多区呉服町	〃	〃				4V	(8)
〃	〃					4V	(8)
〃	〃					[3？]	(8)
〃	丸鞆					3V	(8)
福岡市南区三宅　三宅廃寺　包含層	巡方		4.0	4.1	0.6～0.7	4V	(9)
福岡市南区柏原　柏原遺跡Ｍ区	丸鞆	灰白色	2.8	4.2	0.7	3	長方形透し穴(10)
〃	〃	頁岩・灰黒色	2.6	4.1	0.6	3V	(10)
〃	〃	〃・黒　色	2.0	2.8	0.7	3V	(10)
福岡市西区拾六町　湯納遺跡ＩＢ・34区	巡方		2.8+α	3.5+α	0.6	[4‖]	(11)
春日市春日字坂本　九州大学筑紫地区内遺跡群	丸鞆	白　色	2.2	3.6	0.7	3V	(12)
太宰府市太宰府字月見山	〃	碧玉	2.1	4.1	0.8～0.9	3V？	(13)
字泉水　御笠川南条坊遺跡	巡方	蛇紋岩		4.1+α	0.8	[4V]	(14)
〃　〃	丸鞆		2.3	4.3	0.7	3V？	(15)
字鼓石　左郭八条二・三坊(大第50次)	〃	淡青灰色	2.7	[5.0弱]	0.7	3V	(16)
観世音寺字今道(大第45次)ＳＤ1230東	巡方		3.7	4.1	0.7	4V	(16)
字堂廻　観世音寺僧房(大第43次)	鉈尾	白玉	4.3	7.3	0.8	3V	(17)
字蔵司　(大第65-2次)	丸鞆	灰白色	2.2	3.3	0.6	3V	(18)
字山ノ井　(大第70次)	〃	蛇紋岩	2.2	3.6	0.7	3	長方形透し穴(19)
字大楠(大第76次)ＳＤ320	〃		2.1	2.8	0.4	[3]	(19)
〃(大第76次)ＳＤ2011	鉈尾	白玉			0.7	[3V]	(19)
〃 右郭六条三坊(大第88次)小ピット	丸鞆	蛇紋岩・濃緑	2.8	4.5	0.8	3V	(20)
〃　〃　円形土壙	〃	頁岩・黒	3.1	4.1	0.7	3V	(20)
〃　〃　ＳＥ2553	巡方	蛇紋岩・濃緑	3.6	3.2+α	0.6	[4V]	(20)
字不丁　右郭五条二坊(大第87・90次)	鉈尾	〃	3.5		0.5	[3V]	(20)

太宰府市観世音寺字日吉　(大第80次)	鉈尾	暗青色	2.9	4.3	0.6	3V	(21)
字土居ノ内　左郭五条四坊(条27-1次)	丸鞆	碧玉	2.5	2.7+α	0.4	3	長方形透し穴(22)
椡寺　右郭十条一坊(条43次)井戸L	〃	粘板岩・灰黒色	2.7	2.0+α	0.7	[3V]	(23)
〃	〃	〃	2.8	1.6+α	0.7	[3V]	(23)
椡寺　椡社の東方50m	巡方	白玉質・乳白色	3.4	3.6	0.7	4V	(23)
椡寺　椡社							(24)
通古賀字市の上	丸鞆						(25)
筑紫野市杉塚　杉塚廃寺　礎石脇	〃	頁岩・灰黒色	2.3	3.6	0.7	2V	(26)
〃　剣塚遺跡　8号土壙	巡方	〃	4.0	4.1	0.7	4V	(27)
朝倉郡朝倉町入地　才田遺跡　P586	〃	〃	4.0	4.1	0.6	4Ⅱ	(28)
小郡市小郡　小郡正尻遺跡　大溝2	丸鞆	白色	2.7	[4.5]	0.7	[3V]	
久留米市東合川町字上ヘボノ木　ヘボノ木遺跡(13次)	巡方	頁岩				4Vか	(29)
合川町字東　筑後国府東遺跡	〃	頁岩　灰黒色		[4.3]	0.7	4Vか	(30)
〃	丸鞆	〃	2.7	4.0	0.7	3V	(30)
〃　SD−44	〃	〃	2.7	[4.3]	0.7	3V	(30)
山門郡瀬高町大草　大道端遺跡　B区1号溝	鉈尾	滑石質	4.3		0.7	[3V]	(31)

況の検討，統一した色調の検討・材質同定作業などが今後の課題として残される。

とまれ，小郡正尻遺跡では，石帯の他に，越州窯青磁，緑釉陶器・耳皿，瓦や「郡」墨書土器など官衙・寺院などと関連のある特殊な遺物が出土している。推定御原郡衙の小郡官衙遺跡も近く，字寺田の存在などからして，付近に官人階級の居住地域を想定しても不自然ではないだろう。

なお，一覧表を作成するにあたり，西谷正・宮小路賀宏・西健一郎・山崎純男・柳沢一男・中間研志・山本信夫・浜石哲也・池崎譲二・伊崎俊秋・杉山富雄・大庭康時・狭川真一氏の御教示を得た。記して感謝します。

(小池史哲)

註1　財団法人北九州市教育文化事業団　1985　埋蔵文化財調査室年報1　昭和58年度
註2　宮田町役場　1978　宮田町史　上巻
註3　福岡市教育委員会　1980　多々良込田遺跡Ⅱ　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第53集
註4　福岡市教育委員会　1985　多々良込田遺跡Ⅲ　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第121集
註5　福岡市教育委員会　1984　博多　高速鉄道関係調査(1)　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第105集
註6　福岡市教育委員会　1985　博多Ⅲ　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第118集
註7　高速鉄道関係の調査で出土。1986報告予定。福岡市教育委員会　池崎譲二氏の御教示による。
註8　築港線関係の調査で出土。丸鞆は特異で半円形。福岡市教育委員会　大庭康時氏の御教示による。
註9　福岡市教育委員会　1979　三宅廃寺　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第150集
註10　福岡市教育委員会　山崎純男氏の御教示による。
註11　福岡県教育委員会　1976　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第4集
註12　九州大学　西健一郎氏の御教示による。

註13　九州歴史資料館　1979　大宰府史跡昭和53年度概報
註14　福岡県教育委員会　1976　福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第３集
註15　福岡県教育委員会　1977　福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第６集
註16　九州歴史資料館　1978　大宰府史跡昭和52年度概報
註17　九州歴史資料館　1977　大宰府史跡昭和51年度概報
註18　九州歴史資料館　1980　大宰府史跡昭和54年度概報
註19　九州歴史資料館　1982　大宰府史跡昭和56年度概報
註20　九州歴史資料館　1985　大宰府史跡昭和59年度概報
註21　九州歴史資料館　1983　大宰府史跡昭和57年度概報
註22　太宰府市教育委員会　1984　大宰府条坊跡Ⅲ　太宰府市の文化財　第８集
註23　山本信夫・狭川真一　1984　飛地境内榎社周辺の考古学的調査　飛梅第56号　太宰府天満宮社務所
註24　鏡山猛　1957　福岡県筑紫郡太宰府遺跡　日本考古学年報５
註25　福岡県教育委員会　宮小路賀宏氏の御教示による。
註26　筑紫野市教育委員会　1979　杉塚廃寺　筑紫野市文化財調査報告書　第４集
註27　福岡県教育委員会　1978　剣塚遺跡　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIV
註28　福岡県教育委員会の1984年度発掘調査で出土。伊崎俊秋氏の御教示による。
註29　久留米市教育委員会　1985　東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書　第４集　久留米市文化財調査報告書　第43集
註30　久留米市教育委員会　1976　筑後国府跡Ⅰ　久留米市文化財調査報告書　第12集
註31　福岡県教育委員会　1977　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告　XIV
註32　伊藤玄三　1968　末期古墳の年代について　古代学14-3・4　京都
註33　佐藤興治他　1975　平城宮発掘調査報告Ⅵ　奈良国立文化財研究所学報23
註34　阿部義平　1976　銙帯と官位制について　東北考古学の諸問題
註35　亀田博　1983　銙帯と石帯　関西大学考古学研究室開設30周年記念考古学論叢

図　　版

1

2

1　小郡正尻遺跡航空写真　　2　A地区航空写真

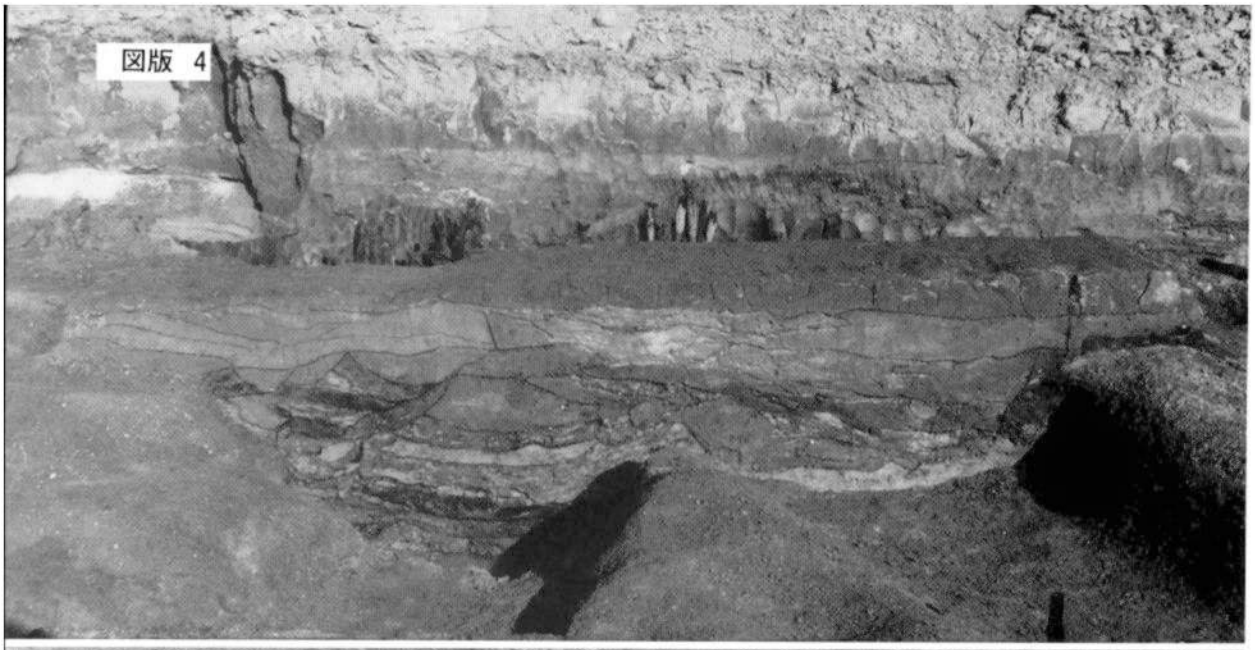
1　小郡正尻遺跡全景（西から）　　2　A地区全景（北から）

1

2

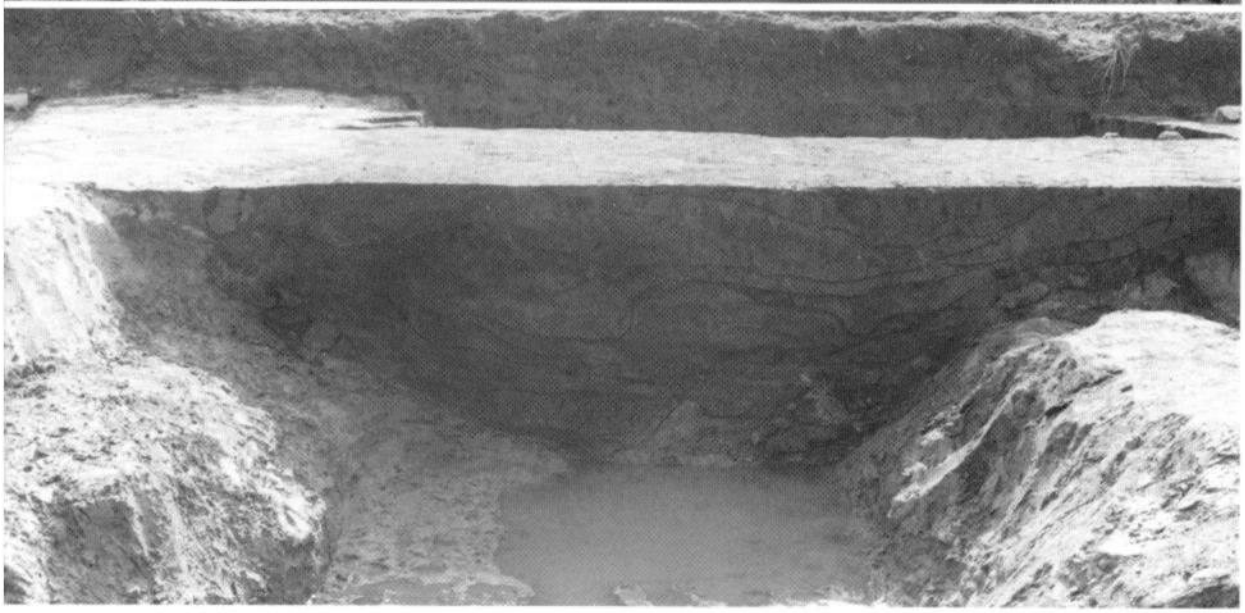
1　A地区1・2号住居跡（北西から）　　2　A地区溝状遺構群（北から）

図版 4



1

2



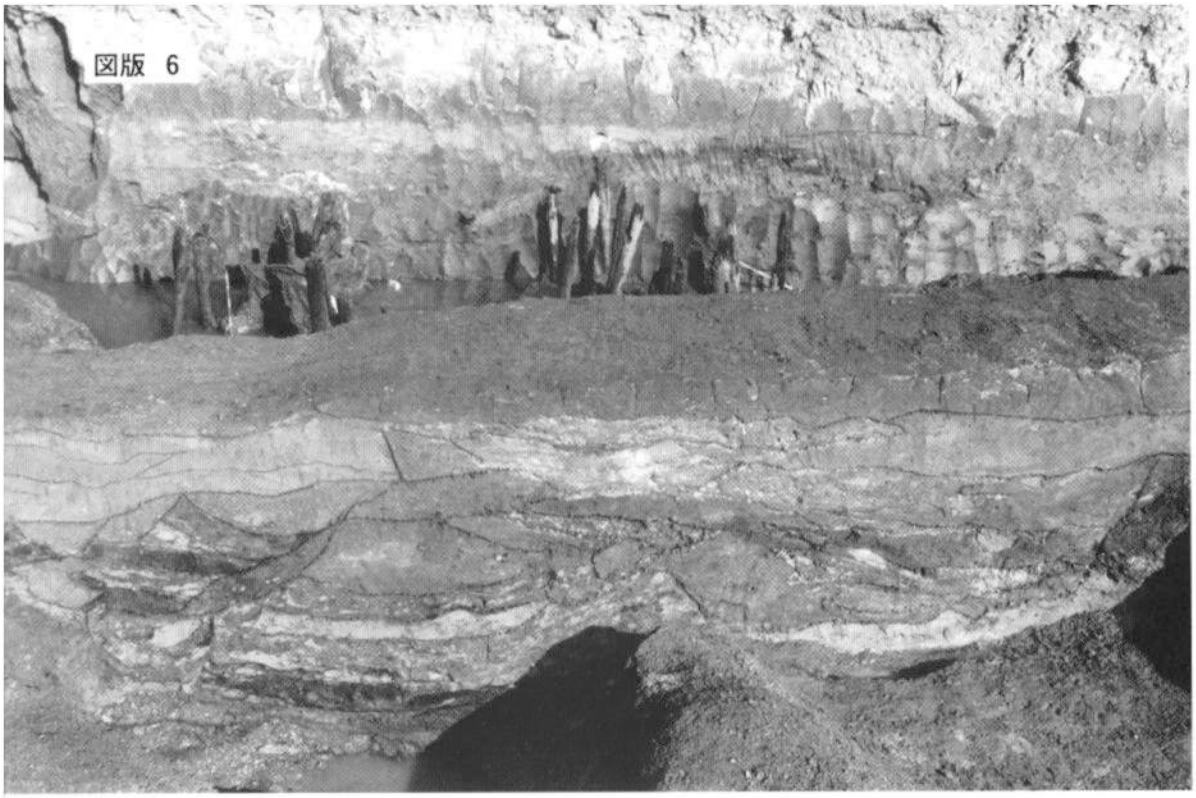
3

A地区大溝1堆積状況（1は大溝1・2重複地点，2・3は南部での状況）

上　A地区　大溝２
　　南側杭列（北から）

下　　同　（西から）

図版 6



1

2

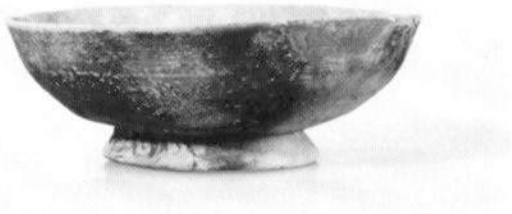
3

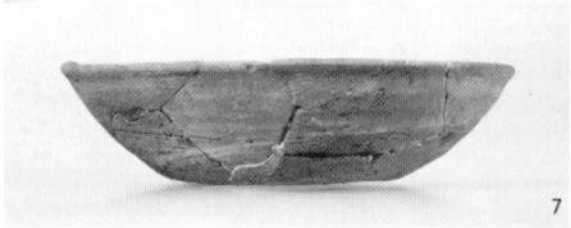
A地区

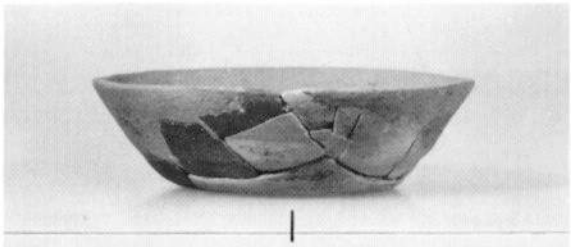
1　大溝２　北側杭列（南から）

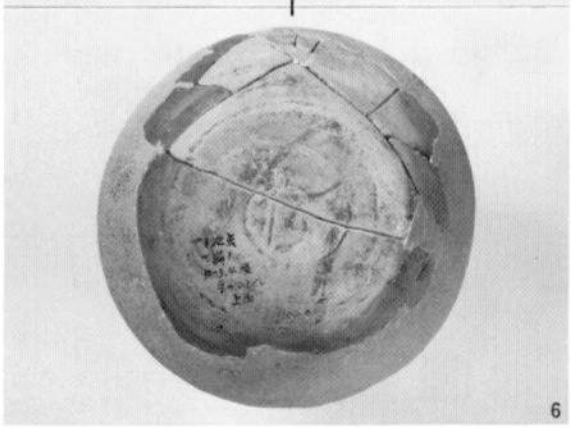
2　大溝２　土器出土状況

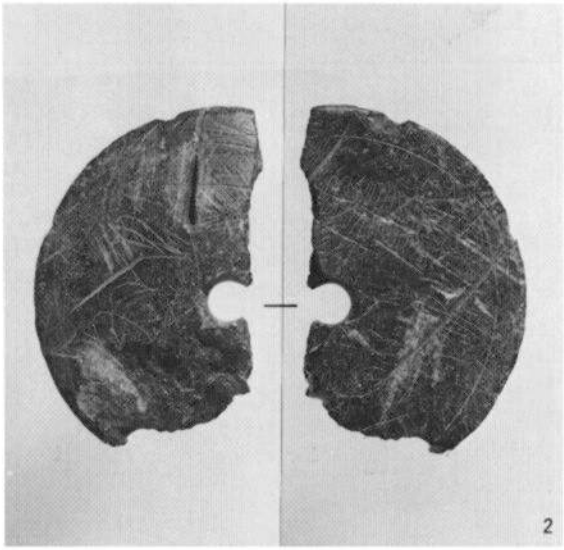
3　大溝２　石帯出土状況

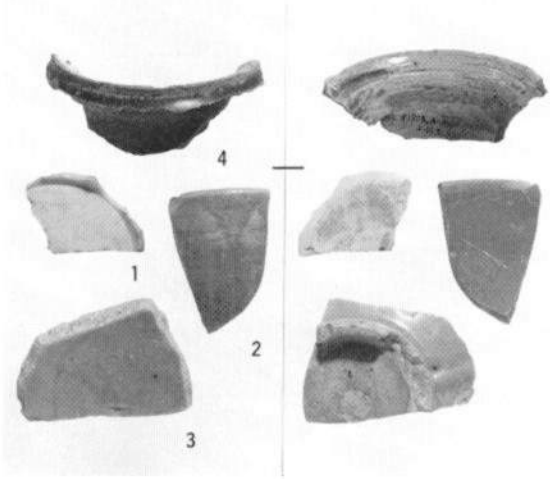




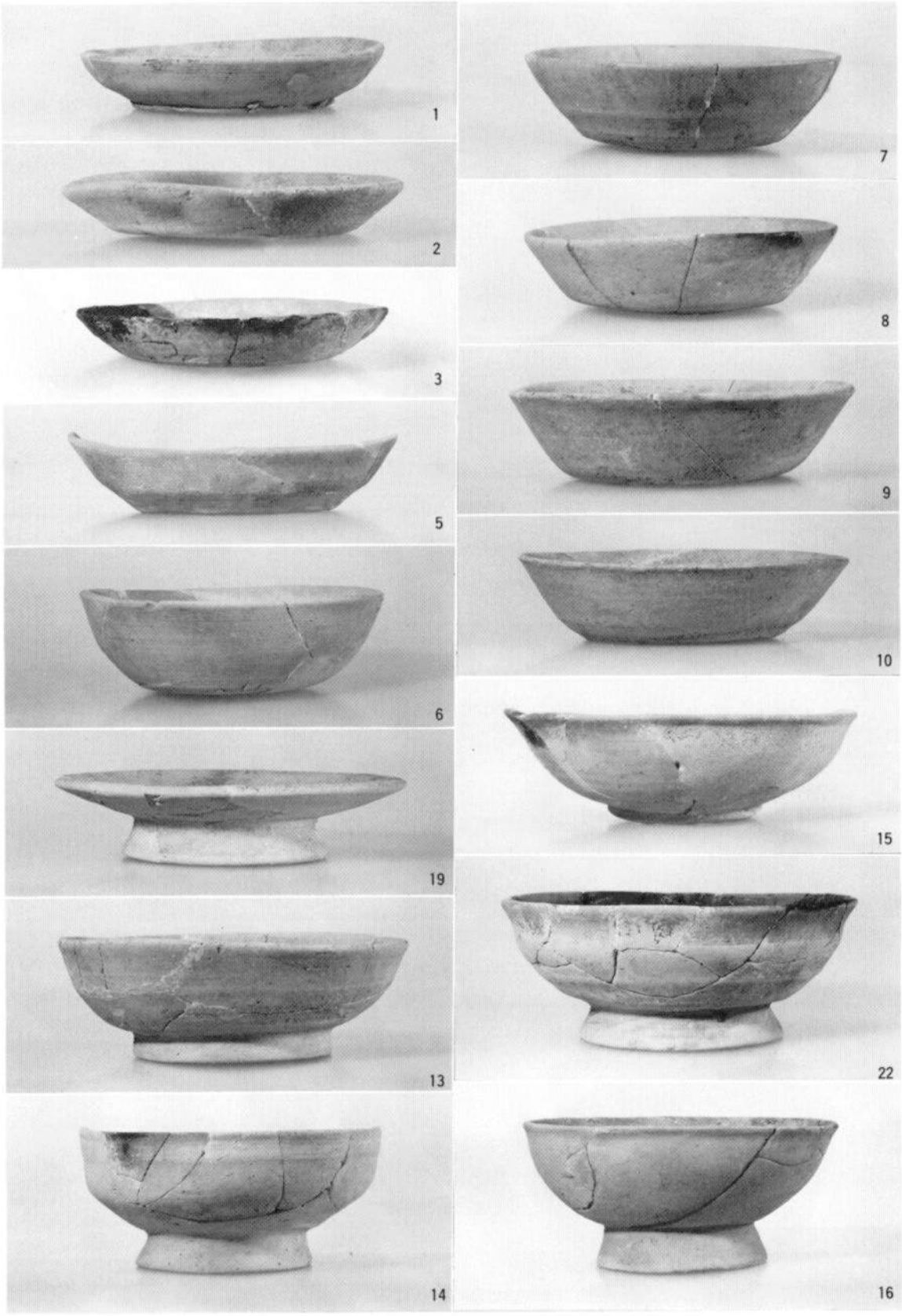




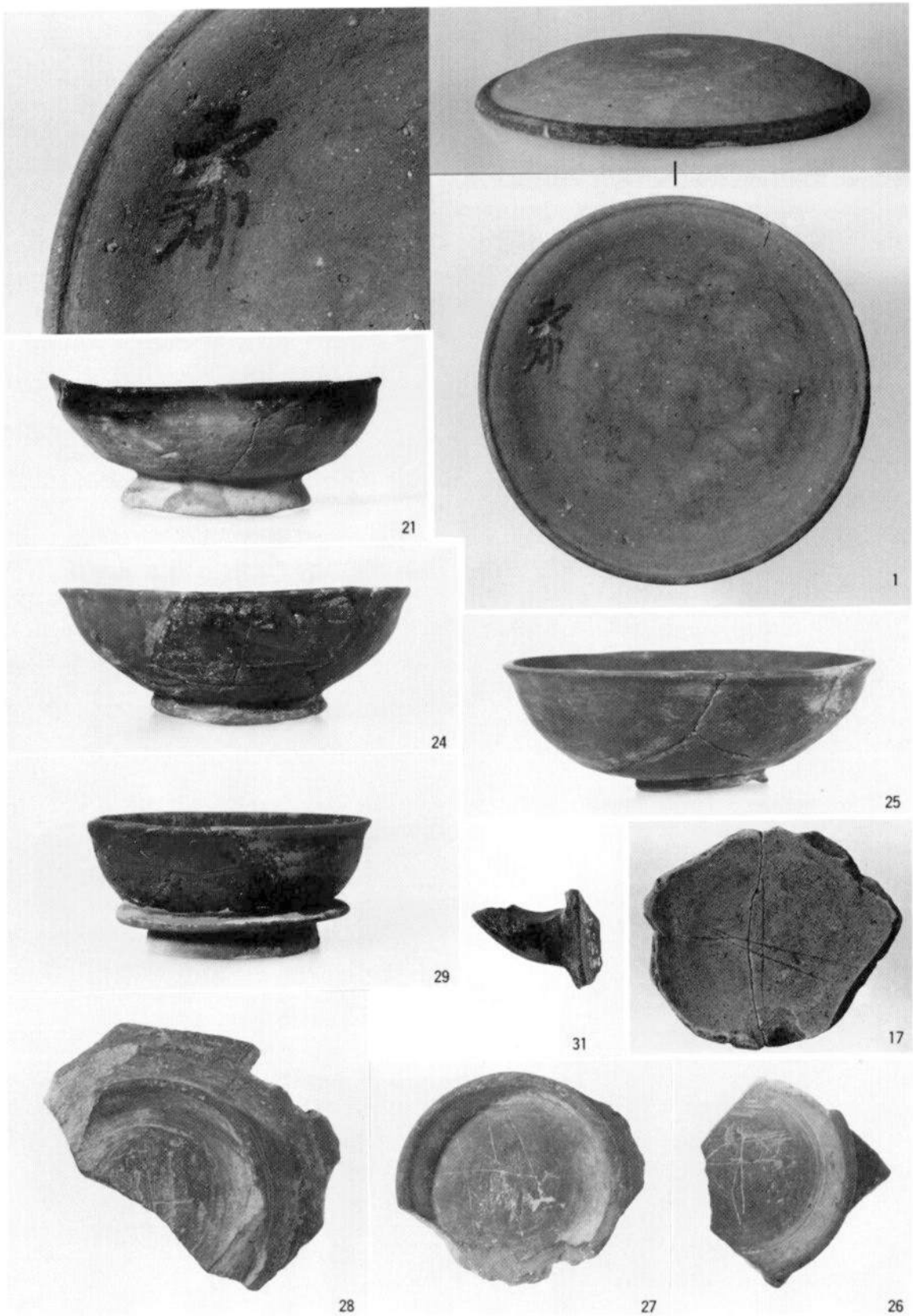




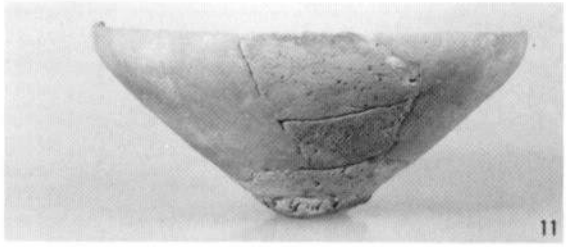
A地区　2号井戸・大溝1出土遺物

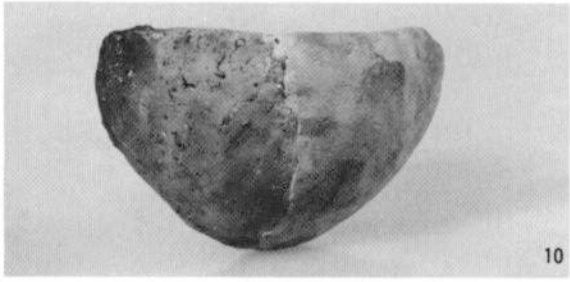


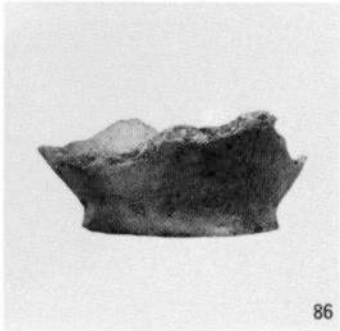
A地区　大溝２出土土器　1　（土師器）



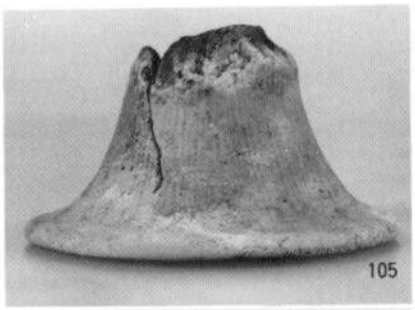
A地区　大溝２出土土器　２　（須恵器・黒色土器）



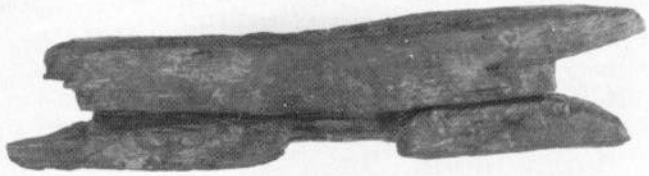


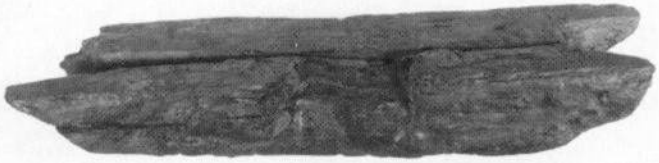


A地区　大溝１・２出土土器（弥生土器）

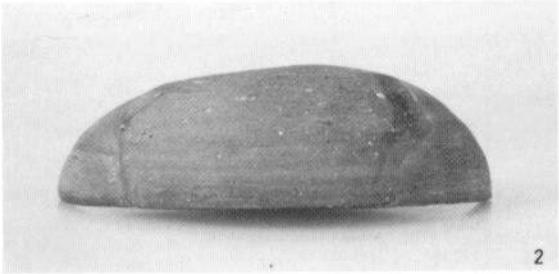


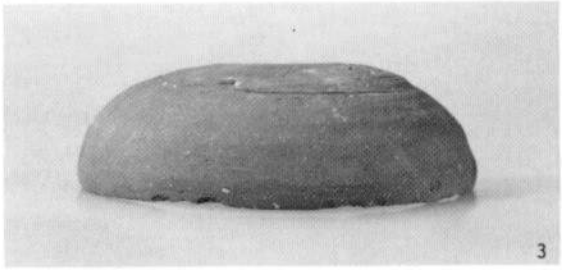
1



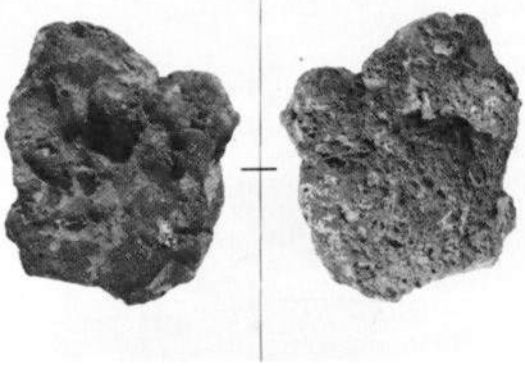


2

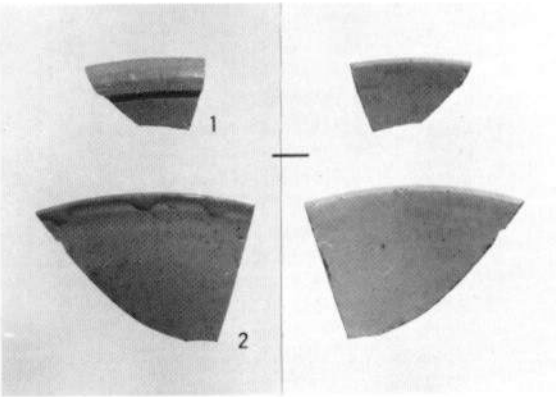




3



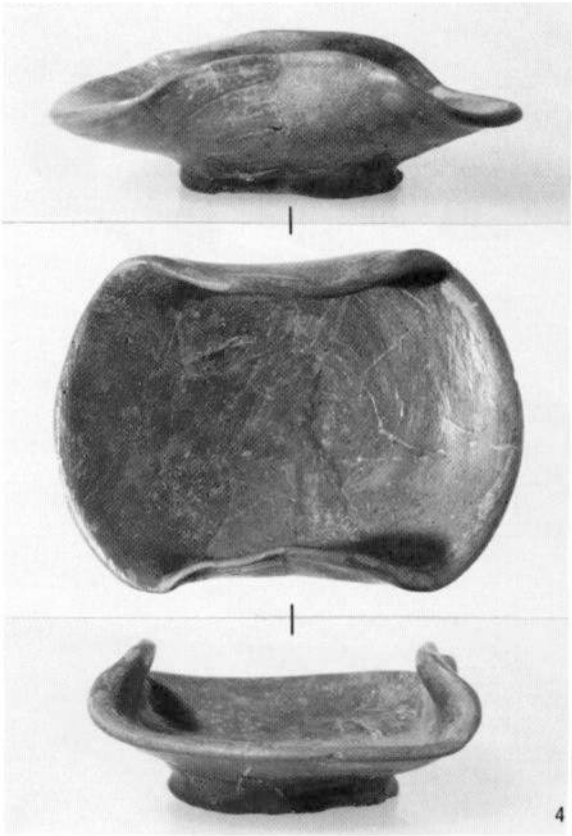
4

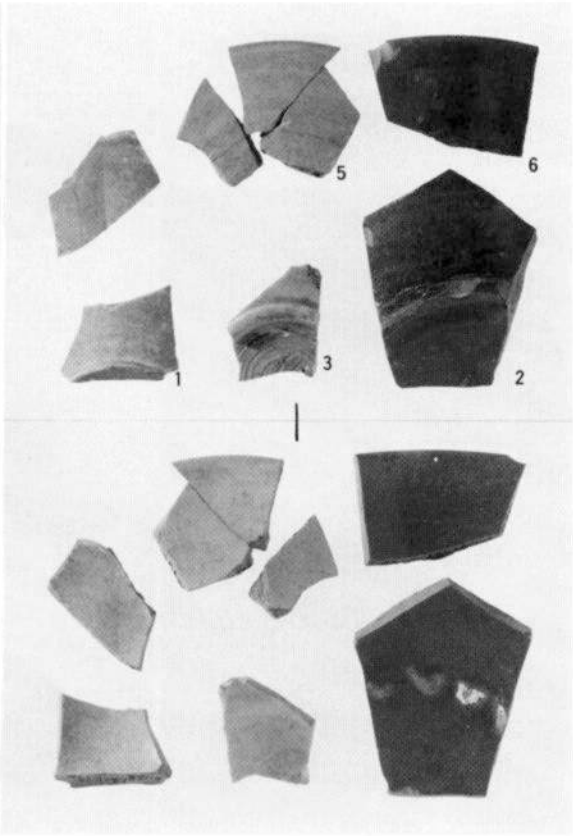


5

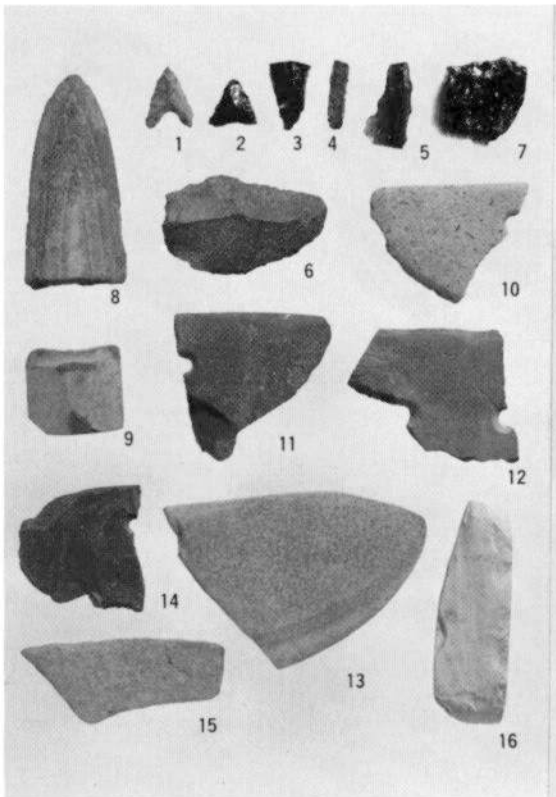
1　A地区　大溝２出土土器　　2　大溝２出土木製品　　3　大溝２支流１出土土器

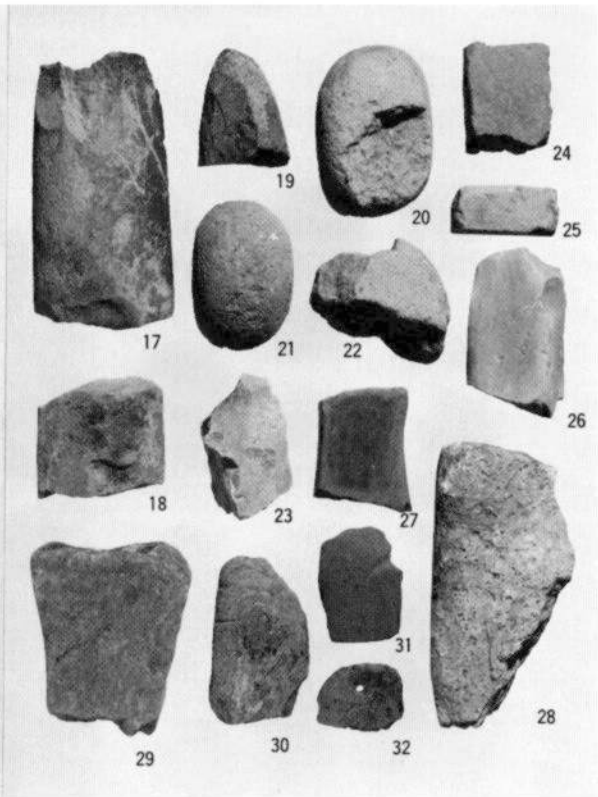
4　大溝２出土鉄滓　　5　包含層出土白磁





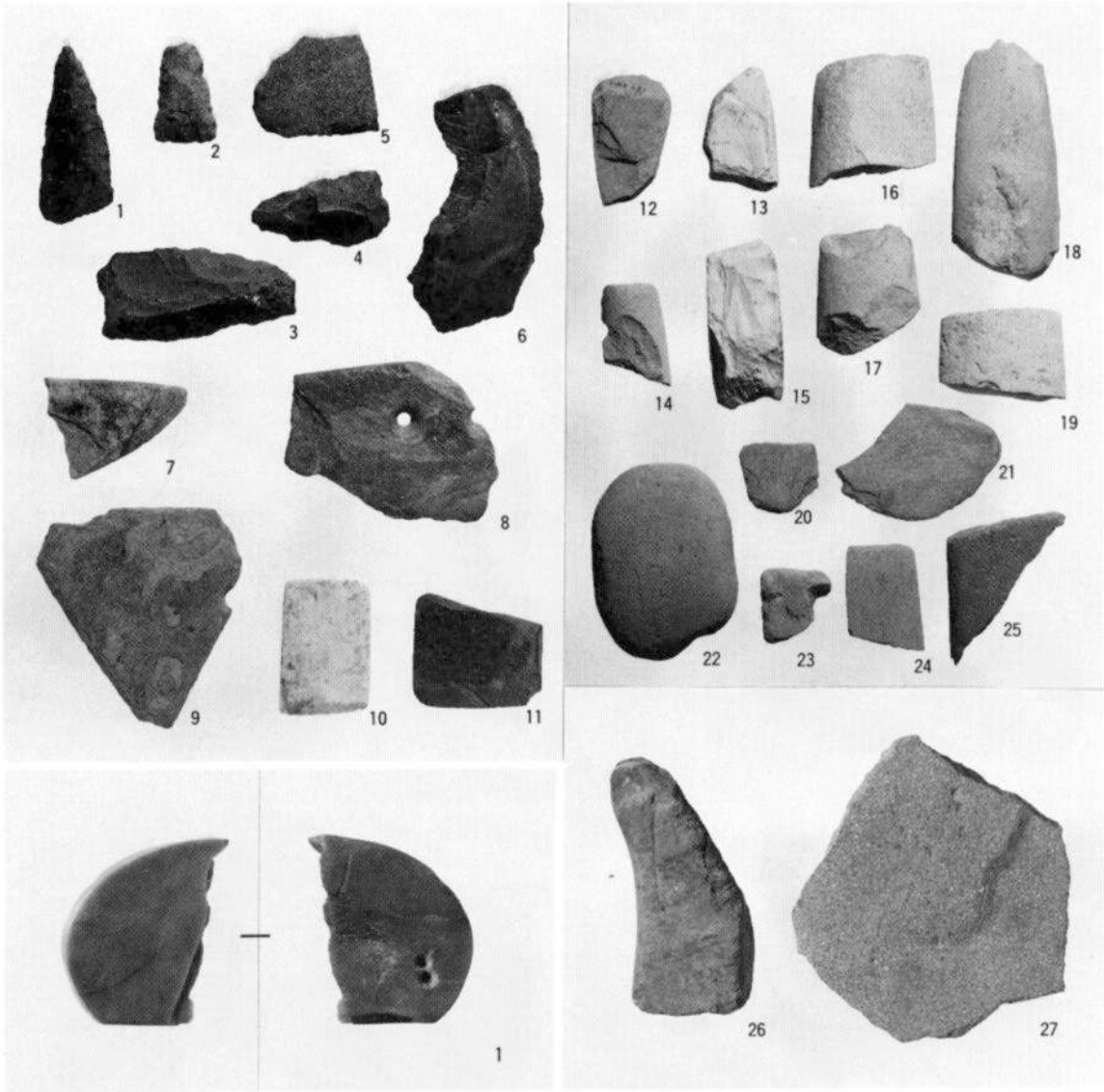
1



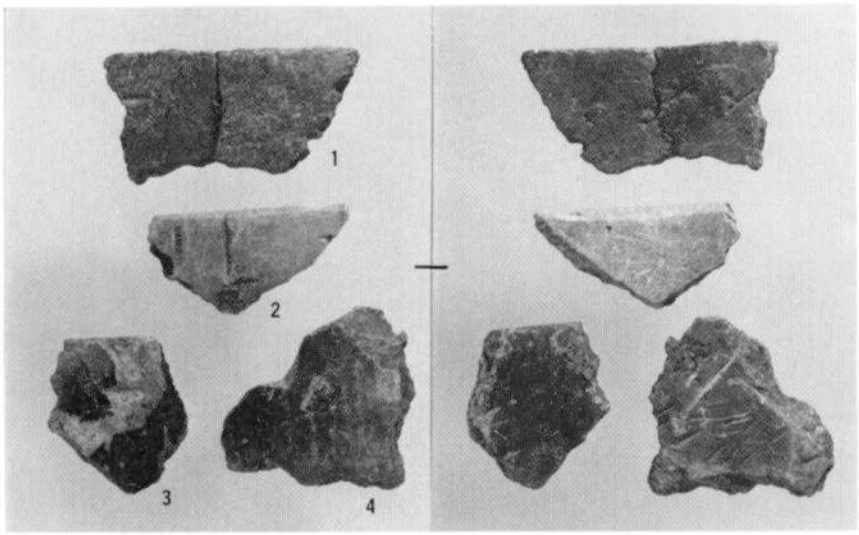


2

1　A地区　大溝２出土陶磁器　　2　大溝２上層出土石器

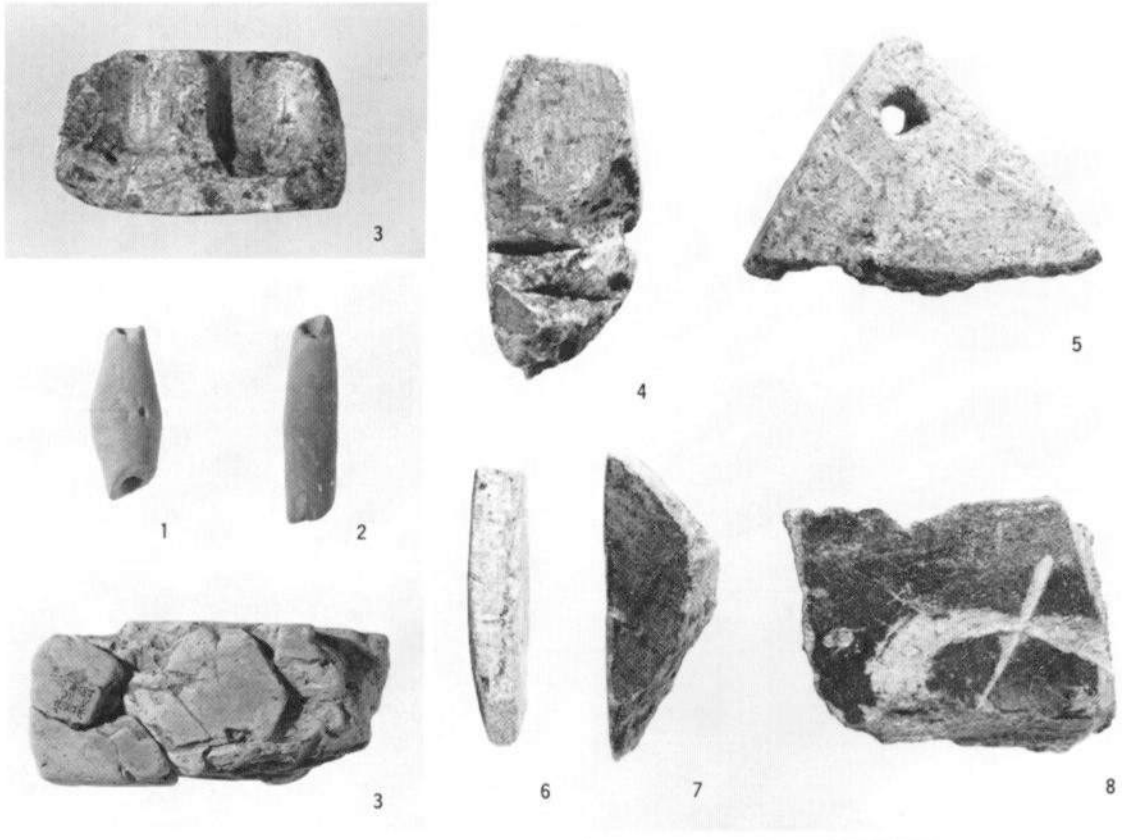


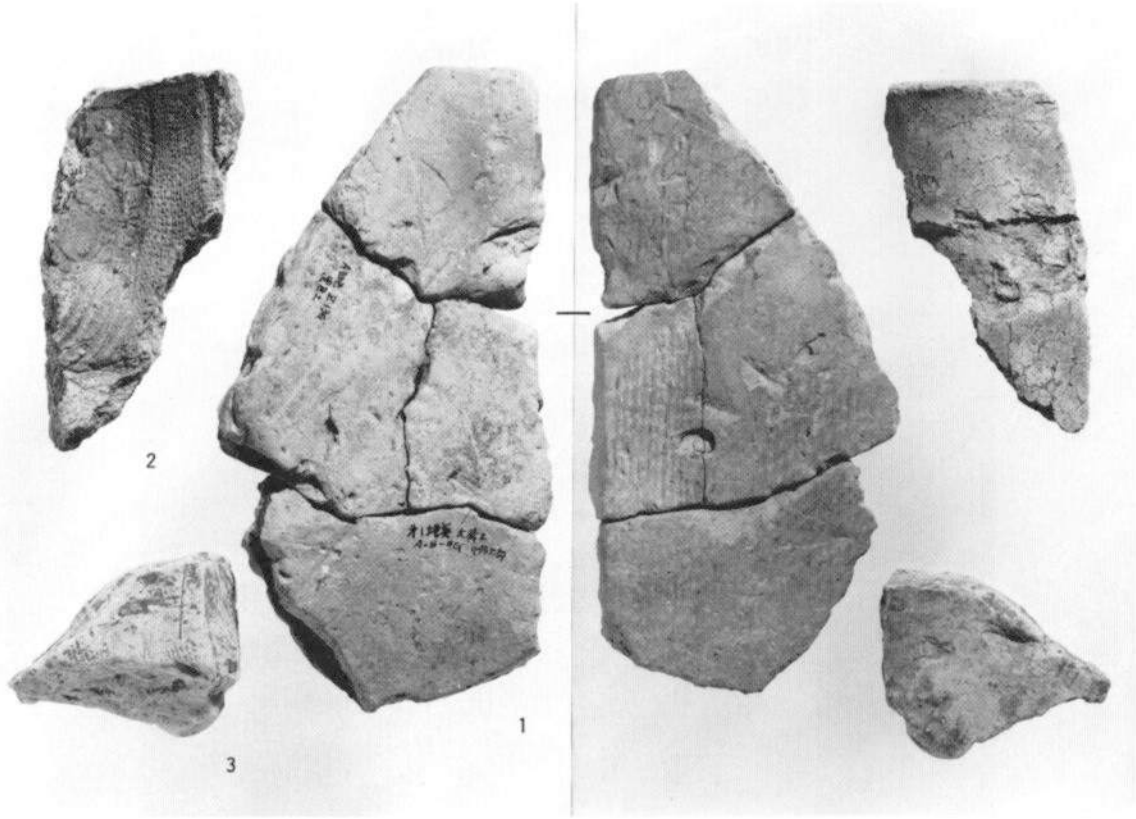
2　　1



3

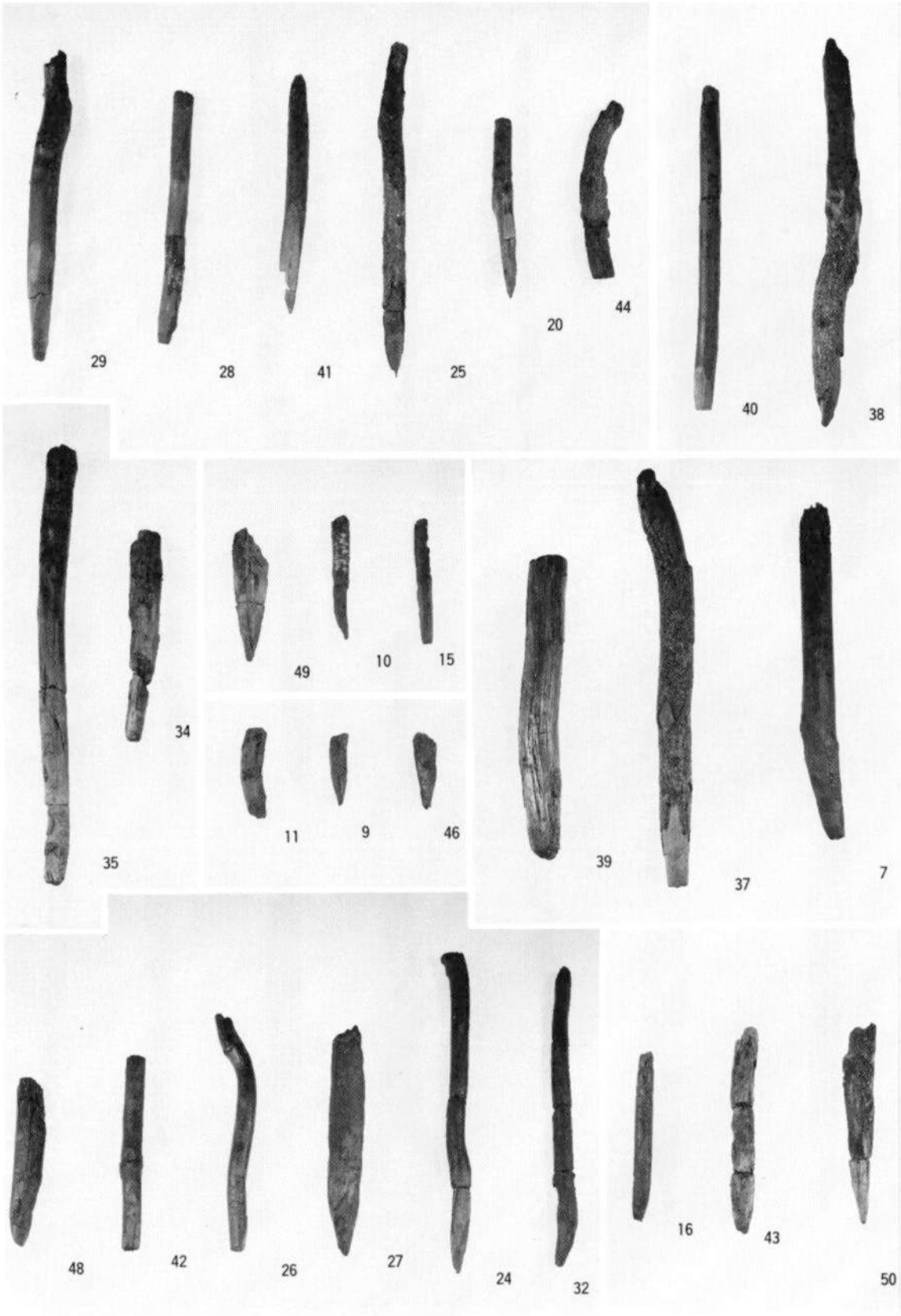
1　A地区　大溝２下層出土石器　　2　大溝２出土石帯　　3　大溝２出土石鍋



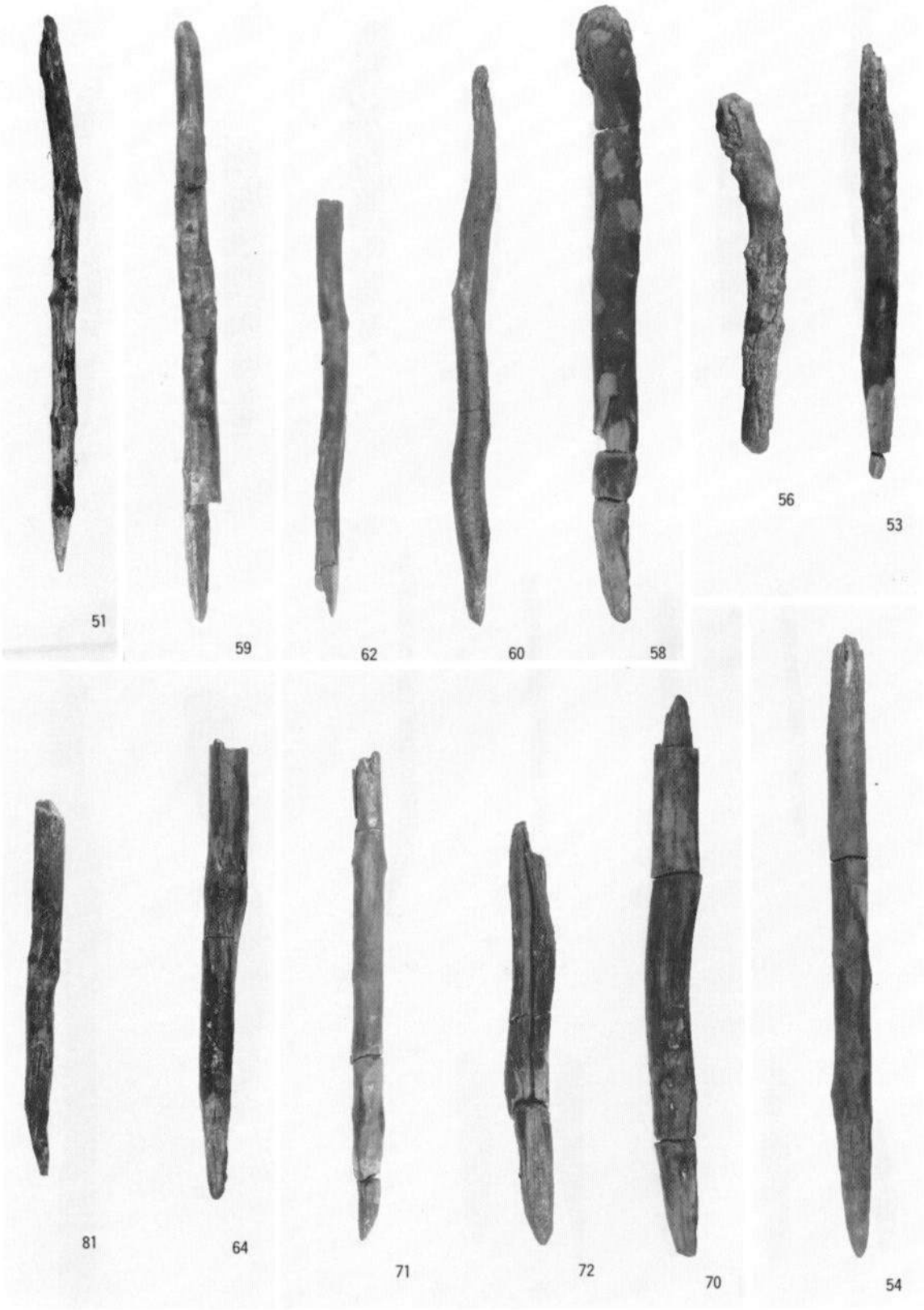


1　A地区　大溝２出土石製品　　2　大溝２出土土製品　　3　大溝２出土瓦

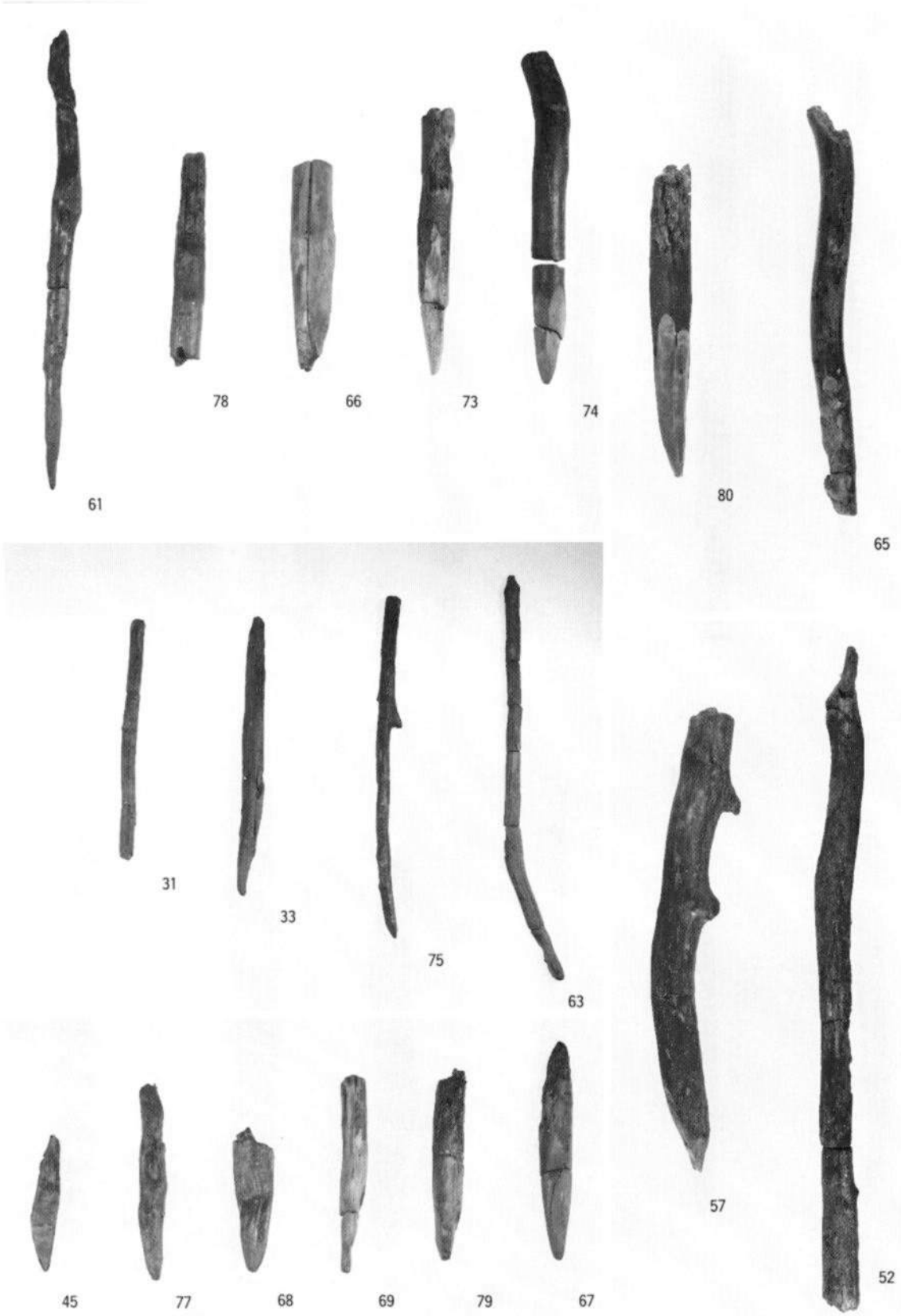
A地区　大溝２出土杭　1


29
28
41
25
20
44
40
38
35
34
49
10
15
11
9
46
39
37
7
48
42
26
27
24
32
16
43
50

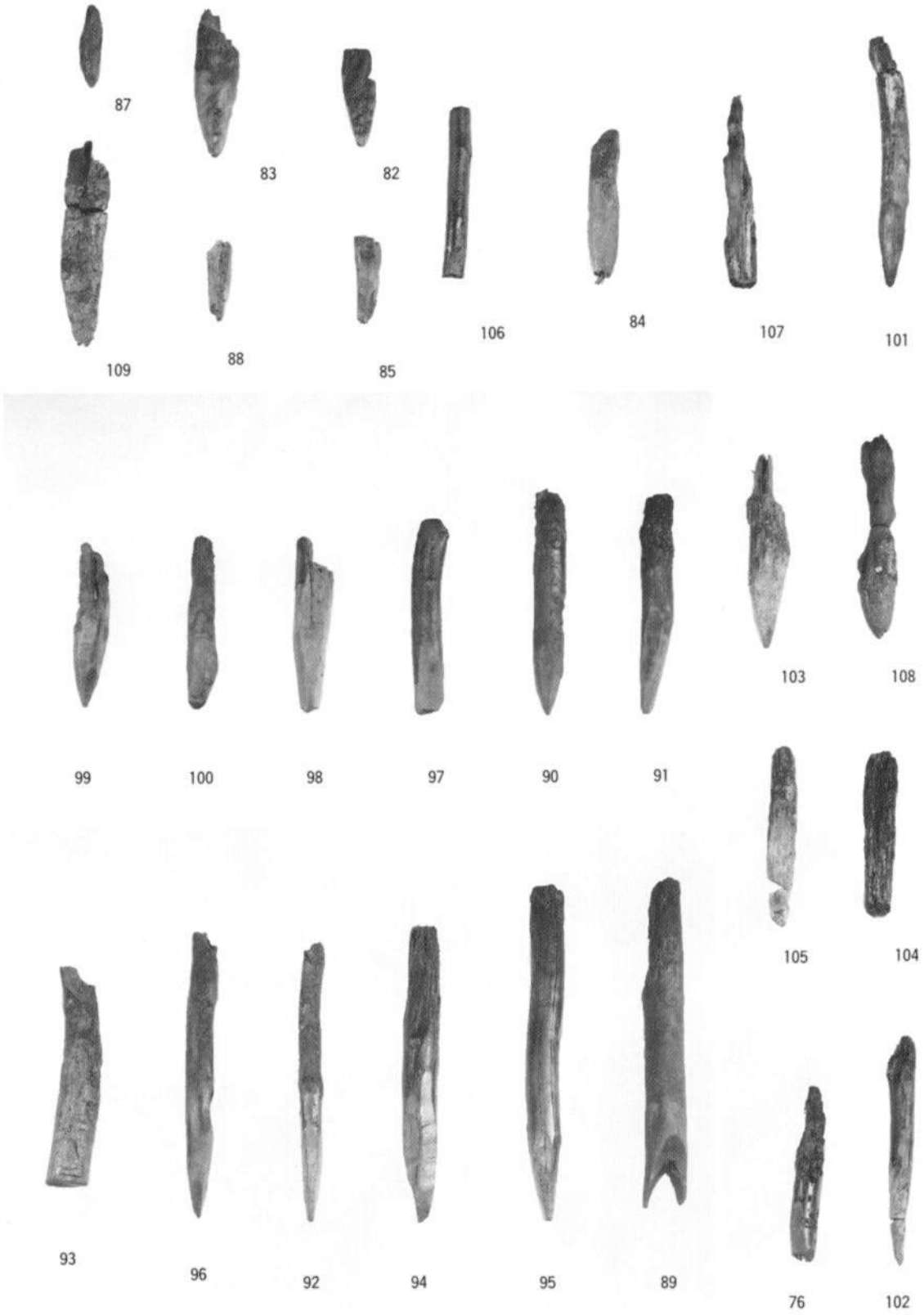
A地区　大溝２出土杭　2



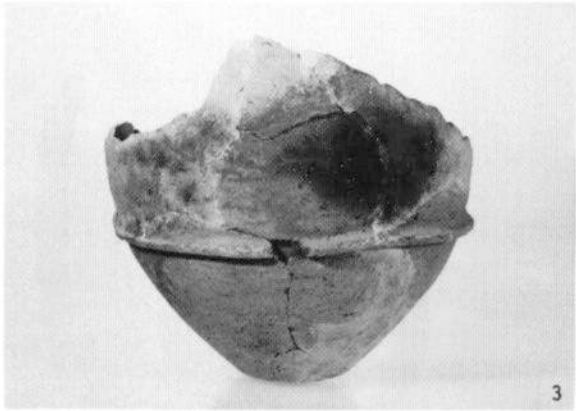
A地区　大溝2出土杭　3

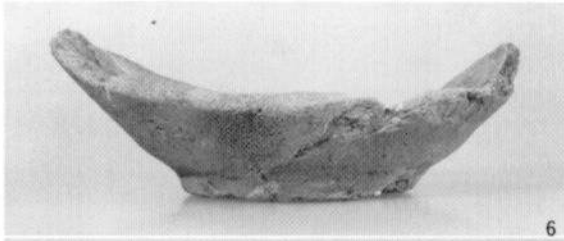


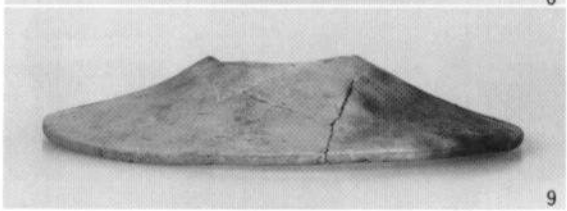
A地区　大溝２出土杭　4

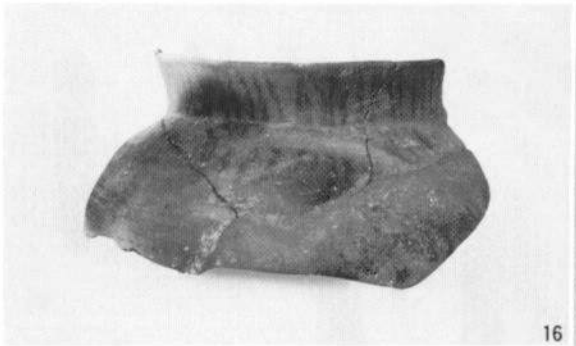

87
83
82
109
88
85
106
84
107
101
99
100
98
97
90
91
103
108
105
104
93
96
92
94
95
89
76
102

A地区　溝状遺構出土杭

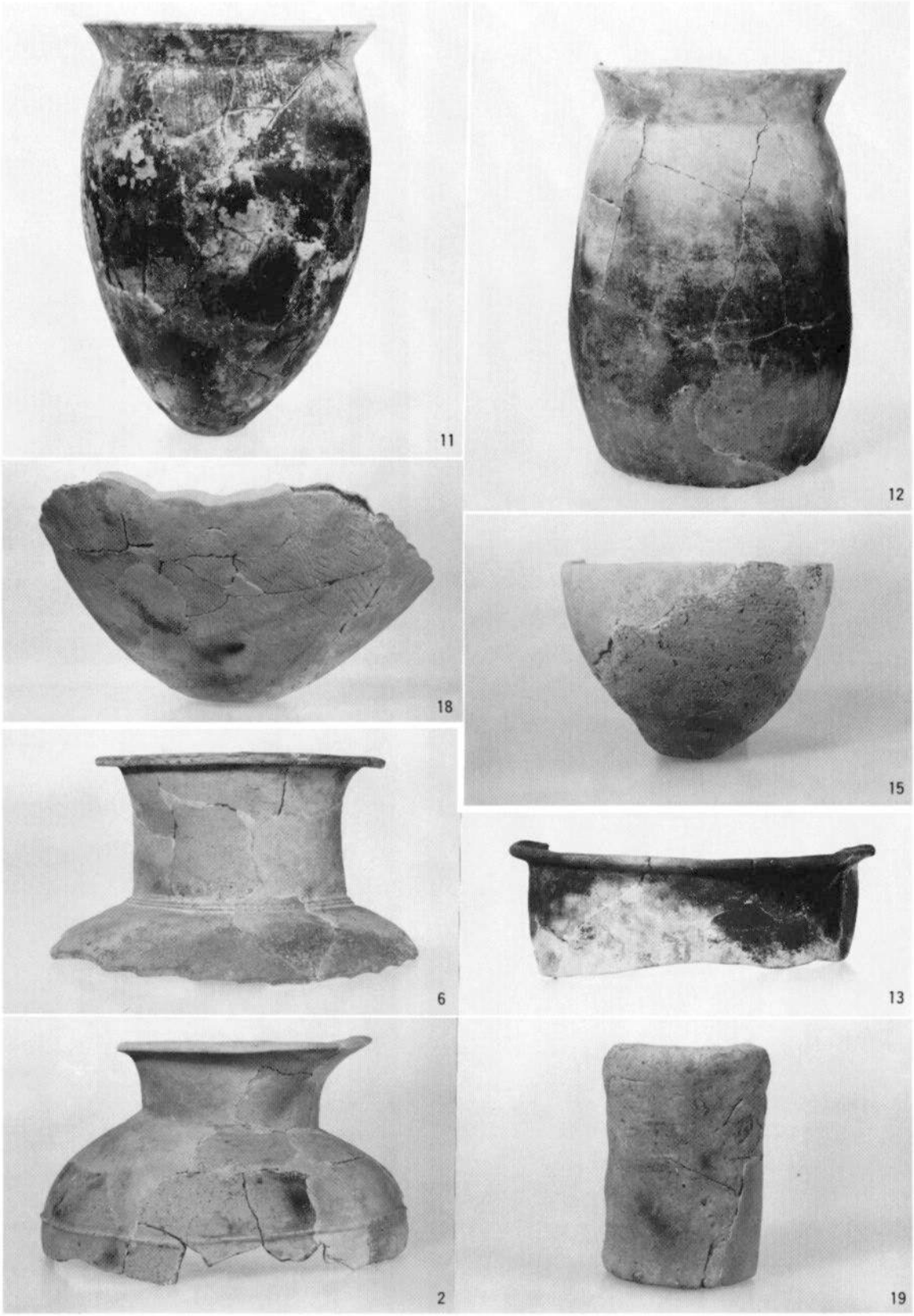








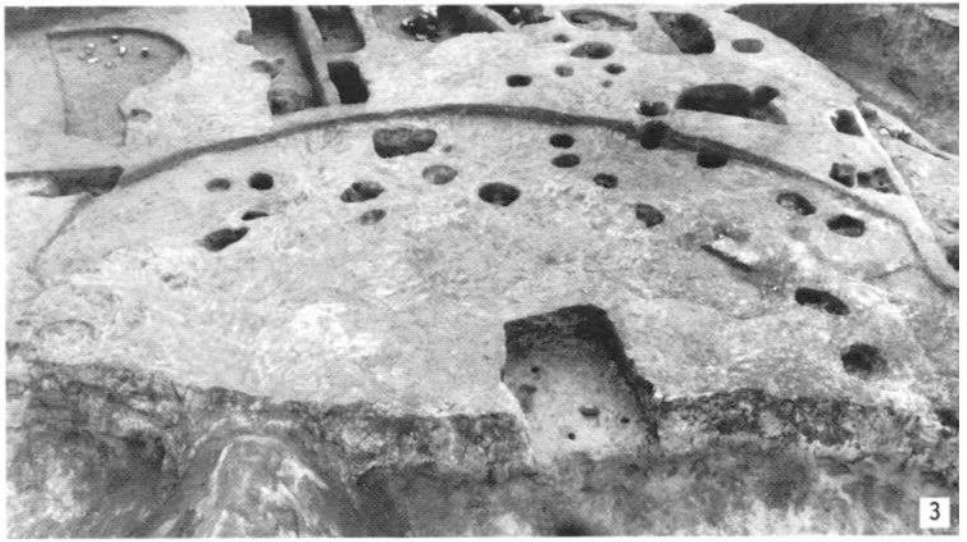
A地区　北部・西部・北西部落込み出土土器



A地区　北西部・南西部落込み出土土器

1

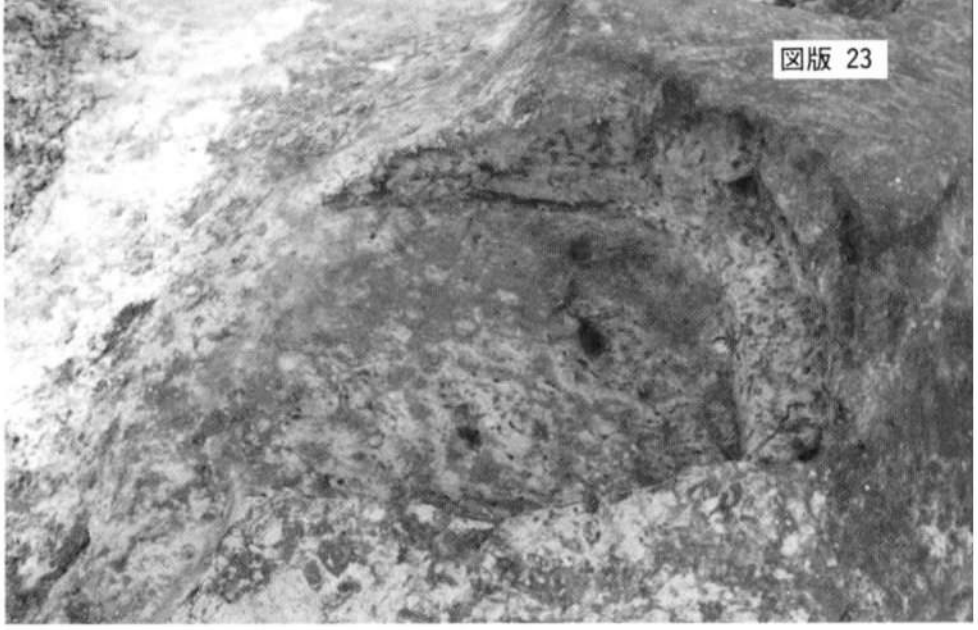
2



3

1 B地区全景（北から）
2 2号住居跡遺物出土状況
3 3号住居跡全景（北から）

1



2

3

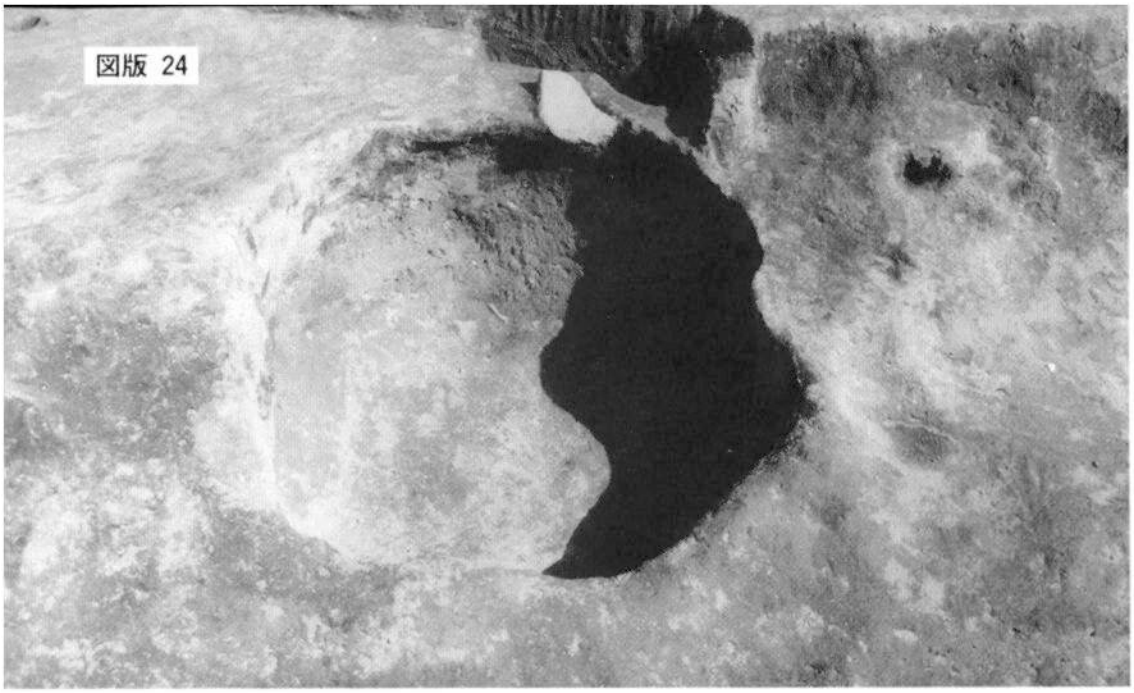
B地区

1　1号貯蔵穴

2　2号貯蔵穴

3　3号貯蔵穴

図版 24



1

2

3

B地区

1　4号貯蔵穴

2　5号貯蔵穴

3　5号貯蔵穴堆積状況

1

2

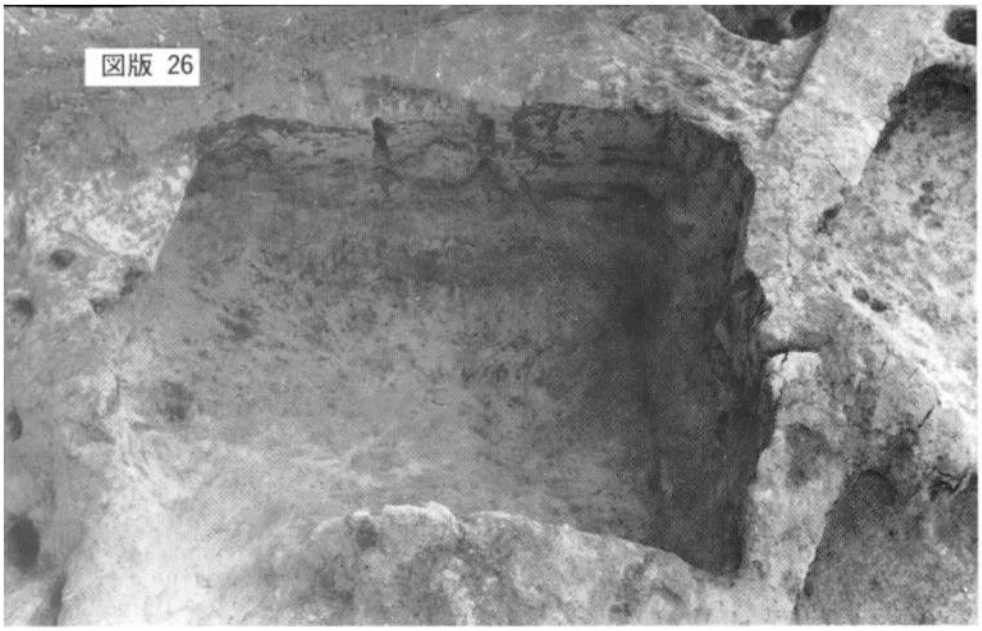
3

B地区

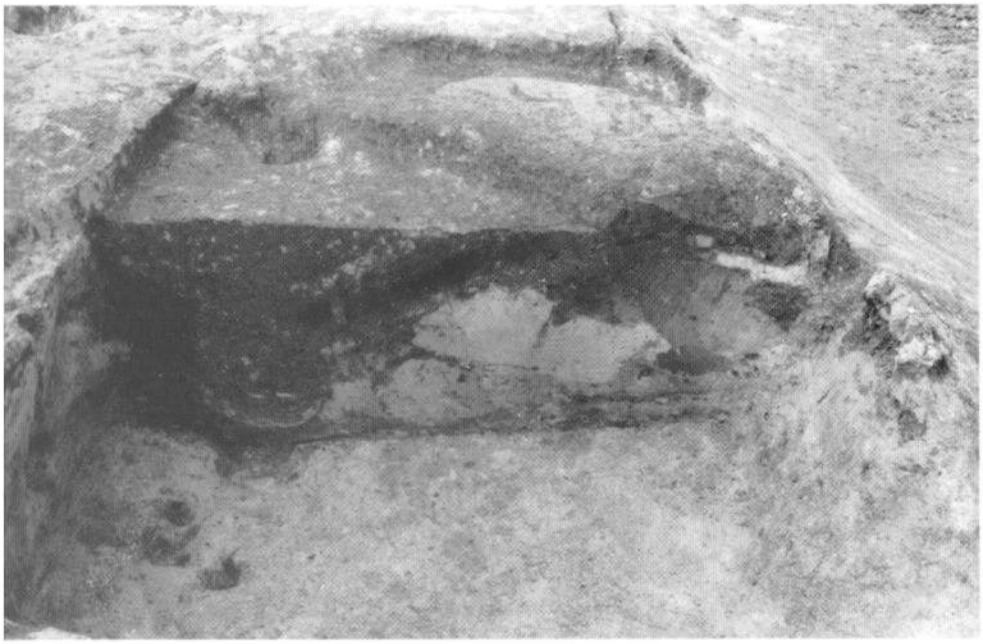
1　7・8号貯蔵穴
　　堆積状況

2　7号貯蔵穴

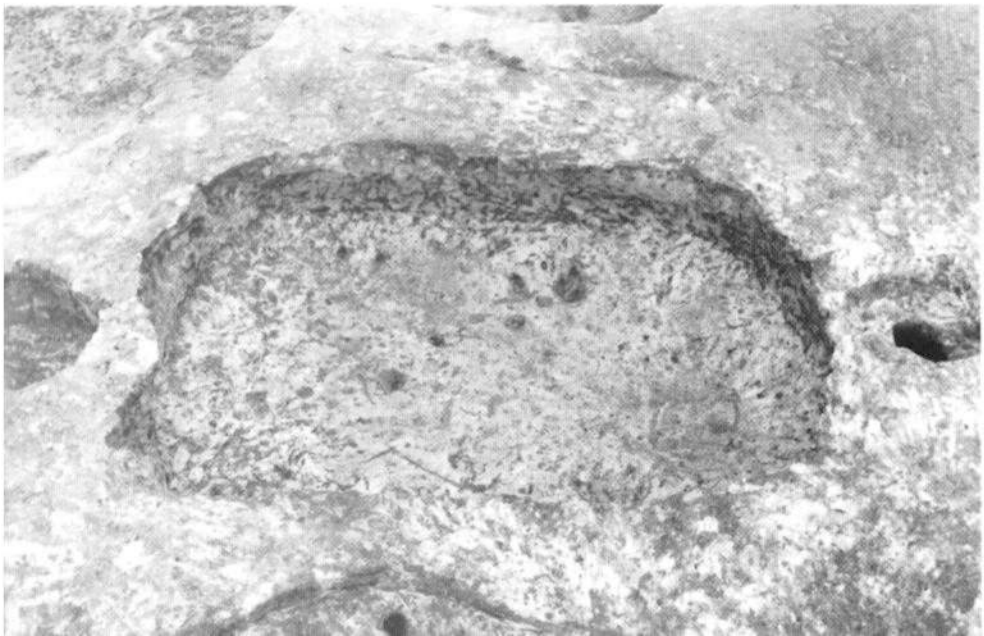
3　8号貯蔵穴



1



2



3

B地区

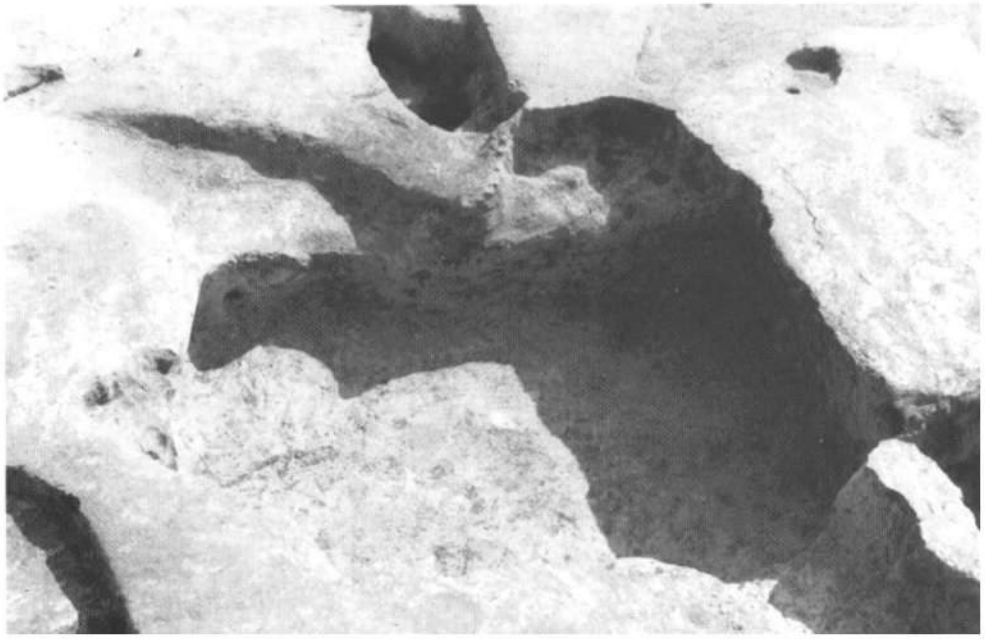
1　9号貯蔵穴

2　9号貯蔵穴
　　堆積状況

3　10号貯蔵穴

1

2



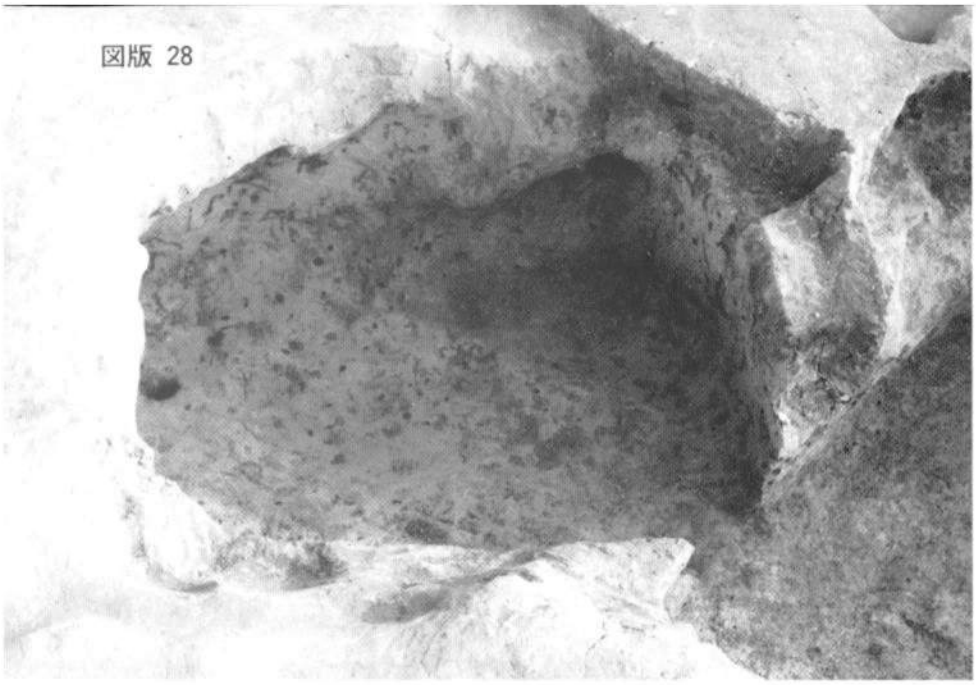
3

B地区

1　11号貯蔵穴

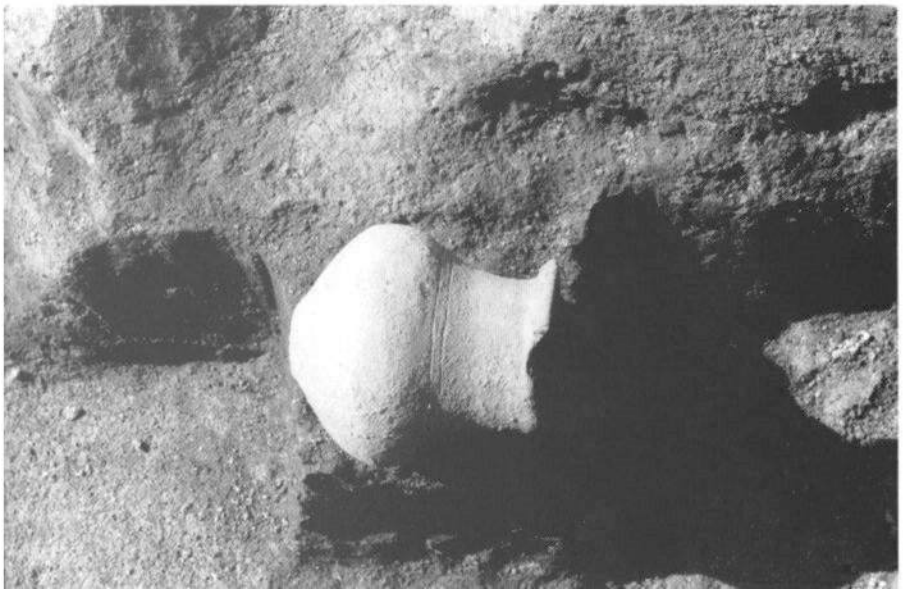
2　12号貯蔵穴

3　13号貯蔵穴



1

2



3

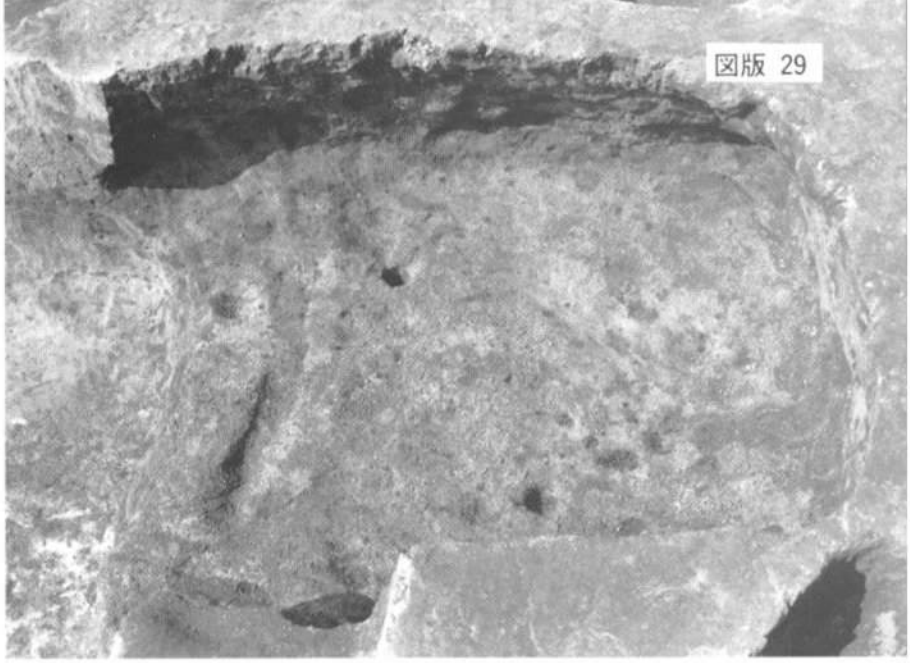
B地区

1　14号貯蔵穴

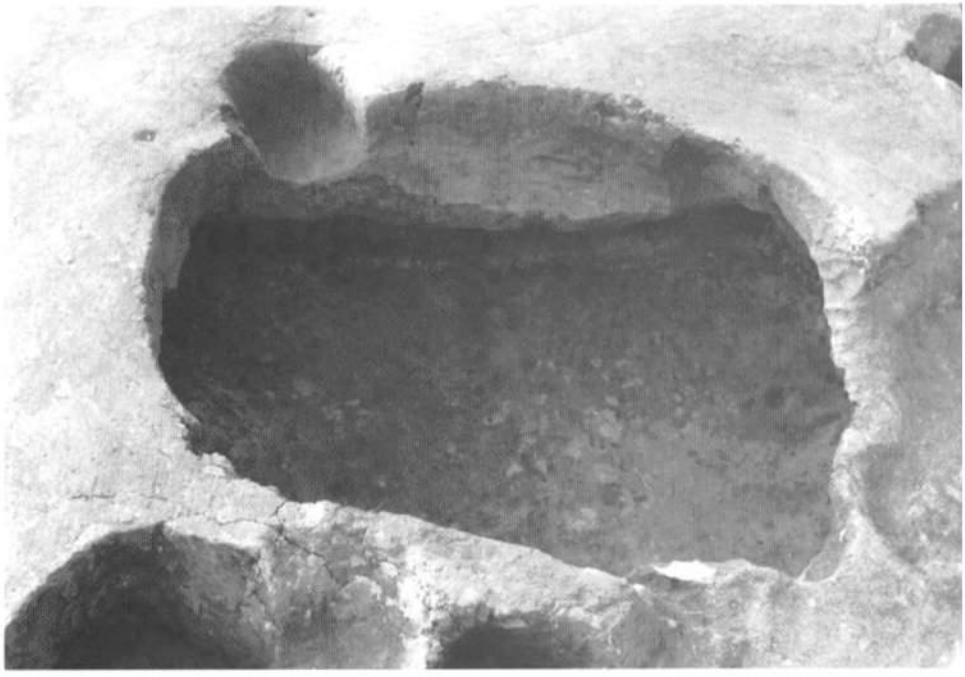
2　17号貯蔵穴

3　17号貯蔵穴

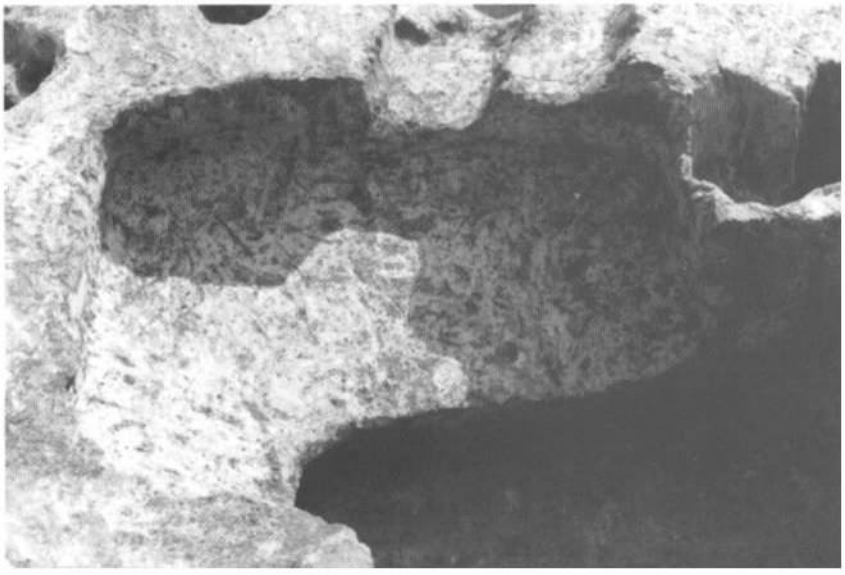
土器出土状況



1



2



3

B地区

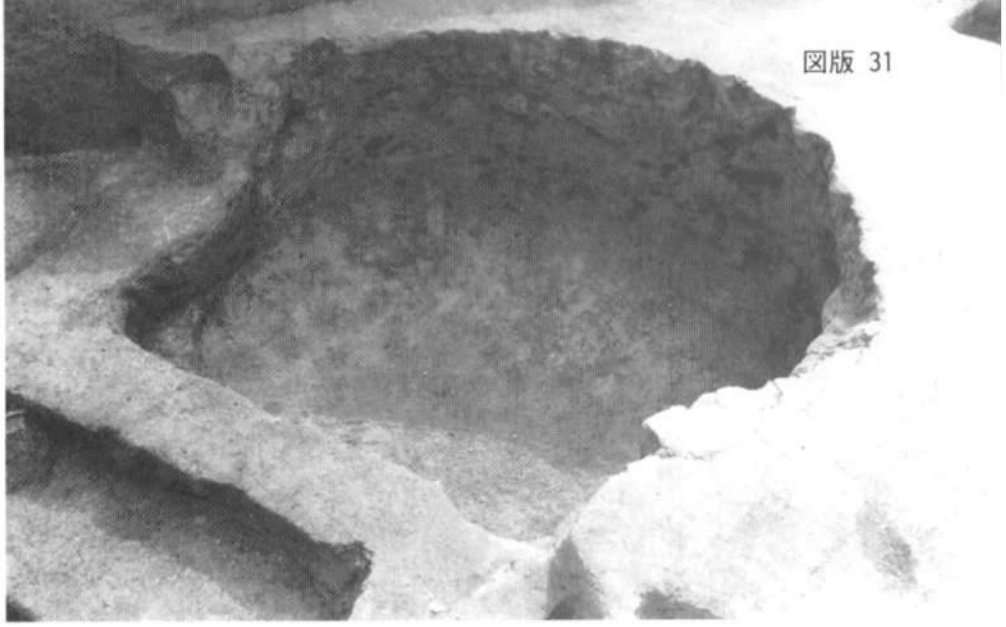
1　18号貯蔵穴

2　19号貯蔵穴

3　20号貯蔵穴

B地区
19号貯蔵穴
土器出土状況

1



2

3

B 地区

1　23号貯蔵穴

2　24・31号貯蔵穴

3　25号貯蔵穴

1

B地区

1　25号貯蔵穴
　　土器出土状況

2　26号貯蔵穴

3　27号貯蔵穴

2

3

1

2

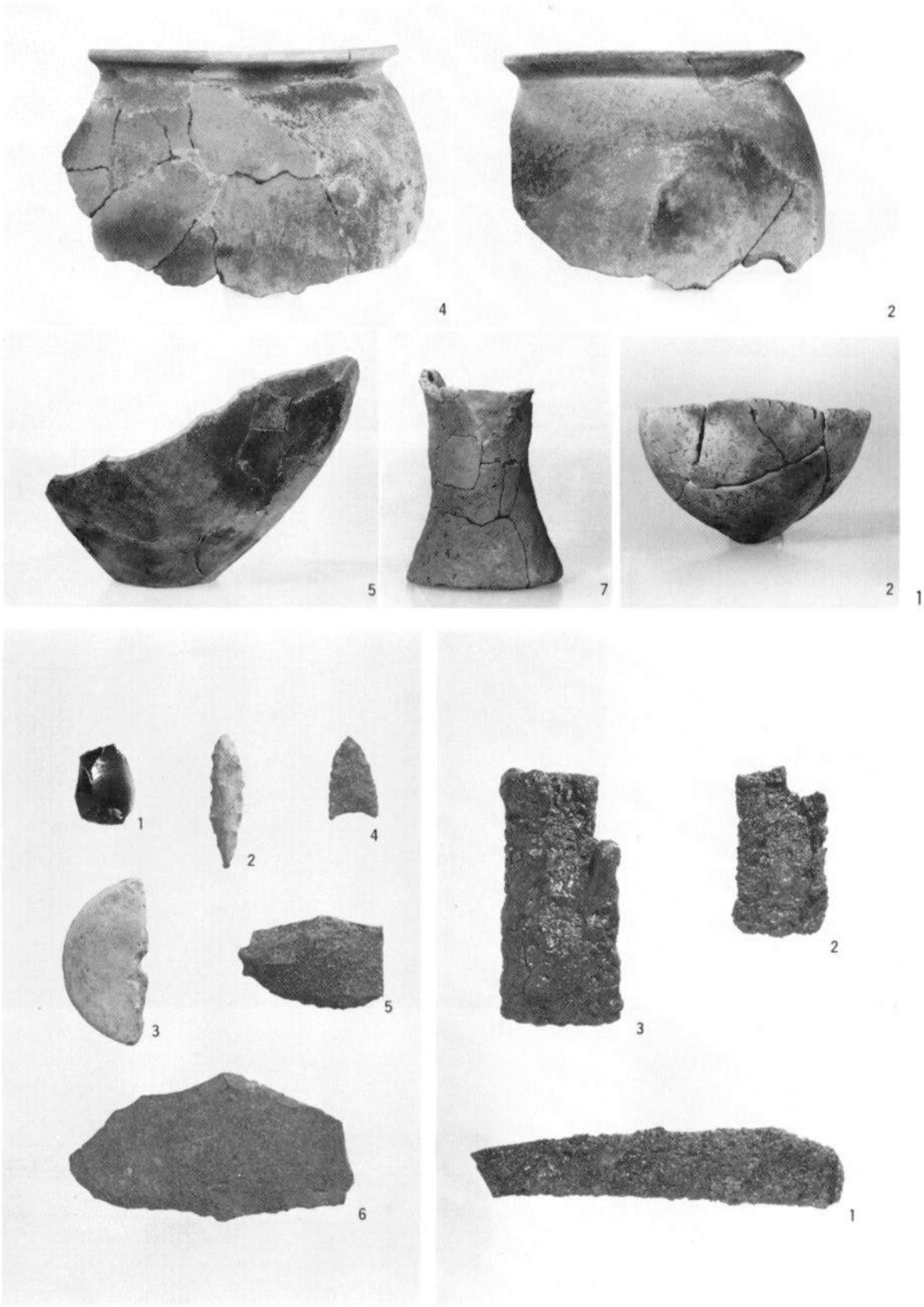
B地区

1　28号貯蔵穴

2　30号貯蔵穴

3　調査風景

3

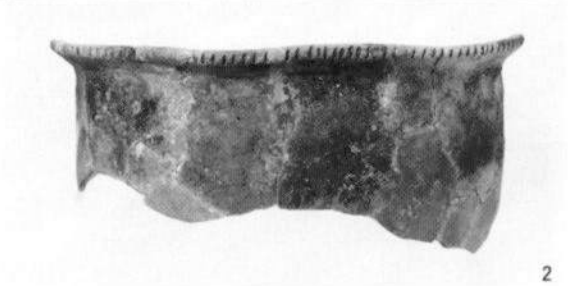


B地区

1　2・4号住居跡出土土器　　2　3・4号住居跡出土石器・土製品　　3　4号住居跡等出土鉄器

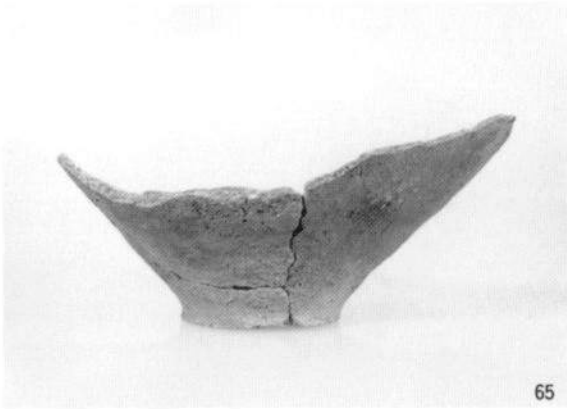
1

32


2

52

7


65

19

61

B地区　2・4・5・9・15・17号貯蔵穴出土土器

68

76

79

75

82

99

86

B地区　18・19号貯蔵穴出土土器

84

92

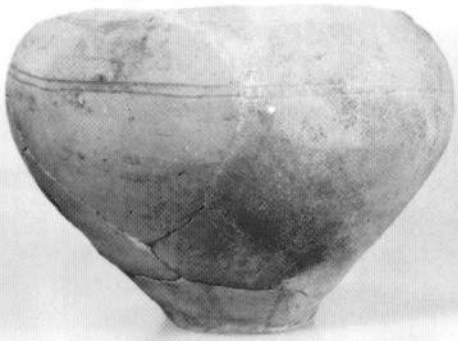
87

95

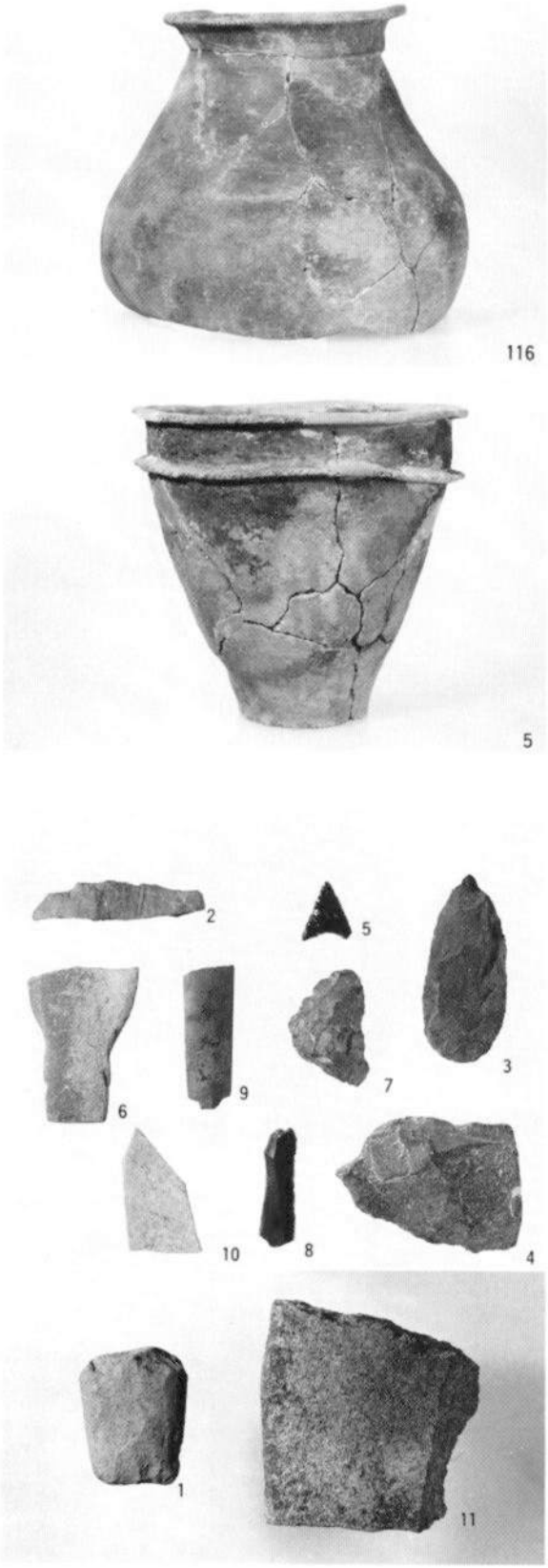
88

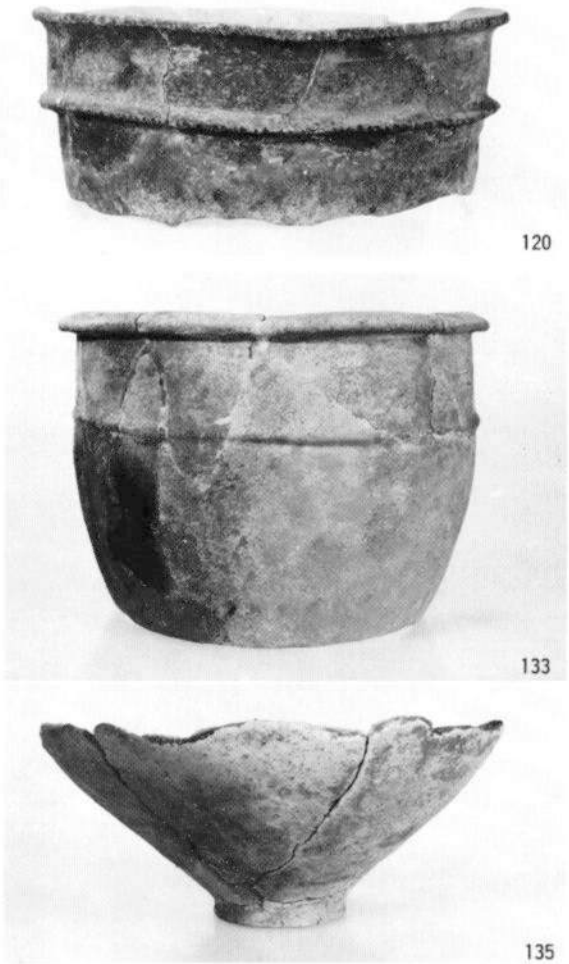
106

110

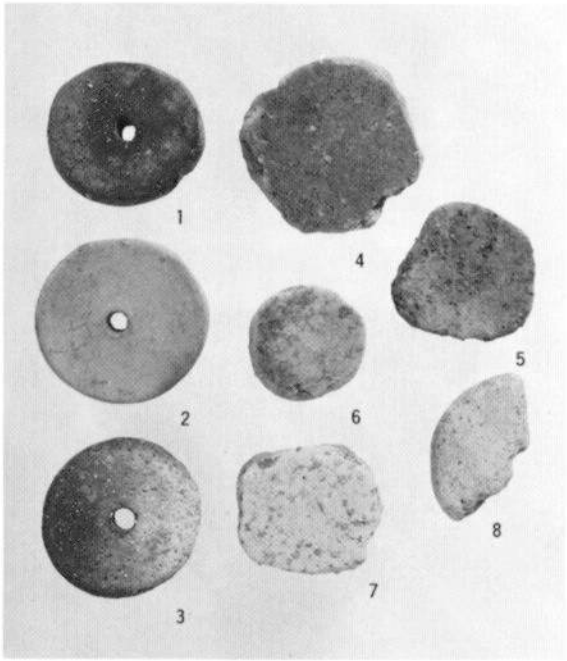

104

B地区　19・23号貯蔵穴出土土器





1

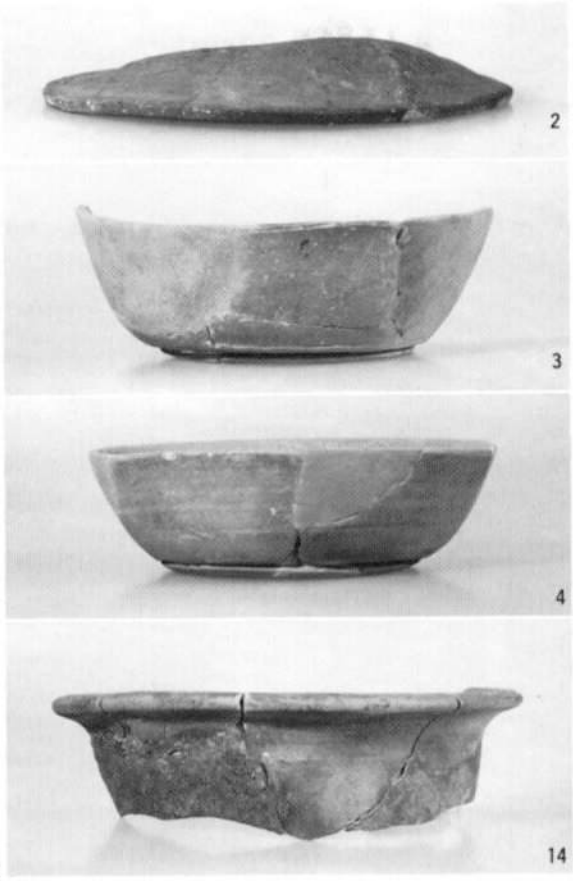


2

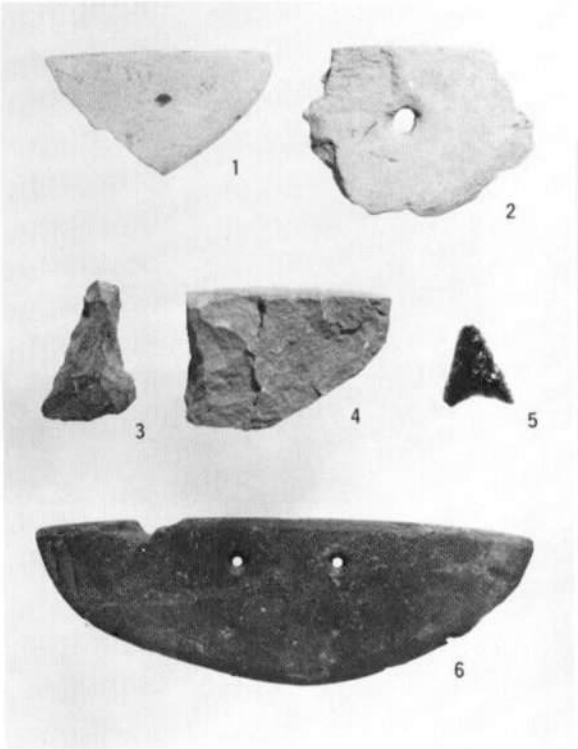
3

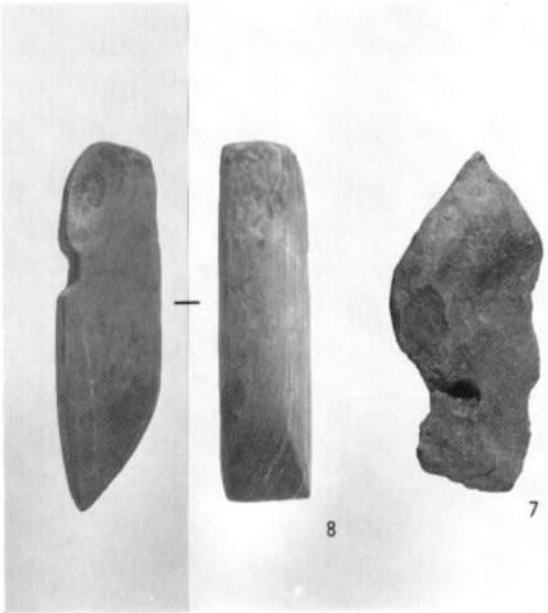
1　B地区　25・32号貯蔵穴出土土器　　2　貯蔵穴出土石器　　3　貯蔵穴等出土土製品

1

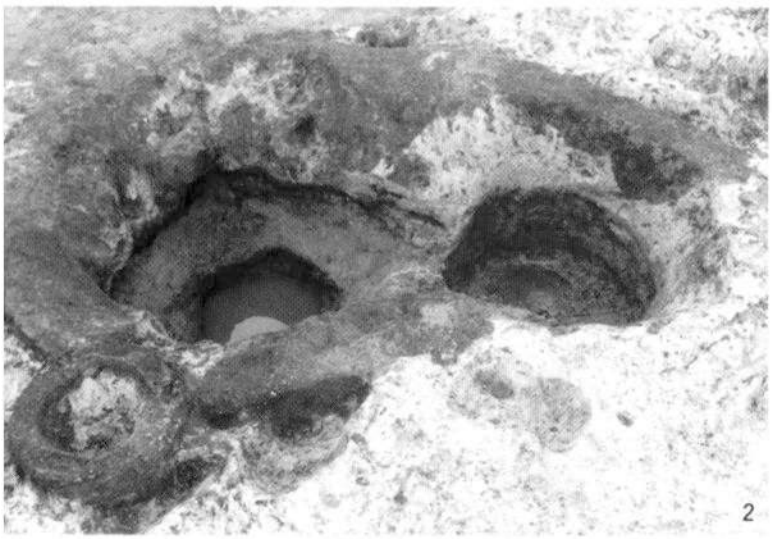


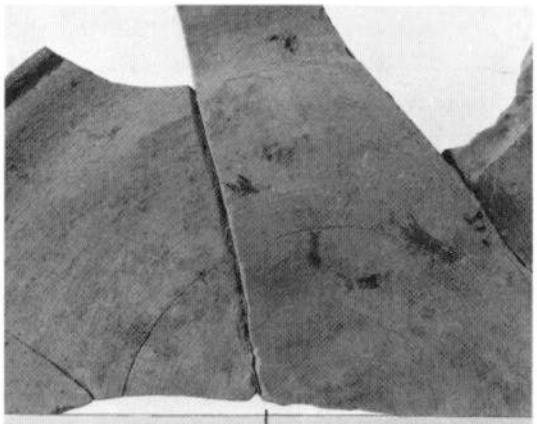
2

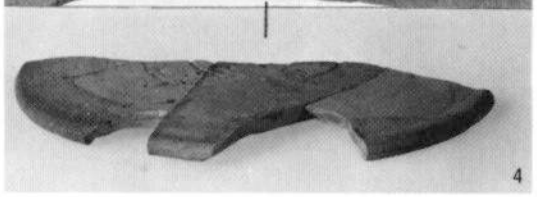


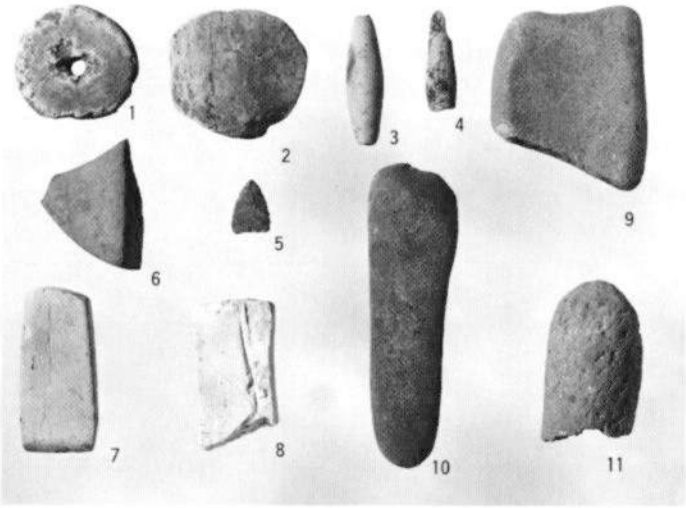


1　B地区　土壙（北から）　　2　大溝出土土器　　3　土壙・大溝他出土石器









1　C地区全景（北から）　3　出土土器

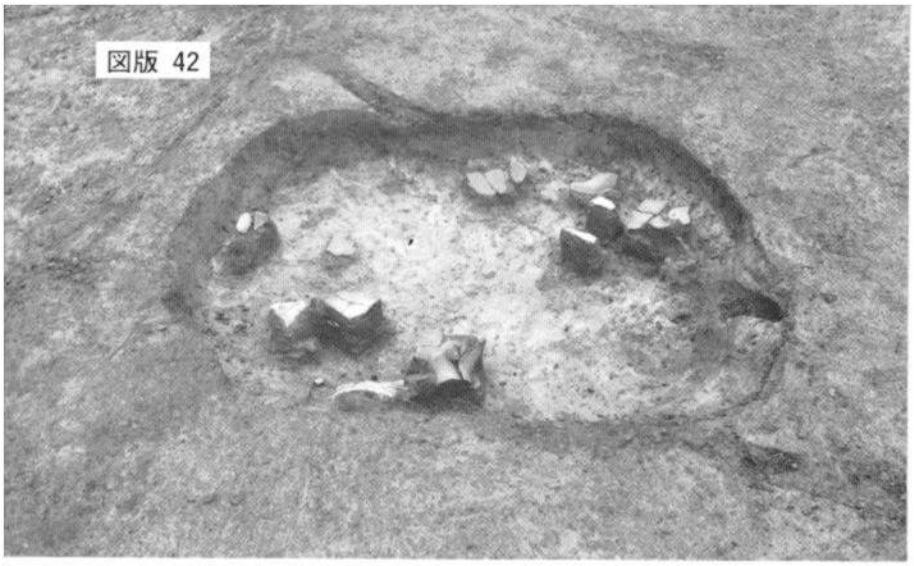
2　井戸（北東から）　4　出土石器・土製品

1

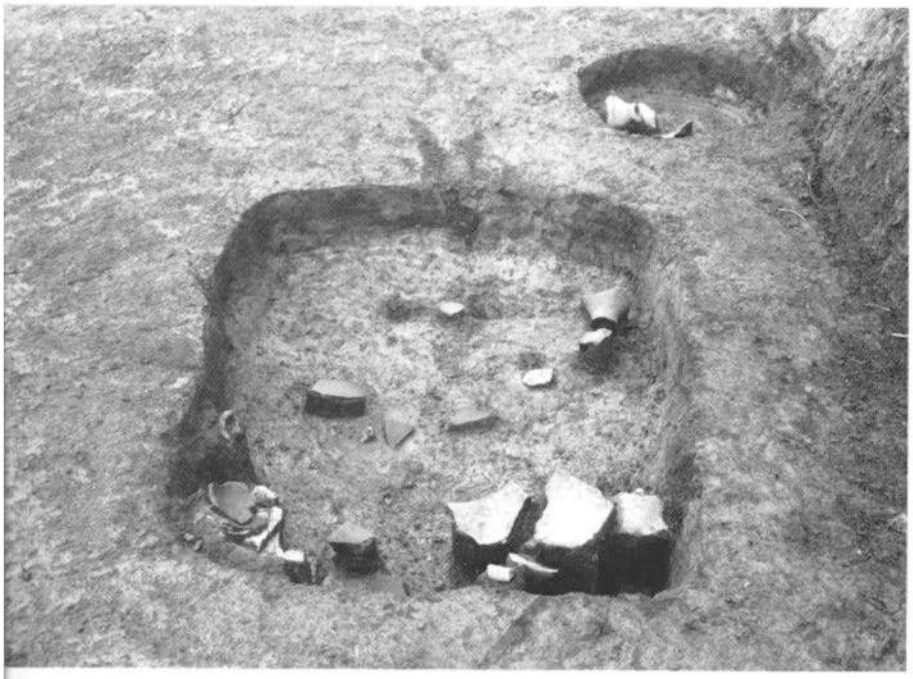
2

3

1　C・D地区全景
2　D地区全景（南から）
3　D地区全景（東から）



1



2

3

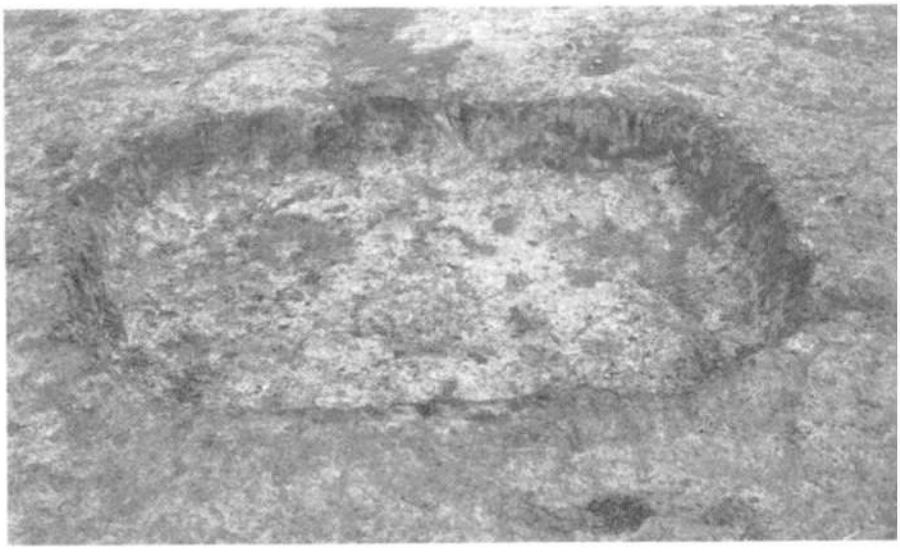
D地区

1　1号貯蔵穴（東から）

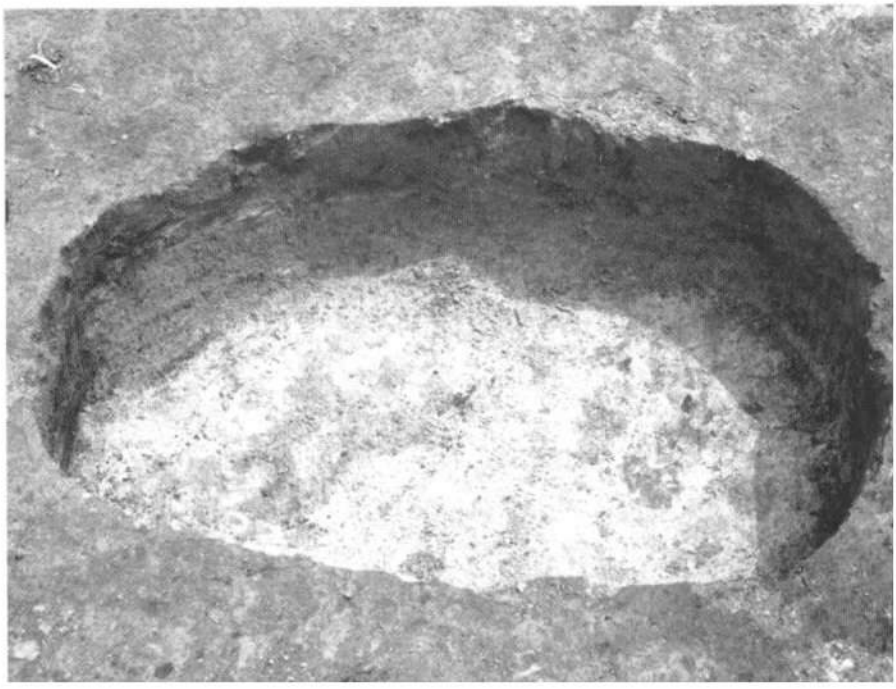
2　2号貯蔵穴（北から）

3　3号貯蔵穴（南から）

1



2



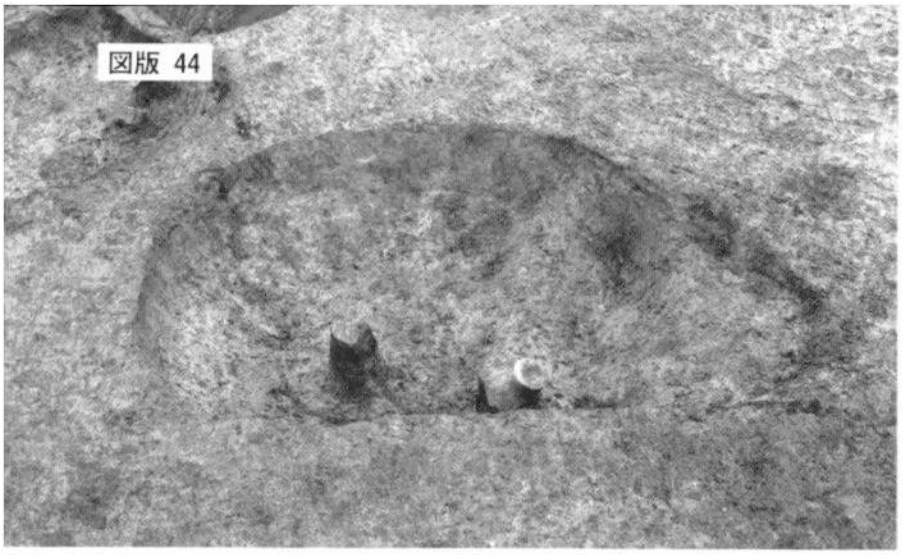
3

D地区

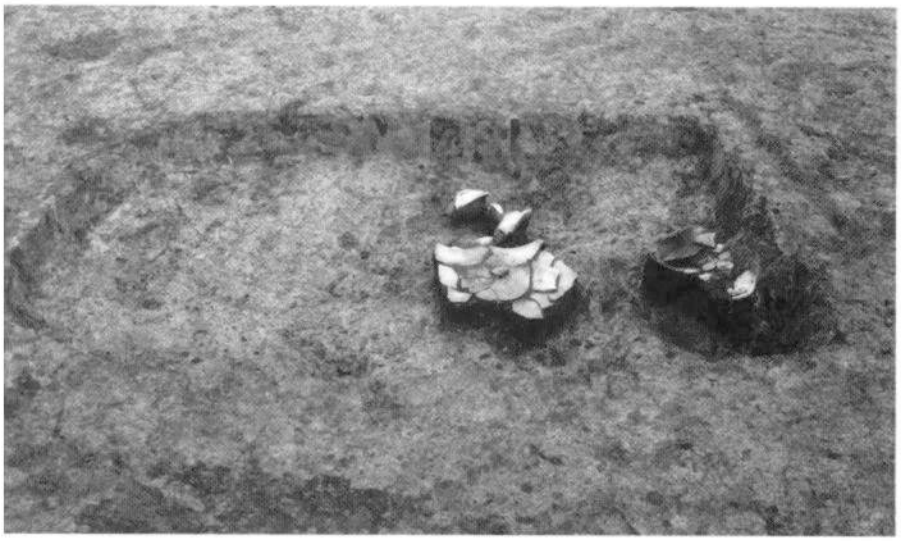
1　3・4号貯蔵穴（西から）

2　6号貯蔵穴（西から）

3　5号貯蔵穴（南から）



1



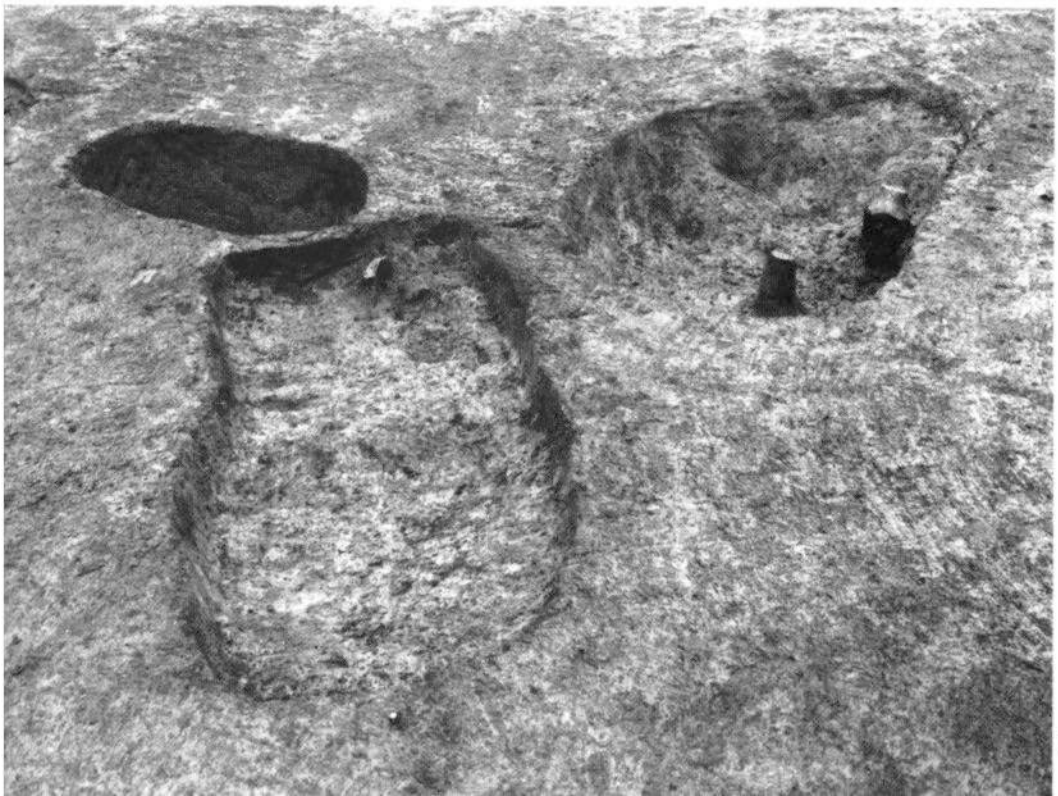
2

D地区

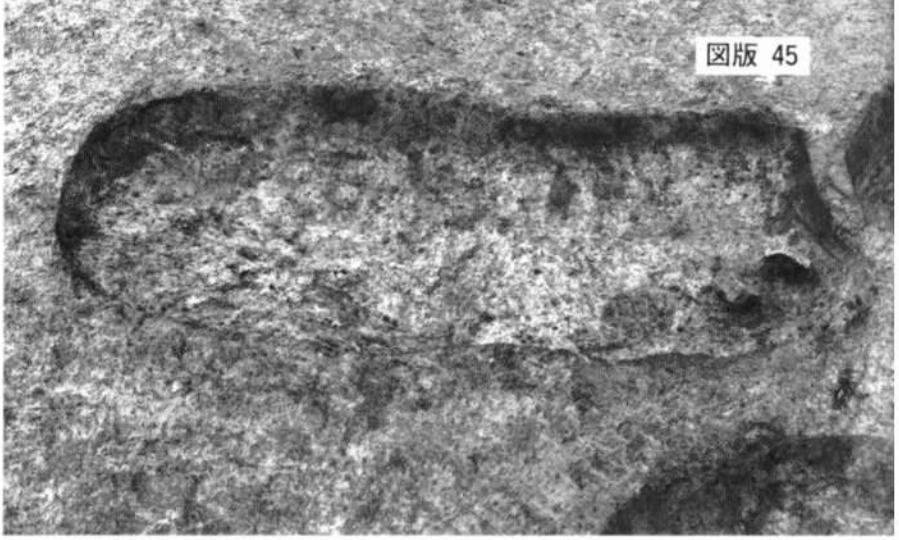
1　7号貯蔵穴（西から）

2　8号貯蔵穴（西から）

3　7・9号貯蔵穴
　・3号小土坑



3



1

2

3

D地区

1　9号貯蔵穴（西から）

2　10号貯蔵穴（南から）

3　11号貯蔵穴（南から）

図版 46

1

2

3

D地区

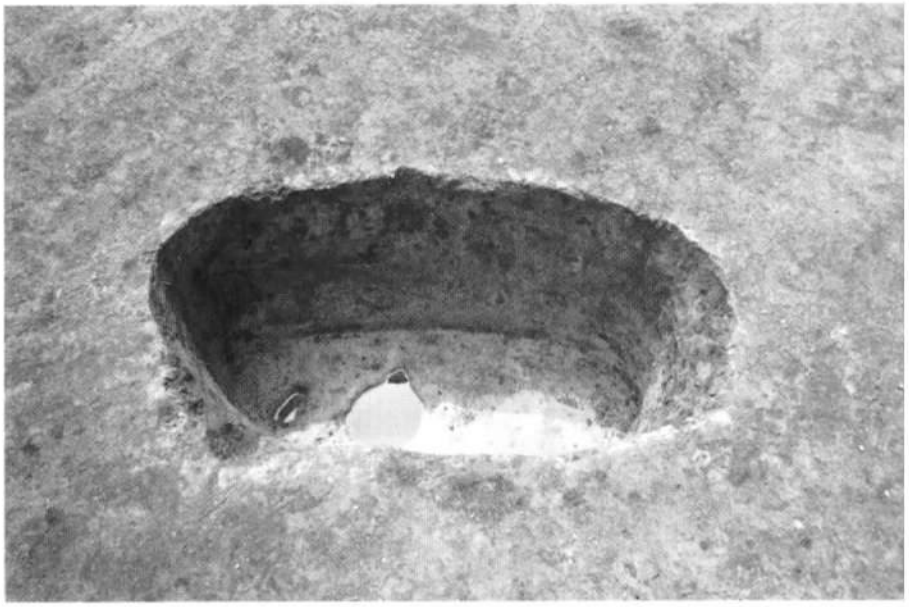
1　12号貯蔵穴（西から）

2　13号貯蔵穴（西から）

3　14号貯蔵穴（南から）

1

2



3

4

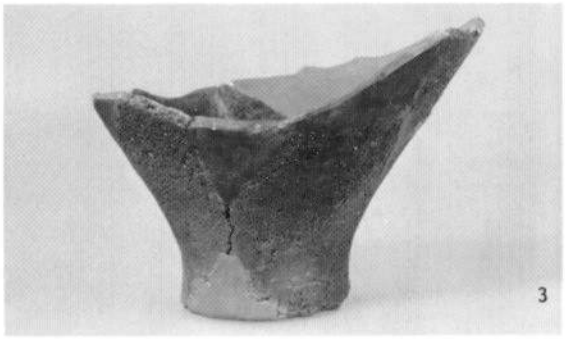
D地区

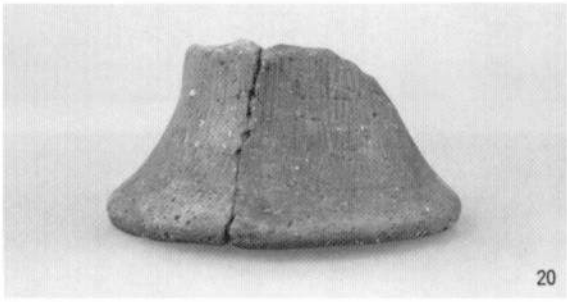
1　3号土坑（西から）

2　2号土坑（西から）

3　1号土坑（東から）

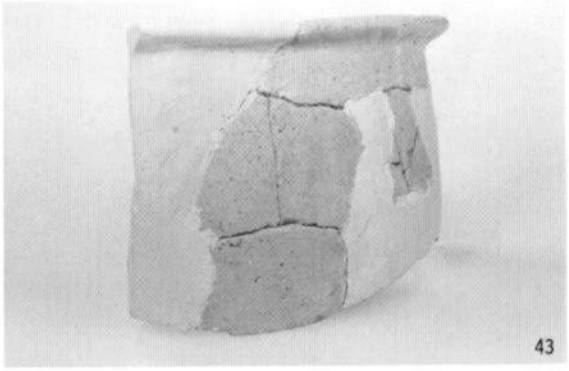
4　4号土坑（西から）





D地区　1～5・8号貯蔵穴出土土器

34


43

45

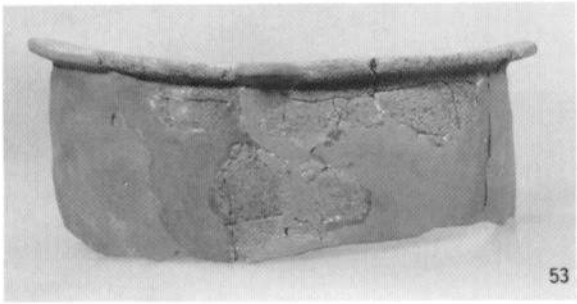
44

48

49

50

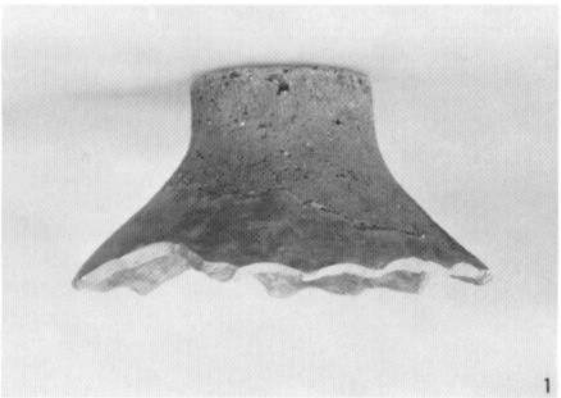
56


53

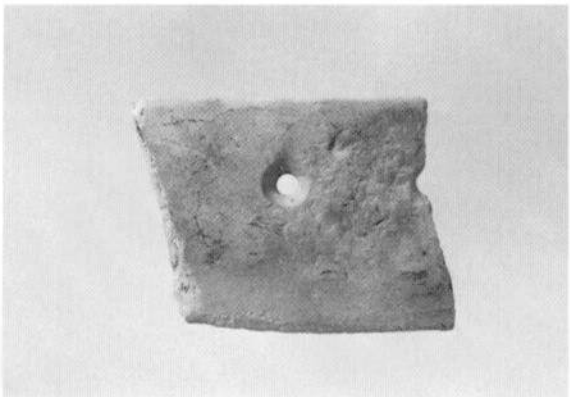
55

D地区　8・11～13号貯蔵穴出土土器

1



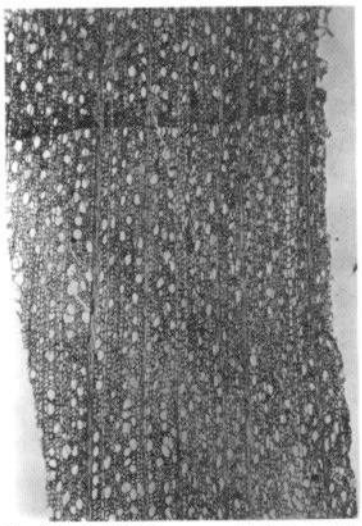
2



3

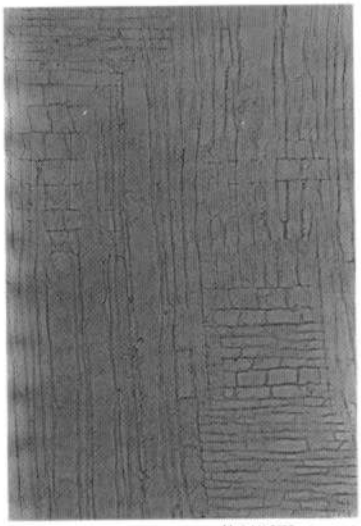
1　D地区　13～15号貯蔵穴出土土器　　3　1号貯蔵穴出土石器

2　1号小土坑出土土器

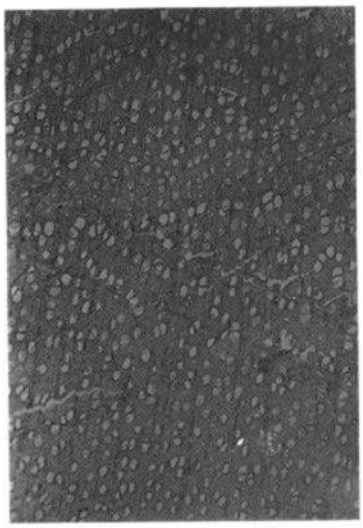


1 大溝 2 南杭20　横断面（×24）

接線断面（×60）

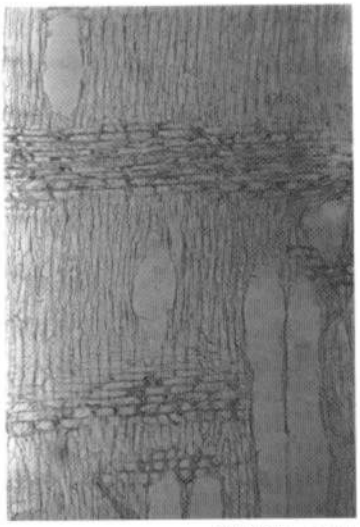


放射断面（×60）

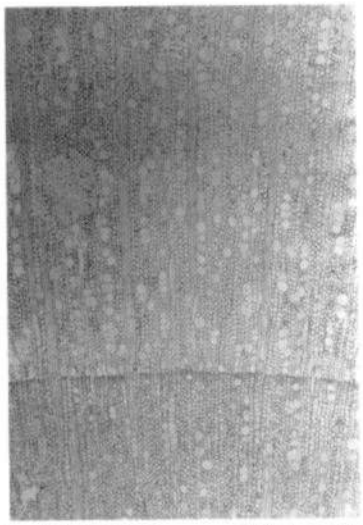


2 大溝 2 南杭22　横断面（×24）

接線断面（×60）



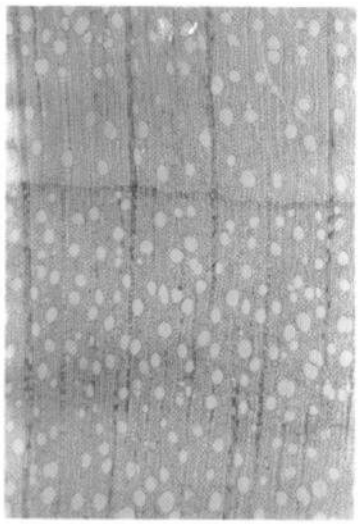
放射断面（×60）



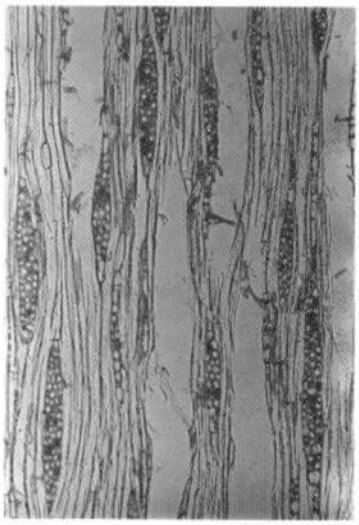
3 大溝 2 南杭26　横断面（×24）

接線断面（×60）

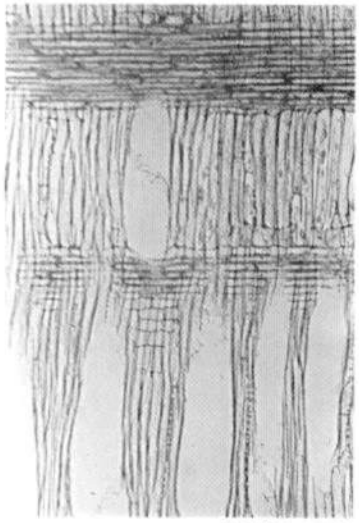
放射断面（×60）



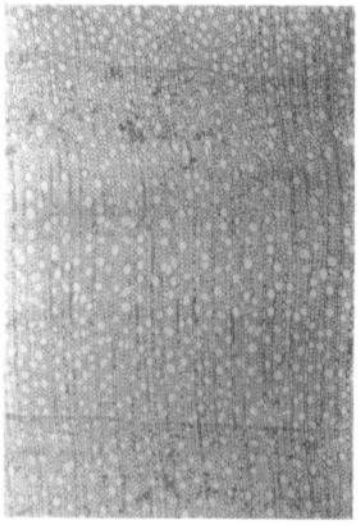
4 大溝 2 南杭27　横断面（×24）



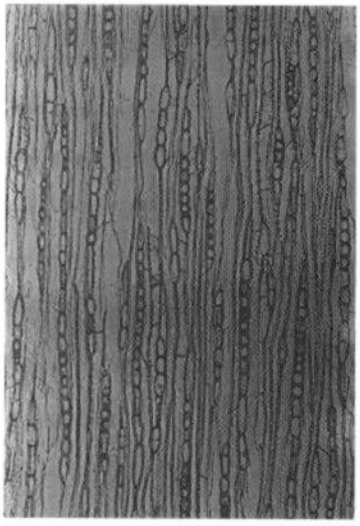
接線断面（×60）



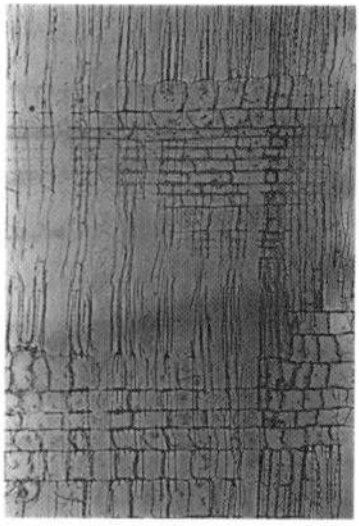
放射断面（×60）



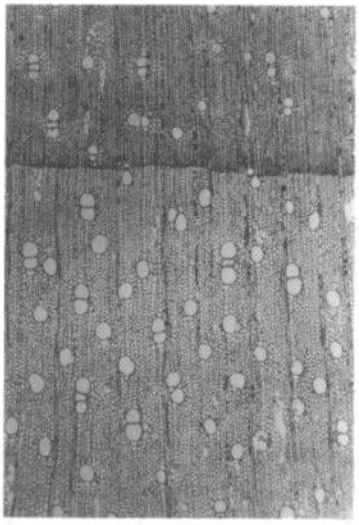
5 大溝 2 南杭28　横断面（×24）



接線断面（×60）

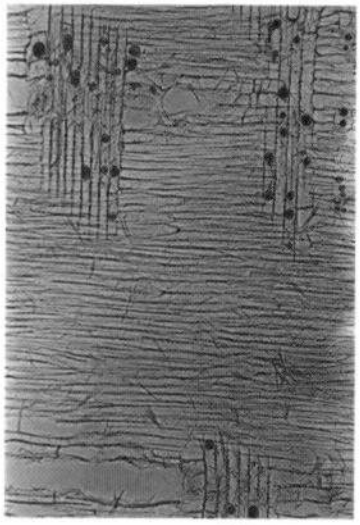


放射断面（×60）

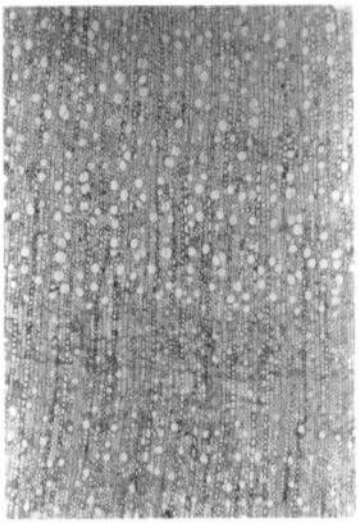


7 大溝 2 南杭39　横断面（×24）

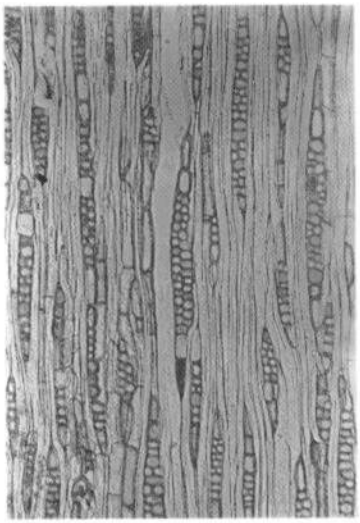
接線断面（×60）



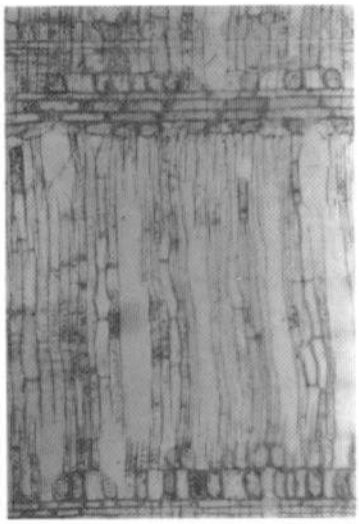
放射断面（×60）



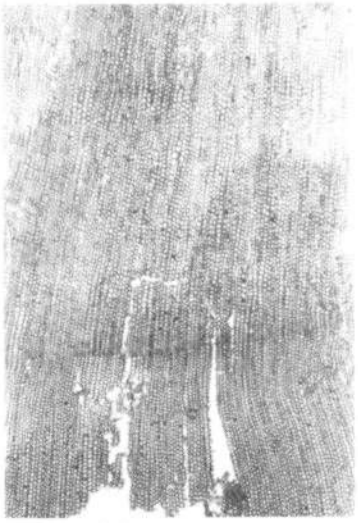
8 大溝 2 南杭43　横断面（×24）



接線断面（×60）

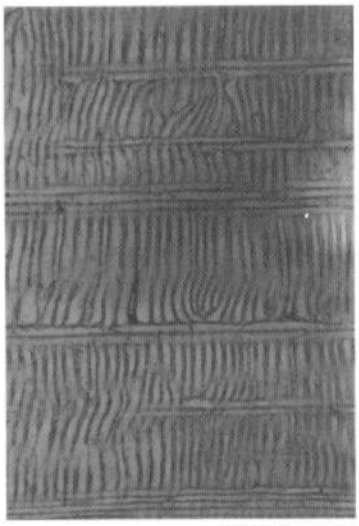


放射断面（×60）

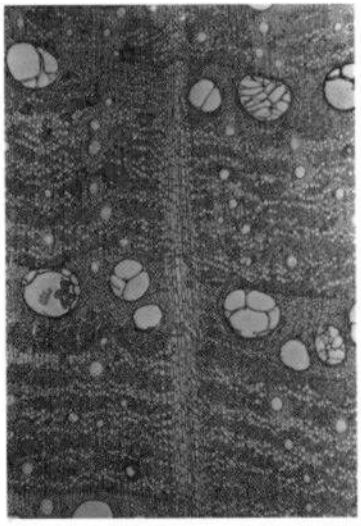


9 大溝 2 南杭44　横断面（×24）

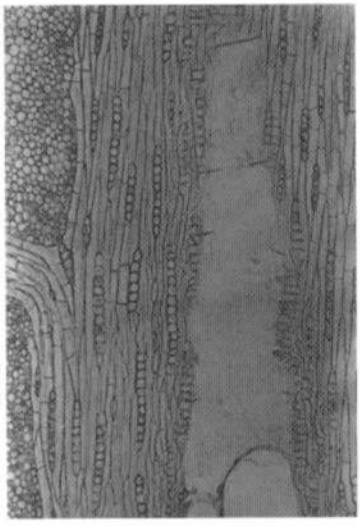
接線断面（×60）



放射断面（×60）

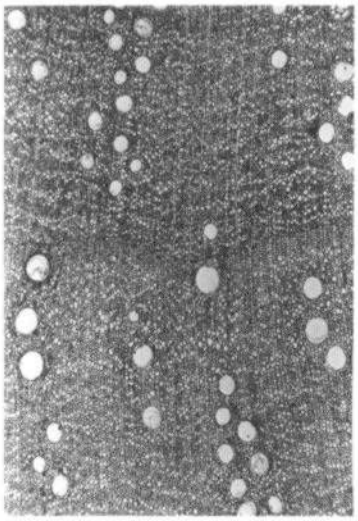


11 大溝 2 南杭57　横断面（×24）



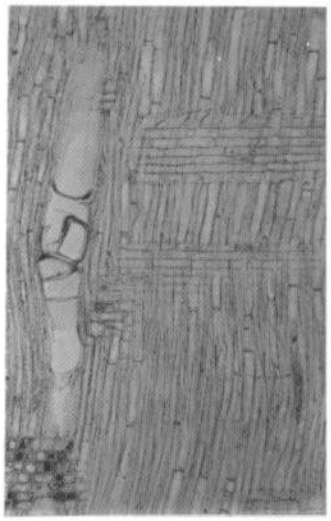
接線断面（×60）

放射断面（×60）

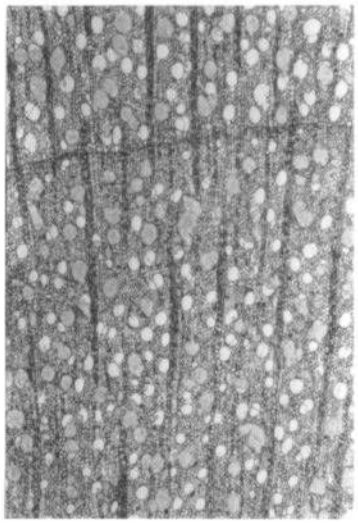


13 大溝 2 南杭59　横断面（×24）

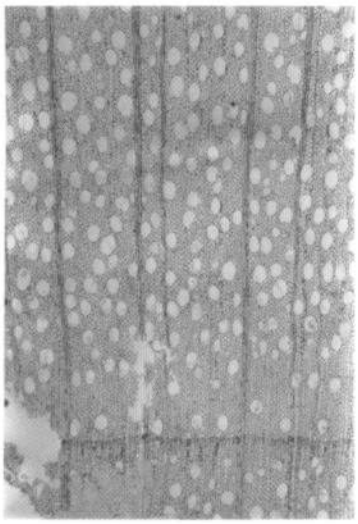
接線断面（×60）



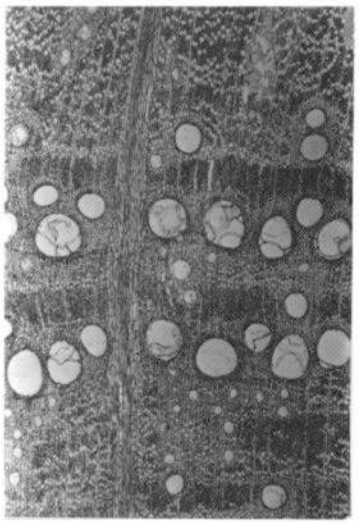
放射断面（×60）



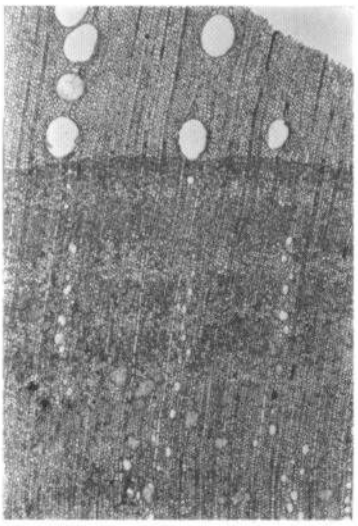
6 大溝 2 南杭32　横断面（×24）



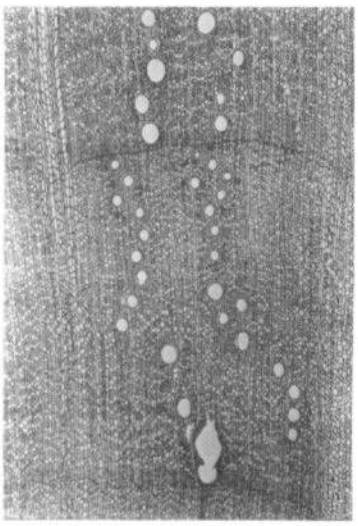
10 大溝 2 南杭48　横断面（×24）



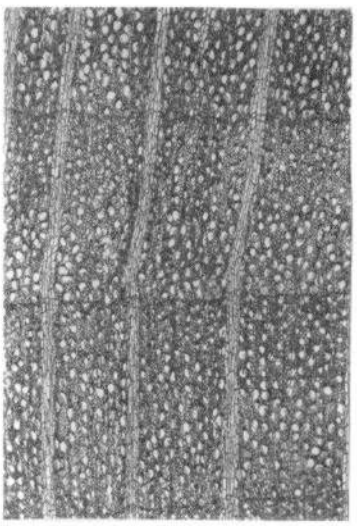
12 大溝 2 南杭58　横断面（×24）



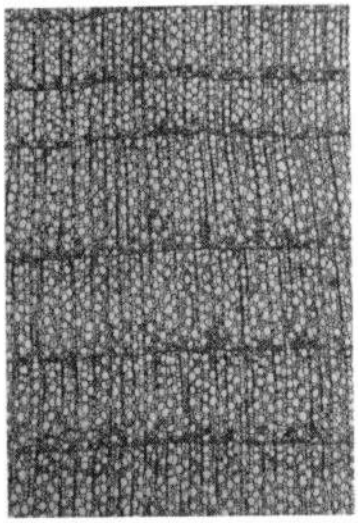
14 大溝 2 北杭31　横断面（×24）



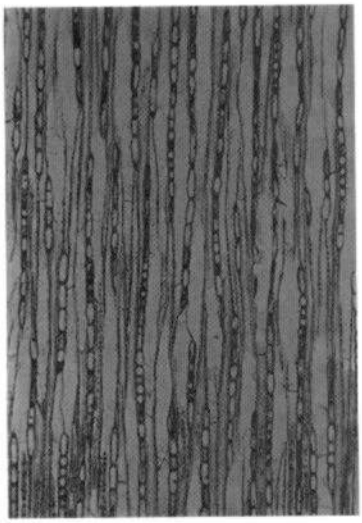
15 大溝 2 北杭36　横断面（×24）



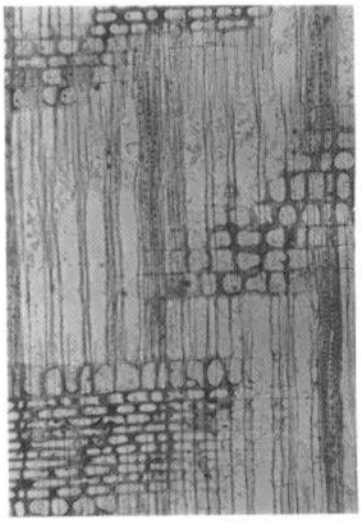
16 大溝 2 北杭40　横断面（×24）



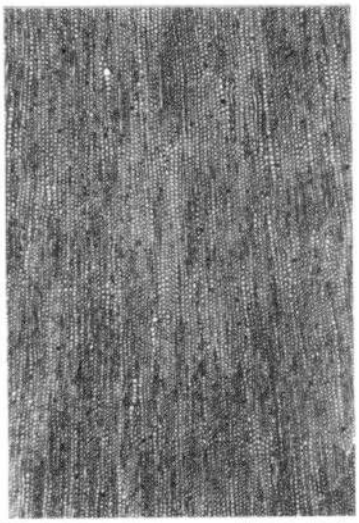
18 大溝 2 北杭46　横断面（×24）



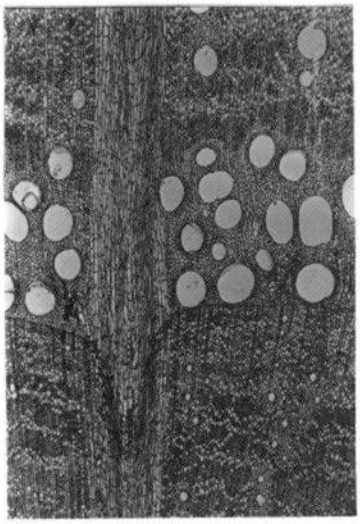
接線断面（×60）



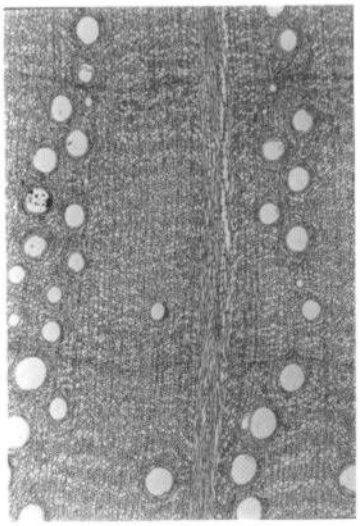
放射断面（×60）



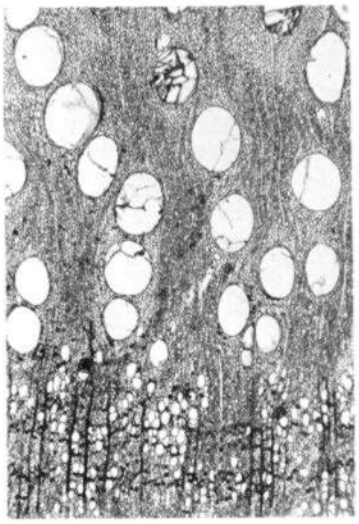
17 大溝 2 北杭44　横断面（×24）



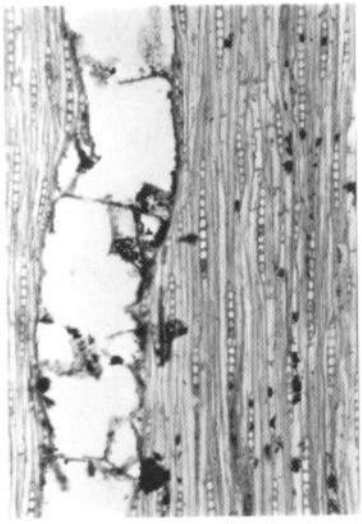
19 大溝 2 北杭47　横断面（×24）



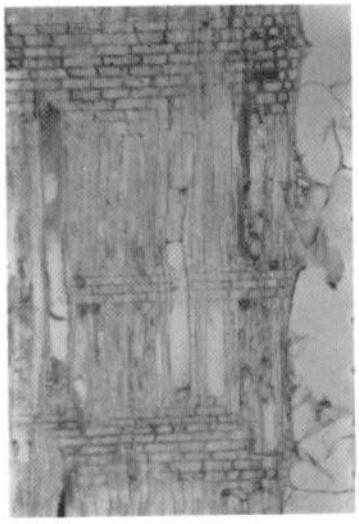
20 大溝 2 北杭48　横断面（×24）



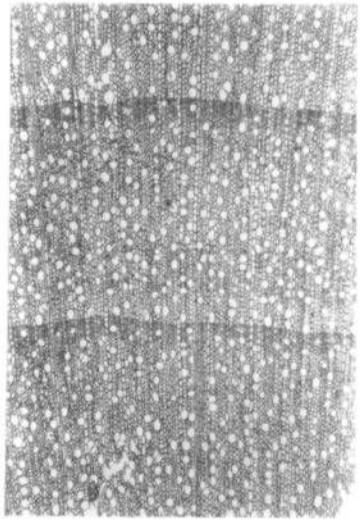
22 大溝 2 木製品 5　横断面（×24）



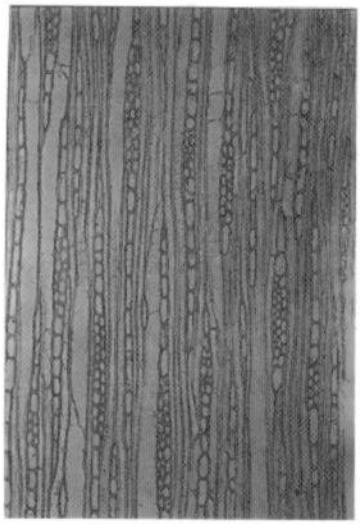
接線断面（×60）



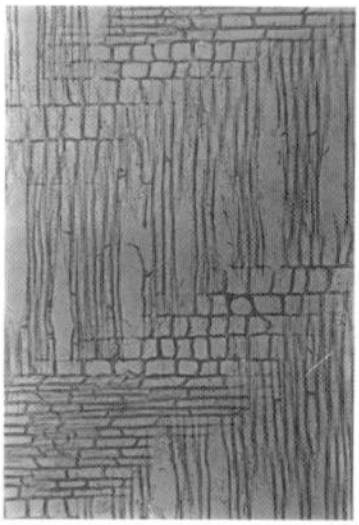
放射断面（×60）



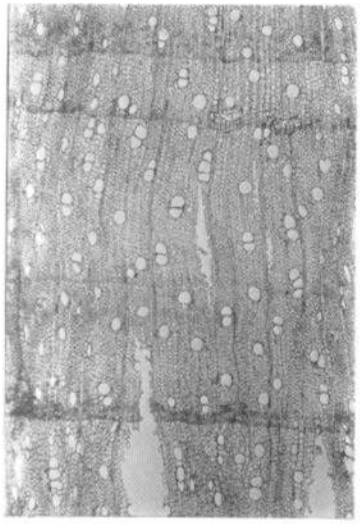
23 大溝 2 杭B　横断面（×24）



接線断面（×60）

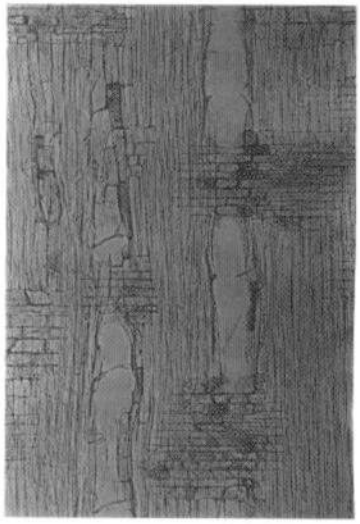


放射断面（×60）

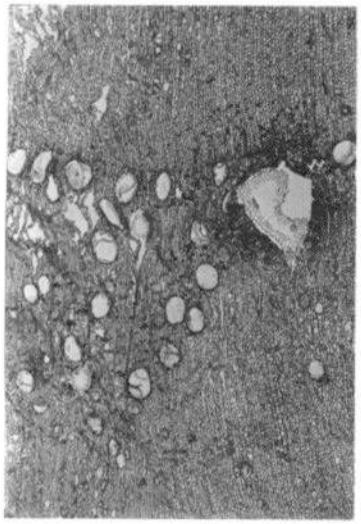


24 大溝 2 杭U　横断面（×24）

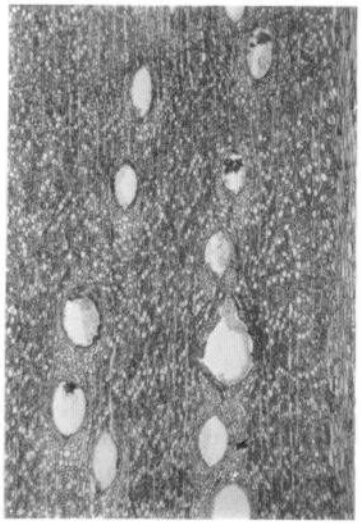
接線断面（×60）



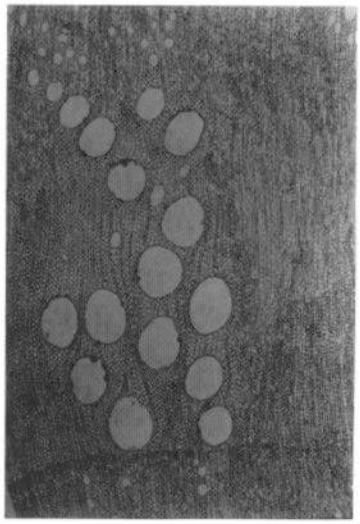
放射断面（×60）



21 大溝 2 北杭51　横断面（×24）



25 大溝 2 木製品 3　横断面（×24）



26 大溝 2 木製品 1　横断面（×24）

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 ―7―

昭和61年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷　隆文堂印刷株式会社

北九州市門司区畑田町1―1